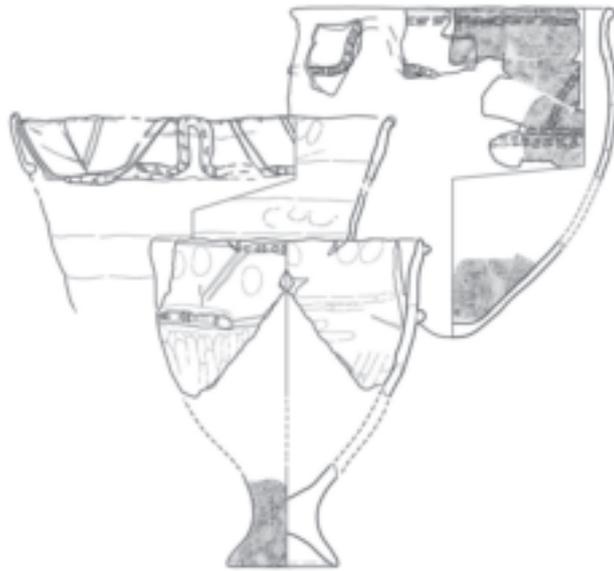


い れい ばる
伊礼原D遺跡

— 桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成18・19年度） —



2013(平成25)年8月

沖縄県 北谷町教育委員会

い れい ばる
伊礼原D遺跡

—桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成18・19年度）—

2013(平成25)年8月

沖縄県 北谷町教育委員会

はじめに

本報告書は、平成18年度から平成19年度までにおいて本町教育委員会が事業者の委託を受けて実施した桑江伊平土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査の成果をまとめたものです。

本町桑江伊平土地区画整理事業は、平成15年3月末に返還された米軍施設跡地(キャンプ桑江北側部分)にて施行されています。米軍施設跡地(キャンプ桑江北側部分)地域の返還前の状況は、埋蔵文化財の有無が不明であったため文化庁の補助事業により試掘調査などを実施しており、平成9年度に伊礼原D遺跡は発見されました。

本遺跡は試掘調査等及び今回の本発掘調査の結果、近代の道路跡、グスク時代の柱穴群や高床式建物址が1棟、貝塚時代後期のイモガイ貝集積遺構が検出されました。遺物では近代より本土産陶磁器、沖縄産陶器など、グスク時代より中国産陶磁器、タイ産陶器など、貝塚時代後期より土器、石器、貝製品など多数出土し、貝塚時代後期から近代に至る複合遺跡であることが判明しました。

本遺跡は貝塚時代及びグスク時代は集落を形成し、近代は水田だと推察されます。貝塚時代後期では、貝交易に利用される貝製腕輪の素材となるイモガイのストック状況が確認されており、これらは往時の人々の九州との交流・交易を考える上で大変貴重な発見であります。また、グスク時代においては住居等の構築物の痕跡が重複して検出されることから建て替えを行っていた状況が窺えます。近代には南西に伊平集落、北に平安山集落をかまえており、両集落の立地や形成、変遷を考える上でも貴重な成果が得られた遺跡であります。

今回、本遺跡の調査成果を報告書にまとめ刊行することとなりました。本書及び出土資料が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、さらに、文化財保護の普及、そして本町をはじめ地域の歴史を考える学術研究資料として活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、ご助言とご指導を賜りました諸先生方に厚く御礼申しあげるとともに、発掘調査現場や資料整理作業にご尽力頂きました関係各位に対し、心からの謝意を表します。

平成25年8月

北谷町教育委員会
教育長 川上 啓一

例 言

1. 本報告書は、北谷町教育委員会が桑江伊平土地区画整理事業に伴い、平成 18 年度～ 19 年度に実施した「伊礼原 D 遺跡」発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の 1/2,500 地形図（昭和 54 年測量）を元に北谷町役場都市計画課が作成したものである。本報告の方位は磁北をさす。
3. 遺物の同定等については、下記の方にご協力をいただいた。（敬称略）記して感謝申し上げます。

脊椎動物遺体	樋泉 岳二（早稲田大学）
貝類遺体	黒住 耐二（千葉県立中央博物館 主任上席研究員）
石 質	大城 逸朗（おきなわ石の会）
4. 貝類遺体、脊椎動物遺体については、黒住耐二氏・樋泉岳二氏の監修による種名一覧、図版を掲載した。
5. 放射性炭素年代測定は、パリノ・サーヴェイ（株）に依頼した。
6. 本報告書の編集は、山城安生、島袋春美が行い執筆分担は下記のとおりである。

第 I 章	松原 哲志
第 II 章	山城 安生
第 III 章 第 1 節	松原 哲志
第 III 章 第 2 節	山城 安生
第 III 章 第 3 節	島袋 春美
第 III 章 第 4 節 1・2（1・4・5）	島袋 春美
第 III 章 第 4 節 2（1）	呉屋 広江
第 III 章 第 4 節 2（2・3）	上地千賀子
第 III 章 第 5 節 1	東門 研治
第 III 章 第 5 節 2（1～7）	東門 研治
第 III 章 第 5 節 2（8～10）	山城 安生
第 III 章 第 6 節 1	山城 安生
第 III 章 第 6 節 2（1～3）	呉屋 広江
第 III 章 第 6 節 2（4・5・9～13）	山城 安生
第 III 章 第 6 節 2（6・7）	島袋 春美
第 III 章 第 6 節 2（8・14）	上地千賀子
第 V 章	東門 研治

7. 本遺跡の遺物の注記及び、遺構、取上の凡例は次のとおりである。（注記台帳は CD に収録）

・注記（遺構以外）

区分	台帳番号	大グリッド	小グリッド	層序	取上日
油ナシ	738	B5	H18	包含層 2	061006



伊 D ナ 738B5H18 —包 2-061006

・注記（遺構）

区分	台帳番号	大グリッド	小グリッド	遺構	取上日
油ナシ	1893	B5	H16	1047P	070509



伊 D ナ 1893B5H16 1047P-070509

・注記（調査地区南側）

区分	台帳番号	大グリッド	小グリッド	層序	取上日
南	153	B5	H18	砂③	080226



伊 D ミ 153B5H18
-砂③- 080226

・遺構記号

性格	溝・河川	土坑	柱穴・穴	石列	貝集積	その他・現代	攪乱
遺構記号	SD	SK	SP	SL	SS	SX	SZ

・遺物取上番号

台帳番号	グリッド	遺構名	層序	種別	取上番号	取上日	X	Y	Z
4812	H17	—	包砂(V b)	土器	288	07.12.11	35934.624	25735.029	3.002

観察一覧 出土地表記 →
(調査時表記の層序は () で示した)

H17 V b層 (包砂)
X: 35934.624
Y: 25735.029 Z: 3.002
取 288 台 4812

8. 本報告の編年表記は沖縄編年を基本とするが、出土遺物には時代幅があり、その種類によって時代表記が異なるため、下記の表を示した。

〈参考〉沖縄・九州の時代区分対照表

九州	縄文時代						弥生時代				古墳時代			奈良時代	平安時代	鎌倉時代	南北朝時代	室町時代	戦国時代	安土桃山時代	江戸時代	近代	現代
	草創・早期	前期	中期	後期	後期末	晩期	晩期末	前期	中期前半	中期後半	後期前半	後期後半	前期										
沖縄	貝塚時代												グスク時代前期		グスク時代後期/古琉球	近世琉球	近代沖縄	戦後沖縄					
	早期			前期			中期			後期			12世紀～15世紀		15世紀～1609年	1609～1879年	1879～1945年	1945～1972年	1972年～				
	前I期	前II期	前III期	前IV期前～中葉	前IV期後葉	前V期前葉	前V期中葉～後葉	前V期末	後期前半(古)	後期前半(中)	後期前半(新)	後期後半	グスク時代	三山	第一尚氏王朝	第二尚氏王朝前期	第二尚氏王朝後期	沖縄県の設置	アメリカ統治時代	沖縄県 日本復帰			
事項															1609 島津進入	1879 琉球処分	1945 沖縄戦	1972					

註：戦史時代については多和田編年・高宮廣衛編年を併記した「南西諸島先史時代葬墓制」（新里貴之 2011）、歴史時代については『琉球の時代』（高良倉吉 1980）、『宜野湾はじまりや!』（2013）を参考に加筆

9. 本書に掲載した発掘調査に関する写真、実測図などの記録および出土遺物全ては北谷町教育委員会に保管している。

本文目次

はじめに

例言

巻首図版

第I章 調査経緯・経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査経過	4
第II章 位置と環境	6
第III章 調査の方法と成果	11
第1節 調査の方法	11
第2節 層序	13
第3節 遺物の出土状況	29
第4節 貝塚時代後期	32
第5節 グスク時代	171
第6節 近・現代	225
第IV章 理科学的分析	270
第1節 貝類遺体	270
第2節 脊椎動物遺体	278
第3節 伊礼原D遺跡の自然科学分析	286
第V章 まとめ	300
報告書抄録	307

図版目次

巻首図版1 土器1 (復元)	巻首図版19 遺物出土状況2
巻首図版2 伊礼原D遺跡周辺航空写真	巻首図版20 胎土薄片1
巻首図版3 全景写真	巻首図版21 胎土薄片2
巻首図版4 層序1	巻首図版22 作業風景
巻首図版5 層序2	図版1 4409SX 検出状況
巻首図版6 下層確認調査	図版2 サガリバナ検出状況
巻首図版7 貝塚時代後期 遺構	図版3 貝製品出土状況
巻首図版8 グスク時代 柱穴群	図版4 自然木・石出土状況
巻首図版9 グスク時代 高床式建物址 (4450SB)	図版5 4318SK 検出状況 (南東より)
巻首図版10 近代 遺構	図版6 4318SK 検出状況 (北より)
巻首図版11 遺物出土状況1	図版7 イモガイ貝集積検出状況 (4317SS)
巻首図版12 土器2	図版8 軽石の種類
巻首図版13 土器3	図版9 土器1 (I群)
巻首図版14 石器	図版10 土器2 (II-I類)
巻首図版15 貝製品・骨製品	図版11 土器3 (II-II類)
巻首図版16 白磁・青磁・染付	図版12 土器4 (II-II類)
巻首図版17 褐釉陶器・三彩	図版13 土器5 (II-II・III類)
巻首図版18 銭貨・人形・土製品・簪・金属製品	図版14 土器6 (II-IV類)

図版15	土器 7 (II-V・VI類)……………	71	図版59	染付 3・瑠璃釉……………	207
図版16	土器 8 (II-VI類)……………	73	図版60	褐釉陶器 1……………	213
図版17	土器 9 (II-VI類)……………	75	図版61	褐釉陶器 2……………	215
図版18	土器10 (II-VI・VII類)……………	77	図版62	褐釉陶器 3……………	217
図版19	土器11 (II-VIII・IX類)……………	79	図版63	三彩……………	219
図版20	土器12 底部 (丸底・尖底)……………	87	図版64	瓦質土器……………	221
図版21	土器13 底部 (乳房状尖底・平底)……………	89	図版65	焼土……………	223
図版22	土器14 底部 (くびれ平底)……………	90	図版66	錢貨……………	224
図版23	4409SX 土器 1 (I群・II-I・II・III・VI・VIII類)……………	101	図版67	0008SF 検出状況 (北東より)……………	229
図版24	4409SX 土器 2 (II-VIII類)……………	103	図版68	4442SZと0008SFの検出状況 (南西側より)……………	229
図版25	4409SX 土器 3 (II-VIII類)……………	105	図版69	水路①・②検出状況 (東側より)……………	229
図版26	4409SX 土器 4 (II-VIII・X類・底部1)……………	107	図版70	水路① (東側より)……………	229
図版27	4409SX 土器 5 (底部2)……………	109	図版71	F10・11検出状況 (南東より)……………	229
図版28	土製品……………	111	図版72	沖縄産施釉陶器 1……………	237
図版29	石器 1 (石斧)……………	123	図版73	沖縄産施釉陶器 2……………	239
図版30	石器 2 (石斧)……………	125	図版74	沖縄産無釉陶器 1……………	245
図版31	石器 3 (敲打器類)……………	127	図版75	沖縄産無釉陶器 2……………	247
図版32	石器 4 (敲打器類)……………	129	図版76	沖縄産無釉陶器 3……………	249
図版33	石器 5 (敲打器類)……………	131	図版77	陶質土器……………	253
図版34	石器 6 (敲打器類)……………	133	図版78	本土産陶器……………	255
図版35	石器 7 (敲打器類)……………	135	図版79	本土産磁器……………	257
図版36	石器 8 (台石・石皿)……………	137	図版80	先島系土器……………	258
図版37	石器 9 (石皿)……………	139	図版81	木製品……………	259
図版38	石器10 (チャート剥片・砥石)……………	141	図版82	円盤状製品……………	263
図版39	穿孔貝……………	157	図版83	瓦……………	265
図版40	貝製品 1……………	159	図版84	簪……………	266
図版41	貝製品 2……………	161	図版85	煙管……………	266
図版42	貝製品 3……………	163	図版86	人形……………	267
図版43	貝製品 4……………	165	図版87	金属製品……………	268
図版44	貝製品 5……………	167	図版88	軽石製品……………	269
図版45	貝製品 6……………	169	図版89	貝類遺体 1 (巻貝)……………	272
図版46	骨製品……………	170	図版90	貝類遺体 2 (巻貝)……………	273
図版47	検出状況 (南西より)……………	172	図版91	貝類遺体 3 (巻貝)……………	274
図版48	完掘状況 (南西より)……………	172	図版92	貝類遺体 4 (上:巻貝・下:陸産貝)……………	275
図版49	完掘状況 (柱想定)……………	172	図版93	貝類遺体 5 (二枚貝)……………	276
図版50	柱穴検出状況……………	173	図版94	貝類遺体 6 (上:二枚貝・下:巻貝、陸産貝)……………	277
図版51	カムイヤキ……………	181	図版95	脊椎動物遺体 1 (サカナ類)……………	278
図版52	白磁 1……………	185	図版96	脊椎動物遺体 2 (上面:イルカ、ウミガメ・ 下面:ジュゴン、クジラ、ヘビ類)……………	280
図版53	白磁 2……………	186	図版97	脊椎動物遺体 3 (上面:イヌ・下面:イヌ、ネコ、ネズミ)……………	281
図版54	青磁 1……………	193	図版98	脊椎動物遺体 4 (ウマ類)……………	282
図版55	青磁 2……………	195	図版99	脊椎動物遺体 5 (イノシシ・ブタ類)……………	283
図版56	青磁 3……………	197	図版100	脊椎動物遺体 6 (ウシ類)……………	284
図版57	染付 1……………	203			
図版58	染付 2……………	205			

挿 図 目 次

第 1 図	伊礼原 D 遺跡の位置とキャンプ桑江北側地区の遺跡……………	8	②層序 (東壁 2)……………	20	
第 2 図	北谷町の位置と遺跡分布……………	9	第 7 図	層序 (南壁)……………	21
第 3 図	グリッド設定……………	12	第 8 図	層序 (下層確認調査)……………	22
第 4 図	旧汀線の復元と試掘検出箇所……………	12	第 9 図	①南区 (H16～18・I18) 下層の遺物平面・垂直分布……………	23
第 5 図	各層の検出面……………	18		②南区 (H16～18・I18) 下層の遺物別平面分布……………	24
第 6 図	①層序 (東壁 1)……………	19	第 10 図	遺物平面・垂直分布 (取上げ)……………	26

第11図	4409SX 平面・断面図	35	第64図	骨製品	170
第12図	4409SX 層別出土遺物	36	第65図	高床式建物址(4450SB)平面・断面図	172
第13図	4318SK 平面・断面図(H16)	38	第66図	カムイヤキ	181
第14図	自然貝と貝集積の殻径比較	39	第67図	白磁1	184
第15図	イモガイ貝集積(4317SS)	40	第68図	白磁2	186
第16図	イモガイ貝集積・貝だまり	43	第69図	青磁平面分布	189
第17図	軽石グリッド別出土分布	44	第70図	青磁1	192
第18図	軽石平面分布(伊礼原D遺跡・伊礼原遺跡)	44	第71図	青磁2	194
第19図	土器重量別平面分布	45	第72図	青磁3	196
第20図	土器1(I群)	58	第73図	染付平面分布	199
第21図	土器2(II-I類)	60	第74図	染付1	202
第22図	土器3(II-II類)	62	第75図	染付2	204
第23図	土器4(II-II類)	64	第76図	染付3・瑠璃釉	206
第24図	土器5(II-II・III類)	66	第77図	褐釉陶器平面分布	209
第25図	土器6(II-IV類)	68	第78図	褐釉陶器1	212
第26図	土器7(II-V・VI類)	70	第79図	褐釉陶器2	214
第27図	土器8(II-VI類)	72	第80図	褐釉陶器3	216
第28図	土器9(II-VI類)	74	第81図	鶴型水注の出土部位	218
第29図	土器10(II-VI・VII類)	76	第82図	三彩	219
第30図	土器11(II-VIII・IX類)	78	第83図	瓦質土器	220
第31図	土器12 底部(丸底・尖底)	86	第84図	焼土平面分布	222
第32図	土器13 底部(乳房状尖底・平底)	88	第85図	焼土	223
第33図	土器14 底部(くびれ平底)	90	第86図	銭貨	224
第34図	II群VI・VIII類口縁部傾き別構成比	91	第87図	伊礼原D遺跡と戦前集落	225
第35図	4409SX 土器1 (I群・II-I・II・III・VI・VIII類)	100	第88図	平安山・伊礼の戦前集落	227
第36図	4409SX 土器2(II-VIII類)	102	第89図	0008SF 平面図	228
第37図	4409SX 土器3(II-VIII類)	104	第90図	沖縄産施釉陶器平面分布	233
第38図	4409SX 土器4(II-VIII・X類・底部1)	106	第91図	沖縄産施釉陶器1	236
第39図	4409SX 土器5(底部2)	108	第92図	沖縄産施釉陶器2	238
第40図	土製品	111	第93図	沖縄産無釉陶器平面分布	243
第41図	石器平面分布	115	第94図	沖縄産無釉陶器1	244
第42図	石器器種別素材重量比	116	第95図	沖縄産無釉陶器2	246
第43図	石器1(石斧)	122	第96図	沖縄産無釉陶器3	248
第44図	石器2(石斧)	124	第97図	陶質土器	252
第45図	石器3(敲打器類)	126	第98図	本土産陶器	255
第46図	石器4(敲打器類)	128	第99図	本土産磁器	257
第47図	石器5(敲打器類)	130	第100図	先島系土器	258
第48図	石器6(敲打器類)	132	第101図	木製品	259
第49図	石器7(敲打器類)	134	第102図	円盤状製品素材別比較	261
第50図	石器8(台石・石皿)	136	第103図	円盤状製品平面分布	261
第51図	石器9(石皿)	138	第104図	円盤状製品	262
第52図	石器10(チャート剥片・砥石)	140	第105図	瓦平面分布	264
第53図	ヤコウガイ使用部位	146	第106図	瓦	265
第54図	ヤコウガイの蓋刃分布	149	第107図	簪	266
第55図	スイズガイ突起番号	150	第108図	煙管	266
第56図	二枚貝有孔製品観察部位	150	第109図	人形	267
第57図	二枚貝有孔製品の重量分布と殻長比較	151	第110図	金属製品	268
第58図	貝製品1	158	第111図	軽石製品	269
第59図	貝製品2	160	第112図	胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成(1)	298
第60図	貝製品3	162	第113図	胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成(2)	299
第61図	貝製品4	164	第114図	砕屑物・基質・孔隙の割合	299
第62図	貝製品5	166	第115図	時代別出土遺物変遷	305
第63図	貝製品6	168	第116図	III層面遺構(柱穴)平面・断面図	別紙

表 目 次

第1表	北谷町遺跡一覧	10	第45表	白磁出土量	182
第2表	層序観察一覧	16	第46表	白磁観察一覧	183
第3表	取上遺物一覧	25	第47表	青磁出土量	189
第4表	伊礼原 D 遺跡の遺物出土量	29	第48表	青磁観察一覧	190
第5表	南区 (H16~18・I18) 土器分類別出土量	32	第49表	染付出土量	199
第6表	4409SX 遺物出土量	33	第50表	染付観察一覧	200
第7表	大型イモガイ貝集積計測一覧	39	第51表	褐釉陶器 (中国産・タイ産) 出土量	210
第8表	軽石出土量	44	第52表	褐釉陶器観察一覧	210
第9表	I 群土器出土量	46	第53表	三彩出土量	218
第10表	II 群土器 (口縁・胴部) 出土量	48	第54表	三彩観察一覧	218
第11表	II 群土器 (VI・VIII類) 出土量	52	第55表	瓦質土器出土量	220
第12表	I 群・II 群土器観察一覧	54	第56表	焼土出土量	222
第13表	II 群土器底部 (分類別) 出土量	81	第57表	銭貨観察一覧	224
第14表	II 群土器底部胎土別出土量	81	第58表	0008SF 遺物出土量	227
第15表	II 群土器 (底部) 観察一覧	85	第59表	近・現代遺物出土量	230
第16表	4409SX 出土 土器観察一覧	97	第60表	沖縄産施釉陶器出土量	233
第17表	II 群VI・VIII類口縁部形態と傾きの関係	110	第61表	沖縄産施釉陶器観察一覧	234
第18表	土製品観察一覧	111	第62表	沖縄産無釉陶器出土量	241
第19表	石器出土量	112	第63表	沖縄産無釉陶器観察一覧	242
第20表	遺構出土石器	114	第64表	陶質土器出土量	251
第21表	4409SX 石器出土量	116	第65表	陶質土器観察一覧	251
第22表	石器器種別素材重量	117	第66表	本土産陶器出土量	254
第23表	石器観察一覧	118	第67表	本土産陶器観察一覧	254
第24表	石器出土一覧	121	第68表	本土産磁器出土量	256
第25表	貝製品出土量	142	第69表	本土産磁器観察一覧	256
第26表	オオツタノハ製品観察一覧	142	第70表	先島系土器胎土分類	257
第27表	オオベッコウガサ製品観察一覧	143	第71表	先島系土器出土量	258
第28表	ゴホウラ・アツソデガイ製品及び自然貝出土量	143	第72表	円盤状製品出土量	260
第29表	ゴホウラ・アツソデガイ製品・未製品観察一覧	144	第73表	円盤状製品観察一覧	261
第30表	貝玉観察一覧	144	第74表	瓦出土量	264
第31表	イモガイ製品観察一覧	144	第75表	伊礼原 D 遺跡出土貝類とその生息場所類型	270
第32表	タカラガイ製品観察一覧	145	第76表	伊礼原 D 遺跡から採集された脊椎動物遺体の 種名一覧	285
第33表	ヤコウガイ製品出土量	146	第77表	放射性炭素年代測定結果	287
第34表	ヤコウガイ製品観察一覧	148	第78表	暦年校正結果	287
第35表	ホラガイ有孔製品観察一覧	149	第79表	放射性炭素年代測定結果	289
第36表	螺蓋製貝斧観察一覧	149	第80表	暦年校正結果	289
第37表	スিজガイ製品観察一覧	150	第81表	試料一覧	290
第38表	二枚貝有孔製品出土量	151	第82表	放射性炭素年代測定結果	292
第39表	ヒメジャコ殻長比較 (範囲確認・本調査)	151	第83表	暦年校正結果	292
第40表	二枚貝有孔製品観察一覧	152	第84表	薄片観察結果	296
第41表	穿孔貝観察一覧	157	第85表	伊礼原 D 遺跡・小堀原遺跡土器分類別比較	301
第42表	骨製品観察一覧	170	第86表	伊礼原 D 遺跡の時期 (九州・沖縄の時代区分対照表)	304
第43表	遺構別遺物出土量	171			
第44表	柱穴・土坑計測一覧	174			



卷首図版 1 土器 1 (復元)



巻首図版 2 伊礼原 D 遺跡周辺航空写真



Ⅲ層面完掘状況（北東から）



完掘状況（東から）

調査終了後（南東から）



東壁 2 (C16 ~ 18)



南壁 (J19 周辺)



南壁 (G19 周辺)



東壁 2 (A8 ~ A10) 1 面目検出時



東壁 1 (D8 ~ 14) 完掘時



北壁 (A ~ E8) 完掘時



深掘調査トレンチ2南壁 (VIa層とVIb層、北西から)



深掘調査トレンチ2 (左:VIa・VIb層 右:VIb層、北から)



センニンガイ (VIb層:ビーチロック中)



室川下層式土器 (VIb層:ビーチロック中)



4409SX 北端壁面 (西から)



4409SX 南端壁面 (西から)



東壁 2 (4409SX 周辺 左端：範囲確認 4 トレンチ跡)



4409SX 完掘状況 (西から)



サガリバナ検出状況



イモガイ貝集積 (4317SS) 検出状況



巻首図版 8 グスク時代 柱穴群



検出状況



完掘状況



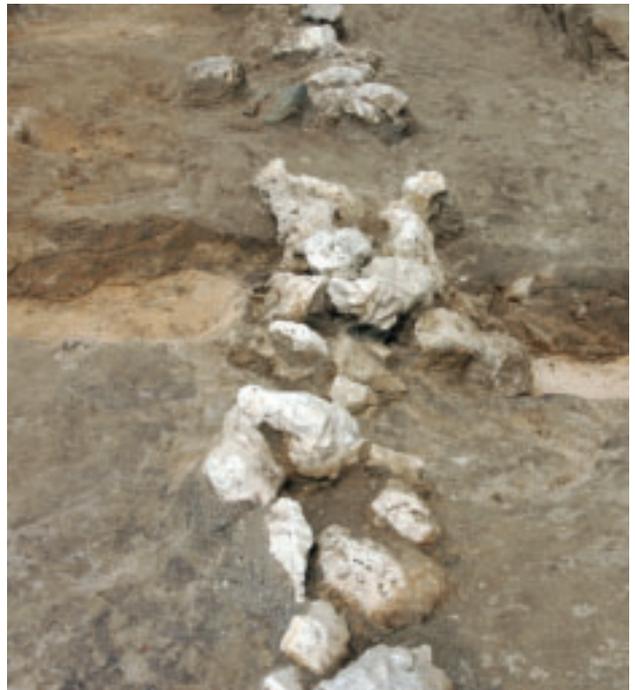
完掘状況



0008SF (ビーチロック道)



石列 (0019SL)



石列 (0019SL)



土器 (第 28 図 109)



土器 (第 28 図 109)



土器 (第 22 図 44)



石器 (第 43 図 1)



貝製品 (第 59 図 16)



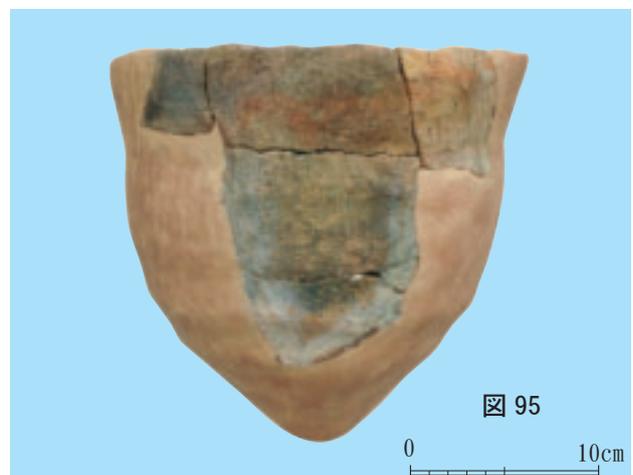
石器 (第 44 図 7)



貝製品 (第 60 図 21)



貝製品 (第 60 図 25)



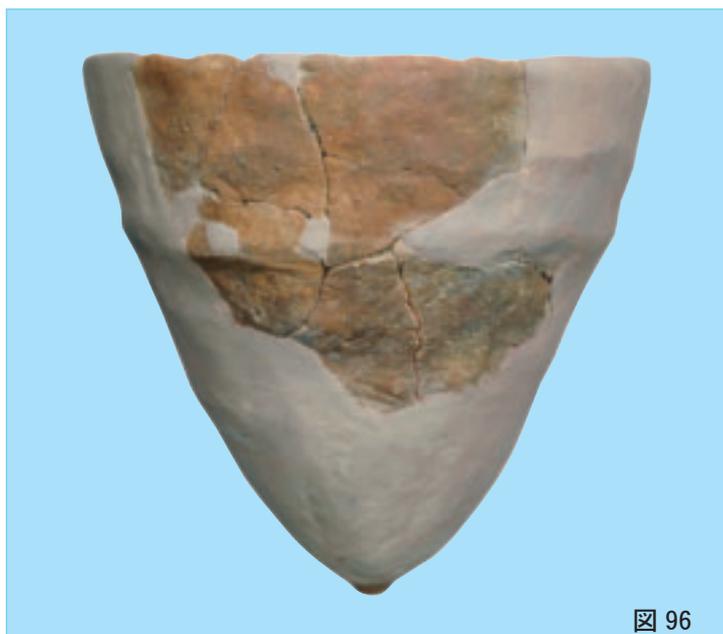


図 96



図 110



図 109



図 124



図 112



4409SX
図 55

0 10cm



石斧



磨り石



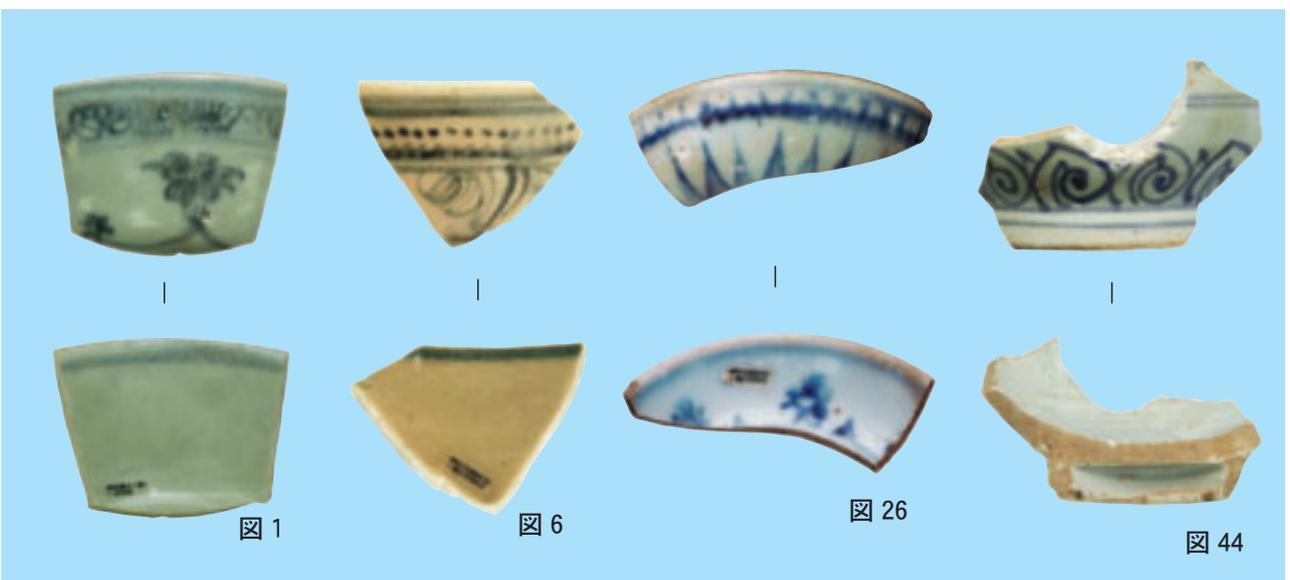
有孔砥石

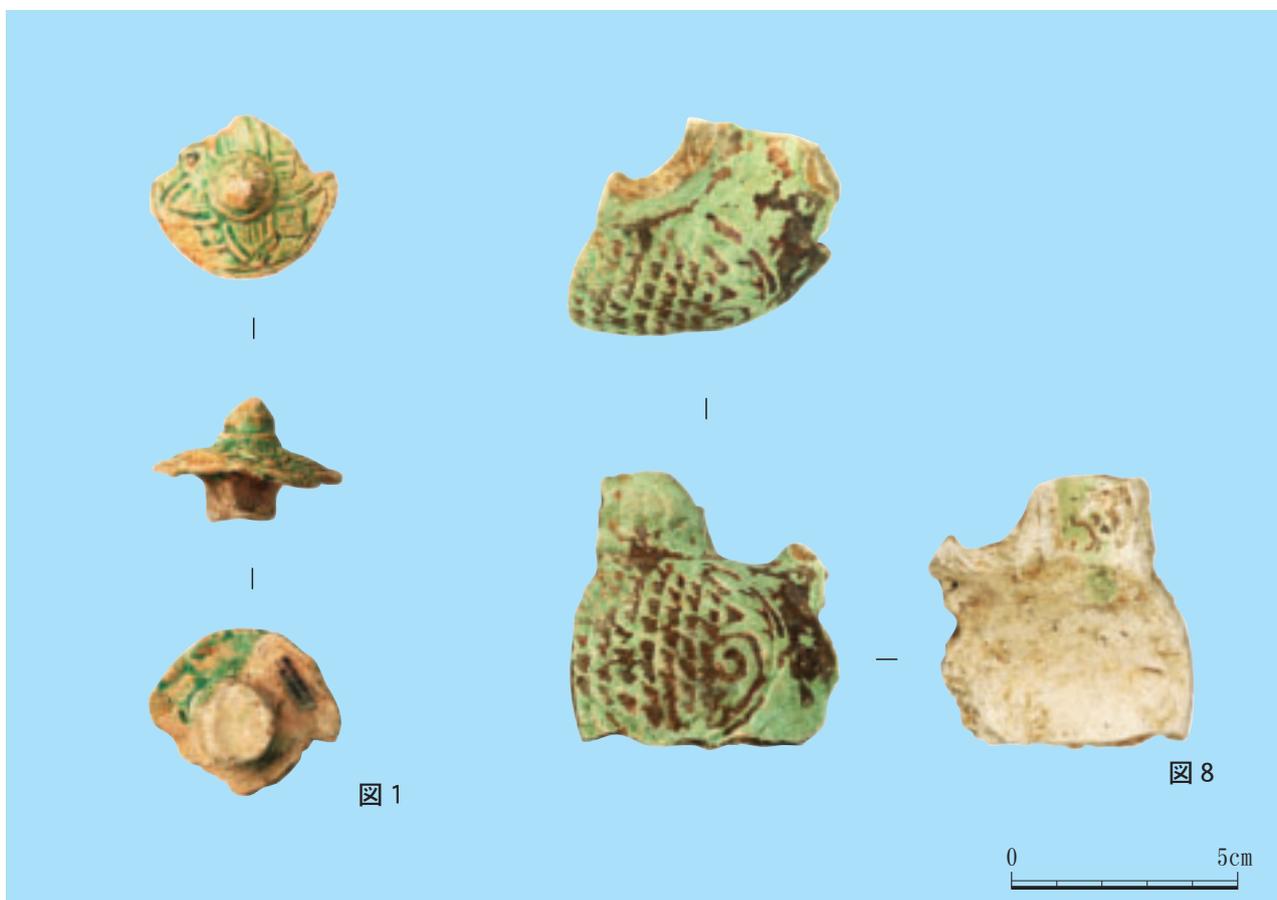


石皿

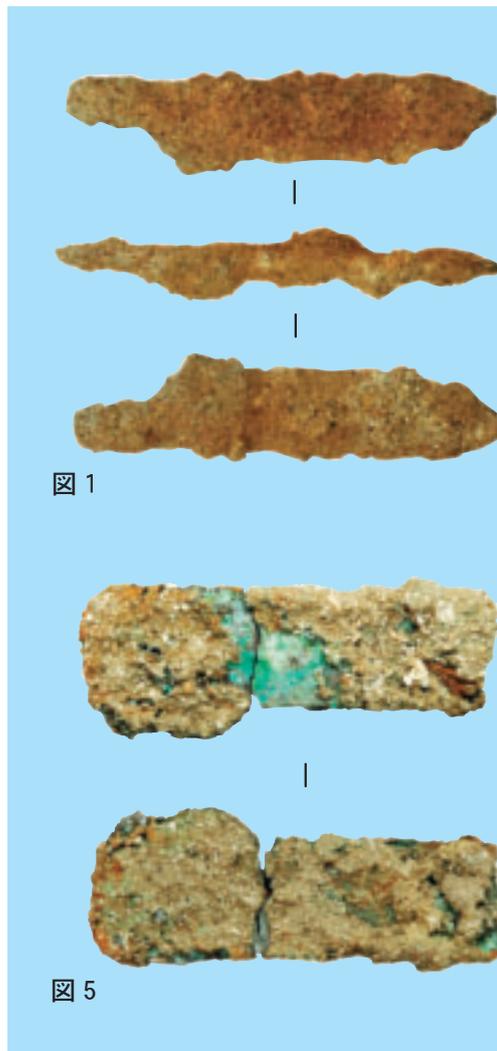
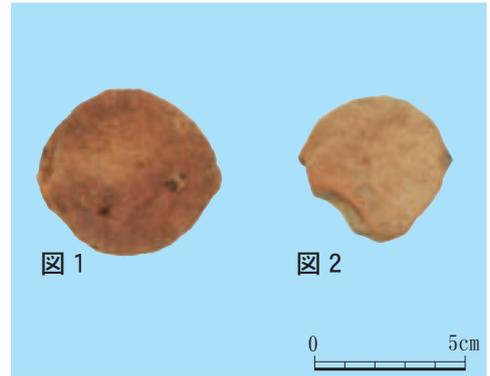
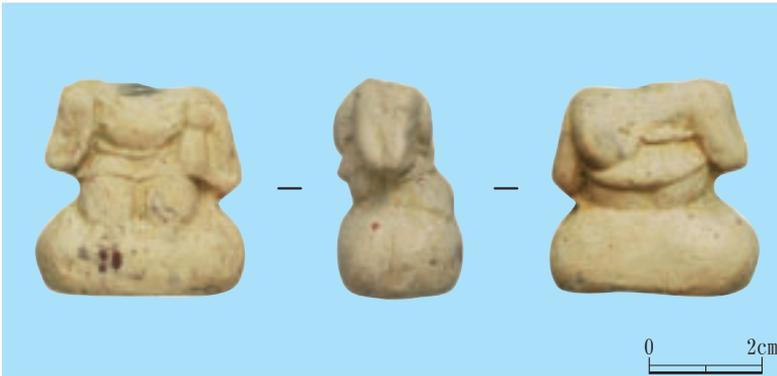
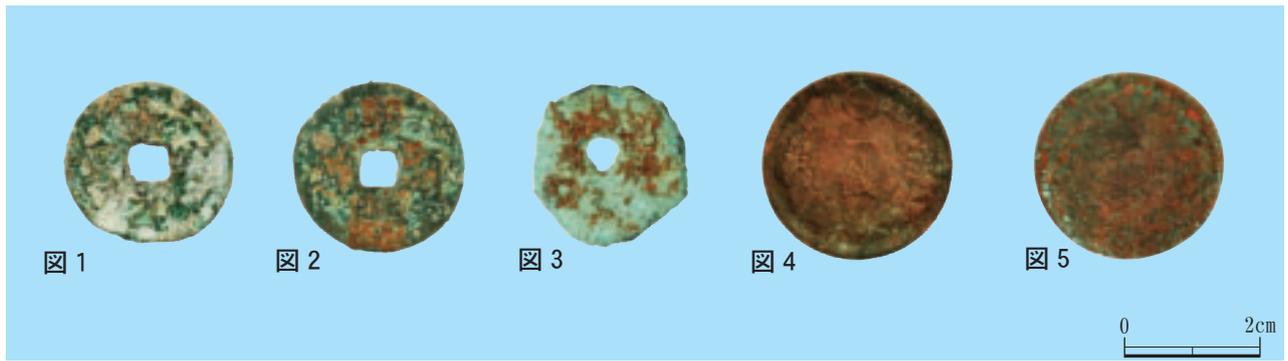


卷首図版15 貝製品・骨製品 (遺物番号は図版番号と一致)





卷首図版17 褐釉陶器・三彩 (遺物番号は図版番号と一致)



卷首図版18 銭貨・人形・土製品・簪・金属製品 (遺物番号は図版番号と一致)



貝製品 (製品番号 696・812・824)



ゴホウラ貝 (第59図③)



イノシシ骨 (第9図①)



貝製品 (第61図30)



褐釉陶器 (第79図25)



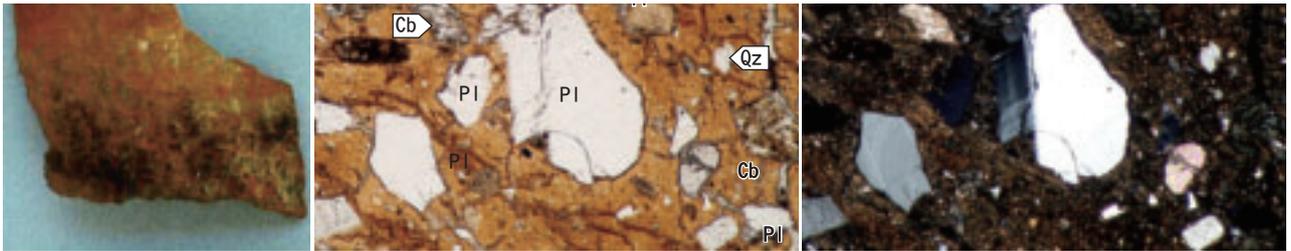
青磁 (第72図33)



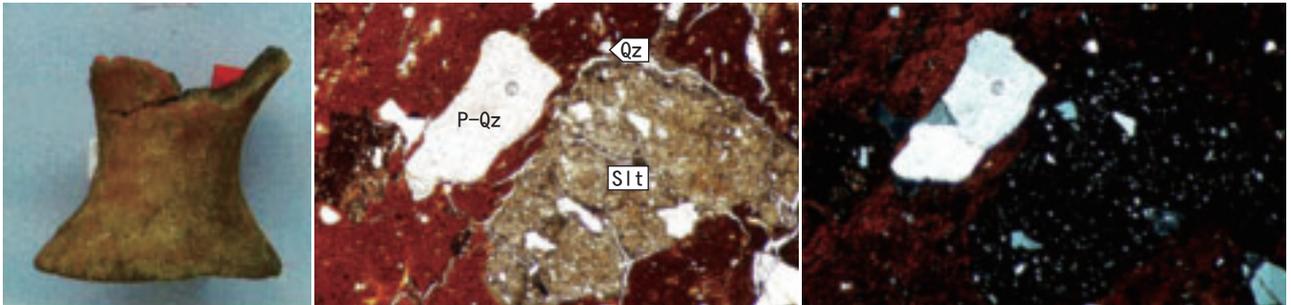
三彩 (第82図8)



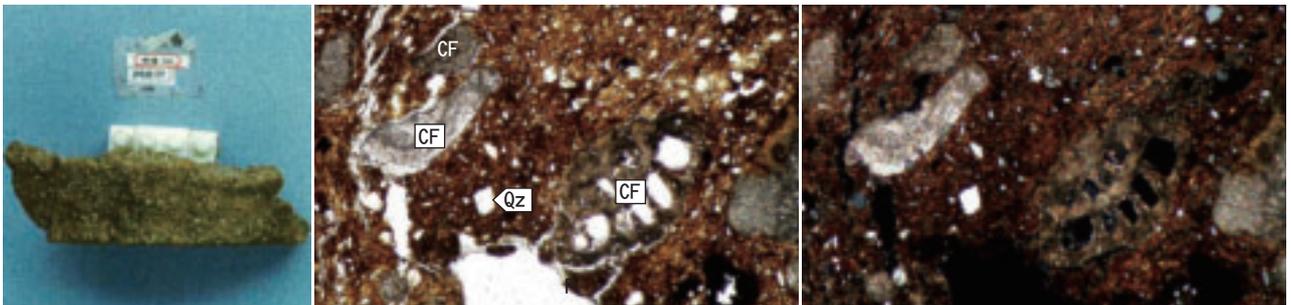
沖縄産無釉陶器 (第95図20)



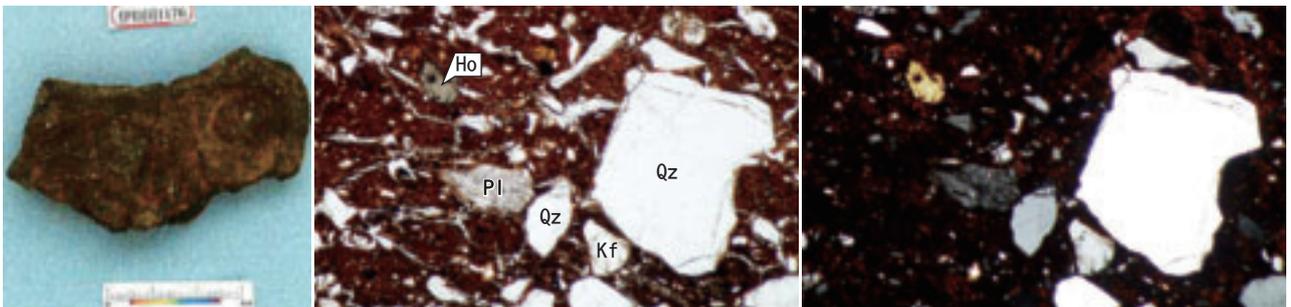
1. 試料番号1 平安山原B 型式不明 P2白砂層一括下層確認トレンチ3



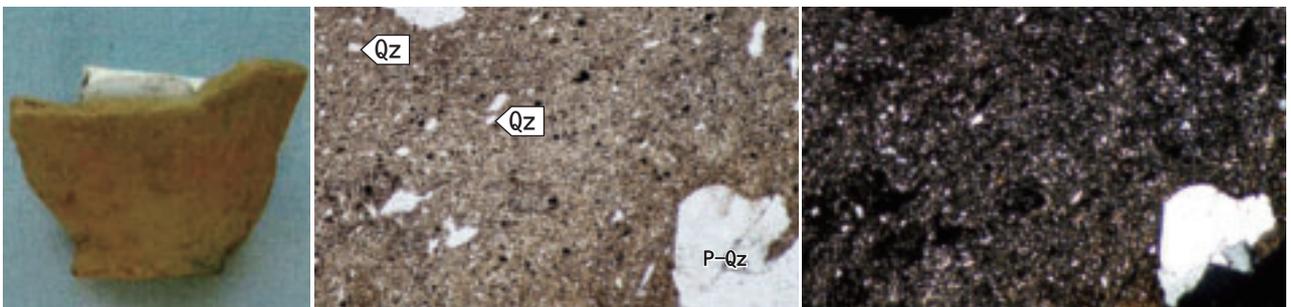
2. 試料番号2 伊礼原D スセン當式 第21図33



3. 試料番号3 伊礼原D 平底(搬入) 第21図27



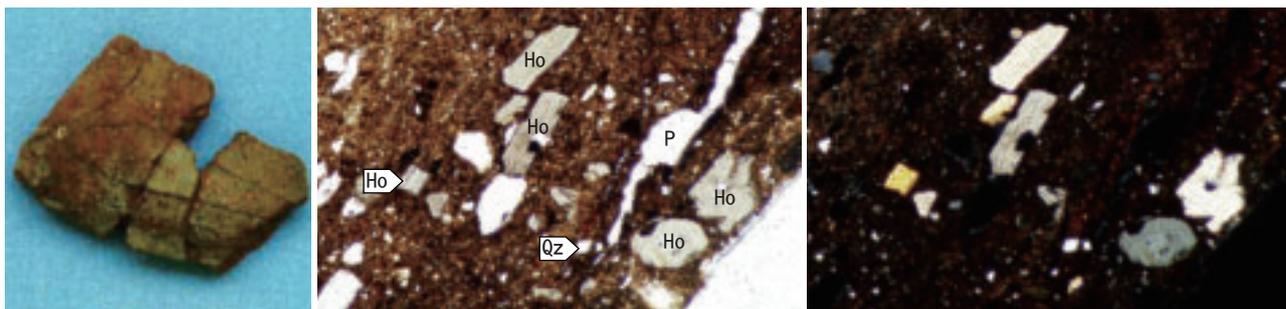
4. 試料番号4 伊礼原D 船元系 第20図1



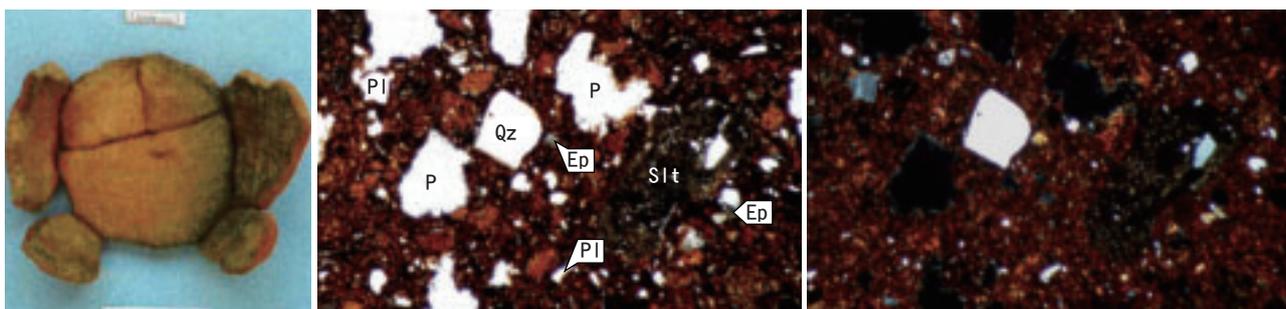
5. 試料番号5 伊礼原D くびれ平底(泥) 第39図101

0.5mm

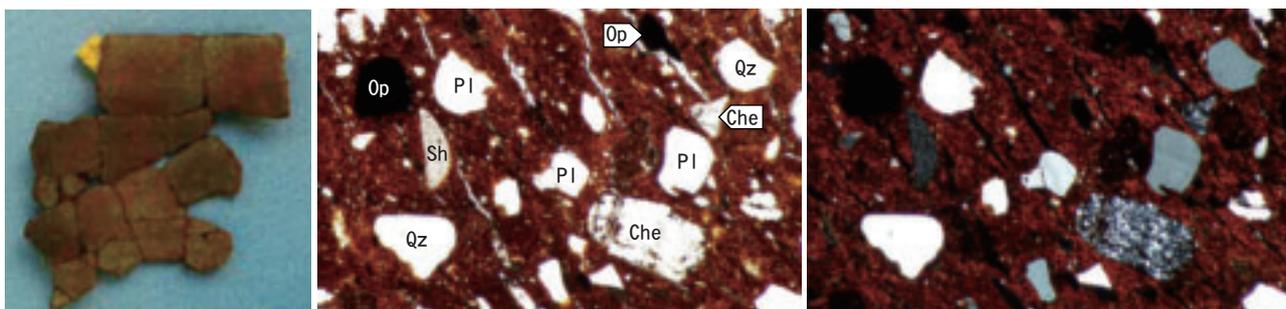
(写真中列は下方ポーラー・写真右列は直交ポーラー下)
 Qz: 石英, Kf: カリ長石, Pl: 斜長石, Ho: 角閃石, Cb: 炭酸塩鉱物, Tf: 凝灰岩.
 P-Qz: 多結晶石英, Slt: 砂質シルト塊, CF: 石灰質化石, P: 孔隙.



6. 試料番号7 伊礼原D 有段・沈線文 第29図116



7. 試料番号8 伊礼原D くびれ平底(砂) 第33図188



8. 試料番号9 伊礼原D 縄文時代晩期系 第22図39

(写真中列は下方ポーラー・写真右列は直交ポーラー下)

Qz: 石英, Pl: 斜長石, Ho: 角閃石, Ep: 緑レン石, Op: 不透明鉱物, Che: チャート,
Sh: 頁岩, P-Qz: 多結晶石英, Slt: 砂質シルト塊, P: 孔隙.



4 トレンチ (0001SZ)



0008SF



包含層検出



包含層検出



グスク遺構検出



グスク遺構検出



土器検出



遺物洗浄

第I章 調査経緯・経過

第1節 調査に至る経緯

伊礼原D遺跡は、平成15年3月に返還された在沖米海兵隊基地（キャンプ桑江北側地区）内に位置し、基地返還に先立つ予備調査で発見された「周知の埋蔵文化財包蔵地」である。本報告書は、桑江伊平土地区画整理事業に係る記録保存目的の緊急発掘調査成果をまとめたものである。上記予備調査の結果、キャンプ桑江北側地区には、9遺跡6遺物散布地（延べ13ヘクタール）が確認され、伊礼原D遺跡が位置する字伊平小字伊礼原160番地一帯には、貝塚時代後期（弥生から平安並行期）とグスク時代、近世の遺構が確認された（註1・2）。

キャンプ桑江北側地区は返還後の跡地利用促進が重要な課題となっており、課題の整理と解決に向け、北谷町内の関係部署間で定期的に会議の場を設けた。埋蔵文化財については、事業調整の段階でほとんどの遺跡が開発行為の影響を受ける事が判明した。その理由として、事業地内のほぼ全域で盛土による造成工事が施工されるためであった。国道58号に東接するキャンプ桑江北側地区は、国道よりも地盤面が低く、大雨時に度々冠水を引き起こしていたことから、返還跡地一帯を盛土造成し上記現象を解消する必要があるがあった。同地域は、本町でも数少ない平坦地であり、かつ、地理的に本町の中心部であることから、返還後は町の中核ゾーンとして、職住近接型の都市環境の創出及び地域活性化を図る計画がなされていた（註3）。返還跡地を有効かつ効率的に利用するためには、国道との段差を解消する盛土造成工事は避けられないものであり、盛土高は、地下の埋蔵文化財に悪影響を及ぼす可能性が十分に考えられる規模も認められた。ただし、盛土の高さが一様ではない事から、盛土の高さや恒久的工作物の範囲を割り出すことにより、緊急発掘調査の対象地及び対象外範囲の抽出作業を進めたが、同作業は困難を極めた。

また、連絡会議と並行して、沖縄県内の政府関係機関、沖縄県並びに北谷町で「キャンプ桑江北側地区跡地利用支援関係機関連絡会議（以下「連絡会議」という。）」が、平成11年9月14日から平成12年10月27日にかけて延べ10回開かれた。連絡会議では、返還跡地で確認された遺跡の取扱等について、調査費用・調査期間・文化財保護・地権者への負担等の総合的観点から、今後の方針を導き出すため検討が行われた。連絡会議では、遺跡の取扱いについて以下の2案が持ち上がった。

- 1、区画整理事業期間中に対象遺跡の全てを全面調査する。
- 2、区画整理事業期間中には事業に係る範囲（遺跡の一部）のみを調査し（第1段階）、その他の一般宅地等範囲については、事業完了後に土地所有者が建築行為を計画した時点において、原因者負担や文化庁補助を受けて発掘調査を実施する。

1案のメリット（2案のデメリット）として、

- ①従前地から埋蔵文化財包蔵地へ換地されないため、この点において地権者へ不利益が生じない。
- ②第1段階で全ての発掘調査を行うため、2案に比べ調査期間の短縮が考えられる。

が想定され、デメリット（2案のメリット）としては、

- ①発掘調査を実施した箇所その後開発行為が行われない場合、不必要な調査となってしまう。
- ②遺跡の一部のみの調査に比べ調査費用が増大し（減歩率の上昇）、地権者への負担が大きくなる。
- ③事業完了後に宅地建設の殺到が予想されることから、第2段階の発掘調査の対応が困難となり、地権者に不利益を与える。

が挙げられた。幾多の会議を重ねた結果、最終的には地権者への負担軽減及び盛土高を考慮し、1案を採用する事となった。同時に、現地保存すべき遺跡に伊礼原C遺跡(当時の名称)が挙げられ、今後は保存範囲を確定させるべく範囲確認調査を継続して取り組む事となった(註4)。

平成15年3月15日には「桑江伊平土地区画整理事業(施行者 北谷町)」が事業認可され、伊礼原遺跡を除く他の遺跡は、現状保存が図れないことから次善の策として記録保存調査を行うこととなった。平成16年10月27日、北谷町教育委員会は、桑江伊平土地区画整理事業施行区域における埋蔵文化財の取扱について北谷町と協定を締結した。

伊礼原D遺跡における文化財保護法上の手続きとして、北谷町は、文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、平成18年8月28日付北区18第3521号「埋蔵文化財発掘の通知について」を町教育委員会に提出、これを受けた教育委員会は、平成18年9月14日付北教社18第1849号で沖縄県教育委員会にこれを進達した。その後、沖縄県教育委員会より記録保存のための発掘調査が必要である旨の回答を受け(平成18年10月2日付教文第1034号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」)、発掘調査は、北谷町から委託を受けて町教育委員会が実施する事となった。町教育委員会においては、他事業との関係による専門員の事務負担量が著しく増大していたため、発掘調査に係る諸作業の軽減を図る目的で、現地調査の測量、発掘作業員の手配及び安全管理を民間組織に業務委託する事とした。

平成19年2月14日には、国際航業株式会社と「平成18年度伊礼原D遺跡埋蔵文化財発掘調査委託業務」を締結、3月2日から1,000㎡の表土掘削に着手した。その後、調査区の南東側で検出された遺構群が調査区外に広がる様相を示していた事から、関係部署との調整後、同年7月10日には改定契約を行い、東側に470㎡拡張した。下層調査時には未確認の遺物包含層が部分的に確認されたため、平成20年2月7日、国際航業株式会社と「平成19年伊礼原D遺跡南側埋蔵文化財発掘調査委託業務」を締結し、追加調査を実施した。同年2月29日には現地調査の全てを終了した。

註1 北谷町教育委員会2005『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査—伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業—』

註2 北谷町教育委員会2008『伊礼原D遺跡—キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成10年~13年度)—』

註3 返還に先立つ平成10年3月には、共同使用という形態で北谷町役場新庁舎がキャンプ桑江北側地区内に建設されている。

註4 同遺跡はその後『伊礼原遺跡』と名称が改められ、平成22年2月22日に約17,000㎡が国史跡に指定されるに至った。

第2節 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

事業主体	教育長	瑞慶覽 朝 宏 (平成18・19年度)
	同	川 上 啓 一 (平成24・25年度)
事業総括	教育次長	阿波根 進 (平成18年度)
	同	謝 花 良 継 (平成19年度)
	同	大 城 操 (平成24年度)
	同	比 嘉 良 典 (平成25年度)
	社会教育課長	大 城 操 (平成18・19年度)
	同	嘉陽田 朝 栄 (平成24年度)
	同	比 嘉 敬 文 (平成25年度)

調査総括	文化係長	中村 愿 (平成18・19年度)
	同	嘉陽田 朝 栄 (平成19年度)
	同	米 須 健 (平成24・25年度)
調査担当	主任主事	山城 安 生 (平成19・24年度)
	同	東 門 研 治 (平成18・19・24・25年度)
	同	松 原 哲 志 (平成24・25年度)
	主 事	松 原 哲 志 (平成18・19年度)

発掘調査及び資料整理作業員

(平成18年度)

嘱託 上間真寿美・佐久間クリエ・島袋保・照屋元子・豊里初江・仲田浩二・東順子・細川愛
山城小百合

臨時 新城とよ子・大城俊・古謝かなえ・知念栄子・知念真衣・前田武士・山田裕二

(平成19年度)

嘱託 新城とよ子・上間真寿美・佐久間クリエ・島袋春美・知念栄子・照屋元子・豊里初江
西原美草・東順子・細川愛

臨時 青木絵美・池原絵利香・池宮秀晃・喜友名香織・喜友名正和・黒須裕太・幸地 優
島田靖之・曾木菊枝・照屋久洋・比嘉 学・松長 稔・吉田美百合・湧川 卓・渡辺美幸

(平成24年度)

嘱託 上地千賀子・上間真寿美・大城 光・呉屋広江・佐久間クリエ・島袋春美・曾木菊枝
知念栄子・照屋元子・富平砂綾子・豊里初江・西原美草・東順子・山城小百合

臨時 島袋 和・城間志津香・祖堅弥生・照屋朝子・渡嘉敷ゆみ子・普久原香・宮里由夏
湧川米子

(平成25年度)

嘱託 上地千賀子・上間真寿美・大城 光・呉屋広江・佐久間クリエ・島袋春美・曾木菊枝
知念栄子・照屋元子・富平砂綾子・豊里初江・西原美草・東順子・山城小百合

臨時 稲嶺律子・金城綾乃・城間志津香・田中英子・仲栄真麻美・宮里美也子

(平成18・19・24年度)

北谷町シルバー人材センター

発掘調査及び資料整理に係る業務委託

(平成18年度)

伊礼原 D 遺跡埋蔵文化財発掘調査委託業務委託 国際航業株式会社

(平成19年度)

伊礼原 D 遺跡南側埋蔵文化財発掘調査委託業務委託 国際航業株式会社

(平成22年度)

伊礼原 D 遺跡出土樹根の放射性炭素年代測定業務委託 パリノ・サーヴェイ株式会社

伊礼原 D 遺跡の自然科学分析業務委託 パリノ・サーヴェイ株式会社

調査指導及び助言（敬称略、所属五十音順）

おきなわ石の会	大 城 逸 朗
沖縄県教育庁文化課	島 袋 洋・知 念 隆 博
沖縄市文化財調査審議会	比 嘉 賀 盛
宜野湾市立博物館	知 念 勇
鹿児島大学法文学部	渡 辺 芳 郎
史跡鴻池新田会所管理事務所	松 田 順一郎
千葉県立中央博物館	黒 住 耐 二
土井ヶ浜人類学ミュージアム	松 下 孝 幸
琉球大学医学部	土 肥 直 美
早稲田大学教育学部	樋 泉 岳 二

第3節 調査経過

発掘作業

発掘作業は平成18年度から平成19年度にかけて実施し、資料整理作業は平成24年度から25年度にかけて実施した。以下、年度毎に記述する。

（平成18年度）

平成18年度は、2月下旬から調査区設定に取りかかり（1,000㎡）、磁気探査実施後の3月からは重機による表土（米軍基地造成土）掘削を行った。予備調査の成果から、表土厚は1m前後である事が判明していたため機械力で一気に掘り下げた。造成土の除去後、旧地表面の砂質層上に5m間隔でグリッド杭を打設、3月15日には新規入場作業員に安全教育を実施し、翌16日からはベルトコンベアの設置等、環境整備と人力掘削を開始した。人力掘削では、確認調査時に埋め戻したトレンチ内の遺構を再検出し、周囲の遺構検出の指標とした（遺構番号0008SF）。3月30、31日には0008SFの検出状況の写真撮影を行い、18年度の調査は終了した。

（平成19年度）

平成19年度は4月2日から現場作業を開始した。初めに、調査区の南西側から遺物包含層の掘削を開始し、掘削作業を追いかけるように遺構検出作業を並行して行った。遺物包含層は、上層（Ⅱ層）・下層（Ⅲ層）に分けられ、上層は下層が削平された後に堆積している様相が見られた（詳細は「第Ⅲ章第2節層序」に記述）。包含層からは、沖縄貝塚時代後期（以下、本章で「貝塚後期」）の土器や沖縄産陶器等の遺物が混在して出土し、上記の堆積状況に起因するものと考えられた。

Ⅲ層を掘削すると1㎡当たり6基程度の密度でピットが検出され、特に南壁付近の17・18ラインでは高密度のためプランの把握は困難であった。4月20日からは遺構掘削に取りかかり、5月11日にはスカイマスターを用いて完掘状況の写真撮影を行った。調査区南東側では、調査区外に遺構が広がる様相を示していた事から、町内関係部署との調整後、7月10日に国際航業株式会社と改定契約を締結し東側に470㎡拡張した。8月20日には境界測量を行い、翌日からは磁気探査と並行して重機による表土掘削を行った。磁気探査では6インチの艦砲弾が確認されたため、町内関係部署、沖縄警察署及び那覇防衛施設局（当時）に報告し、9月4日には自衛隊による撤去作業が行われた。9月中旬までには遺構検出を終え、全景の写真撮影を行い遺構掘削へ移行した。拡張した調査区中央の東壁付近では、直径約12mの落ち込みが確認された（遺構番号4409SX）。自然地形か人為的な

掘り込みかを確認するためサブトレンチを設定したところ、地山の砂層と埋土が互層を成していた事から自然地形と判断した。埋土は粘性の強い腐植土で、くびれ平底土器が主体的に出土しており、貝塚後期の後背湿地の一部と捉えた。10月17日には遺構掘削完了の写真撮影を行い、同26日にはNHKによるテレビ取材班が調査風景の取材に訪れた。平成20年2月7日には、下層確認調査にて部分的に認められた遺物包含層の性格を把握するため、国際航業株式会社と「平成19年伊礼原D遺跡南側埋蔵文化財発掘調査委託業務」を締結し、約50m²の追加調査を実施した。

追加調査では、V b層から貝塚後期の土器のほかイノシシなどの獣骨がまとまって出土したが、遺構は確認されなかった。V b層の下位層にて遺物包含層が無いことを確認し、平成20年2月29日に全ての現地調査を終了した。

整理作業

本発掘調査から出土した遺物量は、標準的な遺物コンテナ(60cm×40cm×15cm)233箱であった。整理作業は、現場作業の雨天時を利用して遺物の洗浄・乾燥及び脆弱遺物の強化を行い、本格的な作業は現地調査終了後の平成24年度から開始した。乾燥後の出土遺物はナンバリングや接合作業等を行い、特徴的な資料を実測した。遺物実測図及び現場作業で作成した層序図や遺構図等は全てスキャンし、パソコン上でデジタルトレース作業を行った。報告書掲載写真はデジタルカメラで撮影したものを扱い、35mmフィルムカメラの資料はアルバムにて整理・保管した。現場作業中に採取した炭化物やサンプル試料については、専門機関へ調査依頼・業務委託を行った。

第II章 位置と環境

位置と周辺環境

北谷町は、沖縄本島中部の西海岸、県庁所在地の那覇市から北東約16kmに位置する。町の総面積は13.78km²で、南北約6km、東西約4.3km。北は嘉手納町、東は沖縄市と北中城村、南は宜野湾市に接している。西は全域が東シナ海に面し、沖縄島の形で見ると中南部にかけてくびれた部分にあたり、彼方に慶良間諸島、高所からは浦添市から読谷村までの内湾する海岸線が眺望される。町役場の位置は、北緯26度18分58秒、東経127度45分55秒で、その北西約700mに伊礼原D遺跡は所在する。

本遺跡を第二次大戦中・戦後の米軍撮影航空写真や地形図などを参考に見ると、遺跡背後には標高約20～30mの丘陵が北東から南西方向に伸び、その谷間を抜けた低地では西側に蛇行し海へ至るナガサ（河川）が流れている。この河川東岸に当たる標高約3.5mの沖積低地に本遺跡は立地する。

戦後は米軍基地（キャンプ桑江）整備により、ナガサは本遺跡南側に流路変更され、遺跡を分断したものと見られる。本遺跡は貝塚時代後期、グスク時代の集落址、戦前の旧集落背後の耕作地の複合遺跡で、国指定史跡伊礼原遺跡のグスク時代の範囲とは同一遺跡^(註1)と考えられる。本遺跡の範囲として捉えた内陸側の一部は縄文海進の痕跡等を有する範囲として国指定範囲となった経緯がある。

地理的環境

本町の地形を概観すると、台地・丘陵・カルスト地形・低地・海浜・サンゴ礁・埋立地などが見られ、東側には台地や丘陵、西側は低地や海浜が広がり、東から西に階段状に低くなる海岸段丘を成す。

海岸段丘の標高は100m以上の中位段丘上位面、100～50mの中位段丘下位面、50～30mの低位段丘面に分かれる。最高値123mが見られる台地は侵食により起伏に富んだ地形を呈している。

主な河川には、町城南側を流れる普天間川（佐阿天川）と町域中央部付近を流れる白比川があり、概ね白比川を境に東側の台地の縁辺部に小さな解析谷が発達し、湧水や河川が見られ、白比川以北では「ナルカー」、「クシヌカーラ」、「ナガサ」などが西流する。

町域北側には、石灰岩段丘下位面やカルスト地形の洞穴や石灰岩残丘、陥没ドリーネが見られ、白比川から南側では石灰岩段丘下位面と小起伏丘陵や石灰岩堤が見られ、主な湧水には「北谷ターブックワ」と称された水田の源流であった町指定文化財の「チブガー」がある。

低地は谷底低地と海岸低地に分けられ、前者は大部分がジャーガル（泥岩層の風化土壌）、後者は海成砂を主体とするが、表層部はジャーガルやマーシ（琉球層群の風化土壌）が堆積する。

海浜にはサンゴ礁が発達しているが、礁池（イノー）はあまり見られず、干潮時には干上がる礁原（ヒシ）だけで構成される。このサンゴ礁には、前述した河川などからの淡水の流入による深い切れ目も見られる。海岸部は公有水面埋立、人工ビーチ・護岸整備が行われ自然の海浜は僅かである。

地質をみると島尻層群を基盤に琉球層群が不整合に覆い、低地では琉球層群を沖積層が不整合に覆っている。琉球層群は大きく南北に区分され、北側が沖縄本島北部の非石灰質の国頭礫層、南側が沖縄本島中南部の石灰質の琉球石灰岩層をなしている。そのため、植生も北部に生育するイタジイ・イジュ・ヤマモモ等と、中南部に生息するアカギ・オオバギ・ヤブニッケイ等があり、本町の

台地・丘陵部は、両方の植物が混生している。しかし、戦争による破壊、戦後の米軍基地整備や戦後復興の狭小な丘陵地から始まる帰村、宅地開発に伴って土地は改変され、自然植生は一部の御嶽や拝所、墓所、城跡等のまわりや台地斜面に残るのみである。

歴史的環境

第二次大戦以前の北谷村は、近世の行政区域を近代までほぼ引き継いだ琉球王府時代の間切の範囲で、米軍上陸により基地使用が開始され極東最大の嘉手納基地によって現在の北谷、嘉手納に分村し現在に至る。本町では字砂辺に戦前の集落の様相を窺えるが、米軍の土地収容や基地整備によって、軽便鉄道から眺望された集落、「北谷ターブックウ」と称された水田や畑の景観は失われた。

本町では現在、53件の遺跡が確認されそのうち指定遺跡は国指定史跡1件、町指定文化財4件の合計5件である。町域の53%を占める基地内に所在するものが多い。

北谷の村落変遷は、1609年の島津侵入以前の歌謡集『おもろそうし』に「きたたん」・「くわい」など5つが見えており、その後1649年の「絵図郷村帳」では9ヶ村、「伊礼」「玉代勢」「伝道」などは1670年代に成立したと推測されている^(註2)。その後、18世紀末から19世紀始め頃に首里・那覇から移り住んだ士族による屋取集落が形成されたと考えられている。

近世の集落以外の遺跡としては古墓群があり、丘陵地の基盤の石灰岩を利用した横穴式の墓が見られる山川原古墓群や大作原古墓群などがあり、米軍基地内に点在する。

1840年に台風によって座礁したイギリスの輸送船インディアン・オーク号の座礁地からは、中国産染付や銅製釘、ワイン瓶破片等の遺物が出土しており、現存する航海日誌から乗務員に対して行った北谷の人々や王府の様子を窺い知ることができる^(註3)。

さらに時代を遡って遺跡を概観すると、町域東側の台地に旧石器時代の鹿化石出土地と桃原洞穴遺跡があり、後者は化石人骨（頭蓋骨）が検出され、鈴木尚氏により桃原洞人と命名されている。

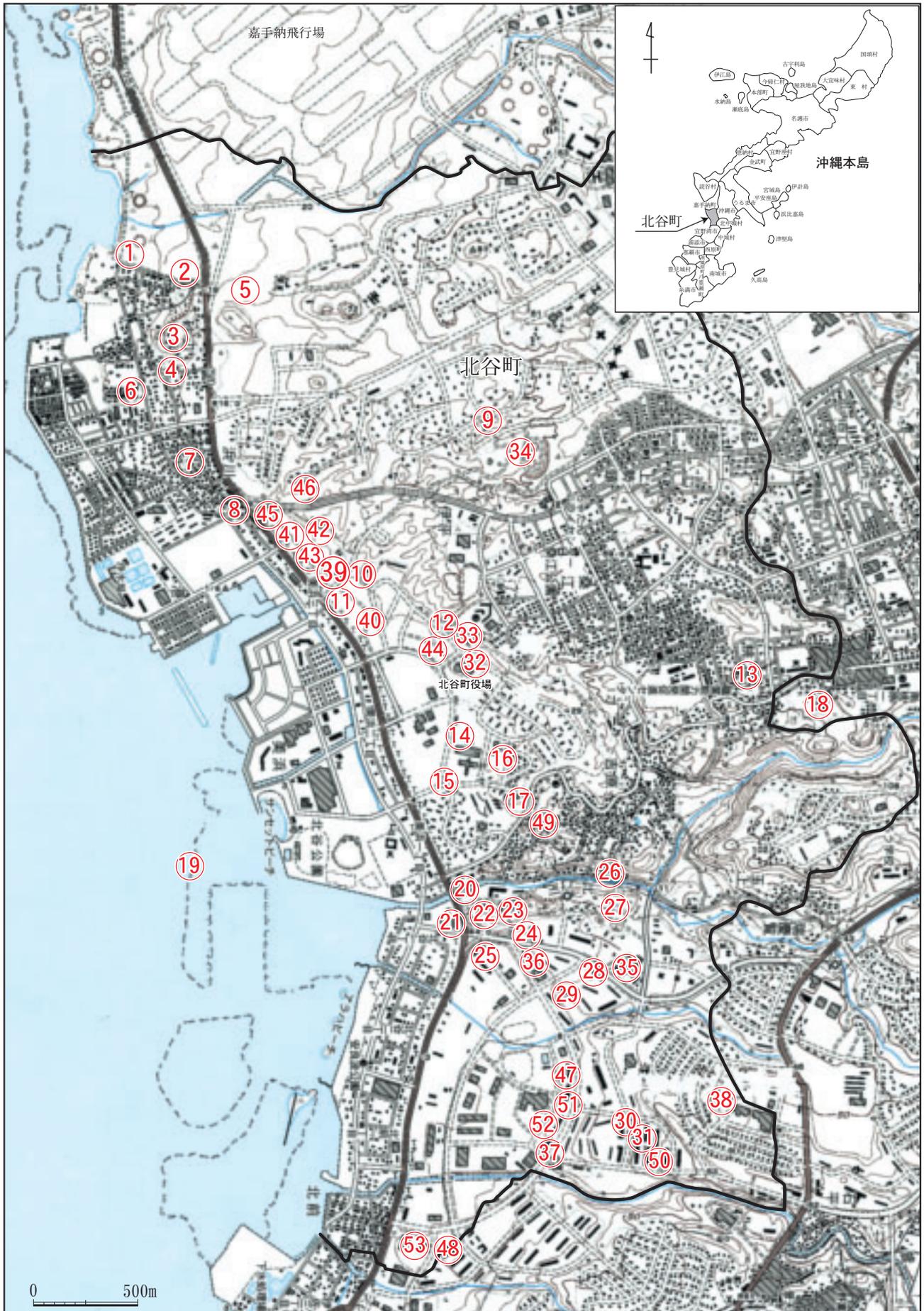
縄文時代に比定する遺跡は12遺跡あり、町北側の砂辺集落背後の石灰岩残丘に所在する砂辺貝塚からは台地上で縄文晩期の方形竪穴住居址、クマヤー洞穴遺跡は陥没ドリネの洞穴で、縄文前期からグスク時代の遺物が得られ、特に縄文晩期の改葬人骨が多数検出され、グスク時代には祭祀場所として利用されたと考えられている。

平成22年に国指定史跡になった伊礼原遺跡は、沖縄諸島の先史時代からグスク時代までの編年体系が網羅できるほどの遺物が得られ、沖縄諸島最古の土器とされる爪形文土器、九州の縄文前期の曾畑式土器、室川下層式土器、面縄前庭式土器、宇佐浜式土器、縄文晩期系土器、弥生式土器、貝塚後期系土器、グスク時代の白磁玉縁口縁碗、滑石製品、カムイヤキ、青磁、染付などが出土した複合遺跡である。生活の場も丘陵側の湧水に近い低湿地区から砂丘へと展開するなど長きに亘る利用、自然災害の痕跡が砂丘の堆積に見られるなど各時期の変遷も含めた成果が明らかとなった。

伊礼原遺跡の南東側に位置する伊礼原E遺跡は、沖縄において初めて縄文が施文された土器（船元系土器）が確認され、また津波による自然災害を受けたことが明らかになった遺跡である。

貝塚時代後期（弥生～平安並行期）に比定する遺跡は16遺跡ある。主に沖積低地の砂地に立地しており、字砂辺北側の砂辺サーク原貝塚、基地返還跡地（旧キャンプ桑江北側）の沖積低地に立地する本遺跡や平安山原A～C遺跡、伊礼原遺跡（砂丘区）、伊礼原E遺跡、小堀原遺跡などがある。これらの遺跡では、住居址や貝集積遺構、在地土器の浜屋原式土器・大当原式土器・アカジャンガー式土器などの出土に伴って弥生式土器の出土も見られ、貝製品（貝交易に関連する貝輪、ホラガイ製容器、漁網錘等）、サンゴ礁に棲息する大形貝や動物骨などの食料残滓が出土している。

グスク時代（おおよそ12～17世紀前半）に属する遺跡は25遺跡あるが、丘陵（石灰岩堤）に



第2図 北谷町の位置と遺跡分布

第1表 北谷町遺跡一覧

2012年現在

No.	遺跡名	時期	所在地
1	砂辺(すなべ)サーク原貝塚	弥生～平安並行期	字砂辺差久原
2	砂辺サーク原遺跡	縄文後期～近世	字砂辺加志原
3	砂辺貝塚	縄文後期～グスク	字砂辺村内原
4	砂辺ウガン遺跡	弥生終末～平安並行期	字砂辺加志原
5	カーシーノボントン遺物散布地	縄文晩期	字砂辺加志原
6	クマヤー洞穴遺跡	縄文前期～戦前	字砂辺村内原
7	浜川千原岩山(はまがわせんばるいわやま)遺物散布地	縄文晩期	字浜川浜川千原
8	浜川ウガン遺跡	弥生終末～平安並行期	字浜川浜川
9	上・下勢頭区古墓群(かみ・しもせどくこぼぐん)	近世	字上勢頭平安山伊森原・伊礼伊森原・下勢頭平安山下勢頭原
10	伊礼原(いれいばる)遺跡	縄文早期～戦前	字伊平伊礼原
11	伊礼原B遺跡	縄文前期～晩期・近世・戦前	字伊平伊礼原
12	桑江ノ殿(くわえのとうん)遺物散布地	グスク～近世	字桑江小堀原
13	鹿化石出土地	旧石器	字吉原柴口原・桃原
14	前原古島(めーばるふるじま)A遺跡	近世	字桑江桑江原・前原
15	前原古島B遺跡	近世	字桑江前原
16	伊地差久原(いじさくばる)古墓	近世	字桑江伊地差久原
17	前原古墓群	近世	字桑江前原
18	桃原(とうばる)洞穴遺跡	旧石器	字吉原東新川原
19	インディアン・オーク号の座礁地	近世	字北谷地先
20	池(いち)グスク	グスク	字吉原東宇地原・西宇地原
21	白比川(しらひがわ)河口遺物散布地	縄文前期	字北谷西表原
22	北谷城(ちやたんぐすく)遺跡群	平安並行期～グスク	字大村城原
23	北谷城	平安並行期～グスク	字大村城原
24	北谷城第7遺跡	弥生～グスク	字大村城原
25	北谷番所址	グスク	字北谷北谷原
26	吉原東角双原(よしはらあがりちぬまたばる)遺物散布地	グスク	字吉原東角双原・西角双原
27	山川原(やまがーばる)古墓群	近世	字大村山川原
28	玉代勢原(たまよせばる)遺跡	平安並行期～グスク	字大村玉代勢原
29	長老山(ちやうろうやま)遺物散布地	グスク～近世	字大村玉代勢原
30	大道原(うふどうばる)A遺跡	グスク	字北谷大道原
31	大道原B遺跡	縄文晩期	字北谷大道原
32	後兼久原(くしかにくばる)遺跡	グスク	字桑江後兼久原・字桑江小堀原
33	ジョーミーチャー古墓	グスク	字桑江小堀原
34	伊礼伊森原(いりーいーむいばる)遺跡	グスク	字上勢頭伊礼伊森原
35	後原(くしばる)遺跡	グスク～近世	字大村玉代勢原
36	塩川原(すーがーばる)遺跡	グスク	字北谷塩川原
37	稲干原(んにふしばる)遺跡	弥生並行期	字北前稲干原
38	横嵩原(よこたけばる)遺跡	グスク	字北前横嵩原
39	伊礼原D遺跡	弥生～グスク	字伊平伊礼原
40	伊礼原E遺跡	縄文前期～近世	字伊平伊礼原
41	平安山原(はんざんばる)A遺跡	グスク～近世	字伊平平安山原
42	平安山原B遺跡	弥生～近世	字伊平平安山原
43	平安山原C遺跡	弥生～近世	字伊平平安山原
44	小堀原(くむいばる)遺跡	弥生～近世	字桑江小堀原
45	千原(せんばる)遺跡	グスク	字伊平千原
46	大作原(うふさくばる)古墓群	近世	字伊平大作原
47	東表原(あがりうむていばる)遺跡	縄文晩期	字北谷東表原
48	新城下原(あらぐすくしちやばる)第2遺跡	縄文早期～近世	字北谷安仁屋原
49	東宇地原(あがりうじばる)古墓群	近世	字伝道原東宇地原
50	大道原C遺跡	近世	字北谷大道原
51	大道原D遺跡	グスク	字北谷大当原
52	高畔原(たかぶしばる)水田跡	近世～戦前	字北谷高畔原
53	安仁屋原(あにやばる)遺跡	グスク～近世	字北前安仁屋原

註：時代表記は概ね「縄文時代」→「貝塚時代前期」、「弥生～平安並行期」→「貝塚時代後期」、「グスク」→「12～17世紀前半」、「近世」→「17世紀後半～明治以前」、「戦前」→「1945年以前」

《参考文献》

- ①中村愿・田場勝也ほか「北谷町の遺跡—詳細分布調査報告書—」『北谷町文化財調査報告書』第14集 北谷町教育委員会 1994年
- ②中村愿・東門研治・島袋春美『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査—伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業』北谷町文化財調査報告書 第23集 北谷町教育委員会 2005年3月
- ③中村愿・東門研治・松原哲志・島袋春美ほか「伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡『キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成10～14年度)』北谷町文化財調査報告書 第27集 北谷町教育委員会 2008年3月
*番号は位置図に付随

立地する連郭式の城壁を有している北谷城（グスク）は、フェンサ下層式土器も出土するが14～15世紀の中国産の青磁や褐釉陶器などが得られており、このころが盛行期と考えられている。

北谷城とほぼ同時期の中国産陶磁器が出土し、「吹出原型掘立柱建物」の類似が見られる掘立柱住居址と高床式建物址がセットで確認され、砂鉄貯蔵穴、木棺墓の可能性のある土坑墓、畠跡などが検出された集落遺跡の後兼久原遺跡が丘陵麓と低地に立地し、類似する住居址や建物址、土壙墓などが確認され、沖縄県内最古（10～12世紀）の麦、稲が確認された小堀原遺跡（2012）は緩斜面地から低地にかけて立地し、丘陵地では、水田または畑の可能性が考えられた谷間を横断する石列が検出された伊礼伊森原遺跡がある。

註1：北谷町教育委員会 2006『伊礼原D遺跡』北谷町文化財調査報告書 第28集

註2：北谷町役場 1986「北谷の村落変遷」『北谷町史 第二巻 資料編1 前近代編 近代文献資料』

註3：北谷町役場 1986「インディアン・オーク号海難救助関係資料」『北谷町史 第二巻 資料編1 前近代 編近代文献資料』

〈引用・参考文献〉

北谷町教育委員会 1994『北谷町の遺跡—詳細分布調査報告書—』

北谷町教育委員会 2007『伊礼原遺跡—伊礼原B遺跡ほか発掘調査—』

北谷町総務部企画財政課 2009『沖縄県北谷町・町勢要覧』

北谷町教育委員会 2005『北谷町史 第1巻 通史編』

北谷町 2010『北谷町緑の基本計画基礎調査〈報告書〉』

北谷町教育委員会 2006『北谷町の地名—戦前の北谷の姿—』北谷町文化財調査報告書 第24集

北谷町教育委員会 2005『キャンプ桑江返還に伴う試掘調査』北谷町文化財調査報告書 第23集

北谷町教育委員会 2012『小堀原遺跡』北谷町文化財調査報告書 第34集

北谷町教育委員会 2012 史跡『伊礼原遺跡』保存管理計画書



第1図 伊礼原D遺跡の位置とキャンプ桑江北側地区の遺跡

第Ⅲ章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査区及びグリッド設定

調査地は、確認調査の結果を踏まえ伊礼原160番地一帯の標高4.0～5.5mの平坦地に定めた。地区割りについては、今後の桑江伊平土地区画整理事業地内における発掘調査でも整合性がとれるよう統一性を持たせた。具体的には、100m×100mの大グリッドで事業地内全体を覆い、大グリッドの中には5m×5mの小グリッドを設定した。グリッド名称は、大小ともグリッドの北東を基準に南東へ01～20、南西へA～Tとし（第3図）、本調査区は大グリッドA5の一部とB5の範囲内に位置する。

・表土掘削

調査区の設定後、磁気探査を実施し機械力を用いて表土掘削を行った。磁気探査では、污水管や鉄屑等、米軍基地に帰属する金属類が認められた。また、不発弾のほか磁気探査では探知できない小銃弾等も出土したが、これらについては関係部署と調整し自衛隊や警察が回収した。表土掘削ではこれら金属類を撤去しつつ、バケット容量0.8m³のバックホウ3台と10tダンプ3台にて米軍基地建設時の造成土及び確認調査時の埋土の一部を掘削・運搬した。

・包含層掘削及び遺構検出

遺物包含層は、遺物量や出土状況に応じて小形のスコップや手鍬、ねじり鎌を用いて掘削を行った。出土遺物は層位・グリッド毎に取り上げ、特徴的な遺物や一括遺物については実測図作成と写真撮影を行った。遺構検出作業は基本的にジョレンを用いたが、より精査が必要な箇所についてはねじり鎌を用いた。排土はベルトコンベアを使用して場外搬出し、バックホウ及びダンプトラックを用いて残土置き場へ運搬した。

・遺構掘削

遺構は基本的に長軸で半截し、溝は規模に応じて2～4箇所程の土層観察用畦を残し掘削した。

・記録作業

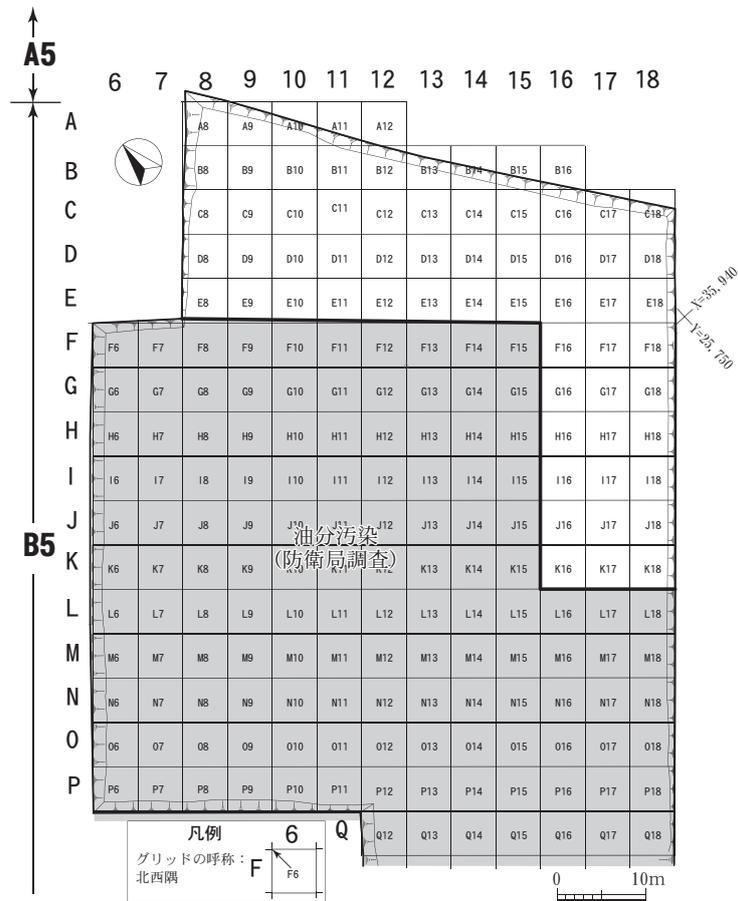
実測は基本的に電子平板を用いて行い、重要遺構については手実測も併用して行った。写真撮影では、35mmフィルムカメラと600万画素のデジタルカメラ、中判カメラ（6×7）を用い、フィルムカメラでは、カラーリバーサル、モノクロを使用した。全景写真については、状況に応じてラジコンヘリコプター・高所作業車を使用して撮影した。

・自然科学分析

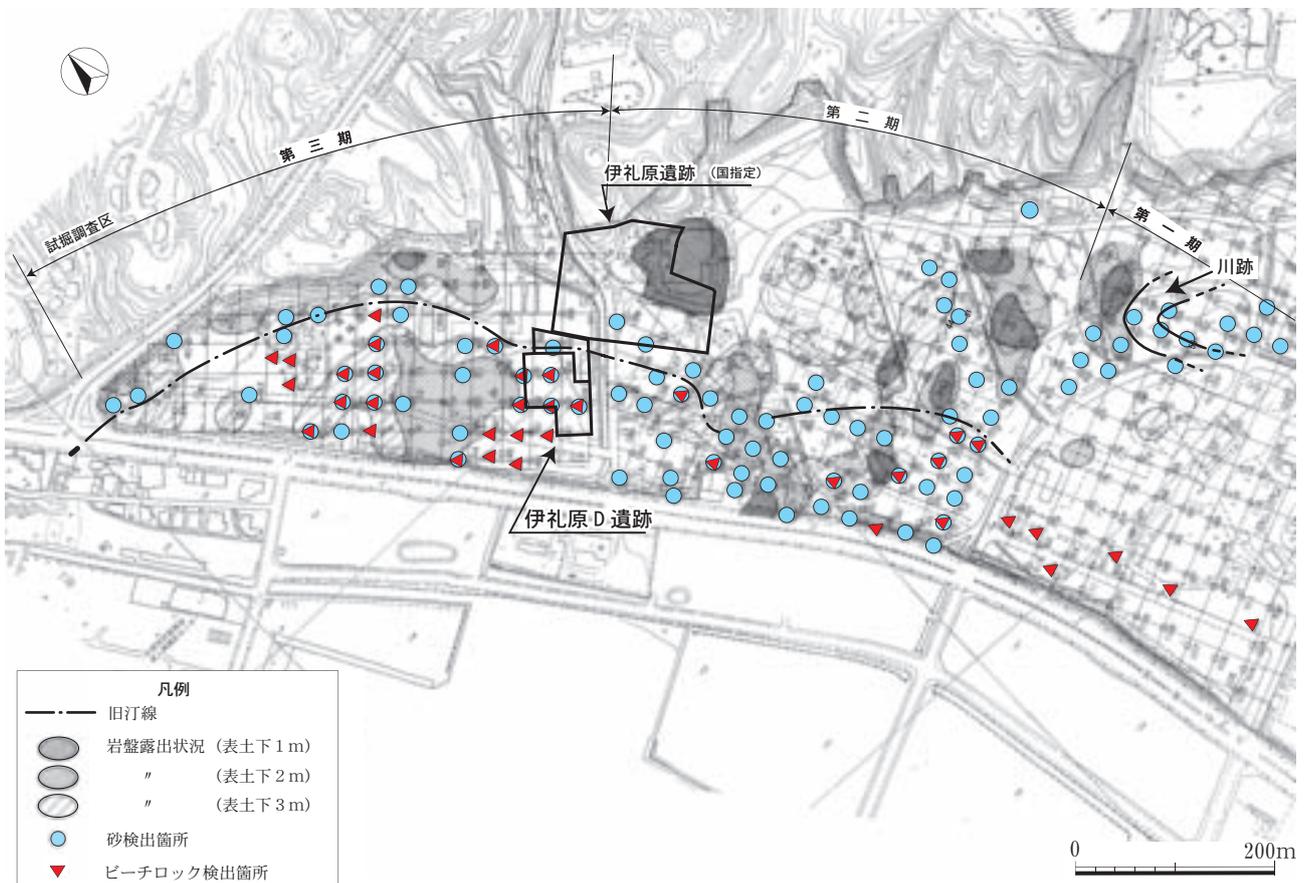
自然科学分析では、遺構番号4409SX下部から出土した樹根や型式不明土器の年代測定のほか土器の胎土分析を専門機関に委託した。

・整理作業

整理作業では特徴的な遺物を抽出し、手実測及び実測器による図面作成を行った。トレースはデジタルトレースを行い、写真撮影では1200万画素のデジタルカメラを用いた。現場作業にて作成した遺構平面図は、時期毎の全体図のほか個別遺構図を掲載し、現地調査及び整理作業でも判然としなかったピット等については詳細な記述を割愛した。



第3図 グリッド設定



第4図 旧汀線の復元と試掘検出箇所

小堀原遺跡 (2012) 参考に『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』(2005)に加筆

第2節 層 序

本遺跡の層序は、Ⅰ～Ⅵ層に大別される。第6～9図に、調査時に付した層名称、層番号を示し、第2表に層序観察一覧、Ⅴ層検出面の色調による平面分布を第5図c・dに示す。以下、各層について述べる。

Ⅰ層：表土。客土、層厚約70cm～1m40cm。3つに大別される。

1. 旧キャンプ桑江北側返還後の油分汚染土壌処理後の入換土。
2. 米軍基地整備の造成土で、戦後の大規模な造成によるものと見られ、返還以前のバスターミナル等の整地と見られる硬く締ったコーラルクラッシャーによる転圧路盤が東から西へ平坦化された様子が確認された。
3. 基地収用時の旧表土を用いた造成と見られる攪乱層。

Ⅱ層：近・現代（第1文化層）。

調査範囲のほぼ全面に堆積し、3枚（イ・ロ・ハ）に分けられる。

イ：調査区北側の0008SFとその周辺に見られ、道路築造層（8～12・15～17・26～34・36・37・67層）と耕作土（18～25層）と考えられる。（第6図①・②）

道路築造層とした各層のうち、大型サンゴ石灰岩礫等を含む37層は厚さ約1mを測り、0008SFに関連した道路の基礎築造層と判断され（第Ⅲ章第6節1）、8層はその路面の可能性のあるものと思われ、厚さ約8～16cmを測る。この8・37層の間に堆積する9～11、15～17、26、27、31、36層は最も厚い部分で約94cmを測る造成土と考えられる。

耕作土は、東壁1（第6図①）のD12付近で畦と見られる台形状を呈する部分（26層）を境に18（褐色細砂質シルト）、19層（にぶい黄褐色粗砂層）、24層（にぶい黄褐色細砂質シルト）が南北側に堆積している。これらの堆積は、後述する1945年の米軍上陸前の耕作地域の様相を示しているものとする。

ロ：15ライン付近から南側に堆積する〔45（包含層1）・75～77層〕は、東壁2（第6図②）ではC17・18、南壁ではC～K18に見られる。厚さ約10～20cmを測る。

南壁（第7図）では、耕作地境界と考えられる段差が4ヶ所（D・H・J・Lライン付近）に見られ、J18グリットではⅢ層〔78層（包含層2）〕を切っており、削平による土地改変が行われたと見られる。土質は包含層2に類似しており、母材としたものと思われる。

ハ：SZの埋土とA11、B12～14に堆積する。前者は東壁1（第6図①）のⅡ層イ（0008SF）下位となる4439SZ（38・41層）、4436SZ（46層）、0588SZ（68～70層）、Ⅱ層ロ下位の0350SZ（71～74層）、東壁2（第6図②）は4442SZ（39・41・42層）とA11、B12～14に堆積する46層である。

Ⅱ層ハのうち、Ⅱ層ロ下位にある0350SZによってⅢ層口の柱穴群が失われていることから同SZ（71～74層）はⅢ層口より新しく、Ⅱ層口より古い、また、その他のSZはⅡ層イ（0008SF）の下位にあることからⅡ層イ（0008SF）より古くA11、B12～14のⅢ層イより新しい堆積と判断される。このⅡ層ハの下位にⅤb層は見られない。

本調査区北側のA～E8北壁（巻首図版5）では、4442SZ最下部の41層に0008SFの石積が見られ、4442SZの埋土は、乱れた堆積であることから、河川（後背湿地）に起因する自然地形の窪みと考えられ、0008SFは軟弱な地盤に礫を積んで道路の基礎を構築したものと考えられる。

近・現代の遺構である 0008SF、0019SL（第5図a）は、沖縄産陶器、瓦、本土産陶磁器等の出土遺物から大正頃までは遡れるものと見られる。

第88図の1945年の沖縄戦の米軍上陸前は、丘陵間を流れ平地部で蛇行するナガサ沿いの耕作地には水田の地籍も見られ、隣接する伊礼原遺跡（2007）の第3層（3a層）は、水田床土と思われる堆積や畝の畝跡が検出されていることから、第5図bに示した本遺跡を縦横に走るSZは、河川の氾濫または農耕に伴う治水の可能性もあるものと考えられる。

Ⅲ層：グスク時代の遺物包含層（第2文化層）。

土色や土質、堆積範囲からイ（47～50層）、ロ〔78層（包含層2）〕に分けられる。

イ：47～50層は、11ラインから南側の4409SX一帯で、同遺構埋没後の浅く窪む地形に堆積し、16ライン付近で途切れるが、出土遺物からⅢロ（78層）と同時期と見られ、範囲確認調査4トレンチの③層（淡灰褐色～黒色砂質層）に相当すると判断される。Ⅲイ（47～50層）全体での層厚は厚い部分で約50cm、南側では約10cmと薄くなる。北側へは、範囲確認調査4トレンチ跡の境目で約36cm、同トレンチ中央付近で途切れる。

ロ：78層は柱穴群が検出された範囲に見られ、東壁1（第6図①）ではD17ライン付近から南側に堆積し、南壁（第7図）ではD19の4400SD付近の東側に堆積は見られず、西側は前述したJ18でⅡ層に切られている。本層の標高は約3.3～3.7m、層厚は厚いところで約38cm、薄いところで約8cm。本層の出土遺物には、15～17世紀（青磁・褐釉陶器・染付・白磁等）の遺物が主体的に出土する。

Ⅲ層の広がりとは国指定史跡伊礼原遺跡（2007）の調査成果と区画整理事業に伴う発掘調査成果から、集落は本調査範囲を中心に川沿いに形成され、隣接する国指定史跡伊礼原遺跡側に広がりを有することが確認された。また、後述するⅣ層の堆積状況などからこの頃は貝塚時代後期よりも陸地の形成が進んでいたことが本遺跡でも窺われた。

Ⅳ層：4409SX埋土。

本遺構内には後述するⅤa層が堆積しており間層に相当すると見られる。

本層は、上位面（51・52層）と下位面（53～60層）に分けられる泥炭層。出土遺物の取上げは4枚に細分された。

上位面（51・52層）は、4409SX内に細かく細分される堆積が繰り返された後の上部で、52層は約8cmと薄く、51層は比較的安定した堆積の様相を呈する。51層の層厚は中央部で約34cm、外側へ次第に厚さを減ずる。出土遺物の取上げでは1層となる。

下位面（53～60層）は、出土遺物の取上げでは2層（53層）、3層（54～56層）、4層（57～60層）。この3層で自然木や樹根が見られ、樹根による放射性¹⁴C年代測定結果は950±30BP（第Ⅳ章第3節）である。層厚は2層（53層）約10～20cm、3層（54～56層）は4～16cm、4層（57～60層）は12～34cmを測る。

Ⅴ層：貝塚時代後期の遺物包含層。Ⅴa層はシルト質層、Ⅴb層は砂層である。

Ⅴa層：61・62層（第3文化層）（第6図②）

4409SX内の北側で、中央部へ傾斜して堆積しており、Ⅵ層（白砂層）上位で堆積が確認された範囲確認調査4トレンチの④層（黒色混貝土層）に相当すると判断される。土器、貝などを多量に含むシルト質層で、くびれ平底土器が主体である。層厚は厚いところで約36cmを測る。

Ⅴb層：80層（砂1・2）、砂①～⑥（包含層3）（第4文化層）（第7図）

海成砂層で、概ね東から西側に緩く傾斜する堆積が繰り返されており、80層は、第5図cで示したV層面で砂1・2の色調により分けられており、(砂1、厚さ約12～28cm、暗色砂層)は主にH18に見られ、その周囲の砂2(白砂層、厚さ25cm程度)はH～L16より南側に広がる。

G・H15～18、I18では、さらに「砂2」下位の追加調査(50m²)を行った結果、東から西へ緩やかに傾斜する6枚(砂①～⑥)(第2表)を確認した。

Vb層の広がりには後述する遺物の出土状況から海側に傾斜する広がり、隣接する国指定史跡伊礼原遺跡や国指定外の伊礼原遺跡に見られる。出土する土器は、貝塚時代後期土器の尖底が主体で、また、H17でイモガイ集積遺構(第15図)が検出された。

VI層：地山。VIa層の砂層、VIb層の砂利・枝サンゴ層に大別される。

VIa層：砂層(63層、T1-2-1～18)

南壁のH・I19や4409SXの縁辺部の下層確認調査トレンチ南壁(C～F13)に見られるように、砂層は海側に向かって傾斜する層が連続して重なる(巻首図版6、第8図)。

本層は概ね海成砂層で、上部はやや中砂、色調は灰オリーブ色～灰黄色、黄色や黄褐色、明褐色に分けられ(巻首図版7)、下部では粗砂となり灰白色と明黄褐色の色調の異なる互層堆積や、灰白色細砂も見られる。灰白色細砂には4409SXの近くで遺跡背後の丘陵間を流れる川に起因する川砂の堆積も僅かに見られる。巻首図版6(1段目左上)にみえる4409SXの下面には海砂が堆積する。

F18～G18では、本層上面に軽石のまとまる範囲、G17・18で枝サンゴのまとまりが概ね南北方向で帯状に検出された(第5図d)。

VIb層：砂利・枝サンゴ層(81層)

標高約1.5m以下に堆積し、厚さ1.6m以上堆積する。上部は粗砂が目立ち、その下位の枝サンゴ層はサンゴ礫を含む。(巻首図版6)

枝サンゴ層は、伊礼原、平安山原地域の試掘調査で広範囲に確認され、伊礼原E遺跡発掘調査報告書(2010)で報告されたビーチロックの下位に確認されている。本遺跡では、同報告の古汀線の復元ラインよりやや内陸側で確認された。

本遺跡や平安山原A～C遺跡、伊礼原E遺跡が所在する伊礼原、平安山原地域では、枝サンゴ層やビーチロックから室川下層式土器(巻首図版6)、面縄前庭式土器、伊波式土器、大当原式土器、貝塚時代後期土器が出土した。本遺跡のVI層からも面縄前庭式土器、船元系土器が出土した(第20図3)。その船元系土器の破片に付着した炭による放射性¹⁴C年代測定結果は4,450±40BP(補正年代)である(第IV章第3節)。

このようにVI層出土の貝塚時代前期の土器は、伊礼原遺跡(2007)及び伊礼原E遺跡(2010)で主体をなし、これらの暴浪や津波の痕跡が報告されていることから、両遺跡の遺物が二次堆積したものと考える。

また、4409SXはナガサの浸食や範囲確認調査(2008)によると調査区の北側で川跡が確認されていることから後背湿地が北側に広がっていたものと推察される。このことは南側に位置する小堀原遺跡(2012)でも沖積低地を蛇行する古い川跡が確認されていることから証左される。貝塚時代後期の集落は、背後の後背湿地をもつ緩やかに傾斜する砂丘に貝塚が形成され、集落の広がりには国指定史跡伊礼原遺跡側にある様子が窺えた。

第2表-1 層序観察一覧

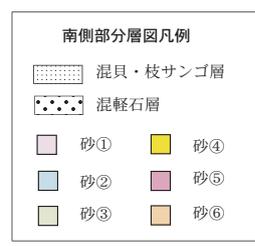
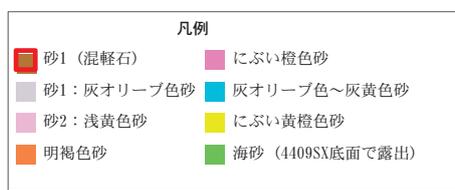
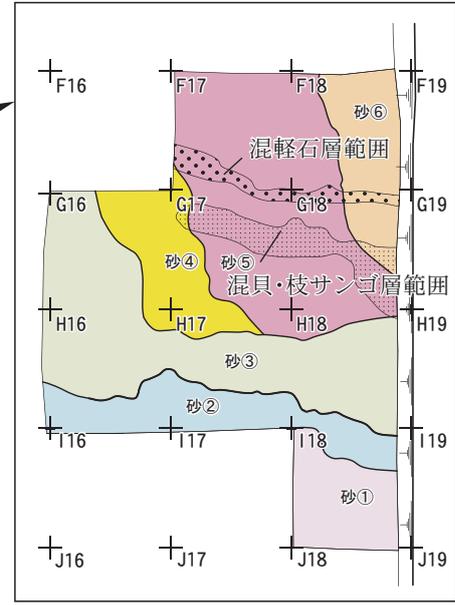
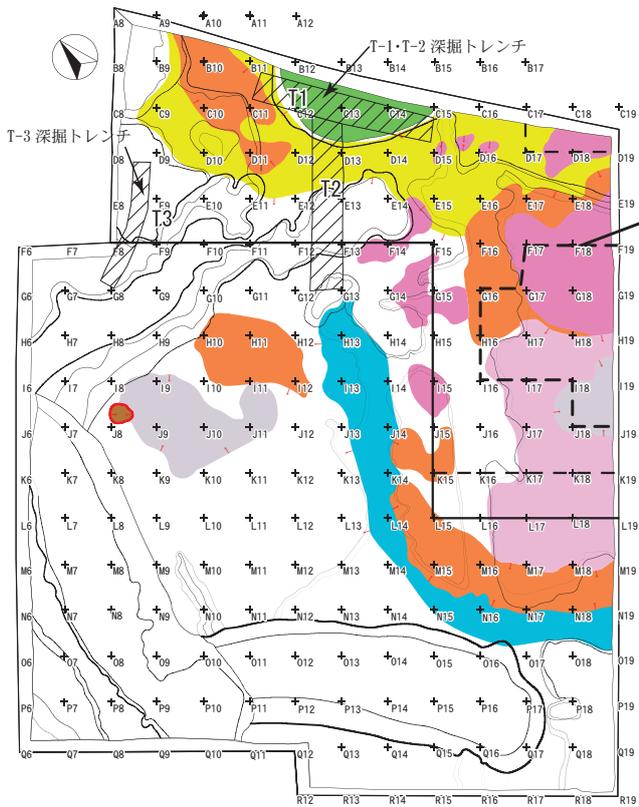
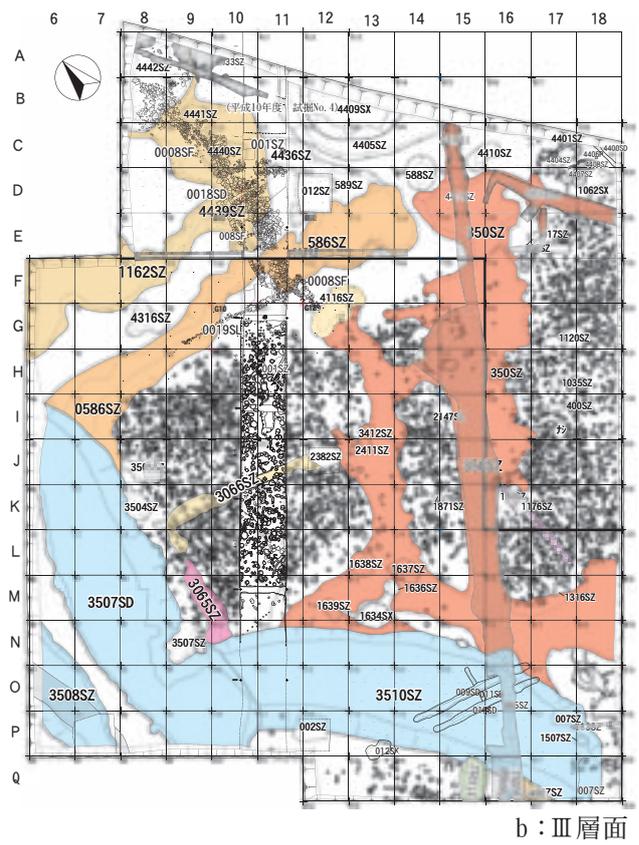
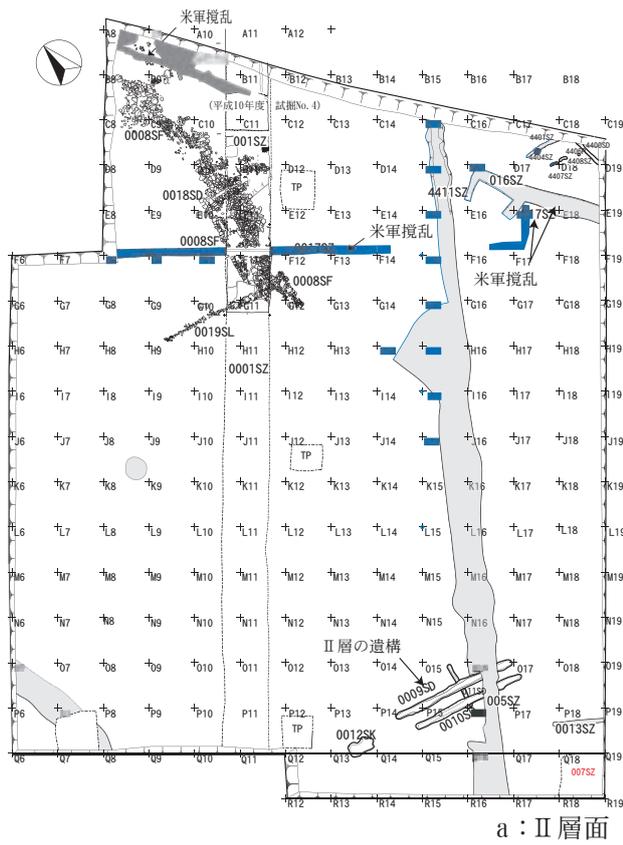
層序名	分層番号	層・埋土の特徴	色調	備考		
I層	I	1 にぶい黄褐色細砂	10YR5/3	第6図①東壁1・第6図②東壁2・第7図南壁		
		2 少量の黒褐色(2.5Y3/2)のシルトブロック、径1～5mmの貝片・コーラル片、含むにぶい褐色細砂質シルト	7.5YR5/3	第6図②東壁2・第7図南壁		
		3 径1～3mmの炭化物、径1～5mmの貝片・コーラル片含むにぶい黄褐色中砂質シルト	10YR7/3	第7図南壁		
		4 褐色粗砂まじりシルト	10YR4/6	第6図①東壁1・第6図②東壁2		
		5 明黄褐色細砂質シルト	10YR6/8	第6図①東壁1・第6図②東壁2		
		6 径1～5mmの貝片・コーラル片含む灰黄褐色砂質シルト	10YR5/2	第6図②東壁2		
		7 径3～5mmの礫含む粗砂まじり褐色細砂質シルト	10YR4/6	第6図①東壁1		
		13 粗砂まじり黄褐色細砂質シルト	10YR5/6	第6図①東壁1		
		14 灰オリーブ色(5Y4/2)シルトのブロック含む粗砂まじり黄褐色細砂質シルト	2.5Y5/4	第6図①東壁1		
		40 径1～5mmの貝片・コーラル片含む暗褐色細砂質シルト	10YR3/3	第6図②東壁2・第7図南壁・4400SDの埋土		
		43 径2cmの貝片、径3cmのコーラル含むオリーブ褐色細砂質シルト	2.5Y4/3	第6図①東壁1・第6図②東壁2・第7図・南壁下部に鉄分の沈着あり		
		44 径1～5mmの貝片・コーラル含むオリーブ褐色細砂質シルト	2.5Y4/4	第7図南壁		
		II層	IIイ	18 径3cmの礫含む粗砂まじり褐色細砂質シルト	10YR4/4	巻首図版5 第6図①東壁1
				19 径1cmの貝片・コーラル含むシルトまじりにぶい黄褐色粗砂	10YR5/4	巻首図版5 第6図①東壁1
20 炭化物、貝片、鉄分含む粗砂まじりオリーブ褐色細砂質シルト	2.5Y4/2			第6図①東壁1		
21 径2cmのビーチロック、径3cmの礫含む粗砂まじり暗黄褐色中砂	10YR6/6			第6図①東壁1		
22 明褐色(7.5YR5/8)シルトのブロック含む粗砂まじりにぶい黄褐色細砂質シルト	10YR4/3			巻首図版5 第6図①東壁1		
23 炭化物、鉄分含む粗砂まじりにぶい黄褐色細砂質シルト	10YR4/3			第6図①東壁1		
24 炭化物含む粗砂まじりにぶい黄褐色細砂質シルト	10YR4/3			巻首図版5 第6図①東壁1		
25 炭化物、貝片、コーラル、黄褐色(10YR5/6)シルトのブロック含む粗砂まじりオリーブ褐色細砂質シルト	2.5Y4/4			巻首図版5 第6図①東壁1		
8 径3cmの貝・コーラル含む明褐色粗砂まじりシルト	7.5YR5/6			巻首図版5 第6図①東壁1・0008SF 路面層		
9 黄褐色細砂質シルト	10YR5/6			巻首図版5 第6図①東壁1・0008SF 造成層		
10 径15cmビーチロック含む粗砂まじり明黄褐色細砂質シルト	2.5Y6/6			巻首図版5 第6図①東壁1・0008SF 造成層		
11 コーラルまじりの明黄褐色シルト質中砂	10YR6/6			巻首図版5 第6図①東壁1・0008SF 造成層		
12 黒色(10YR2/1)・黄褐色(10YR5/6)シルトのブロック含むにぶい黄褐色シルト	10YR5/3			巻首図版5 第6図①東壁1・しまり強い		
15 上部：径5mm～10mmのサンゴ片・貝片・礫まじり黄褐色シルト質中砂	10YR5/6			巻首図版5 第6図①東壁1・第6図②東壁2		
16 径1～5mmの炭化物を少量含むにぶい黄褐色砂質シルト	10YR5/4		巻首図版5 第6図②東壁2・4430SZの埋土最上位?			
17 径1cmの礫含む粗砂まじり褐色シルト	10YR4/4		巻首図版5 第6図①東壁1・0008SF 造成層			
26 鉄分含むにぶい黄褐色中砂まじりシルト	10YR4/3		巻首図版5 第6図①東壁1・0008SF 造成層			
27 オリーブ色(5Y5/6)・黄褐色(10YR5/6)シルトのブロック含む粗砂まじり明黄褐色細砂質シルト	2.5Y6/8		巻首図版5 第6図①東壁1・0008SF 造成層・第6図②東壁2・4430SZの埋土			
28 にぶい橙色シルト	7.5YR6/4		巻首図版5 第6図②東壁2・4430SZの埋土			
29 暗褐色(10YR3/4)ブロックを少量含む明黄褐色細砂質シルト	10YR6/6		巻首図版5 第6図②東壁2・4430SZの埋土			
30 径1～5mmの貝片含むにぶい黄褐色細砂質シルト	10YR5/4		巻首図版5 第6図②東壁2・4430SZの埋土			
31 上部に黄褐色(10YR5/8)シルトのブロック、下部に鉄分を含む中砂まじりにぶい黄褐色細砂質シルト	10YR4/3		巻首図版5 第6図①東壁1・0008SF 造成層			
32 粗砂まじりにぶい黄色細砂質シルト	2.5Y6/4		巻首図版5 第6図①東壁1・第6図②東壁2・4430SZの埋土			
33 赤褐色砂質シルト	5YR4/8		巻首図版5 第6図②東壁2・4430SZの埋土・鉄分の沈着あり			
34 貝・コーラル含む中砂まじりにぶい黄褐色シルト	10YR4/3		巻首図版5 第6図①東壁1・第6図②東壁2・4430SZの埋土・下部に若干砂を多く含む			
36 粗砂まじり褐色細砂質シルト	10YR4/4		巻首図版5 第6図①東壁1・0008SF 造成層・しまり強い			
37 ビーチロック、貝片含む中砂まじり黄褐色細砂質シルト	10YR5/6		巻首図版5 第6図①東壁1・0008SF 基礎構築礫層			
67 褐色(10YR4/4)シルトのブロック含む粗砂まじり褐色細砂質シルト	10YR4/4		第6図①東壁1・D14・Pit 67			
IIロ	45 炭化物、径5cmの貝片、径1mmのコーラル含むオリーブ褐色細砂質シルト		2.5Y4/3	第6図①東壁1・第6図②東壁2・第7図南壁・包含層		
	75 径3mmのコーラル、黄褐色(10YR5/8)・明褐色(7.5Y5/8)シルトのブロック、径2mmの貝片含むにぶい黄色細砂質シルト		2.5Y6/3	第6図①東壁1・D17・Pit 75		
	76 径1cmの軽石、径10cmの貝片、オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルトのブロック含む黒褐色細砂質シルト		2.5Y3/2	第6図①東壁1・D18・Pit 76		
	77 径1cmの貝片、黄褐色(2.5Y5/3)シルトのブロック含む黒褐色細砂質シルト		2.5Y3/2	第6図①東壁1・D18・Pit 77		
	IIハ		35 径2mmの礫含む粗砂まじり暗灰黄色細砂質シルト	2.5Y4/2	巻首図版5 第6図①東壁1	
			38 粗砂まじりオリーブ褐色細砂質シルト	2.5Y4/3	巻首図版5 第6図①東壁1・4439SZ	
		39 径1～10mmの礫含む暗褐色細砂質シルト	10YR3/4	巻首図版5 第6図②東壁2・4442SZ		
41 明黄褐色(2.5Y1.7/1)シルトのブロック含む中砂まじり黒色シルト		10YR1.7/1	巻首図版5 第6図①東壁1・4439SZ・第6図②東壁2・4442SZ			
42 径1～10mmの貝片・コーラル片含む黒褐色細砂質シルト		10YR3/2	巻首図版5 第6図②東壁2・4442SZ			
46 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルトのブロック含む黒褐色シルト		2.5Y3/2	巻首図版7 第6図①東壁1・粘性強い・4436SZ内・第6図②東壁2			
64 礫、貝片含む暗オリーブ褐色細砂質シルト		2.5Y3/3	巻首図版5 第6図①東壁1			
65 シルトまじり褐色中砂		10YR4/4	巻首図版5 第6図①東壁1			
66 粗砂まじり暗灰黄色細砂質シルト		2.5Y4/2	巻首図版5 第6図①東壁1			
68 貝片含むオリーブ褐色細砂質シルト		2.5Y4/4	第6図①東壁1			
69 炭化物、貝片、径1cmのコーラル含む黒褐色細砂質シルト		10YR3/1	第6図①東壁1			

第2表-2 層序観察一覧

層序名	分層番号	層・埋土の特徴	色調	備考
Ⅱ層	Ⅱハ	70 赤褐色(5YR4/8)シルトまじり中砂のブロック含む粗砂まじり褐色細砂質シルト	10YR4/4	第6図①東壁1・落ち込み、礫あり
		71 粗砂まじりオリブ褐色細砂質シルト	2.5Y4/4	第6図①東壁1
		72 径10cmの礫、暗灰黄色(2.5Y5/2)・黄褐色(10YR5/6)シルトのブロック、1mmのコーラル含む黄褐色細砂質シルト	2.5Y5/3	第6図①東壁1
		73 径5cmのコーラル、径5mm～3cmの貝片、径2mmのコーラル、オリブ褐色(2.5Y4/3)シルトのブロック含む黄褐色細砂質シルト	2.5Y5/3	第6図①東壁1・下部に鉄分の沈着あり
		74 炭化物、径3cmのコーラル、径5cmの礫、径2～5cmの貝片、径5mmのコーラル、黄褐色(2.5Y5/3)シルトのブロック含む明黄褐色細砂質シルト	10YR6/6	第6図①東壁1
Ⅲ層	Ⅲイ	47 径1～10mmの貝片含む褐灰色細砂質シルト	10YR4/1	巻首図版7 第6図②東壁2
		48 黒褐色砂質シルト	10YR3/2	巻首図版7 第6図②東壁2
		49 径1～15mmの貝片を多く含む黄灰色細砂質シルト	2.5Y4/1	巻首図版7 第6図②東壁2
		50 径1～5mmの貝片、径1～3mmの炭化物を含む黒褐色砂質シルト	2.5Y3/2	巻首図版7 第6図②東壁2
	Ⅲロ	78 炭化物、径5cmの貝片、径10cmの礫、径1cmの軽石、径2cmのコーラル、径3cmの土器片、暗灰黄色(2.5Y4/2)・褐色(10YR4/6)シルトのブロック含む黒褐色細砂質シルト	2.5Y3/2	第6図①東壁1・第7図南壁・包含層2。
		79 径2cmのコーラル、にぶい黄色(2.5Y6/4)・明褐色(7.5YR5/8)シルトのブロック含む黒褐色細砂質シルト	2.5Y3/1	巻首図版4 第6図①東壁1・第6図②東壁2
		Ⅳ層	Ⅳ	51 にぶい黄褐色(10 Y R 5/4)シルトブロック、径1～20mmの貝片、径1～5mmの炭化物を含む黒褐色砂質シルト
52 黒褐色細砂質シルト	2.5Y3/1			巻首図版7 第6図②東壁2・4409SX埋土・上位面・やや粘性あり。
53 灰白色(10YR8/2)砂ブロック、径1～10mmの貝片、径1cmの炭化物、自然木を含むオリブ黒色粘質シルト	5Y3/1			巻首図版7 第6図②東壁2・4409SX埋土
54 径1～10mmの貝片、径1～30mmの炭化物、自然木を含む灰色粘質シルト	5Y4/1			巻首図版7 第6図②東壁2・4409SX埋土
55 径1～10mmの貝片、径1～20mmの炭化物、自然木を含む黒褐色粘質シルト	2.5Y3/2			巻首図版7 第6図②東壁2・4409SX埋土
56 径1～5mmの貝片を含む粘質シルト	10YR4/2			巻首図版7 第6図②東壁2・4409SX埋土
57 黄灰色(2.5Y4/1)シルトブロック含む粘質シルト	5Y4/1			巻首図版7 第6図②東壁2・4409SX埋土・グライ化みられる。
58 径1～2mmの貝片含む暗オリブ褐色粘質シルト	2.5Y3/3			巻首図版7 第6図②東壁2・4409SX埋土
59 径1～30mmの炭化物含む黒褐色シルト質粘土	2.5Y3/1			巻首図版7 第6図②東壁2・4409SX埋土
60 径1～50mm炭化物、自然木含む黒褐色粘質シルト	2.5Y3/2			巻首図版7 第6図②東壁2・4409SX埋土
Ⅴ層	Ⅴa	61 径1～20mmの貝・土器を多量に含むオリブ黒色粘質シルト	5Y3/2	巻首図版7 第6図②東壁2・4409SX内、遺物包含層・北側
		62 径1～10mmの貝片、径1～50mmの炭化物含む黒褐色砂質シルト	2.5Y3/2	巻首図版7 第6図②東壁2・4409SX内、遺物包含層・北側・土器、貝多量
	Ⅴb	80 径1～2cmの貝片、コーラル含む灰オリブ色粗砂	5Y6/2	巻首図版4 第7図南壁・砂1・H19、I19一帯で見られる・砂2
		砂① にぶい黄橙色中砂	10YR7/4	第7図南壁
		砂② 浅黄橙色中砂	10YR8/3	第7図南壁
		砂③ 遺物を多く包含する灰黄色中砂、西側では色調がやや明るくなる	2.5Y6/2	第7図南壁 大当原式期?
		砂④ 浅黄橙色粗砂	10YR8/4	第7図南壁
		砂⑤ にぶい橙色粗砂	7.5YR7/4	第7図南壁 獣骨多い
Ⅴc	砂⑥ にぶい黄橙色中砂	10YR7/3	第7図南壁	
	Ⅵ層	Ⅵa	63 径1～10mmの貝片・コーラル、自然木含む海砂	10YR4/2
81 径1～5cmの礫、多量の枝サンゴ・貝片含む灰白色粗砂			2.5Y7/1	巻首図版6 第6図②東壁2・海砂・4409SXの63層の低位

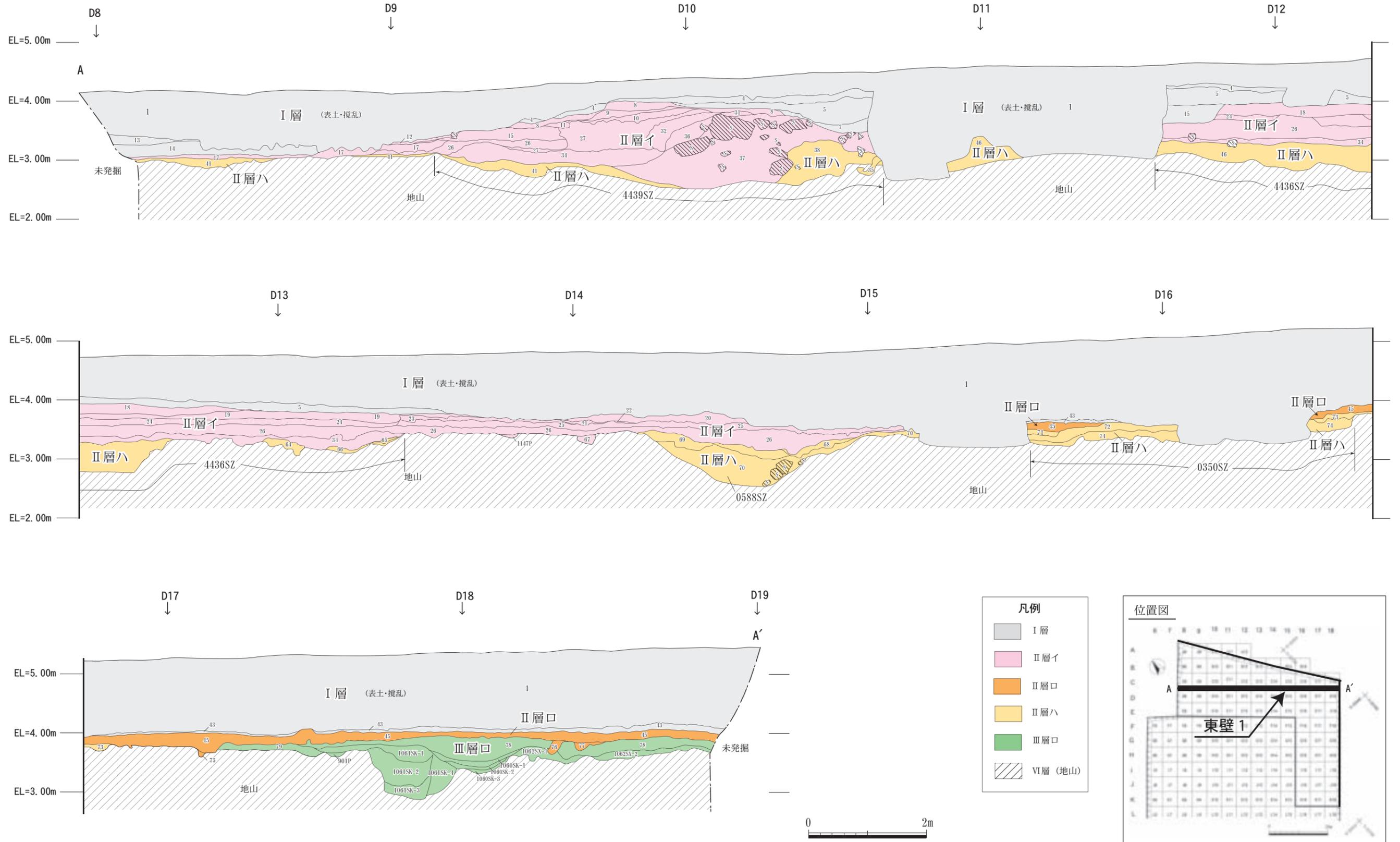
第2表-3 層序観察一覧(下層確認調査)

層名	分層番号	埋土の特徴	色調	備考
Ⅵa層	T1・2-1	径0.5～1mmの貝片・コーラル含む灰白色中砂	2.5Y8/2	巻首図版6 第8図 遺物包含砂
	T1・2-2	径2～20mmの貝片・コーラル・枝サンゴ含む灰白色中砂	2.5Y8/2	巻首図版6 第8図
	T1・2-3	径1～3cmの完形貝を多く含むにぶい黄橙色中砂東側に鉄分の沈着が局所的にみられる	2.5Y8/2	巻首図版6 第8図
	T1・2-4	灰白色中砂	2.5Y8/2	巻首図版6 第8図
	T1・2-5	灰白色粗砂	10YR8/2	巻首図版6 第8図
	T1・2-6	枝サンゴ・サンゴ礫片を含む灰白色粗砂。	10YR8/2	巻首図版6 第8図
	T1・2-7	径5mm以下の貝片・枝サンゴ片を全体に含むにぶい黄橙色粗砂	10YR7/4	巻首図版6 第8図
	T1・2-8	灰白色(10YR8/2)粗砂・明黄褐色(10YR6/8)粗砂・灰白色(7.5Y7/1)粗砂の互層	-	巻首図版6 第8図
	T1・2-9	径1～3cmの礫、径5～20mmの貝片・枝サンゴ片含む灰黄色粗砂	2.5Y7/2	巻首図版6 第8図
	T1・2-10	灰白色細砂	2.5Y8/2	巻首図版6 第8図
	T1・2-11	灰白色(2.5Y7/1)細砂・径5～20mmの貝片含む淡黄色(2.5Y8/3)粗砂の互層	2.5Y7/1	巻首図版6 第8図
	T1・2-12	径1cm以下の完形貝・枝サンゴ、径5～10mmの小サンゴ礫を含む浅黄色粗砂	2.5Y7/3	巻首図版6 第8図
	T1・2-13	明黄褐色(2.5Y6/8)粗砂・灰黄色(2.5Y7/2)粗砂・灰白色(5Y7/1)細砂の互層	-	巻首図版6 第8図
	T1・2-14	径3～5cmの円礫を含む灰白色細砂	10Y7/1	巻首図版6 第8図
	T1・2-15	灰白色細砂	10Y7/1	巻首図版6 第8図 川砂
	T1・2-16	枝サンゴ片・微小貝を含む灰白色粗砂で、筋状に堆積する	10Y7/1	巻首図版6 第8図
	T1・2-17	グライ化した土にぶい黄色(2.5Y6/3)粗砂が不規則に混入する黒褐色細砂質シルト	2.5Y3/1	巻首図版6 第8図 根攪乱か?
	T1・2-18	径1cm以下の完形貝・枝サンゴ、径5～10mmの小サンゴ礫を含む浅黄色粗砂	2.5Y7/3	巻首図版6 第8図

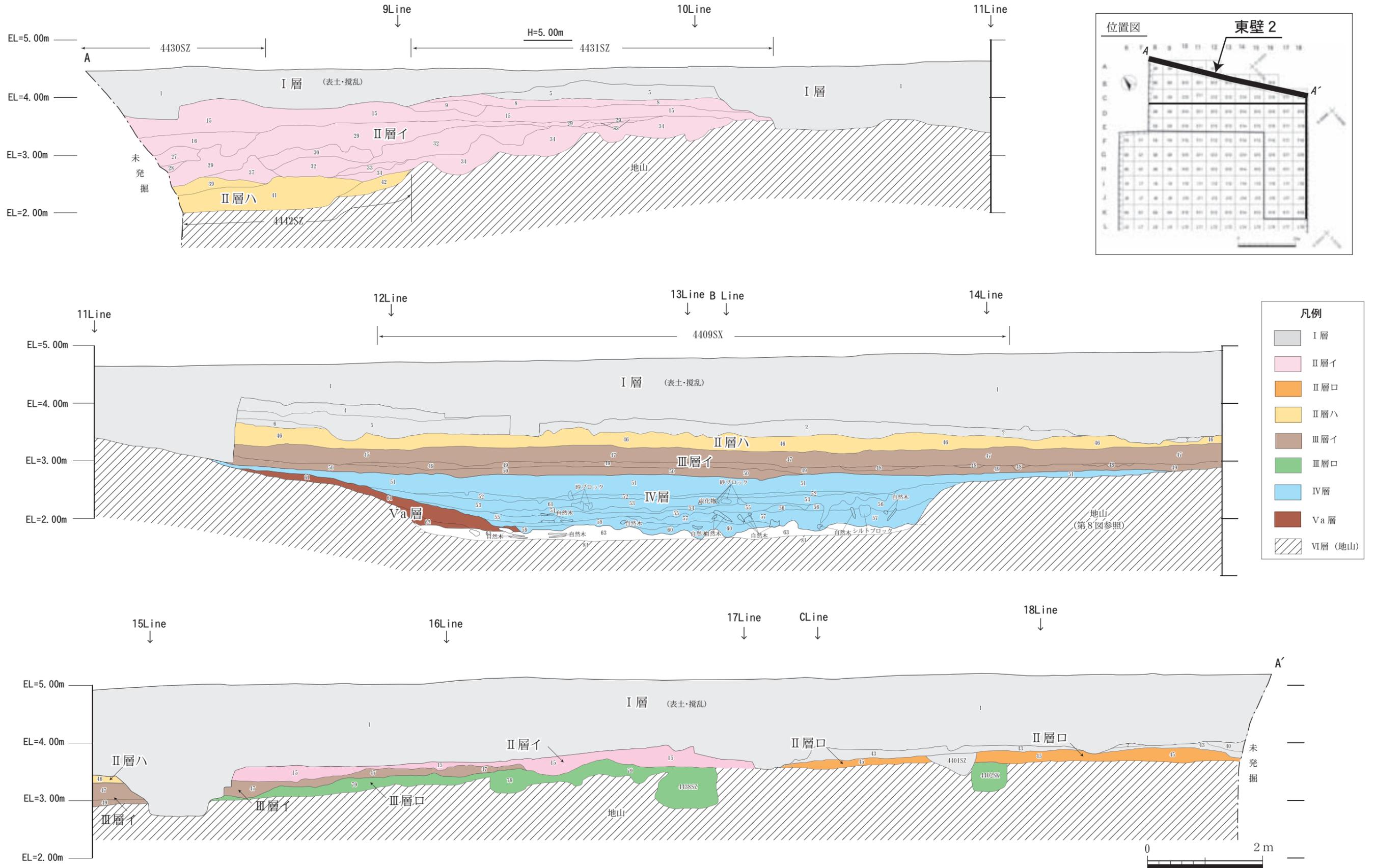


※本図面は下層調査着手前に作成。
 ※トーンなし部分は色調による分層が困難であった。
 G13では灰黄色、L11ではにぶい黄橙色を呈する。

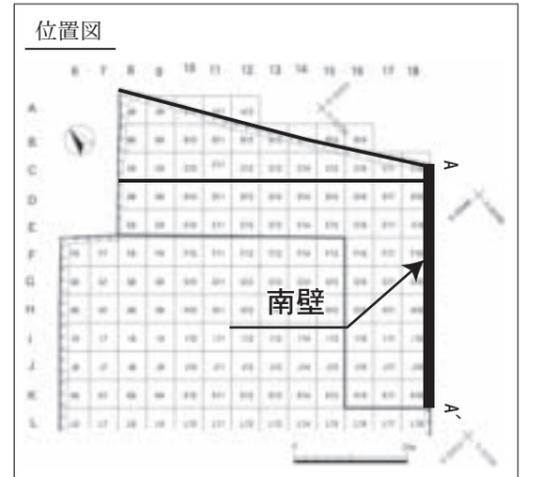
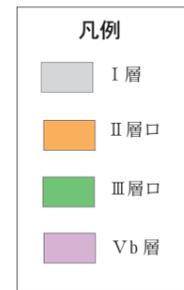
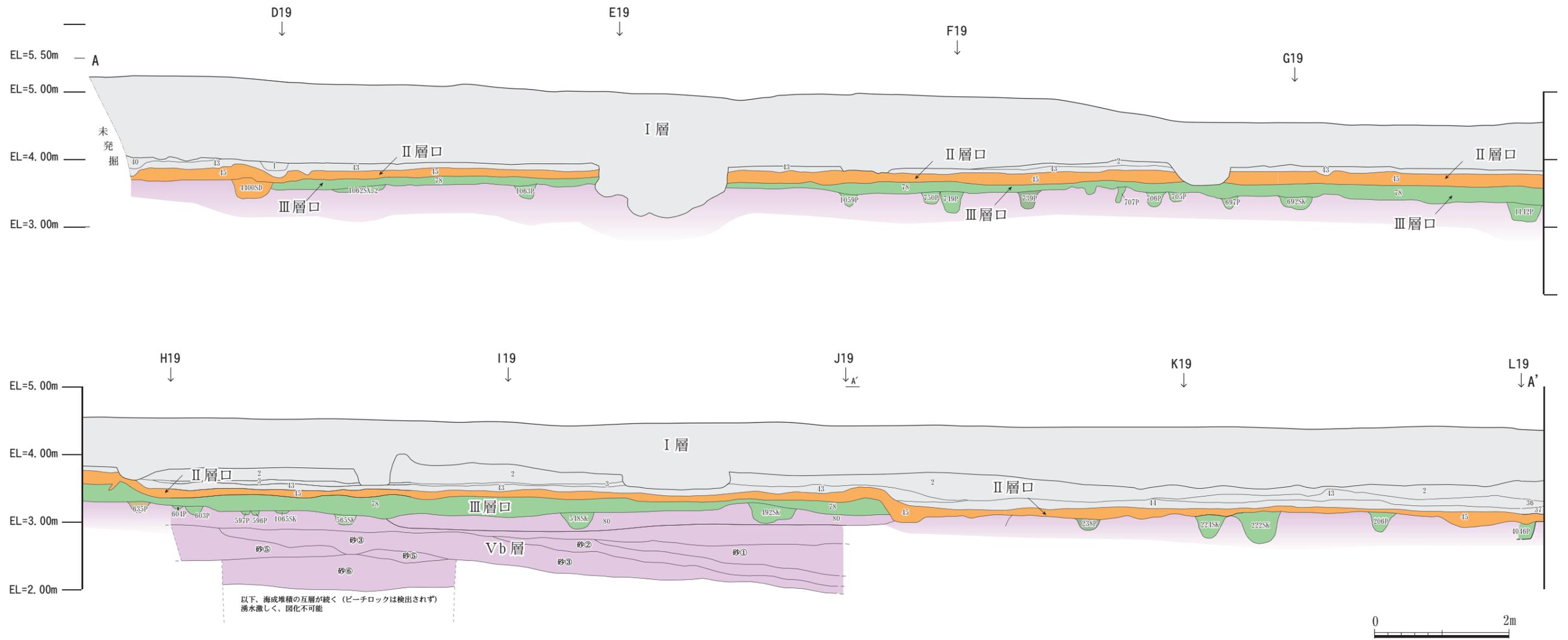
第5図 各層の検出面



第6図 ①層序 (東壁1)

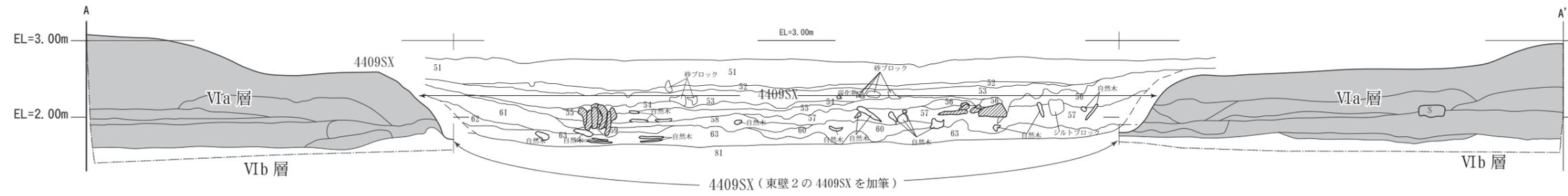


第6図 ②層序 (東壁2)

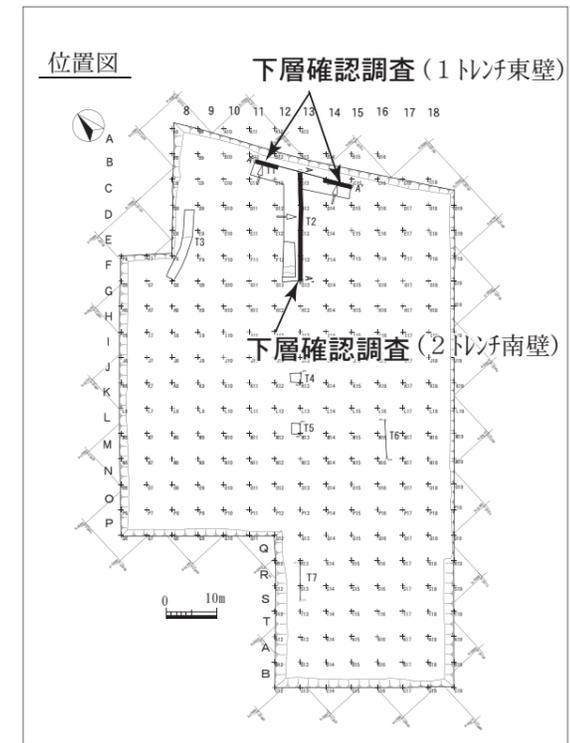
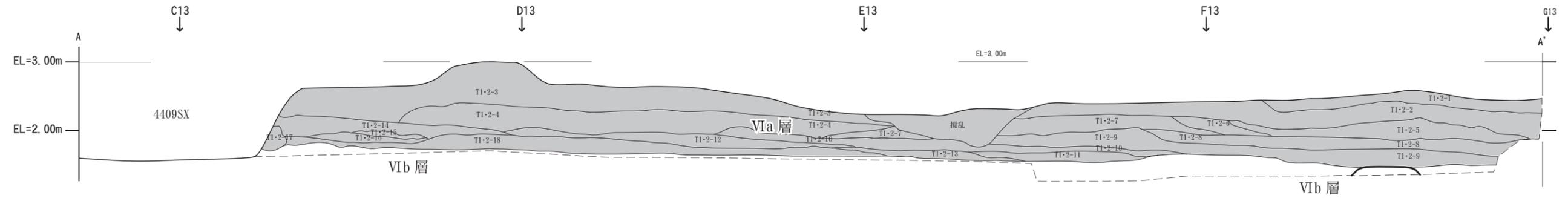


第7図 層序 (南壁)

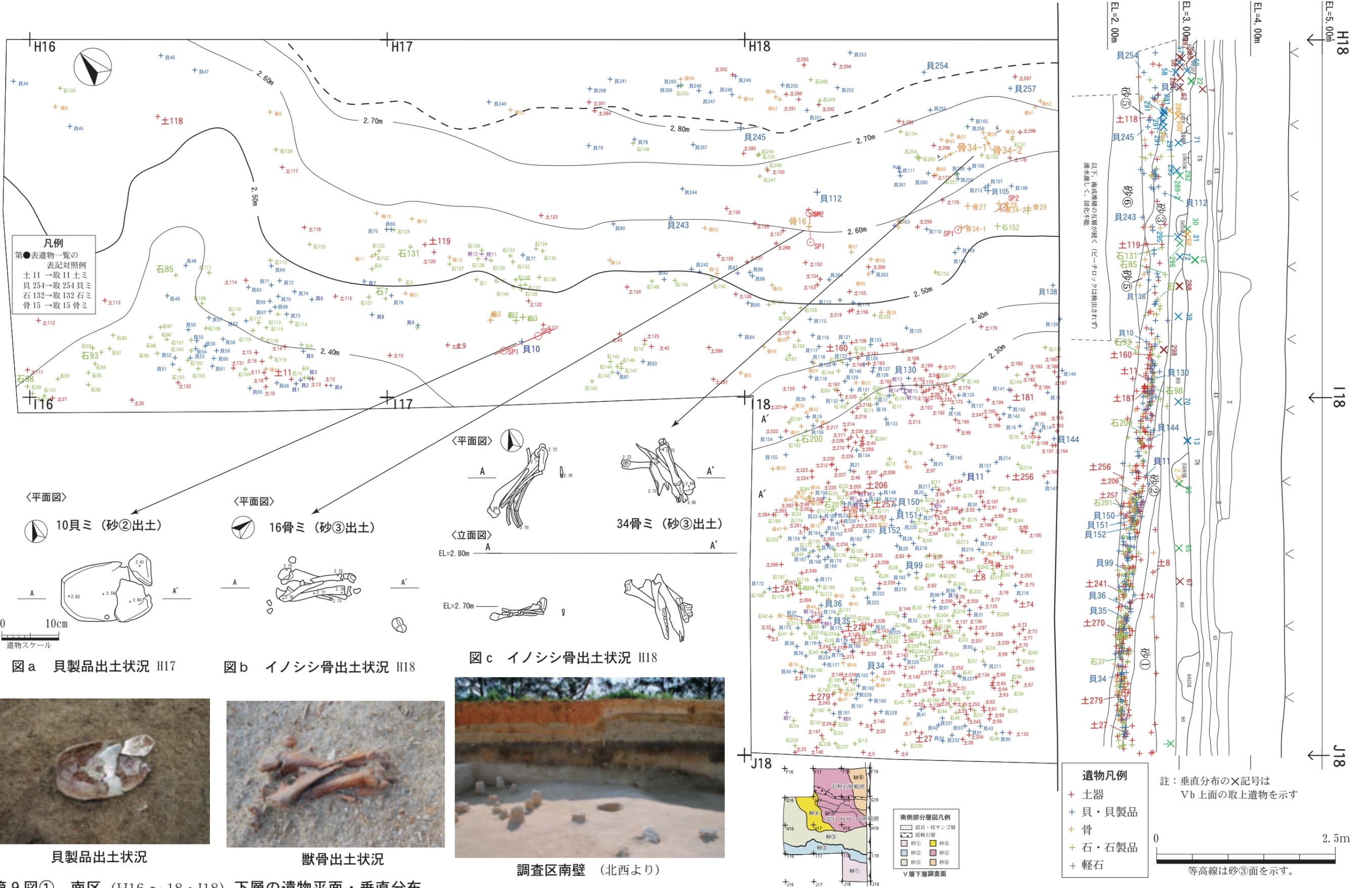
〈1トレンチ 東壁〉



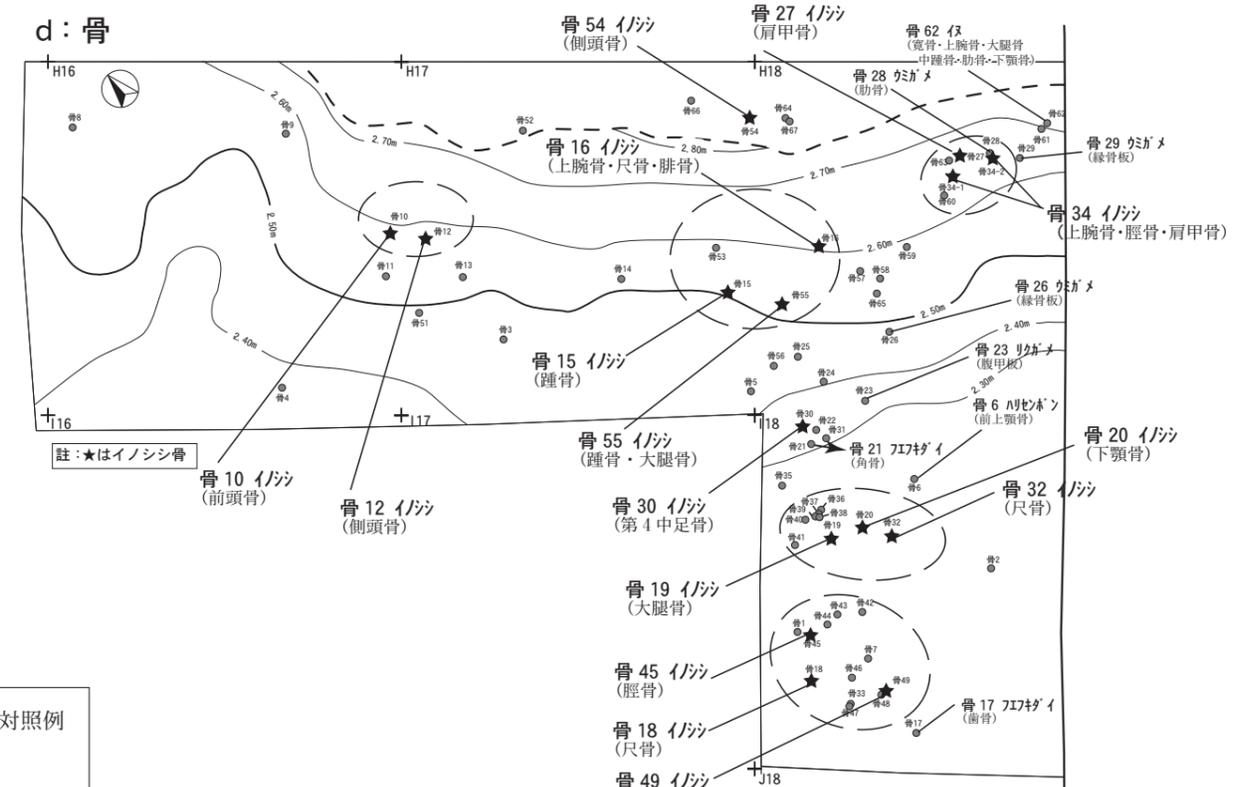
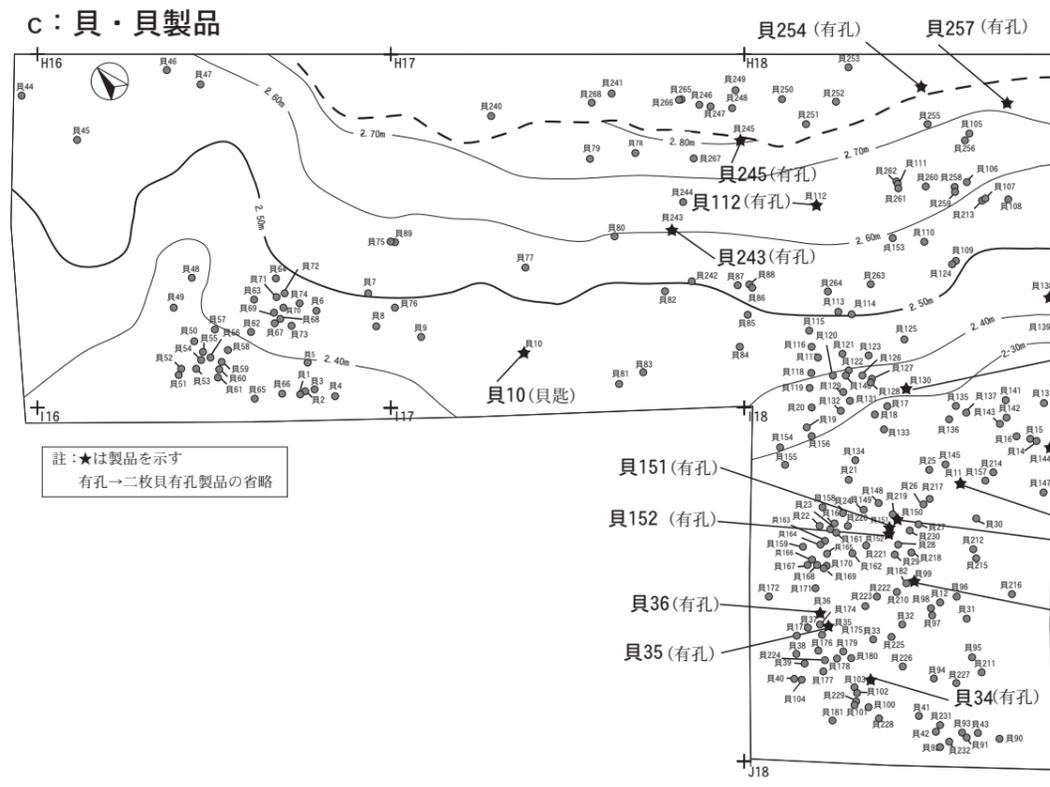
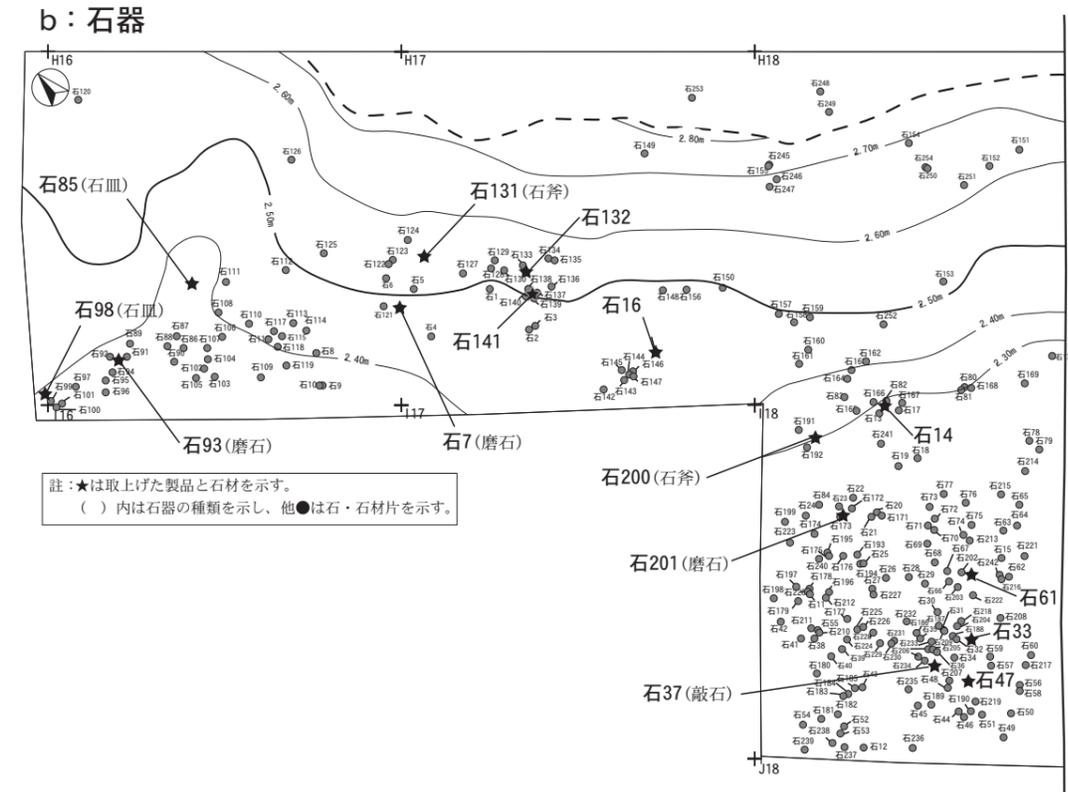
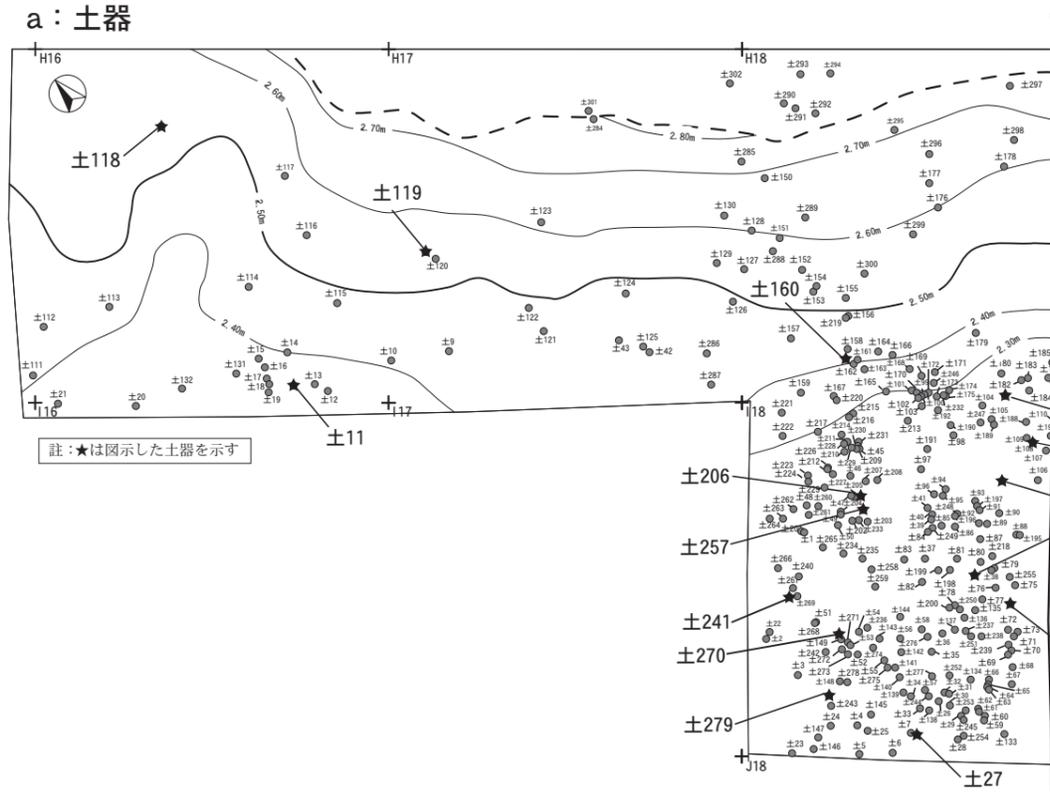
〈2トレンチ 南壁〉



第8図 層序 (下層確認調査)



第9図① 南区 (H16~18・I18) 下層の遺物平面・垂直分布



〈凡例〉
 第3表取上遺物一覧の表記対照例
 土 11 →取 11 土ミ
 貝 254→取 254 貝ミ
 石 132→取 132 石ミ
 骨 15 →取 15 骨ミ

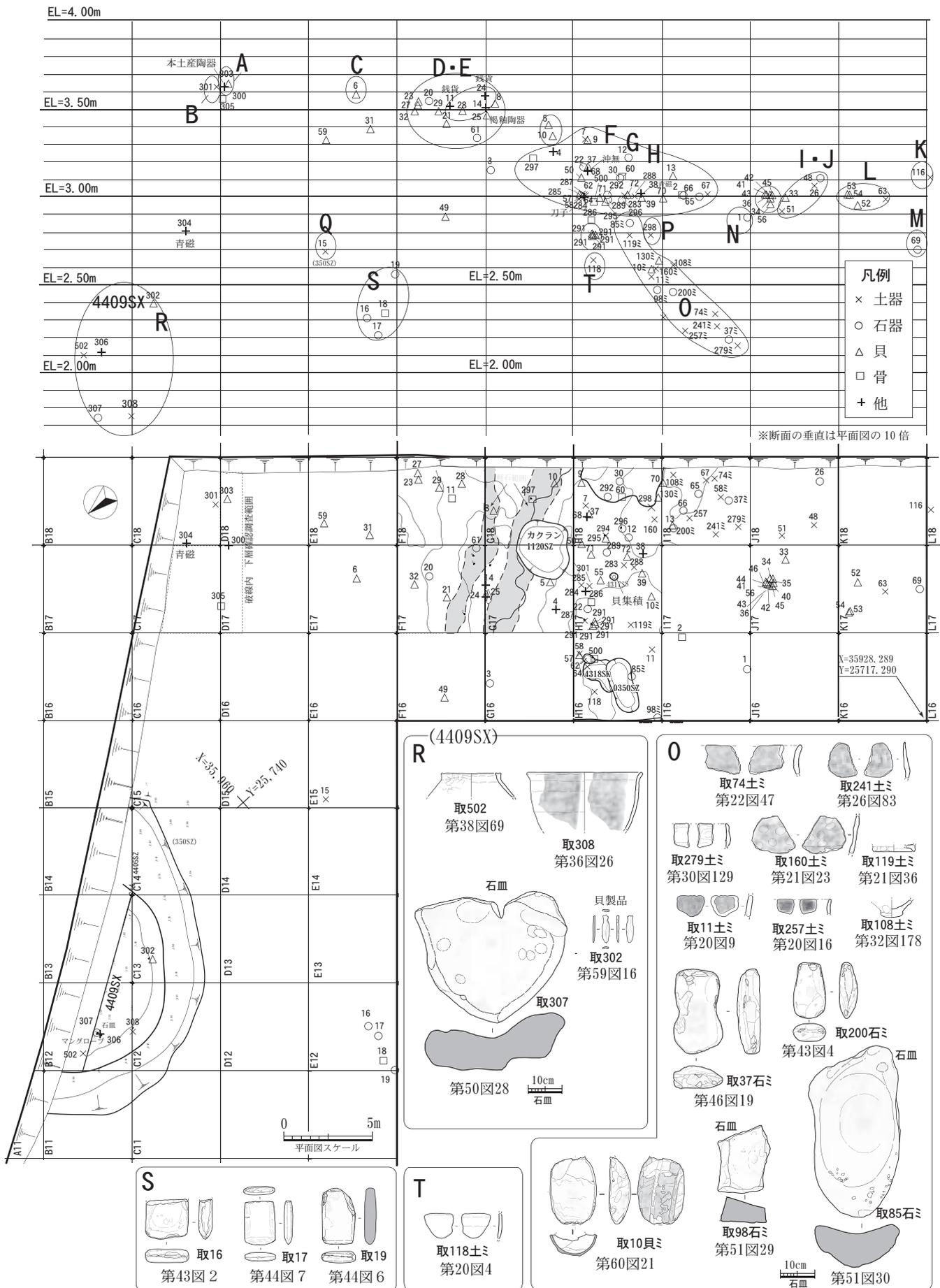
0 25m
 等高線は砂③面を示す。

第9図② 南区 (H16～18・I18) 下層の遺物別平面分布

第3表-1 取上遺物一覧

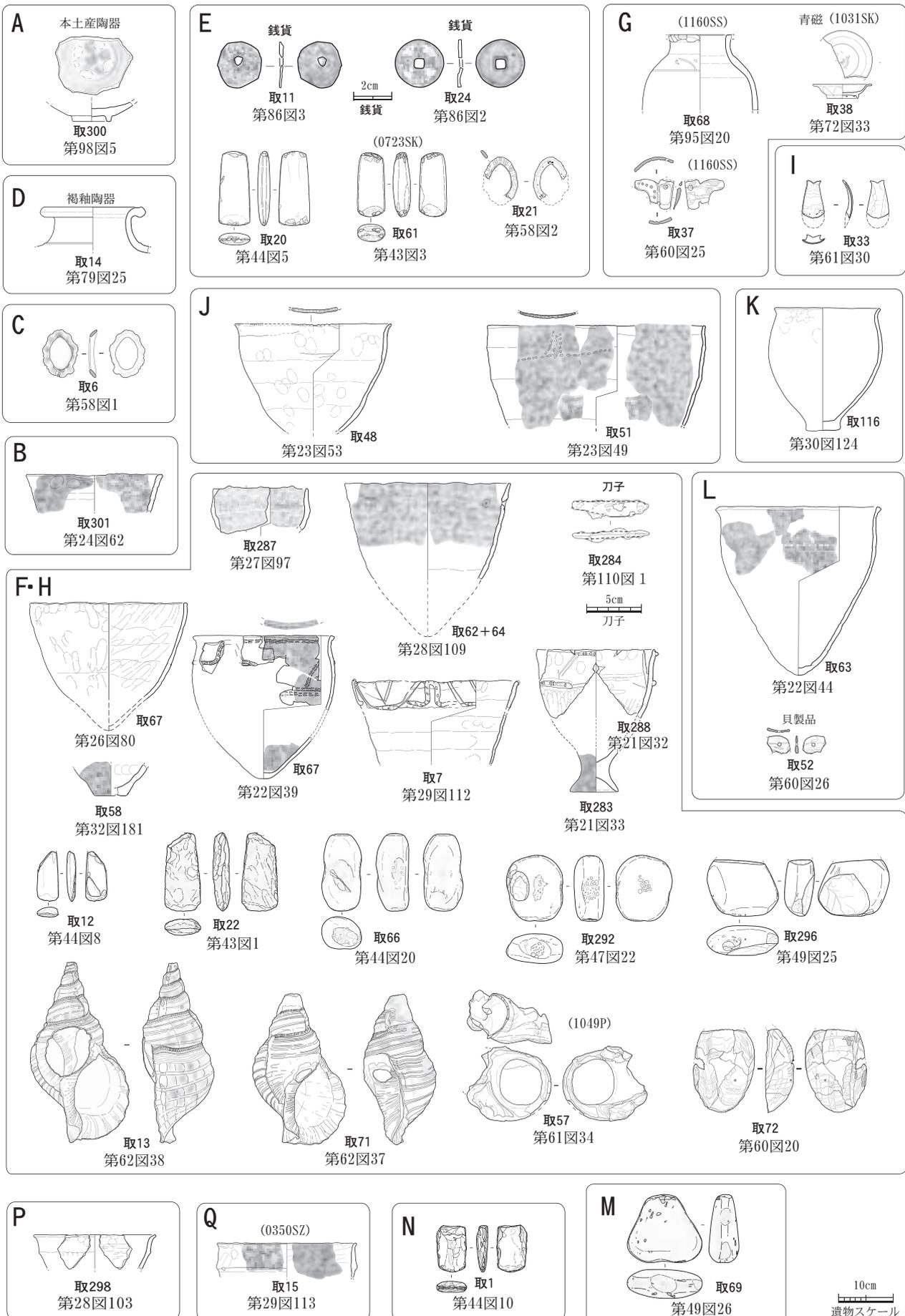
取上番号	X	Y	Z	台帳番号	グリッド	遺構	層序	図番号	遺物
1	35933.783	25726.416	2.892	156	I16	-	Ⅱ	第44図10	石斧
2	35935.292	25730.248	3.067	158	I16	-	Ⅱ		ウシカヤギ 頸椎
3	35945.088	25735.586	3.160	240	G16	-	Ⅱ		剥片石器
4	35939.550	25736.238	3.236	279	G17	-	Ⅱ	第82図8	三彩(水注)
5	35938.737	25737.573	3.410	372	G17	-	Ⅱ		ホラガイ
6	35946.693	25745.105	3.577	636	E17	-	Ⅱ	第58図1	貝輪
7	35934.290	25739.483	3.335	634	H18	-	Ⅲ	第29図112 第92図31	土器鉢 沖施(急須)
8	35938.368	25742.742	3.538	637	G18	-	Ⅲ		貝輪
9	35933.612	25740.567	3.313	638	H18	-	Ⅲ		シャコガイ
10	35934.762	25741.584	3.349	639	G18	-	V b		貝輪
11	35939.619	25744.879	3.518	640	F18	-	Ⅲ	第86図3	銭貨
12	35933.778	25736.676	3.236	641	H18	-	Ⅲ	第44図8	石斧
13	35931.442	25735.298	3.124	642	I18	-	Ⅲ	第62図38	ホラガイ
14	35941.564	25739.956	3.524	802	F17	-	Ⅲ	第79図25	褐釉(壺)
15	35956.410	25737.010	2.692	831	E15	0350SZ	V bカ	第29図113	土器口縁部
16	35963.383	25725.806	2.316	832	E12	0586SZ	V bカ	第43図2	石斧
17	35963.330	25724.998	2.202	833	E12	0586SZ	V bカ	第44図7	石斧
18	35963.884	25724.105	2.345	834	E12	0586SZ	V bカ		イノシシ 下顎骨L・R
19	35963.931	25722.844	2.505	835	E12	0586SZ	V bカ	第44図6	石斧
20	35943.509	25742.460	3.550	836	F17	-	Ⅲ	第44図5	石斧
21	35943.618	25740.786	3.408	837	F17	-	Ⅲ	第58図2	貝輪
22	35938.073	25735.007	3.170	838	H17	-	Ⅲ	第43図1	石斧
23	35940.306	25746.928	3.531	924	H17	-	Ⅲ		ホラガイ
24	35941.993	25739.495	3.580	987	F17	0656SS	Ⅱ	第86図2	銭貨
25	35941.903	25739.545	3.472	988	G17	0656SS	V b		貝輪
26	35923.568	25731.587	3.116	1073	J18	-	V b		磨石
27	35940.143	25747.205	3.518	1138	F18	-	V b		貝匙
28	35938.680	25745.126	3.489	1148	F18	0702SK	V bカ		鍾? サンゴ
29	35939.753	25745.780	3.492	1149	F18	-	V b		ゴホウラ
30	35931.933	25739.213	3.122	1275	H18	-	V b		鍾? 石製品
31	35944.462	25746.462	3.389	1274	E18	0805P	V bカ		二枚貝有孔
32	35944.525	25742.664	3.493	1486	F17	0850P	V bカ		貝輪
33	35928.015	25729.562	2.998	1487	J17	0294SK	V bカ	第61図30	貝匙
34	35929.306	25729.256	2.994	1488	J17	-	V b		二枚貝有孔 メンガイ
35	35929.270	25729.231	3.005	1489	J17	-	V b		二枚貝有孔 メンガイ
36	35929.287	25729.300	3.013	1490	J17	-	V b		二枚貝有孔 ヒメジャコ
37	35934.530	25738.964	3.185	1491	H18	1160SS	V b	第60図25	貝匙
38	35933.761	25735.360	3.086	1492	H17	1031SK	Ⅲ	第72図33	青磁(皿)
39	35934.469	25734.412	2.991	1493	H17	-	V b		鍾? サンゴ
40	35929.544	25728.974	3.008	1494	J17	-	V b		貝
41	35929.561	25729.091	3.017	1495	J17	-	V b		二枚貝有孔 ヒメジャコ
42	35929.619	25729.133	3.011	1496	J17	-	V b		二枚貝有孔 ヒメジャコ
43	35929.509	25729.108	3.028	1497	J17	-	V b		貝
44	35929.354	25729.318	3.010	1498	J17	-	V b		二枚貝有孔 ヒメジャコ
45	35929.377	25729.355	3.007	1499	J17	-	V b		二枚貝有孔 ヒメジャコ
46	35929.311	25729.341	3.005	1500	J17	-	V b		二枚貝有孔 メンガイ
48	35925.474	25729.963	3.064	1616	J18	-	V b	第23図53	土器口縁部
49	35947.541	25736.713	2.885	1617	F16	1051SK	V bカ		二枚貝有孔 ヒメジャコ
50	35935.948	25738.020	3.105	1618	H18	-	V b		螺貝製敲打器
51	35927.209	25730.760	2.929	1619	J18	1097P	V bカ	第23図49	土器口縁部
52	35925.860	25725.867	2.945	1620	K17	-	V b	第60図26	貝匙
53	35927.303	25724.949	3.049	1621	K17	-	V b		イモガイ
54	35927.382	25724.953	3.051	1622	K17	-	V b		イモガイ
55	35936.590	25735.777	2.991	1623	H17	1012SK	V bカ		タカラガイ
56	35929.401	25729.251	2.960	1624	J17	-	V b		二枚貝有孔 メンガイ
57	35940.314	25733.430	3.009	1625	H16	1049P	V bカ	第61図34	ヤコウガイ
58	35940.210	25733.487	2.983	1626	H16	1049P	V bカ	第32図181	土器底部
59	35945.954	25748.674	3.320	1627	E18	1091P	V bカ		シャコガイ
60	35932.422	25738.442	3.119	1794	H18	-	V b		ウミガメ 中・下腹板
61	35940.480	25741.877	3.346	1795	F18	0723SK	V bカ	第43図3	石斧
62	35940.307	25733.034	3.088	1796	H16	1050P	V bカ	第28図109	土器口縁部
63	35925.070	25724.456	2.997	1943	K17	-	V b	第22図44 第23図48	土器深鉢
64	35940.382	25732.647	3.041	1944	H16	-	V b	第28図109	土器口縁部
65	35929.116	25735.687	3.005	1980	I18	-	V b		敲石?
66	35930.385	25735.552	3.021	1981	I18	-	V b	第46図20	敲石
67	35928.285	25735.964	3.050	1982	I18	-	V b	第22図39 第26図80	土器深鉢
68	35934.628	25738.957	3.161	1983	H18	1160SS	Ⅱ	第95図20	沖無壺
69	35923.512	25723.219	2.700	1984	K17	-	V b	第49図26	敲石兼磨石
70	35930.211	25737.469	2.974	2031	I18	-	V b		貝匙
71	35935.940	25737.155	2.999	4689	H17	-	V b	第62図37	ホラガイ
72	35934.555	25735.738	3.034	4690	H17	-	V b	第60図20	貝匙

凡例(沖施:沖繩産施釉陶器 沖無:沖繩産無釉陶器)



第10図 遺物平面・垂直分布図 (取上げ)

「取85石ミ」→南側 石器 取上げ 85の意



第3表-2 取上遺物一覧

取上番号	X	Y	Z	台帳番号	グリッド	遺構	層序	図番号	遺物
116	35920.234	25726.084	3.013	2455	L18	—	V b	第30図 124	土器口～底部
283	35934.947	25735.514	3.062	4792	H17	—	V b	第21図 33	土器底部
284	35937.676	25735.901	3.046	4795	H17	—	V b	第110図 1	鉄製刀子
285	35937.540	25736.264	3.054	4793	H17	—	V b	—	—
286	35937.777	25735.177	2.892	4794	H17	—	V b	—	—
287	35938.707	25734.622	3.022	4796	H17	—	V b	第27図 97	土器口縁部
288	35934.624	25735.029	3.002	4812	H17	—	V b	第21図 32	土器口縁部
289	35935.166	25736.692	2.958	—	H17	—	V b	—	石皿
291	35938.574	25734.195	2.791	4882～4886	H17	—	V b	—	シレナシジミ?
292	35933.030	25739.013	3.029	4887	H18	—	V b	第47図 22	敲石兼磨石
294	35934.606	25737.397	2.999	4914	H18	—	V b	—	—
295	35934.732	25737.291	2.973	4915	H18	—	V b	—	ヤコウガイ
296	35936.618	25737.089	2.914	4930	H18	—	V b	第49図 25	磨石
297	35936.278	25741.784	3.234	4916	G18	—	V b	—	イノシシ 下顎骨 L・R
298	35931.617	25736.901	2.781	4917	H18	—	V b	第28図 103	土器口縁部
300	35950.781	25751.424	3.647	4515	D18	—	Ⅲ	第98図 5	本陶(皿)
301	35949.757	25753.644	3.638	4514	C18	—	V b	第24図 62	土器口縁部
302	35969.977	25736.954	2.463	4544	C13	4409SX	Ⅳ	第59図 16	アンボンクロザメ イモガイ
303	35949.039	25753.354	3.648	4545	D18	—	V b	—	ゴホウラ
304	35952.490	25753.169	2.808	4615	C18	4402SK	Ⅲ	—	青磁(皿)
305	35953.381	25749.136	3.563	4667	D17	—	V b	—	イノシシ 肩甲骨 R ウミガメ 腹甲板
306	35974.904	25735.560	2.127	—	B12	4409SX	Ⅳ	—	サガリバナ
307	35974.999	25735.805	1.727	4731	B12	4409SX	Ⅳ	第50図 28	石皿
308	35973.328	25734.667	1.756	4732	B13	4409SX	Ⅳ	第36図 26	土器口縁部
500	35939.795	25732.729	2.960	4997	H16	—	V b	—	—
502	35976.342	25735.326	2.100	5230	B11	4409SX	V a	第38図 69	土器口縁部
289-1	35935.166	25736.692	2.958	4912	H17	—	V b	—	石皿
289-2	35935.166	25736.692	2.958	4913	H17	—	V b	—	石皿
8 土ミ	35928.594	25735.575	2.637	8	I18	—	V b	—	土器脚台 土器口縁部
11 土ミ	35936.682	25730.589	2.539	11	H16	—	V b	第20図 9	土器胴部
27 土ミ	35927.477	25733.456	2.279	27	I18	—	V b	—	土器胴部
74 土ミ	35927.944	25735.675	2.338	74	I18	—	V b	第22図 47	土器口縁部
108 土ミ	35930.166	25737.610	2.522	108	H18	—	V b	第32図 178	土器底部
118 土ミ	35941.045	25731.383	2.564	118	H16	—	V b	第20図 4	土器胴部
119 土ミ	35937.201	25732.933	2.766	119	H17	—	V b	第21図 36	土器底部
160 土ミ	35932.067	25736.295	2.598	160	H18	—	V b	第21図 23	土器胴部
181 土ミ	35930.166	25737.610	2.522	181	H18	—	V b	—	土器胴部
206 土ミ	35930.498	25735.142	2.395	206	I18	—	V b	—	土器胴部
241 土ミ	35930.123	25733.437	2.251	241	I18	—	V b	第26図 83	土器口縁部?
256 土ミ	35929.309	25736.764	2.211	256	I18	—	V b	—	土器胴部
257 土ミ	35930.335	25735.039	2.223	257	I18	—	V b	第20図 16	土器口縁部
270 土ミ	35929.264	25733.595	2.206	270	I18	—	V b	—	土器胴部
279 土ミ	35928.713	25732.906	2.152	279	I18	—	V b	第30図 129	土器口縁部
7 石ミ	35937.188	25731.862	2.694	641	H16	—	V b	—	磨石
37 石ミ	35928.319	25734.127	2.190	644	I18	—	V b	第46図 19	敲石
85 石ミ	35939.237	25730.074	2.815	639	H16	—	V b	第51図 30	石皿
93 石ミ	35939.147	25728.578	2.405	647	H16	—	V b	—	磨石
98 石ミ	35939.491	25727.492	2.472	648	H16	—	V b	第51図 29	石皿
131 石ミ	35937.313	25732.763	2.777	649	H17	—	V b	—	石斧
200 石ミ	35931.678	25735.113	2.468	652	I18	—	V b	第43図 4	石斧
201 石ミ	35930.614	25734.657	2.359	653	I18	—	V b	—	磨石
10 貝ミ	35935.285	25733.018	2.589	568	H17	—	V b	第60図 21	貝匙
11 貝ミ	35929.742	25736.332	2.548	569	I18	—	V b	—	貝匙
34 貝ミ	35928.556	25733.510	2.200	334	I18	—	V b	—	二枚貝有孔 ヒメジャコ
35 貝ミ	35929.526	25733.593	2.261	335	I18	—	V b	—	貝
36 貝ミ	35929.739	25733.621	2.273	336	I18	—	V b	—	二枚貝有孔 ヒメジャコ
99 貝ミ	35929.176	25734.914	2.358	399	I18	—	V b	—	貝
112 貝ミ	35934.037	25737.478	2.815	412	H18	—	V b	—	貝
130 貝ミ	35931.257	25736.665	2.633	430	H18	—	V b	第60図 22	貝匙
138 貝ミ	35930.852	25739.034	2.670	438	H18	—	V b	—	貝
144 貝ミ	35929.259	25737.598	2.584	444	I18	—	V b	—	二枚貝有孔 メンガイ
150 貝ミ	35929.982	25735.328	2.419	450	I18	—	V b	—	貝
151 貝ミ	35929.960	25735.159	2.370	451	I18	—	V b	—	二枚貝有孔 シラナミ
152 貝ミ	35929.900	25735.100	2.339	452	I18	—	V b	—	貝
243 貝ミ	35935.164	25735.731	2.496	543	H17	—	V b	—	二枚貝有孔 Rサルボウ
245 貝ミ	35935.432	25737.301	2.599	545	H17	—	V b	—	二枚貝有孔 Rサルボウ
254 貝ミ	35934.273	25739.717	2.509	554	H18	—	V b	—	二枚貝有孔 Rマスオ
257 貝ミ	35933.292	25740.457	2.668	557	H18	—	V b	—	貝
16 骨ミ	35933.758	25737.069	2.750	586	H18	—	V b	—	イノシシ 上腕骨・尺骨・腓骨
34 骨ミ	—	—	—	604	H18	—	V b	—	イノシシ 下顎骨・上腕骨

「160 土ミ」→南側 土器取上げ 160 の意

第3節 遺物の出土状況

Ⅱ層の近・現代、Ⅲ層のグスク時代、Ⅴ層の貝塚時代後期の各時期の主な遺物について、それぞれの遺物の項で示し、遺物全体の出土量を第4表に示した。これによると前節の層序の項でも触れたが、本遺跡は米軍の基地建設により大きく攪乱（第5図）を受け、Ⅰ・Ⅱ層のSZ（攪乱）やⅢ層及びSD（溝状遺構）、P（柱穴）等の遺構からⅤb層に属する遺物が多量出土し、なかでも土器は全体量の48.7%を占める。このことから貝塚時代後期（Ⅴb層）はグスク時代（Ⅲ層）の集落、近現代（Ⅱ層）の水田、畠の耕作によって壊されていたことがわかる。

これらの状況から、Ⅱ・Ⅲ層の遺構から出土した貝塚時代後期の遺物（土器・石器・貝製品・骨製品）はⅤb層攪乱としてまとめた。

出土する主な遺物については点上げを実施した。その点数は364点で、主に貝塚時代後期の遺物である（第10図）。その後、砂層の観察を行った結果、南側にさらに貝塚時代後期の遺物が出土する可能性があることから、H16～18・I18の追加調査を行い、その分についても点上げを実施した（第9図）。

以下、これらの状況について概略する。図面上の表記は前者が「取 No.」、後者が「取 No. ○ミ」とし、各遺物の種類や挿図番号については第3表に示した。以下、概略する。

第4表 伊礼原D遺跡の遺物出土量

時代 遺物 層	貝塚時代後期					グスク時代										近・現代													合計					
	土器	土製品	貝製品	石器	骨製品	カムイヤキ	白磁	青磁	染付	瑠璃釉	褐釉陶器	三彩	瓦質土器	焼土	銭貨	沖繩産施釉陶器	沖繩産無釉陶器	陶質土器	本土産磁器	本土産陶器	本土産土器	先島系土器	木製品	円盤状製品	瓦	管	煙管	人形		鉄製品	銅製品	軽石製品		
Ⅰ	54		2	1			2	5	17		9					2	9		4	1					1	2								109
Ⅱ (攪乱)				3																													3	
Ⅱ	982		62	24		1	62	337	172	2	299	4	2	76	2	123	185	63	68	10	19		1	7	40			2			1	1	2545	
Ⅱ (遺構)	210		3	5		1	17	65	23		103		1	11	1	25	72	16	14	3			1	1	17	1		1	2			593		
Ⅲ	2793		69	10			19	148	41		137	3	2	61	2	6	6	3		1	3				1							3305		
Ⅲ (遺構)				4			18	77	31	1	91	1	1	75		2	6	1	2	1	15			2								328		
Ⅳ	1904	1	29	10				1														1										1946		
V a	1099		8	5																												1112		
V b (攪乱)	1477		49	9										3																		1538		
V b	1878	1	113	14	1																								1			2008		
V b (遺構)	190		11	1	1																											203		
Ⅵ	44		1		1																											46		
排土・表採・不明	201		3					1								4	3								1							213		
合計	10832	2	350	86	3	2	118	634	284	3	639	8	6	226	5	162	281	83	88	16	38	2	11	61	1	2	1	3	1	1	13949			

(1) 取上げ資料

第10図は主にⅤ層（a・b）の遺物を点上げしたものであるが、前述したようにⅡ・Ⅲ層の時期がⅤ層の文化層を破壊しているため、その状況は点上げにも現れている。

点上げの最も高いのはC18の標高3.638mの土器（取301・第24図62）で、最も低いのはI18の標高2.152mの土器（取279土ミ・第30図129）である。しかし、さらに海岸寄りのJ18で標高3.064mの土器（取48・第23図53）があり、Ⅴb層の下位は南西側に約10度の傾斜が考えられる。

Ⅳ・Ⅴa層の4409SXでは最も高いのは標高2.463mの貝鋸（取302・第59図16）で、最も低いのは標高1.727mの石皿（取307・第50図28）である。標高を比較しても他の点上げより低いことから低湿地であったことが窺える（第4節参照）。

第10図に示したように平面と垂直分布を確認しながら、A～Tにグルーピングを試みた。以下、各グループについて略述する。

Ⅱ・Ⅲ層の時期の遺物としてはA・D・E・G・Iのグループがある。

Aの取300は本土産陶器（標高3.647m）、Gの取68は沖縄産無釉陶器（標高3.161m）がⅡ層、Dの取14は褐釉陶器（標高3.524m）、Eの取11と取24は錢貸で（標高3.518m・3.580m）の出土。IとGはⅢ層遺構の出土でIの取33は腹面利用のヤコウガイ製貝匙（標高2.998m）でJ17の0294SK、Gの取38は青磁（標高3.086m）で1031SKの出土で前2者より低い。

V b層の遺物としてはC・E・F・G・H・J・K・L・M・Nのグループがある。

C・E：取6と取21のオオツタノハ貝輪及び、取20・取61の石斧は前者が扁平（図5）と厚手（図3）の両刃なすものである。いずれも標高3.5m前後で、FラインV b層の高さを示す資料と思われる。

G：取37のヤコウガイ製貝匙は（標高3.185m）1160SSの出土である。

F・H：土器や石器、貝製品などまとまりのあるグループで、標高3.1m前後に集中するものである。土器は取67でⅡ群Ⅱ類とV類（標高3.05m）で、Ⅱ類土器（図39）は初例で、V類土器（図80）との共伴から時期を示唆するものである。取288はスセン當式土器（新里2000）の範疇に含まれるもので、取7のⅦ類土器と文様の種類及び構図が前述の取67のⅡ類土器と酷似する。この時期の土器に一石を投じるものである。ほかに取287のⅥ類土器が出土している。

取292はチャート製敲石兼磨石で、沖縄では伊礼原E遺跡に次いで2例目である。取12の小型扁平石斧、取22の中型両刃石斧の他、取66の敲石・取296の磨石が検出されている。また、貝製品では取13・71のホラガイ有孔製品、取57・72のヤコウガイ製品があり、一定のまとまりをみせ、貝塚時代後期の安定した面と判断される。

取284の鉄製刀子（第110図1）は標高3.046mで、H17、V b層（包砂）の出土である。形状からは熱田貝塚の製品に類似するが、やや小型である。上層ではくびれ平底も得られており、V b層上位の遺物としての可能性は高い。

I：取58は平底に分類されるもので、標高2.983m、H16から出土している。

J：取51と取48はいずれもJ18の標高3.0前後で検出されている。取51が口唇と外面に刺突文を施すもので、文様構図は貝塚時代前期に類似するが、形状や胎土はⅥ類に近い。

取48は小降りで、口唇に文様が施されることから、アカジャンガー式土器に近いが、底部が丸底になる可能性が高い。タイプの異なるものが近い位置で得られている。

K：取116は口縁部～底部まで残るくびれ平底土器で、標高3.013mで検出され、他の資料と比較すると海岸側のK18で得られ、くびれ平底土器が乳房状尖底土器より上位で出土することを示す好資料である。

L：取63は前者と同じく口縁部～底部まで残るⅡ類に分類される土器で、取52のヤコウガイ製貝匙の近くで得られ、前述のくびれ平底土器より下位から出土。

M・N：取69は三角形の敲き石（標高2.7m）、取1は石斧（標高2.892m）で貝塚時代後期の特徴を示す石器である。

Ⅵ b層の下位の遺物としてはB・O・P・Q・S・Tのグループがある。

B：取301はⅢ類に分類されるV b層の時期では古手の土器でC18、標高3.638mと最も内陸側で高いいちの出土である。

O：南側の部分で土器は取74土ミ、取279土ミが摩耗、取11土ミが室川下層式で、標高2.539m、取257土ミが面縄前庭式、標高2.223mと低く、ローリングを受けたI群の土器が得られている。取119土ミの土器はこれまで報告例がなく、詳細は不明。石器は両刃石斧（取200石ミ）、敲

石（取 37 石ミ）、石皿（取 85 石ミ・98 石ミ）、ヤコウガイ貝匙（取 10 貝ミ）標高 2.589 m、これらの状況から V b 層、最下層面と捉えることができる。

取 74 土ミは（標高 2.338 m）は約 0.7 m 下で出土し、水魔を受けている。

P：取 298 は VI 類土器で標高 2.781 m を測り、H18、V b 層下位の中心部分と考える。

Q：取 15 は VII 類土器で、標高 2.692 m で、E15 では低く、0350SZ の攪乱である。

T：取 118 土ミで、船元系土器で顕著に摩耗する。ローリングを受けた土器は V b 層の最下面及び VI 層で数点検出されている（第10表）。主に I 群土器である。

S：取 16 は厚手、取 17 と取 19 は扁平の両刃石斧である。VI b 層の指標となるが、標高 2.3 m 前後で E12、0586SZ（攪乱）の出土である。

4409SX 遺構内

R：4409SX 内の点上げで、土器は取 502 の壺、取 308 の VIII 類土器、石器は取 307 の石皿、貝製品は取 302 の貝鉞が検出された。この中で取 307 石器、取 308 土器の標高 1.756 m と点上げの中では最も低い。本遺構出土のものは、ほかに比べて出土レベルが低く、水没していたことを示す資料である。

（2）南区の追加調査（H16～18、J18）

第2節の層序に示したように、貝塚時代後期、砂①、砂②、砂③、砂④、砂⑤、砂⑥と徐々に海岸に広がる。

混軽石層、混貝・枝サンゴ層が斜めに帯状に広がり、貝塚時代後期の堆積状況を示している。垂直分布でみると砂③に遺物が集中（第5表）している。第9図に示した図の記号は「×」が上層、「+」が南側の下層調査のものである。「×」は第10図の番号と一致する。石 254 点、土器 302 点、貝 268 点、骨 67 点で、そのうち石は測点のみ 238 点で、自然石が主で測点にとどめた。

第9図①に全点を色分けで示し、第9図②に主となる土器・石器・貝製品・骨製品別に平面分布を示した。

第9図①の垂直分布で示したように砂③に遺物が集中し、出土遺物の高低差をみると標高 2.8 m～2.1 m と海岸方向に低くなることから砂丘の自然堆積を示すものと思われる。

各遺物の出土状況をみると

土器は（第9図② a）平面分布でみると I18 に集中する。

H16～18・I18 の土器の出土量は 334 点で、そのうち、302 点は点取りを行った。出土点数が他の遺物より多いため、各面ごとに土器を取り上げた。その面は砂①～⑥で最も多いのは砂③で 76%（246 点）を占め、V b 層下位の中心部分と判断される。

多数ある土器の関係をj知るため、上位層の II・III・V b・V b カと下位層の砂①～⑥の分類別出土状況を第5表に示す。これによると土器は III 層・V b 層・砂③層で多く得られた。これらの層を中心に土器の分類（分類の記述は「土器」の項）をみると砂③では VI 類（大当原式土器）が 190 点と主体を示し、底部でも乳房状尖底が 4 点得られた。

V b 層では VIII 類の割合が下層に比べて高く、VI 類の厚手が少なくなる傾向が見られ、III 層ではさらに VIII 類の割合が高く、VIII 類の泥質の割合が増し、底部ではくびれ平底の出土が見られる。このことから土器は VI 類（大当原式土器）→VIII 類（くびれ平底系土器）の変遷が窺え、これまでの貝塚時代後期土器の変遷過程を証左するものである。また、海岸側に近い I18 でくびれ平底土器が多く得られている。

石器は(第9図②b)測点のみの自然石も含まれている。こちらからみるとH16～18の海岸側とI18に集中する。これは砂丘の堆積方向を示唆するものと思われる。石器は16点得られている。詳細は石器の項でふれる。

貝・貝製品としたものを第9図②に示した。本品も自然貝を含み、石器と同様、砂丘の堆積を示唆するものであるが、製品としてはヤコウガイ製貝匙(第60図23)、二枚貝有孔製品(シラナミ・メンガイ)が出土している。

骨(第9図②d)はイノシシの骨や魚骨が検出され、そのうち、第9図①に示したようにイノシシ下顎骨、上腕骨(取34骨ミ)、イノシシ上腕骨、尺骨、腓骨(取16骨ミ)など、骨はあまり破損してなく、まとまって出土する。また、H18からI18方向に一定の出土が見られることから砂③は包含層として安定していたことが窺える。

この骨のまとまりは小堀原遺跡(2012)の貝塚時代後期層で同じような状況が見られた。

第5表 南区(H16～18・I18) 土器分類別出土量

層	分類	口縁部・胴部														底部						合計					
		I群	I類	II類	III類	IV	V	VIア	VIウ	VII	VIII砂	VIII中	VIII泥	IX類	分類不可	小計	丸	尖底	乳	平	くびれ		脚	底付近	小計		
II		1		3	2		3	4	12	2	4	7	4		15	57		2	1					1	4	61	
III		3	8	6	3	9	14	47	97	10	42	20	22		45	326		7	3		9			5	24	350	
V bカ									1	6						13			1						1	14	
V b	上	16	1	3	1	3	16	51	90	5	20	17	9	1	82	315	1	3	2	1		1	8	16	331		
	下	砂①					1		1			2					4									0	4
		砂②	3				1	16	11			4	6	1		1	43									0	43
		砂③	4	4	2	3	1	13	99	91		11	9	1	1	1	240		1	2			1	2	6	246	
		砂④	2					1	1			1				1	6									0	6
		砂⑤	6	1				4	4	4		1				1	21			1						1	22
砂⑥							1			1				1	3									0	3		
VI		8				1	1								10									0	10		
合計		43	14	14	9	13	53	225	313	17	85	60	43	2	147	1038	1	13	10	1	9	2	16	52	1090		

註：2.5cm以下は不集計。

第4節 貝塚時代後期

貝塚時代後期はV a層、V b層としたものである。層序の項でもふれたように貝塚時代後期の文化層はII・III層の攪乱を受けており、本時期の遺物はII・III層で出土するが、文化遺物との観点から貝塚時代後期にまとめて扱う。なお、前述の南区下層の遺物は部分調査のため、遺物の項ではV b層としてまとめ、観察一覧に詳細な出土を示し、V b層に内の土器については考察でふれる。以下、遺構、出土遺物の順に報告する。

1. 遺構

貝塚時代後期の遺構としてはV a層の4409SXとV b層の土坑(4318SK)、貝集積(4317SS)があり、それ以外にV b層の堆積の痕跡を示す貝だまり(0656SS・0658SS・1160SS・1163SS)、軽石集中部が検出された。

以下、略述する。

(1) 4409SX (第11図)

調査区の北側の B12・13、C12・13 にまたがる 8m×2.5m の半円形の凹地で、断面は鍋底状を呈する。厚さ砂丘面まで 1.5m と厚く、標高をみると上面が 2.8m、底面 1.8m を測る。平面の形状から北側方向に伸びる可能性が高い。

B12 の縁では樹木が生えた状態で検出され (図版 2)、¹⁴C 測定の結果、補正年代 950±30BP の結果 (第IV章第3節) を得た。黒褐色の泥層で、色や混入物から 1～5 層に分けて遺物を採集した。層の状態から他の調査区と層を整理し、符合させると下記のとおりである。

- IV 層
 - 1 層：51・52 層
 - 2 層：53 層
 - 3 層：54～56 層、自然木、横位になった状態で出土。
 - 4 層：57～60 層
- V a 層 — 5 層：61・62 層

出土した遺物は第6表に示した。これによると土器 2994 点、そのうち口縁部・底部で 492 点得られ、くびれ平底土器が主体を示し、土器の重量分布 (第19図) でも集中度の高いところである。

第6表 4409SX 遺物出土量

層	遺物	土器	土製品	石器	貝製品	骨類	貝類			青磁	先島系土器	合計
							巻	二枚	陸			
IV	1	691		3	10	30	933	429	10	1	1	2108
	2	727	1	2	9	11	672	263	7			1692
	3	91		1	2	5	507	291	2			899
	4	93		4	8	9	403	309	6			832
	—	340				53						393
V a	5	1052		5	8	8						1073
合計		2994	1	15	37	116	2515	1292	25	1	1	6997

前述したように遺構内の層を細分して遺物を取り上げ、層ごとに土器・石器の出土を示したが、遺物の詳細については各遺物の項でふれる。また、点上げされたものは第10図に示した。

以下、各層の遺物を略述する。

1 層：出土数 2108 点得られ、貝類が最も多く、次に土器が多い。青磁 (第71図 23) が得られているが、形状から 15 世紀代の碗で、上層の紛れ込みと判断される。ほかにアンボンクロザメ製の銚 (第59図 16)、磨石 2 点、用途不明石器が出土。土器はくびれ平底系土器が主体であるが、1～2 層からは乳房状尖底 (図 76)、丸底 (図 73) が出土。また、口縁についてみると厚手で胎土や混和材からやや古手のもの (図 6)、有文 (図 24) が出土している。

2 層：出土数 1692 点で、遺物の種類は前者と同様である。石器は磨石片が 2 点得られた。

土器は一見グスク系土器にも似る (図 56)、直状 (図 14)、底部はくびれ平底が主である。船元系 (図 1) 土器なども出土する。同じような船元系土器 (第20図 3) が VI 層の海砂層から出土し、¹⁴C 測定の結果、4450±40BP (第IV章第3節) 得られている。

3 層：自然木が他の層より多く得られ、出土状態も横位であることから流木と思われる。遺物の出土数も 899 点で、土器の出土も少なくなる。土器は口縁でくびれるもの (図 19) 小型 (図 66) が出土している。石器は磨石片 1 点の出土である。

4 層：最も低い部分からは樹木が立位の状態で検出され、樹木は ¹⁴C 測定の結果 950±30BP、その種類はサガリバナという結果が得られている。サガリバナは別名サワフジとも呼ばれ、湿地を形成するところに生える。本遺構の東側に立地する伊礼原遺跡 (2007) の低湿地区からも検出されている。時期は異なるが、似たような環境が想定される。

遺物の出土数 832 点で、そのほとんどは貝類で、土器は 3 層と同様、出土量は少ない。石器は石皿 (第50図 28)、台石 (図 27) の他、磨石が 1 点得られている。第36図 26 は外反の無文口縁土器である。点上げされ、標高は 1.756m で、伊礼原 E 遺跡の点上げデータを参考にすると海底のレベルと思われる。他に外耳土器 (図 70) も得られている。出土する遺物の状態がよいのは 5 層 (包含

層)に近いと思われる。

5層：試掘の4トレンチの延長の包含層と考えられ、北側に緩やかに高くなる。

遺物の出土数は1073点でそのほとんどは土器で、くびれ平底土器が主体である。口縁部はわずかに外反する無文口縁が多く、そのほとんどが泥質でいわゆるフェンサ下層式土器の範疇に含まれ、本遺構の時期を示すものである。また、石器も5点得られた(第45図14・第47図21)。

以上の状況から、4409SXは上層で古い土器が得られ、下層でフェンサ下層式土器が得られる。また、調査区の南側で主体をなす浜屋原式・大当原式土器の包含層は本遺構までは及んでないことから、5層はフェンサ下層式土器の単純層でVa層とした。IV層は人工的な構築物ではなく、サガリバナが生えた状態で検出されたことや出土する自然貝をみると巻き貝ではマガキガイ、二枚貝ではシラナミが主体を示し、骨類ではイノシシが多く、コブダイ、ハリセンボンが含まれ、貝製品も二枚貝有孔製品が出土する。本層は土器などの人工遺物も見られるが、Ⅲ層で出土する青磁や染付、また、ウシ・ウマ等の動物遺体もみられないことから15世紀以前に埋まったものと思われる。

範囲確認調査(2008)時に北側(3トレンチ)でカワニナを含む川跡が確認されていること、小堀原遺跡(2012)でも川跡が確認されていることから950年前以後で500年前(Ⅲ層)にできた後背湿地(自然地形)だった可能性が高い。また、4トレンチでくびれ平底が多数出土していることから北側にその時期の遺跡が存在する可能性が高い。



図版1 4409SX 検出状況



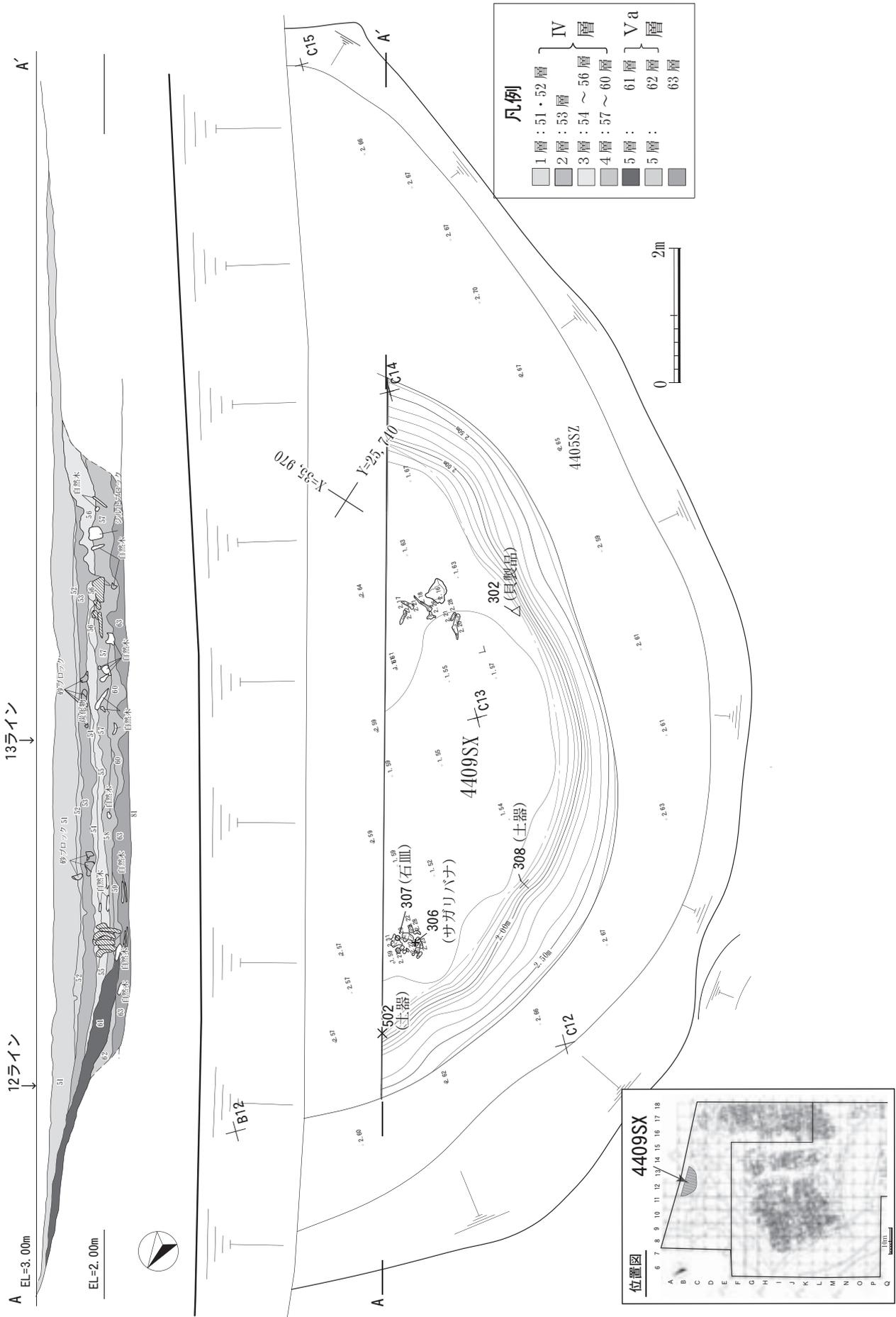
図版2 サガリバナ検出状況



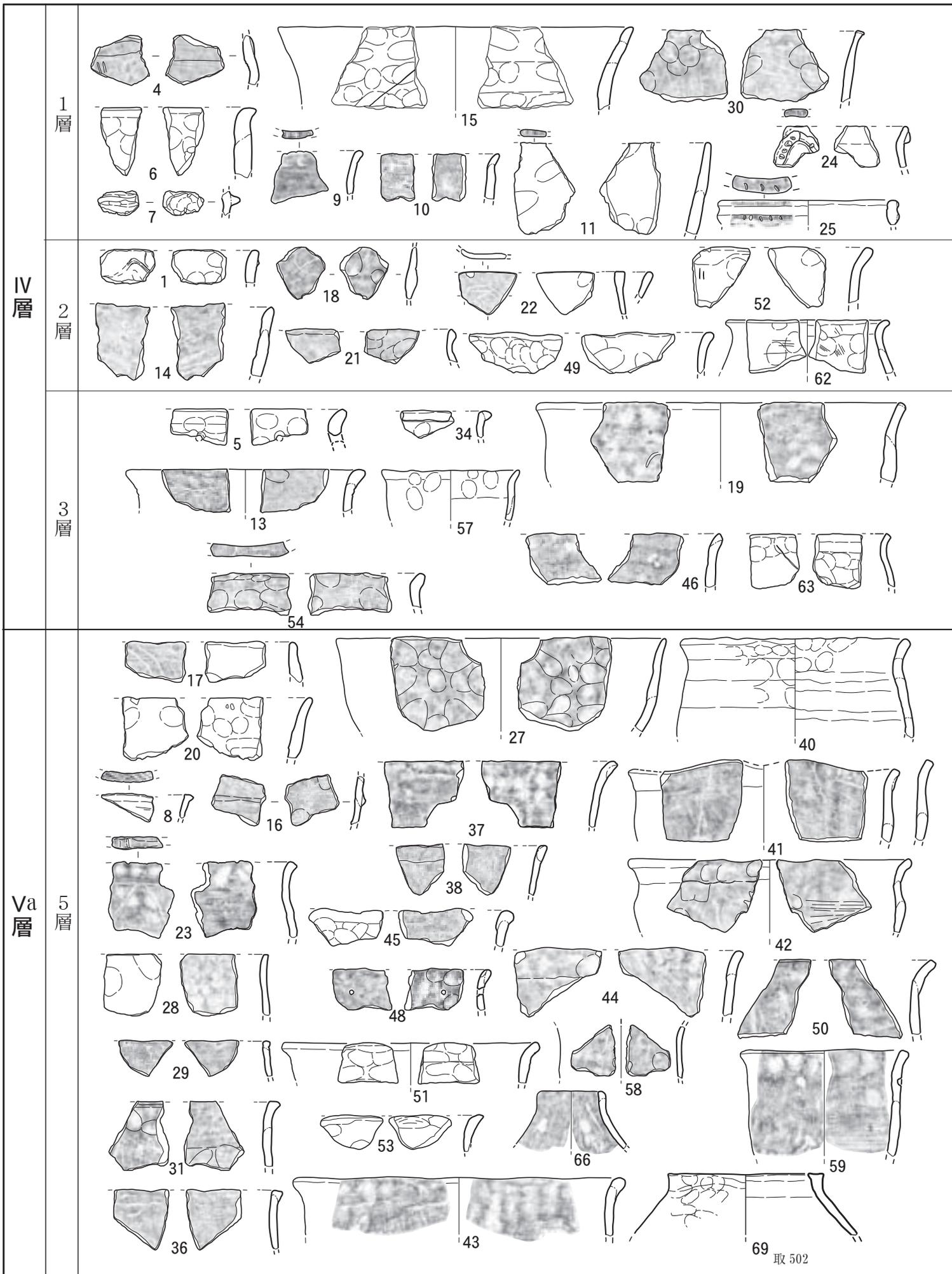
図版3 貝製品出土状況



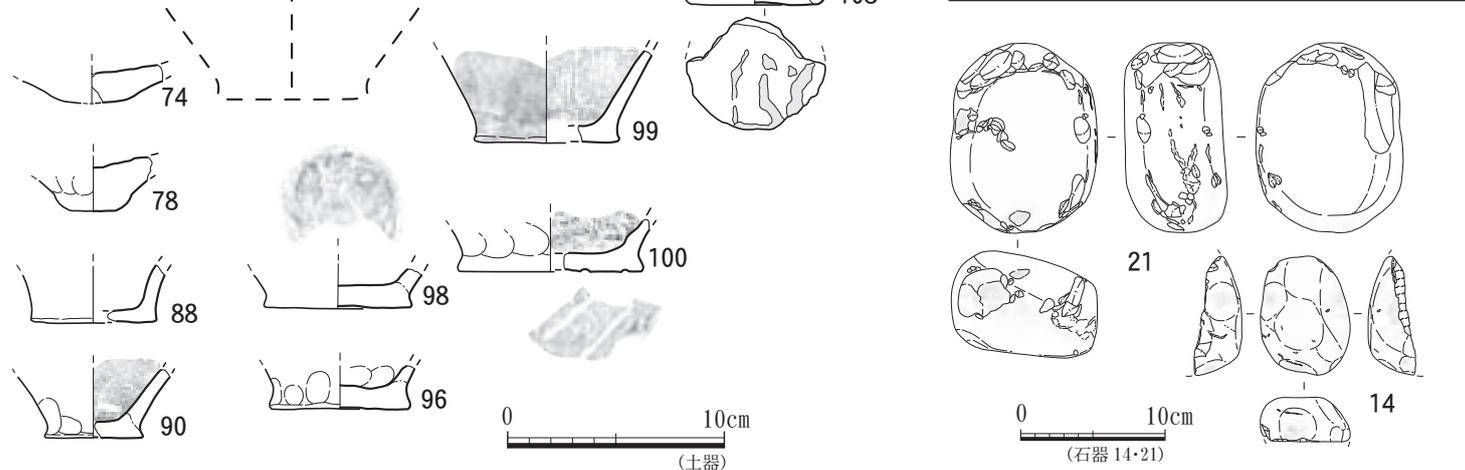
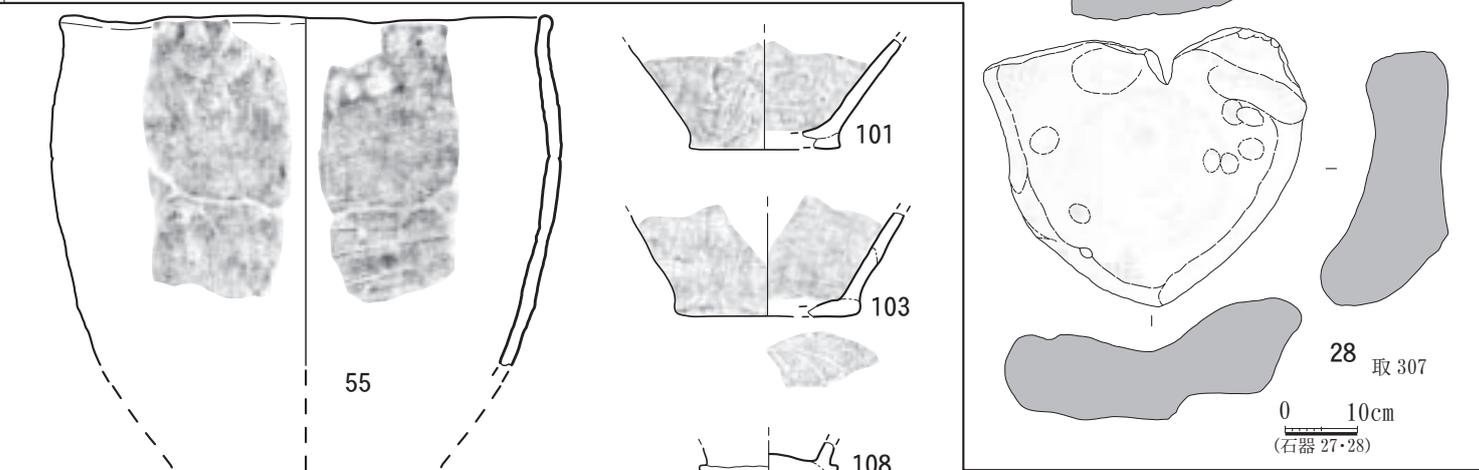
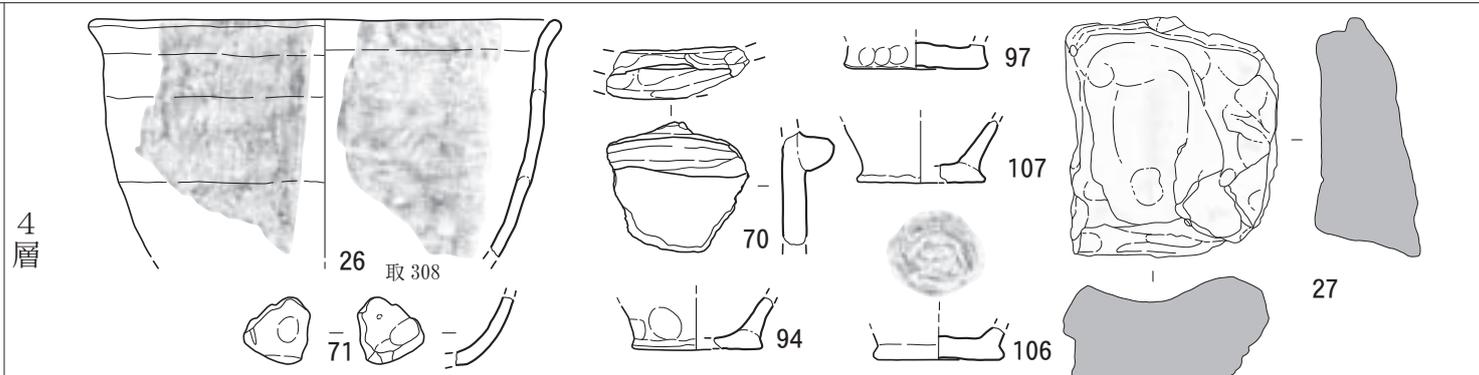
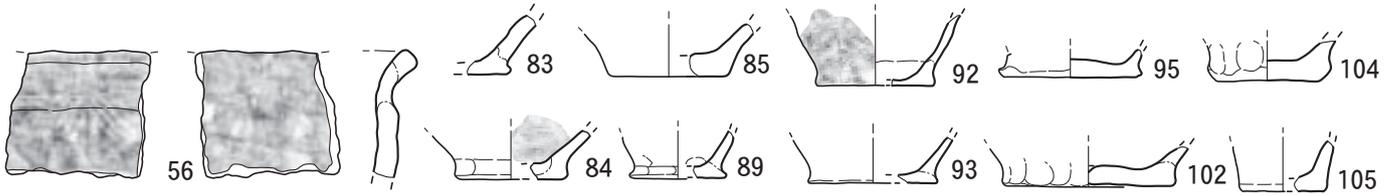
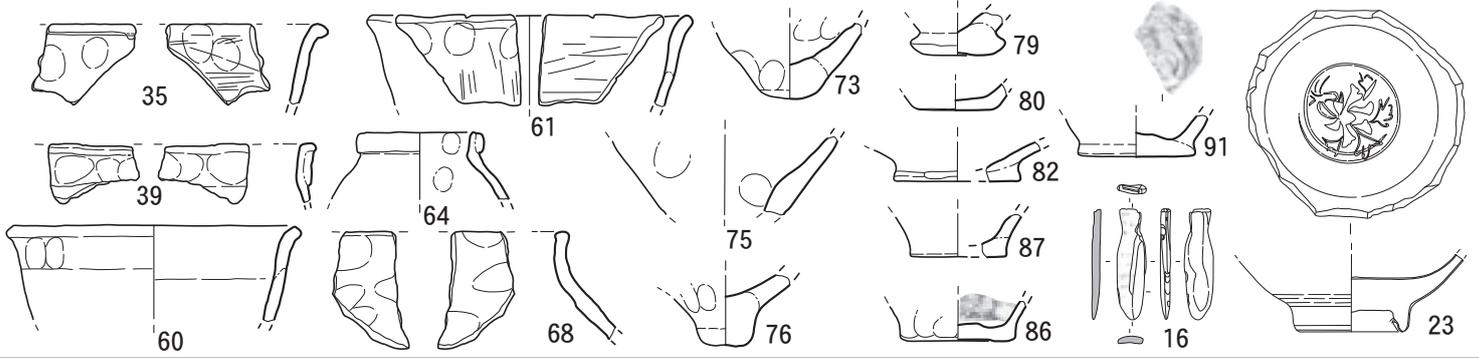
図版4 自然木・石出土状況



第11図 4409SX平面・断面図



第12図 4409SX 層別出土遺物



0 10cm
(土器)

0 10cm
(石器 14・21)

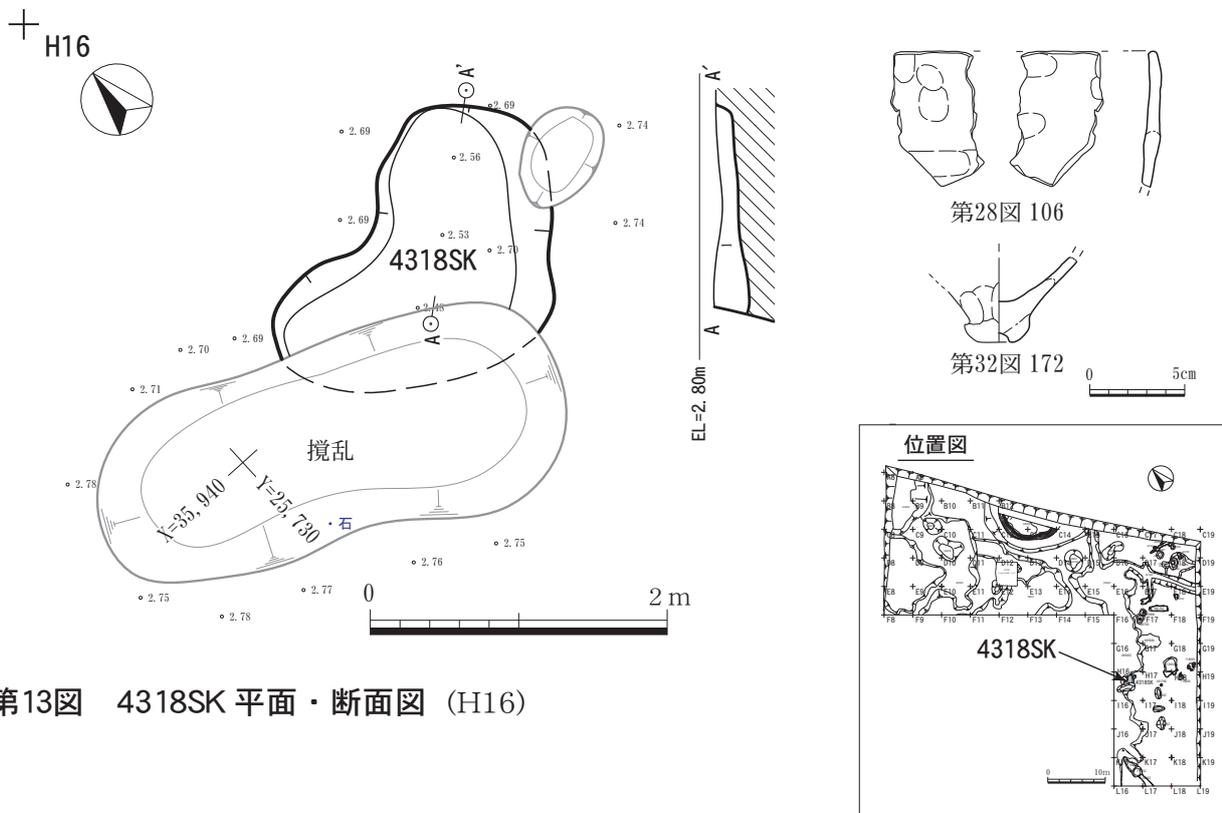
*番号は、各々の図番号と一致

(2) 4318SK

H16で大きさ2.0m×1.2mで、南側の一部が攪乱によってこわされた不定形の遺構が検出された。断面の厚さが10～30cmと皿状を呈し、その中には径1～10mmの貝片・礫を含むオリーブ褐色細砂質シルト(2.5Y4/3)で、検出面は標高2.7mでVb層の遺構である。

本遺構からは第28図106の口縁部(VI類)、第32図172の尖底、他にVI類に分類される胴部が4点出土した。また、土器以外には石、センニンガイの破片、イノシシの脛骨片、アオブダイの下咽頭骨等が得られている。

他に遺構の機能を示すものは無く、砂面であることから自然の落ち込みと考えられる。



第13図 4318SK 平面・断面図 (H16)



図版5 4318SK 検出状況 (南東より)



図版6 4318SK 検出状況 (北より)

(3) イモガイ貝集積 (4317SS)

H17のV b層の、標高2.9m(下位2.7m)で貝集積が1基検出され、中からアンボンクロザメ15個、クロフモドキ20個の計35個検出された(第15図)。貝集積は長径42.57cm、深さ20cmの鍋底状で白砂層に堆積するものである。

貝集積の中にはサンゴ礫(No.26)や土器も1点混じって検出されている。土器は胴部が厚さ6mmで胎土から大当原式土器に近い。

貝集積の取り上げ工程を第15図と図版7に示した。これによると①4~5個のイモガイの殻頂を下にして中央に置き→②中央の隙間を埋めるように数個配置→③殻頂を上にして周囲に差し込む→④殻頂を中央に向け配置という貝の配置が想定される。

35個の大型イモガイ(アンボンクロザメ・クロフモドキ)の計測一覧を第7表に示した。最も大きいものは殻径8.9cm、小さいものは殻径5.4cmを測る。個別観察の結果、殻口に若干の剥離が認められるが人工的な加工はなく、貝色も鮮やかである。

第14図に自然貝と貝集積の大きさを比較し示した。4317SSの貝と本遺跡出土の自然貝、アンチの上貝塚(2005)の貝集積を比較すると、4317SSの貝の大きさは6.0~7.4cmが多く、自然貝は4.5~5.4cm、アンチの上貝塚の貝は5.5~6.4cmが最も多い。従って、4317SSの方が大きい貝を集めており、意図的に集めていたことを示している。他に嘉門貝塚(1989)でも多数の貝集積があるが、貝の大きさは小振りである。

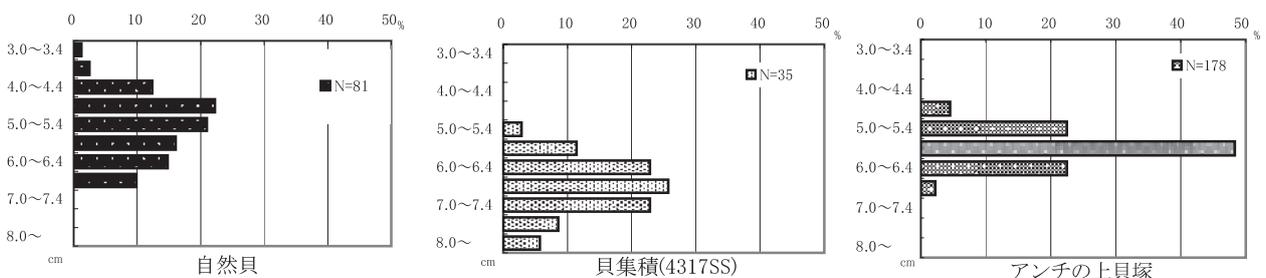
〈参考文献〉

盛本勲ほか 2005『瀬底島・アンチの上貝塚発掘調査報告書』本部町文化財調査報告書第8集 本部町教育委員会
 島袋春美 1989『南島からみた貝の交易-弥生時代を中心に』考古学ジャーナル 311 ニュー・サイエンス社

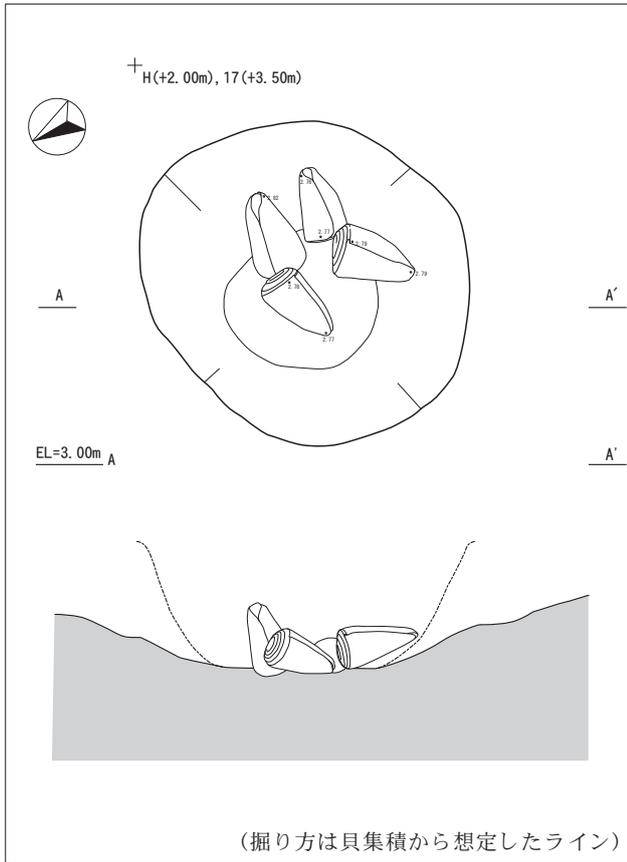
第7表 大型イモガイ貝集積計測一覧

No.	殻高(cm)	殻径(cm)	重量(g)	貝種
1	10.8	6.4	282	アンボンクロザメ
2	10.5	6.0	175	クロフモドキ
3	10.3	6.0	228	アンボンクロザメ
4	11.3	7.2	338	アンボンクロザメ
5	9.4	5.4	128	アンボンクロザメ
6	11.5	7.0	240	クロフモドキ
7	11.4	6.6	266	アンボンクロザメ
8	12.4	7.2	309	クロフモドキ
9	12.1	7.0	273	アンボンクロザメ
10	11.3	6.1	250	アンボンクロザメ
11	10.0	5.6	158	クロフモドキ
12	15.2	8.9	560	クロフモドキ
13	12.2	6.6	224	クロフモドキ
14	105.0	6.0	182	クロフモドキ
15	10.5	7.3	300	クロフモドキ
16	11.3	6.7	274	アンボンクロザメ
17	12.4	7.2	347	クロフモドキ
18	13.0	7.6	368	クロフモドキ
19	12.3	6.8	256	アンボンクロザメ
20	11.0	6.2	221	クロフモドキ
21	10.5	5.7	220	アンボンクロザメ
22	10.6	6.1	212	アンボンクロザメ
23	11.2	6.6	226	アンボンクロザメ
24	12.7	7.1	295	クロフモドキ
25	10.6	6.3	202	クロフモドキ
27	12.1	8.0	257	クロフモドキ
28	12.6	7.4	309	アンボンクロザメ
29	13.2	7.3	332	クロフモドキ
30	10.8	6.6	247	クロフモドキ
31	10.5	6.0	184	アンボンクロザメ
32	12.2	6.9	320	クロフモドキ
33	11.6	6.1	219	アンボンクロザメ
34	13.6	7.9	401	クロフモドキ
35	11.9	7.0	260	クロフモドキ
36	13.1	8.0	401	クロフモドキ

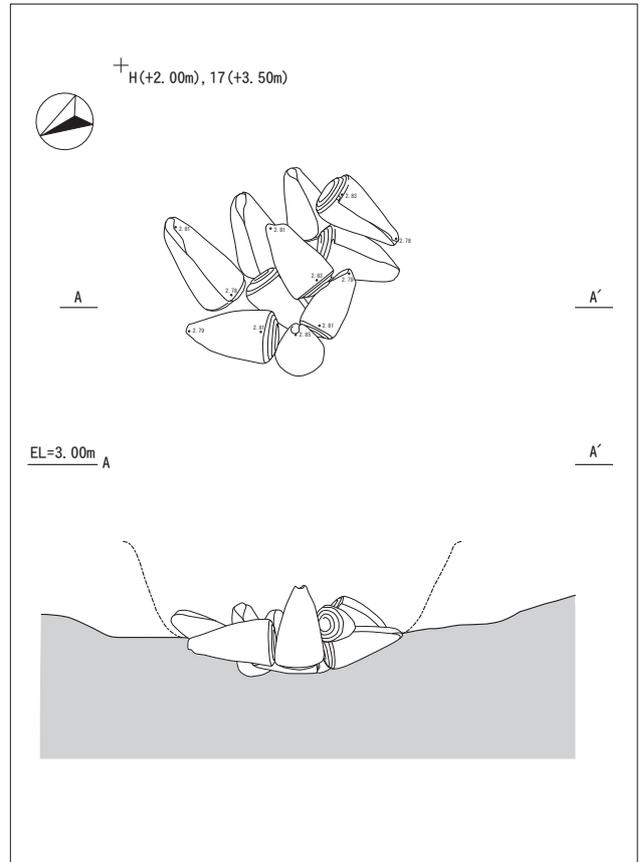
※ No.26はサンゴ礫



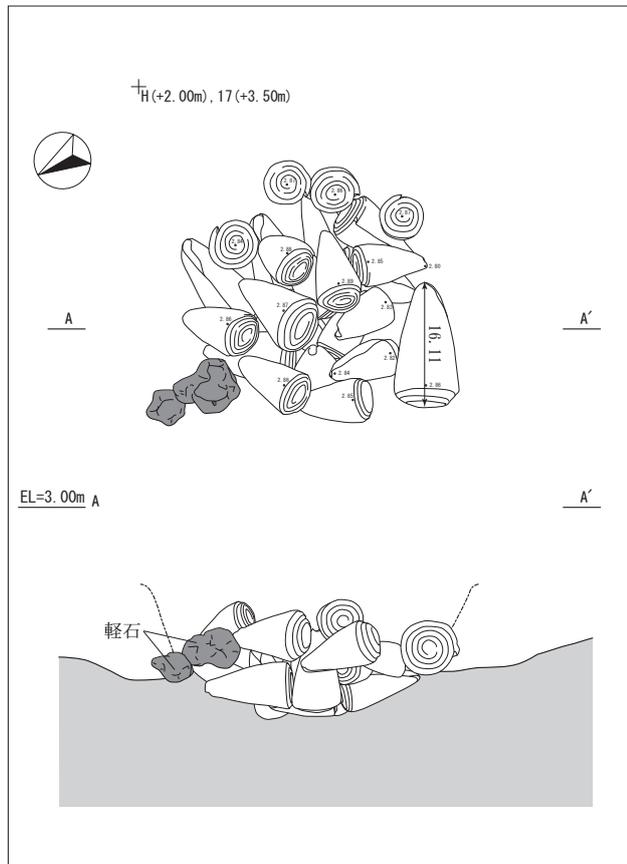
第14図 自然貝と貝集積の殻径比較



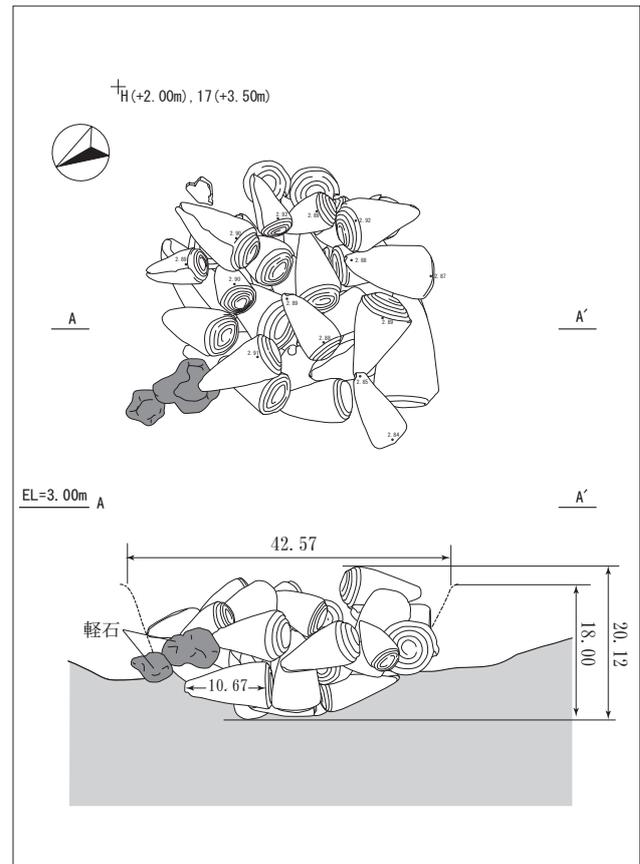
1 段目



2 段目



3 段目



4 段目

第15図 イモガイ貝集積 (4317SS)



① 1 段目 (北より)



2 段目 (北東より)



② 2 段目 (北より)



2 段目 (南より)



③ 3 段目 (北より)



3 段目 (東より)



④ 4 段目 (北東より)



4 段目 (東より)

図版7 イモガイ貝集積検出状況 (4317SS)

(4) 貝だまり

第16図に示すように、5カ所の貝だまりが確認された。

これらは、Ⅱ層除去後、グスク期の柱穴検出面での確認である。標高 3.0m 前後で、一部に錢貸や沖縄産無釉陶器が検出されたことから、所属時期を近世期のもと考えていた。しかし、貝だまりから出土する遺物や点上げで得られた土器の標高などを考慮すると、貝塚時代後期の遺物包含層の残存面の可能性が高いと判断した。以下、各貝だまりの状況を略述する。

<0656SS>

最も面積が大きい貝だまりで長軸 4.19m、短軸 2.3m の楕円形で、F 16・17、G 16・17 にまたがる。

出土遺物は、上部で沖縄産無釉陶器（第94図 10）、錢貸（第86図 2）などが出土している。

貝塚時代後期の遺物としては型式不明（第25図 67）、乳房状尖底（第26図 82）、石器（磨石）、骨製品（第64図 2）、のほかにヤコウガイの腹面型の貝匙未製品（第61図 31）、マガキガイの貝玉（第59図 13）、加工途中のゴホウラ（第59図 19）が出土している。

<0657SS>

長軸 1.61m、短軸 1.37m、深さ 20cm の略方形、F 16・17 で検出された。

出土遺物は薄手と厚手の大当原式土器の他、ヤコウガイや骨、軽石などが混入していた。

<0658SS>

長軸 1.14m、短軸 1.13m、深さ 23cm の略三角形で、断面がすり鉢型を呈するものでE 16・17 にまたがって検出された。サンゴや石灰岩礫が集中する。上部からは鉄片が出土している。

土器では大当原式土器の薄手が 15 点と乳房状尖底土器（第32図 167）が出土している。ほかにヤコウガイやリュウキュウサルボオが得られた。

<1160SS>

長軸 0.97m、短軸 0.56m、深さ 11cm の不定形で、H18 で検出、最も小さい貝だまりである。

径 10cm 大の貝片、径 5cm 大のコーラルが含まれ、黒褐色シルトを呈することから上部に近世の遺構になっているようで、標高 3.161m から沖縄産無釉陶器（第95図 20）が検出されている。

貝塚時代後期の遺物として造形が豊かなヤコウガイ貝匙の柄（第60図 25）が標高 3.185m から出土し、貝だまりの貝はメンガイ、シャコガイ、クモガイ、マガキガイなどが見られる。

<1163SS>

G18 の南西側で検出され、長軸 142cm、短軸 37cm、深さ 14cm の貝だまりで、グスク期の柱穴 No.631SK、634P、637SK、638P に切られ、不定形である。

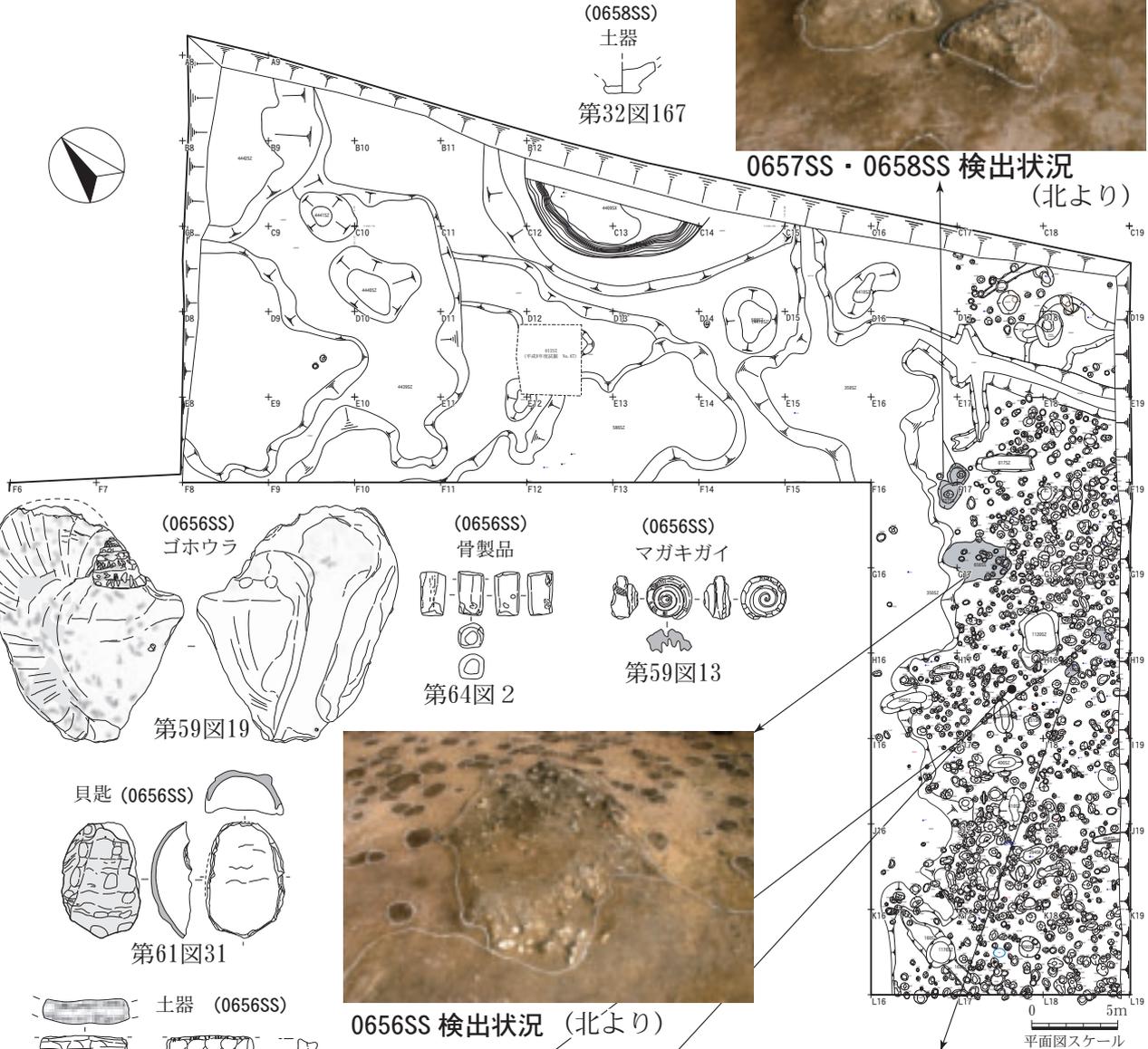
貝塚時代後期の遺物としては土器が大当原式土器のもので不定形の細沈線文を施すものや薄手の胴部が多い。また、平底（第21図 27）が出土した。本品は胎土分析や底部の形状から搬入品の可能性が高い。ほかに丸底も出土している。ハナビラダカラの製品やオオベッコウガサ貝輪も出土している。



(0658SS)
土器

第32図167

0657SS・0658SS 検出状況
(北より)



第59図19



第64図2



第59図13



第61図31



第25図67



0656SS 検出状況 (北より)

平面図スケール



1163SS 検出状況 (南西より)
土器 (1163SS)



第21図27



4317SS イモガイ貝集積
(東より)



1160SS 検出状況 (南より)

ヤコウガイ (貝匙の柄) (1160SS)



第60図25

0 5cm
遺物スケール

第16図 イモガイ貝集積・貝だまり

(5) 軽石

軽石は人工遺物ではないが、伊礼原遺跡(2007)、範囲確認調査(2008)、で集計を行った。

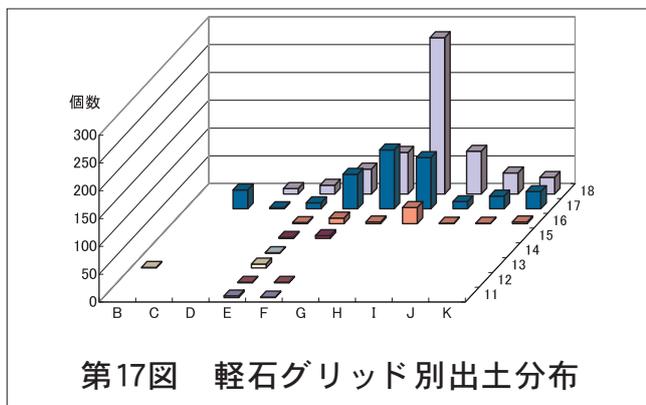
軽石の色(白色系・黄色系・黒系)と気泡(細・中・粗)で分類し、集計を行った。その結果、全体的に黄褐色系の中が最も多く、グリッド別にはH 18(281個)、G 17(106個)、H 17(92個)、I 18(77個)、G 18(75個)、F 17(62個)とH18を中心に集中する。第18図の軽石の範囲と比較すると海側の方に中心が若干ずれるが、これは、第18図に示した軽石ラインにほぼ近い。

軽石は前述したように伊礼原遺跡(2007)の砂丘区では25コンテナ分得られ、貝塚時代後期のE-14・15グリッドに集中し、範囲確認調査(2008)では2コンテナ得られ4・5・6・7グリッドに分布する。また、伊礼原E遺跡(2007)では内陸側のB-2トレンチで軽石層、小堀原遺跡(2009)でも軽石ラインが確認されていることから当時の海岸線を示していると考えられる。本遺跡では第111図に示したように近世に加工された軽石が出土している。黒色の粗い軽石(スコリア)で、他の軽石とは異なる。本遺跡出土の軽石は板状軽石(加藤祐三2009)に類似するが、漂流のためか、全体的に丸味を帯びる。

(参考文献) 加藤祐三 2009年『軽石』 pp.198-200 八坂書房

第8表 軽石出土量

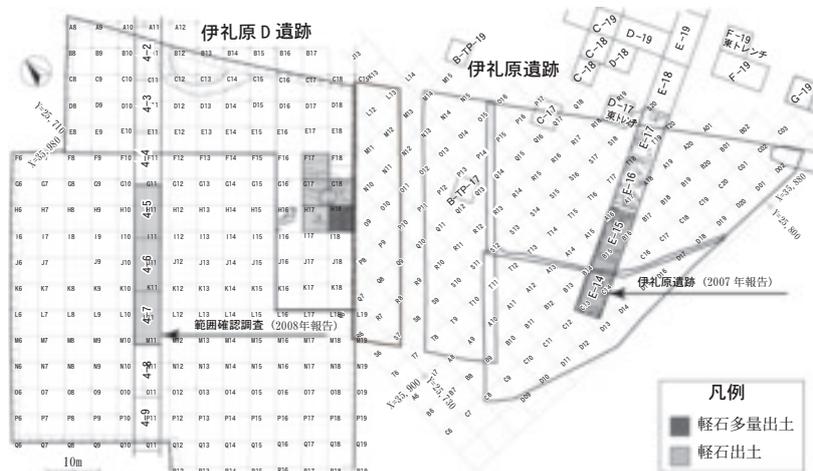
分類	白						黄						黒						個数合計	重量(g)合計
	細		中		粗		細		中		粗		細		中		粗			
層	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量		
II	5	168.1	15	262.1			3	46.6	44	382.1	9	196.7			4	32.6	13	978.5	93	2066.7
II (遺構)									2	60.9					1	4.9			3	65.8
III	8	97.3	1	0.1					131	1367	68	1008.6	3	76	38	236	44	829.3	293	3614.3
IV (遺構)									1	0.8									1	0.8
V b (攪乱)	18	142.9	23	735.6			14	62.8	239	1374.6	50	317.1			21	108.6	139	774.1	504	3515.7
V b	1	0.7			2	94.8	3	16.9	32	250.4	58	2512.7			4	3.28	24	439.9	124	3318.68
不明															1	0.4			1	0.4
合計	32	409	39	997.8	2	94.8	20	126.3	449	3435.8	185	4035.1	3	76	69	385.78	220	3021.8	1019	12582.4
個数・重量合計	個数 73 重量		1501.6		個数 654 重量		7597.2		個数 292 重量		3483.58		1019		12582.4					



第17図 軽石グリッド別出土分布



図版8 軽石の種類



第18図 軽石平面分布 (伊礼原 D 遺跡・伊礼原遺跡)

2. 出土遺物

V層の出土遺物は土器、石器、石材、貝製品、骨製品、脊椎動物遺体、貝類遺体が出土した。

大まかな出土量は、土器 33 コンテナ、石器・石材 14 コンテナ、貝製品 5 コンテナ、貝類 252 コンテナ、骨類 7 コンテナで、人工遺物では土器が最も多い。

(1) 土器

土器は 25 コンテナで、出土量は貝類の 252 コンテナに次いで多い。

・分類集計の方法

土器は注記時に重さを量り、グリッド別の平面分布(第19図)を示し、遺物整理の指標とした。その後、接合を試み、形の復元できるものは 10 個体である。

それ以外については、口縁部、胴部、底部に分け、さらに口縁部は型式の範疇に含まれるものを軸に分類し、底部については口縁部の分類にあわせるのは困難なため別に分類した。胴部は口縁部の分類に準じ胎土で分類し個数と重量を量った。最後にまとめて略述する。

遺物の集計は土器の出土傾向を見るため、A～Eに区切ってまとめた。区割りの詳細は下記の通りである。

- A 区：陸側 C～E、15～18
- B 区：中側 F～H、16～18
- C 区：海側 I～K、16～18
- D 区：4409SX 以外の A～E、8～14
- E 区：4409SX (B～C、12～13)

注記段階で計量した土器の重量分布からは第19図に示したように集中部分は南西側の B 区と北側の E 区に分けられる。土器分類の結果、これら 2つの地区の土器は底部で見ると前者が尖底土器を主体、後者がくびれ平底土器を主体とする傾向がみられ、後者の土器のほとんどは 4409SX からの出土である。4409SX は遺構の項で示したように 1～5 層に細分して取り上げた。そのため、ここでは 4409SX (E 区) とそれ以外 (A～D 区) の土器について分けて報告する。

・A～D 区

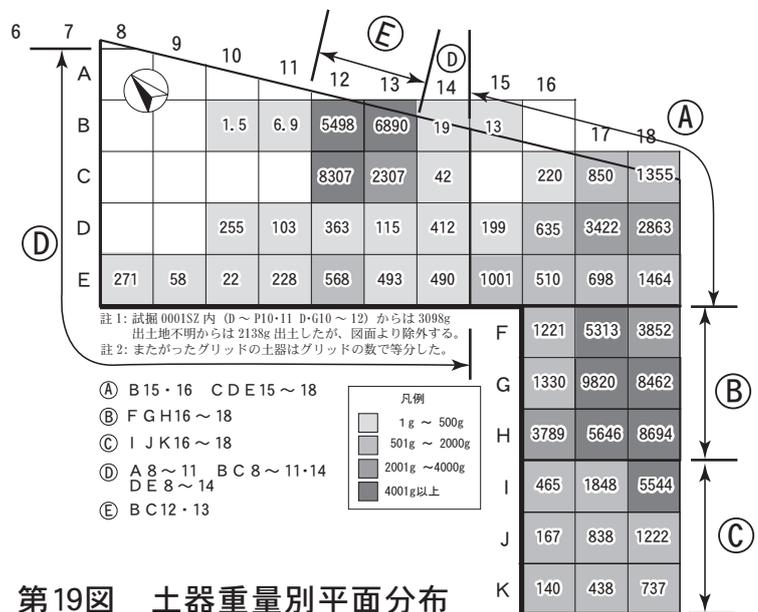
出土した土器は大きく貝塚時代前期 (I 群)、貝塚時代後期 (II 群) に分けられる。I 群は貝塚時代前期土器を主体とする伊礼原 E 遺跡 (2010)、II 群は貝塚時代後期土器を主体とする小堀原遺跡 (2012) の分類を踏襲した。

以下、それぞれの土器について、主なものを第20～33図に図示し、第12表に観察一覧、出土量は必要に応じて各分類で行い、全体を第10表にまとめた。

I 群〈貝塚時代前期系土器〉

I 群は I 類 (縄文中期系土器)、II 類 (室川下層式土器)、III 類 (面縄前庭式土器)、IV 類 (嘉徳式土器)、V 類 (肥厚口縁系土器) とした。

第9表によると出土総数 128 点で、平面的な出土状況を見ると B 区 57 点、D 区 31 点と多く、



第19図 土器重量別平面分布

層別にはⅥ層（海砂）で36点、Ⅴb層で49点、Ⅴb層攪乱で10点である。分類別にはⅢ類62点、Ⅱ類26点、Ⅰ類22点、Ⅳ類8点、Ⅴ類10点の出土でⅢ類が最も多い。

出土層位がⅤb層とⅥ層で74.2%を占め、Ⅲ類が主体を示すことから、Ⅰ群土器が主体をなす国指定史跡の伊礼原遺跡（砂丘区）に関連するものと思われる。

Ⅰ類（縄文中期系土器）

主に火山ガラスや角閃石を多量に混入するもので、伊礼原E遺跡でも267点得られた。器厚により、a：器厚が0.9cm前後の厚手、b：器厚が0.5cm前後の薄手（船元系）に分けられる。

a：7点得られた。図1は幅0.3cmの凸帯文を円弧状に施すもので、E8Ⅲ層の出土で、他に4409SXⅣ層でも出土している。

b：11点得られた。図2は列点文を横位に3条施すもので、図3は外面に縄目の調整痕が明瞭に見られ、図上を復元すると伊礼原E遺跡（2010第47図15）土器とほぼ同じ大きさである。この土器の内面に付着した炭の¹⁴C年代測定した結果4450±40（第Ⅳ章第3節参照）という値が得られた。D12Ⅵ層、標高1.16mの出土である。図4は器面が剥がれ、鉍物を多量に混入し搬入の可能性が高い。Ⅱ類（室川下層式土器）

26点得られた。粗粒の石英を多量混入し、器厚が1.0cm前後と厚手でa：室川下層式土器に類するもの、b：胎土はaと同じであるが、器形が異なるもの、c：焼成が悪く、黄褐色を呈するものに細分した。

a：図5は口縁部としたが、粘土紐の積痕の可能性もある。裏面の器面調整が顕著である。図6～9は胴部で、図6は胴部外面に三条の刺突文を斜めに施す。図7～9は貝殻条痕が顕著に見られる。図10は丸か尖底で、これまで報告された室川下層式土器の底部に一致する。

b：図11は底径10cmの平底である。室川下層式土器では報告されてないため、細分した。

やや薄手であるが、粗い石英を多量混入する点は室川下層式土器に類似する。

c：図12は器厚が1.1cmとやや厚手で、粗い石英や火山ガラスを含む。外面に横位に2条の貝殻文を施すもので、器面は剥落し、状態は良くない。前述のaタイプとbタイプとは胎土が異なる。神野式の可能性

Ⅲ類（面縄前庭式土器）

62点出土した。いわゆる面縄前庭式土器に分類されるもので器厚が0.6cm前後の薄手で、頸部が窄まり、凸帯文の上に刻目文を施すものである。図13～16は口縁部、図17は胴部である。

図13は凸帯文下に鋸歯状に沈線文を施し、図14は口唇に刻目文が施され、口縁部には凸帯文はなく、縦位に沈線文を施すもので、頸部は厚くなる傾向がみられる。図15は凸帯文を曲線状に施し、図16は内唇と外面に刺突文を横位に深く施文するもので、施文具の方向は内唇が縦位、外面が横位と異なる。図17はやや大きめの胴部で、沈線文を縦位に施すものである。図15と図17はやや厚手である。文様は伊礼原E遺跡に比べて雑で、伊礼原遺跡低湿地区の上部出土の土器と類似する。

第9表 Ⅰ群土器出土量

地区・層	分類	Ⅰ群										合計	地区別計	
		Ⅰ類			Ⅱ類			Ⅲ類		Ⅳ類				Ⅴ類
		a	b	-	a	b	c	a	-	-	-			
A	Ⅱ	1										1	2	10
	Ⅴb(攪乱)											1	1	
	Ⅴb							2				5	7	
B	Ⅱ	3	1										4	57
	Ⅲ	1			1				4	1			7	
	Ⅴb(攪乱)		2						1				3	
	Ⅴb	1	3		6	1	1	2	16			1	31	
	Ⅵ				5					5	2		12	
C	Ⅱ								1				1	17
	Ⅴb(攪乱)								5				5	
	Ⅴb		3					1	5	1	1	1	11	
D	Ⅱ				2	1			1				4	31
	Ⅲ	1			1								2	
	Ⅴb(攪乱)				1								1	
	Ⅵ		2		4	2		1	14	1			24	
E	Ⅳ		1		1			1		3			6	9
	Ⅴa		2	1									3	
-	排土							2				1	3	4
	表採							1					1	
合計		7	14	1	21	4	1	10	52	8	10		128	
類別合計		22			26			62		8		10		

註1：「排土」調査時の排出した土。
 註2：2.5cm以下は不集計。

Ⅳ類（嘉徳式土器）

8点出土した。図18は厚さ0.6cmと薄手の直状口縁で外面に羽状の沈線文を施すものでいわゆる嘉徳式土器の範疇に含まれるもので、水摩のため摩耗する。H17 VI層の出土である。

Ⅴ類（肥厚口縁系土器）

10点出土した。A区に出土が多いことからⅡ群土器のⅢ類にも近い。Ⅱ群Ⅲ類の可能性も考えられるが、胎土が若干異なるためここに分類した。

図19は口縁部断面がやや扁平三角形を呈するもので、いわゆる宇佐浜式土器である。全体的に摩耗し、水摩を受けている。内外面とも赤褐色を呈し、器厚は0.8～0.9cmとやや厚手である。I18 V b層の出土で、図80（Ⅴ類）と図125（Ⅷ類）と共伴で出土。

Ⅱ群〈貝塚時代後期土器〉

Ⅱ群土器は搬入土器と在地土器があり、前述したように小堀原遺跡（2012）の分類を軸に新たに記号を付した。

I類（搬入土器）、在地土器をⅡ類（晩期系土器・有文）、Ⅲ類（晩期系土器・無文）、Ⅳ類（型式不明－a）、Ⅴ類（浜屋原式土器）、Ⅵ類（大当原式土器）、Ⅶ類（型式不明－b）、Ⅷ類（くびれ平底系土器）、Ⅸ類（その他）で、必要に応じて細分を試みた。

口縁部と胴部の出土量を第10表に示した。集計は個数及び重量について行ったが同表に示すように分類別の個数と重量の割合はほぼ同じである。そのため、ここでは、個数の集計で示す。

この表から土器の出土量をみるとV b層で1905点（18.8%）、V b層攪乱1408点（14.0%）、Ⅲ層2677点（25.8%）、Ⅱ層1127点（11.2%）と本来の貝塚時代後期の層であるV b層よりもⅢ層及びⅡ層の出土が多い。このことは層序あるいは遺構の項でもふれたが、伊礼原D遺跡の貝塚時代後期の包含層はⅢ層（グスク期）、Ⅱ層（近・現代）によって攪乱を受けていることを示すものである。

それを前提に地区別の出土状況をみると各分類別に異なる分布を示していることから平面分布が有効と判断される。以下、分類別に出土量及び図示し、主な土器について略述する。

I類（搬入土器）

土器の形状及び胎土などから搬入されたものかあるいはそれに近いものをここでまとめた。器種は鉢・甕形と壺がある。78点得られ、全体の1%を占め、地区別にはB区が31点（40%）、A区が19点（23%）と内陸側に多い傾向が見られる。

a：弥生系及びその模倣、b：外耳土器、c：底部、d：壺、e：スセン當式土器、f：土師器？がある。

a：図20～22は細い凸帯文を1～3条施すもので、凸帯文は図20が3条、図21が1条、図22が2条確認された。凸帯の断面をみると図20・22が三角形、図21が丸く、図22は凸帯文が前2者より大きく、弧状をなす。いずれも器厚が1.0cm前後と厚手で、胎土をみると図20と図21は金雲母や石英を多量混入し、図22にはこれらの混和材が認められないことから、在地的な様相が高い。

図23・24は胴部で、図23は角閃石などの鉱物を多く含むもの、図24の外面には黒班が確認でき、平安山B遺跡（2008）、小堀原遺跡（2012）でも報告されている。

b：弧状の耳を持つもの（図25）で、伊礼原遺跡（2007 第83図17）にも報告例がある。

c：図26が7.5cm、図27が8.6cmと他の底部に比べて底径が大きく、前者は底部の厚さも1.2cmと厚く、立ち上がりも直状、きめ細かい胎土で、底面に砂粒の付着が多い。後者は前者に比べて底厚は胴部とほぼ同じ厚さで中央部分が上げ底状を呈する。粗粒の石灰質粒を多量混入し（第Ⅳ章第3節参照）、内面は黒褐色を呈する。類例がなく搬入に含めたが、今後の資料の追加を待ちたい。

1163SSの出土である。

d：弥生土器の胎土と模倣の可能性のある壺を含めた。いずれも長頸で口縁部は舌状を呈する。図28・29はラッパ状に開くもので、図28は外面の光沢が顕著、雲母を多量混入し、搬入と考えられる。図30・31は前2者に比べて内傾するもので、図31は胎土から在地に近い。図28～31は器厚が1.0cm前後の厚手である。

e：スセン當式土器に類似するものである。

図32は直状の口縁部で刻目凸帯文と沈線文を組み合わせで施文する。このような文様はスセン當式かどうか明瞭でないが、図33と同一個体の可能性が高く、脚台、中空ということからここに含めた。図32は文様の施されている口縁部分の器面は丁寧に調整され、胴部以下はユビナデを縦位に施して器面を調整する。

図34は小振りの脚台で、赤粒を混入、砂泥質などから胎土はⅥ類（大当原式土器）に近い。

図35は口縁部に深い沈線で重弧文を描く。胎土が類似することからここに含めた。胴下部は極端に薄く、似たような胎土の丸底（図140）もあり、同一個体の可能性も考えられる。出土も北側の0008SFで出土。

f：薄手で胎土のキメも細かい胎土で、これまで出土した搬入土器と比べて薄手できめ細かく、土師器の可能性も考えられる。脚台（図36）、壺（図37）、有文胴部（図38）が出土した。

図36は幅0.9cmの弧状の粘土紐で、断面が丸く、外耳か底部がはっきりしないが、内面にカーブが見られないことから底部とした。胎土は火山ガラスを含み、搬入土器とした一因である。

図37は口径6.6cmの短頸壺で口縁部が若干肥厚する肥厚幅は1.4cmで断面は丸である。

図38は縦位に細沈線文を密に施すもので一見、弥生土器の刷毛目に酷似する。胎土に特徴があるが、類例はなく、今後の資料の追加を待ちたい。

Ⅱ類（晩期系土器・有文）

Ⅱ類としたのは口縁部の作りが丁寧で、角を持ち、口唇部及び外面に施文するものである。

既存の縄文時代晩期系土器に近いが、文様のバリエーションが多いためⅢ類の無文とは区別した。

文様の種類には凸帯文、刻目文、刺突文、沈線文があり、これらを組み合わせたり、深くあるいは浅く、また、疎らあるいは密に施している。器面調整は丁寧で、焼成はやや悪く、胎土は砂質、混和材は細かく、色調が暗赤褐色～茶褐色を呈し、出土している土器の中では古手である。

40点得られ、全体の0.4%と少ない。地区別にはB区で19点（48%）、C区で12点（30%）、Ⅳ類と同様な出土状況を示す。以下、文様の組み合わせで略述する。

・刻目文と凸帯文の組み合わせ：図39は口径24.6cm、推定器高26.3cmと全形を図上復元できるもので胴部は張り、口径と胴径はほぼ同じ大きさで、底部は丸底である。文様の施文部位は口唇と口縁～胴上部で、口唇部は幅広の沈線文、口縁～胴上部の文様帯には口唇に沿うように叉状工具で刺突文を施し、その間に「Ω」字状に凸帯文を貼り付けて刻目を施している。その凸帯文が途切れるところから押引き文を斜位に施し、最大胴位で横位に圍繞する刻目文に接続する。口縁の作りも丁寧で、器厚も均一である。図上復元で、底部の部分は取上番号67で、図80（Ⅴ類）と同じ地点で出土（第10図）。

図45も図39と同じような文様で、凸帯文を横位に圍繞せず、途中で途切れ、その回りを幅広沈線文でなぞるものである。

・刻目文と幅広沈線文の組み合わせ：図43は肩部に幅広沈線文とその間に叉状工具で刻目文を丁寧に施すものである。断面をみると肩部で厚く、口縁部に窄まり、最大胴径16.0cmを測ることか

ら壺と考えられる。

図44は口縁部から底部まで接合できるもので、口径28.6cm、高さ31.2cm、丸底の土器で、胴部は前述の図39よりは張らない。口縁部の作り及び文様構図は図39と類似するが、施文の位置は最大胴径よりは上位に位置し、施文は前者に比べてラフである。図41、42も同様のタイプである。

図48は前者と同じタイプの口縁で、図39と図45の折衷タイプの文様を施すが、幅広沈線文が主文様で、凸帯文は前2者に比べて薄手である。口径29.0cmを測る。

・刻目文：図40は口縁部が外に張り出すもので、口唇と外面に先端が方形の刻目文を浅く施す。器面の保持は悪い。

・刺突文：図49は口唇及び外面に幅0.4cmの工具で刺突文を施すもので、口唇部は若干膨らみ玉縁を呈し、胴部は積痕が顕著に残る、薄手の土器で、口径38.5cmと大きめの土器である。

文様構図をみると縦位に3条、胴上部にやや斜めに1条圍繞するもので、構図は貝塚時代前期に見られるが本品はラフに施されている。J18 V b層攪乱、標高2.9mで出土。

・口唇のみに刻目文：口唇に深い刻目文を施すもの（図50・51・53・55）とさらに口縁部に幅広沈線文を施すもの（図52）のものがある。口縁形態をみると若干窄まる（図55）と僅かに外反するもの（図50～52）、外反が強いもの（図53）がある。土器の大きさをみると口径が図55は11.4cm、図52が21.4cm、図51が20.2cm、図53が21.3cmで全体的に小さめである。図53は薄手であるが、図49と同じように積痕が残り、底部近くまで残存することから、底部の形状を推定すると丸底か尖底の可能性が高い。口縁部は幅4cmの積痕があり、肥厚口縁部のようにも見える。Ⅷ類の口縁の作りと類似することからアカジャンガー式土器やフェンサ下層式土器などのくびれ平底系土器への移行タイプの可能性が高いが、1点であり、今後の資料の追加を待ちたい。

・沈線文：図47と図54は沈線文を施したもので口縁形態、胎土は異なるがそれぞれ1点のため、まとめて略述する。図47は口縁部が丸く、僅かに外反するもので、頸部に沈線文を1条施すものである。器厚も0.9cmと厚く、泥質である。推定口径26.8cmと大きめで、胎土などからは時期は下る可能性が高い。

図54は口縁部が舌状を呈し、直状口縁で外面に沈線文を2段の鋸歯状に施すものである。

・「く」字状に屈曲、施文：口唇部は欠落するが、逆「く」字状に屈曲する部分に施文するものである。図57は屈曲部分が緩やかに丸く、外面に沈線文を波状に、図58・59は屈曲部分が角を呈し、その部分に前者は刺突文、後者は点刻文と縦位に沈線文を施す。類例は小堀原遺跡（2012）で得られ、凸帯文を縦位に施している。

Ⅲ類（晩期系土器・無文）

Ⅱ類とほぼ同様の胎土や器面調整をなすが、無文のためここに分けた。出土総数121点で全体の約1%の出土である。地区別の出土をみるとA区で46点（38%）、D区で44点（36%）と内陸側に多い。口縁部の形態により、a：若干外反するもの、b：外反するもの、c：直状なものがある。以下、略述する。

a：口縁部がやや外反するものは図56で器厚が0.8cmと厚手で胎土に火山ガラスを含み、僅かに胴部で張る。口縁部は若干膨らみ、玉縁を呈する。

b：口縁部が外反するものは図60・61・63で、前2者が舌状、器厚はやや均一で、後者は丸を呈し、器厚は一定、胎土に白粒を多量含む。いずれも内面の刷毛目調整が特徴的で、図61は内唇に粘土を貼り付けており、前述した鞍状凸帯文の名残と思われる。鞍状凸帯文は直状口縁に施文するのに対し、本品は外反することから、口縁部の形状と文様の変化は関連するものと思われる。図63

は図 62 と胎土が酷似する。

c：口縁部が直状なものは図 62・64～66 で、胎土に石灰粒を多量に混入するものと石灰粒を含まないものがある。

図 62 は丸味のある口縁部で胎土に石灰質粒を多く含むもので室川上層式土器（註）に類似する。

図 64 と図 65・66 は口縁断面が方形で厚みがあり、胎土に赤粒を含むものである。図 64 は僅かに火山ガラスを含み、搬入の可能性も考えられる。図 65・66 は内陸側の C・D17 で出土している。口径が 38.0cm、最大胴径が 34.8cm と大きく、焼きも弱く、やや古手の様相を持つものである。

Ⅳ類（型式不明－a）

前述のⅡ・Ⅲ類に含まれないもので、厚さがほぼ均一で、a：砂質とb：やや泥質がある。aの砂質は火山ガラスなどの鉱物を多く混入し、器面が剥落気味で、器厚 0.7cm 前後と器厚 0.4cm 前後の2種がある。bのやや泥質は焼成もよく、混和材も少ない。91 点得られ、全体の約 1%の出土である。地区別の出土をみると B 区で 38 点（42%）、C 区で 32 点（35%）の出土である。

a：口縁の形態は直状口縁（図 67～74）である。

外反口縁は口唇に粘土紐を貼り付け、逆「L」字状（図 67・68）、方形（図 69）角（図 70・71）を呈する。粘土紐を貼り付けたため、図 67 と 70 は口唇部分が窪み、前者が凹文、後者が沈線文を施す。図 69 と図 71 は粘土紐を規則的に調整し、波状口縁のように見える。

直状口縁は薄手で、口唇に前者と同じように粘土紐を加え、玉縁状（図 73・74）をなす。

b：やや泥質で口縁部は舌状で外反するもの（図 75～77）、口縁部は方形で直状を呈するもの（図 78～79）がある。

Ⅴ類（浜屋原式土器）

図 80 は器厚がほぼ均一で、口縁部は平坦をなし直状、内外ともユビで調整するものである。底部は欠落しているが、乳房状尖底と考えられるもので、浜屋原式土器に酷似する。出土は 210 点得られ、全体の約 2%と少ない。地区別には B 区 76 点（36%）、A 区 40 点（19%）の出土である。図 80 は口径 27.2cm の復元可能な土器で、I 18 V b 層（X:928.285、Y:25735.964、Z:3.050cm（第 10 図））で点取りされ、同じ場所からは第 22 図 39 の底部が出土している。

ほかに図 19 の肥厚口縁や図 125 のⅧ類の胴部も共伴している。やや不安定な層かもしれない。

Ⅵ類（大当原式土器）

Ⅵ類は内外器面に積痕を明瞭に残す、器厚が均一でないもので、粗隆帯文をベースとする大当原式土器の範疇に含まれる土器である。出土量は最も多く 5684 点得られ、全体の 56%を占める。地区別の出土をみると B 区で 3512 点（62%）、A 区 1003 点（17%）、C 区 634 点（11%）と B 区に集中する。Ⅷ類（くびれ平底系土器）が海岸側に広がるのに対し、本類は内陸側の方が出土量は多い。また、本品は第 11 表に示したように厚手と薄手があり、最大厚が 1.0cm 前後の厚手は 1975 点（34.7%）、最大厚が 0.7cm 前後の薄手は 3671 点（64.6%）と薄手の方が多い。厚手と薄手の地区別の出土割合はほぼ同じであるが、B 区では薄手が多い傾向を示し、D・E 区では厚手が多い傾向を示す。

器種をみるとミニチュア土器（図 81・82）、壺、深鉢・甕などがあり、後者の中には沈線文や鞍状凸帯の文様を施すものがある。出土量は多く器厚や口縁部形態により、細分が可能である。ここでは、a：ミニチュア土器、b：有文、c：無文にまとめ、深鉢・甕については口縁部形態でさらに分類した。

a：口縁部（図 81）と底部（図 82）の 2 点確認された。

図 81 は内彎口縁で口径 4.4cm、厚さ 0.5cm、胎土は後述に比べて泥質で、G18 II 層の出土。

図 82 は底径 1.6cm、小さめ底部で尖底か脚台の可能性が考えられる。器面調整、指圧痕が顕著で鉢形の底部の可能性のものもある。

b：沈線文と鞍状凸帯文がある。

・沈線文：ラフに曲線（図 83・84・86）や横線（図 85）を描くものである。

図 83 は逆「く」字状に内彎、図 85 は直状口縁で口縁部が膨らむ。総じて厚手で、泥質を呈する傾向が見られる。

・鞍状凸帯文：口縁部に鞍状の凸帯文を施すもので、凸帯文の幅は 1.1 ～ 1.5cm がある。

図 91 は口径 23.0cm を測り、鞍状凸帯文の施文位置がわかる資料である。器厚は薄く、4カ所施された可能性が高い。凸帯幅 1.1cm で図 87 と類似する。

図 88・89 は扁平の凸帯文でその幅は 1.2cm と前者に比べて広い。口唇部分も角を呈し、胎土は細かく、浜屋原式土器に類似する。全体に器厚は 5 ～ 6 cm と薄い。

図 90 も凸帯幅が 1.5cm と広く、扁平となる。

凸帯文を施すものは直状の口縁で砂質を呈し、薄手が多い。文様をみると凸帯幅が広くなるに従い、扁平になる傾向が見られる。

また、図 61 や図 104 は粘土粒を貼り付けたもので、鞍状凸帯文の名残と思われる。

c：有文でもふれたように 0.6cm 前後の薄手と 0.9cm 前後の厚手があり、地区別の出土状況は前述した通りである。胎土をみると厚手のものは泥質、薄手のものは砂質が多い傾向が見られる。

また、口縁部は直状、「く」字状に屈曲、内彎、外反するものがある。以下のように細分した。

・直状：器厚が 0.9cm 前後と厚く、このタイプの中では器厚が均一な方で、胎土は泥質に近い。図 92・図 93 は口縁部が舌状、図 95・96 は口縁部内面に膨らみを持つものである、粘土紐の積み幅も大きい。小堀原遺跡（2009・2012）に酷似するものがある。

・「く」字状に屈曲し内彎するもの：器厚は 0.9 ～ 1.1cm、粘土紐のつなぎ目が明瞭に残るものである。屈曲は図 94 → 図 97 → 図 98 と屈曲の度合いが強くなる。図 100 は屈曲する位置が下位に下がり一見、筒状をなす。推定口径は図 94 が 13.8cm、図 97 が 16.9cm、図 100 が 15.9cm と小振りである。

・「く」字状に屈曲して外反するもの：前者と同じく「く」字状に屈曲するが、口縁部で外反し、鉢状を呈するものである。

図 102 は他と異なり、外反してさらに内彎するが、全体の外反するものに近い。

・口縁部が直状を呈するもの：前者に比べて、器厚が 6 ～ 8cm と薄く、口縁部が直状を呈するものである（図 105・106・108 ～ 110）。

・内彎するもの：図 107 は薄手で口径 34.0cm を測る大ぶりの土器で、形状から浅鉢の可能性が考えられる。

・やや外反するもの：図 109 に器厚や胎土が類似するものである。口唇の形状で分けた。大方の器

第11表 II 群土器（Ⅵ・Ⅷ類）出土量

地区・層	分類	Ⅵ類			Ⅷ類			合計	地区別計
		厚手	薄手	—	砂	中	泥		
A	I		3		2			5	1122
	II	92	134		3	21	4	254	
	III	35	79		3	6		123	
	V b (攪乱)	65	132		4	18	1	220	
	V b	138	325		12	35	10	520	
B	I	1	1			3		5	4138
	II	92	257		51	28	12	440	
	III	546	1403	15	146	99	44	2253	
	V b (攪乱)	187	396		73	47	12	715	
	V b	244	362	7	57	45	9	724	
C	VI	1						1	1004
	II	34	49		11	23	24	141	
	III	37	54		24	21	20	156	
	V b (攪乱)	42	116	15	48	26	26	273	
	V b	99	188		52	80	15	434	
D	I	9	14		5	1	6	35	352
	II	80	27		5	38	12	162	
	III	4	3			2	7	16	
	V b (攪乱)	13	20		7	14	15	69	
	V b	50	13	1	1	3	1	69	
E	IV	103	30		173	152	1246	1704	2679
	V a	56	35		38	83	763	975	
不明	II	3	6				1	10	171
	V b	1	1					1	
	排土	28	16		5	11	55	115	
	表採・不明	16	7		7		15	45	
合計		1975	3671	38	728	756	2298	9466	
類別合計		5684			3782				

註 1：「排土」は調査時の排出した土。
 註 2：2.5cm 以下は不集計。

形は同じと思われる。口縁部は調整が丁寧でなく、一見、波状口縁にもとれる。

その他に穿孔したもの（図 107・109）があり、その位置は図 107 が口縁部より下 5cm、図 109 が下 3.5cm で、後者はその隣に未貫通の孔がある。いずれも口縁部より近いところにあり、孔の機能を示唆するものと思われる。

大きさをみると図 103 は推定口径が 22.5cm、図 107 が 34.0cm、図 108 が 27.5cm、図 109 は 30.0cm と大ぶりなもの、図 110 の口径 :20.8cm、高さ 16.0cm、底径 3.8cm と小降りなものがある。底部は平底に近い形を呈する。

Ⅶ類（型式不明－b）

胴部の器厚が 0.6cm 前後と均一で、Ⅵ類に比べて、積痕は明瞭でなく、内外面の器面調性も丁寧で、焼成もよいもので、Ⅷ類に近いが口縁部が主に有段、文様を有することなどからⅧ類とは区別した。B 区 63 点（77%）、C 区 4 点（5%）の出土で、とそのほとんどは B 区の出土である。a：有文、b：肥厚（有段）、c：肥厚（有段）＋有文の 3 つに細分される。

a：図 112 は口縁部が直状の鉢形で、口唇と口縁部に文様を施すものである。口縁部は幅 5cm 前後の文様帯をなし、口唇に刻目文、口縁部は凸帯文＋刻目文を「Ω」字状と横位に配し、その間に沈線文を鋸歯状に施す。沈線文は 2 本 1 組で、一見、凸帯文を略化した様に思われる。「Ω」字状の凸帯文は口唇より、若干突出する。H18 の標高 3.335m の出土（第10図）である。

b：図 113 は有段幅 5.0cm、一見、天久式（註）に近いが、器厚が 0.4～0.5cm と均一薄手で、砂泥質で焼成が良く、裏面に刷毛目調整が明瞭施されている。混和材に角閃石、輝石などの鉱物を含むもので、同じような鉱物を混入するⅤ類に比べて、泥質が強い。E15、V b 攪乱（0350SZ）で標高 2.692m の出土。（第10図）。

c：b と同じく、口縁部は段をなすが、文様を有し、胎土も若干異なるため、分けて扱った。文様は凸帯文（図 117・118）と細沈線文（図 114～116）がある。

図 118 の有段幅は 5.2cm で、図 113 と同じある。図 117 と 118 は「Ω」字状の凸帯文で、図 112 のような刻目文は施されない。図 114～116 は細沈線文が施されている。図 115・116 は図 118 と胎土も同じで、同一個体と考えられる。図 114 は前述と同様な沈線文を施すが、沈線が若干太く、焼成が良くもよいことから別の個体と考える。

Ⅷ類（くびれ平底系土器）

Ⅵ類より小振りで、既存のアカジャンガー式土器やフェンサ下層式土器などのくびれ平底系土器の範疇に含まれるものである。両型式への区別は明瞭でないため、Ⅷ類としてまとめた。器厚が平均 0.6cm 前後と均一で、混入物も少なく、焼成も良く、器面調整は他に比べてよく、中には内面に刷毛による調整が見られる。3782 点得られ、B 区 626（17%）、C 区 370 点（10%）得られ、Ⅵ類がやや内陸に広がるのに対し、本類は海側に広がる傾向が見られる（第9図）。さらに砂質と泥質のその中間の細分を試み、その結果、砂質は 728 点（19.2%）、中間 756 点（20%）、泥質 2298 点（60.8%）と泥質が主体をなした。地区別にみると砂質は B 区で 45%、E 区で 28%、泥質は E 区で 2009 点（87%）とⅧ類も胎土により地区別に異なることが明らかになった。

主なものを図示し、観察一覧を示す。

文様を施したものは図 119 と図 120 で、前者が沈線文、後者が凸帯文である。

図 119 は口唇に刻目、口縁部に幅広沈線文を鋸歯状、その下部に薄手の凸帯文に刻目を施すもので、久志貝塚（註）、シマシヤーマ貝塚（註）などで類似の文様が見られる。

図 120 は凸帯文に刻目文を施し、逆「U」字状に貼り付けるものである。アカジャンガー式土器

第12表-1 I群・II群土器観察一覧

第 四 図 版	図 番 号	大 分 類	中 分 類	小 分 類	部 位	特 徴	法 量		砂 泥 質	粒 度 (mm) 量	混 和 材					器 面 調 整		色 調		出 土 地		
							口 径 底 器 高 (cm)	器 厚 (mm) 重 量 (g)			石 英	火 山 ガ ラ ス	輝 石 角 閃 石	赤 粒	白 粒	砂 粒	そ の 他	外 面 内 面	外 面 内 面		外 面 内 面	外 面 内 面
第 20 図 版 9	1	I群	I類	a	胴部	凸帯文(幅3mm)円弧+円(1.1cm)	— —	9 均一 25.33	砂質	粗粒 多量	○	○					内外:ユビナデ丁寧	外:黒褐色 内:暗茶褐色	E8 II層 台 985			
	2	I群	I類	b	胴部	列点文(横位、3条)	— —	5 均一 9.21	砂質	粗粒 多量	○	△		○			外:条痕(横) 内:条痕(斜)	外:暗茶褐色 内:暗灰褐色	D12 VI層 台 4894			
	3	I群	I類	b	胴部	細目調整痕 内面炭付着(14C4450+40B.P.)	— —	7~8 均一 90.36	砂質	0.5・1.0 多量			◎	△	○		外:細目 内:ユビナデ丁寧	外:明橙褐色 内:暗黒褐色(煤付着)	D12 VI層 標高 1.16 m 台 14719			
	4	I群	I類	b	胴部	摩耗	— —	5~6 均一 19	砂質	粗粒 多量	○	○				◎ 雲+ナ	内外:剥離摩耗	内外:黒褐色	H16 V b層(砂③) X:35941.045 Y:25731.333 Z:2.564 取 118土ミ 台 118			
	5	I群	II類	a	口縁部	口断:角(疑似)、傾:直状	— —	12 均一 15.64	砂質	粗粒 多量	○	△						外:条痕(斜) 内:条痕(横)	外:暗赤褐色 内:暗茶褐色	H17 VI層台 734		
	6	I群	II類	a	胴部	刺突文(斜位、3条)	— —	12 均一 7.3	砂質	粗粒 多量	○	○				◎ 岩片	外:条痕(斜) 内:条痕(横)	外:暗赤褐色 内:暗黄褐色	H18 V b層(包砂) 台 4908			
	7	I群	II類	a	胴部	刺突文 貝殻条痕	— —	12 均一 27.6	砂質	粗粒 多量	◎	△				○ 雲	外:条痕(縦) 内:条痕(横)	内外:明茶褐色	D12 VI層 台 4894			
	8	I群	II類	a	胴部	沈線文? 貝殻条痕	— —	9 均一 30.92	砂質	粗粒 やや多量	○	△				○ 岩片	外:条痕(斜) 内:条痕(斜)	内外:暗茶褐色	C12 VI層 台 14708			
	9	I群	II類	a	胴部	摩耗 沈線文(斜位・4本) 貝殻条痕	— —	9 均一 24	砂質	粗粒・小粒 やや多量	○		△		○		外:条痕(斜) 内:剥落	外:暗黄褐色 内:明黄褐色	H16 V b層(砂②) X:35936.682 Y:25730.589 Z:2.539 取 11土ミ 台 11			
	10	I群	II類	b	底部付近 (丸か尖)	積痕	— —	8 均一 19.19	砂質	1.0 多量	△				○ チヤ	外:条痕(斜) 内:剥落	外:暗赤褐色 内:暗茶褐色	D12 VI層 台 4894				
	11	I群	II類	b	底部	平底	10.0 —	底厚 10 36.48	砂質	粗 多量	◎				○ チヤ	外:ユビナデ 内:条痕(横)	内外:暗赤褐色	表採排土中 台 5109				
	12	I群	II類	c	胴部	貝殻文(横位、2条)	— —	11 均一 1.19	砂質	粗粒 多量	○	○					内外:剥落	内外:明黄褐色	H18 V b層(包砂) 台 4908			
	13	I群	III類	a	口縁部	口断:丸、傾:「<」字状湾曲、直状 沈線文(鋸歯状、4条)	— —	5.5 均一 3.87	砂質	粗粒 多量					○ チヤ	内外:ユビナデ丁寧	内外:赤褐色	H18 V b層(包砂) 台 4908				
	14	I群	III類	a	口縁部	口断:舌、傾:直状 口唇-刻目文 沈線文(縦位、5条)	— —	10 均一 7.69	砂質	1.0 多量	○				○ チヤ	内外:ユビナデ丁寧	内外:明赤褐色	H18 V b層(包砂) 台 4908				
	15	I群	III類	a	口縁部	口断:丸、傾:内傾し、外反 凸帯文+刻目	— —	6~7 均一 15	砂質	粗粒 多量	○	△			○		内外:ユビナデ丁寧	内外:暗茶褐色	表採 台 4082			
	16	I群	III類	a	口縁部	口断:丸 内唇-刺突文(横位)、施文(縦) 外面-刺突文(横位)、施文(横)	— —	6 均一 6.3	泥質	粗粒 多量			◎			アバタ	内外:ユビナデ	内外:明赤褐色灰 褐色	H18 V b層(砂③) X:35930.335 Y:25735.039 Z:2.223 取 257土ミ 台 257			
	17	I群	III類	a	胴部	沈線文(縦位、3条)	— —	7 均一 46.32	砂質	0.5 多量	○	△					内外:剥落	外:明茶褐色 内:暗灰褐色	D12 VI層 台 4894			
	18	I群	IV類	-	口縁部	口断:丸、傾:直状 沈線文(羽状、3組) 嘉徳II式	— —	6 均一 12.3	砂質	1.0 多量	○			△	○ 雲	外:ユビナデ丁寧 内:ハケナデ丁寧(横)	内外:暗黄褐色	H17 VI層 台 734				
	19	I群	V類	-	口縁部	口断:三角形(肥厚)、傾:直状	— —	8~9 均一 12	砂質	粗粒 多量	○						内外:剥落	内外:明赤褐色	I18 V b層(砂1) 台 1985			
第 21 図 版 10	20	II群	I類	a	胴部	凸帯文(横位・3条)(幅0.4cm) 断:三角	— —	10 均一 11.84	砂質	粗多	○	△	△		◎ 雲	外:ユビナデ丁寧 内:剥落	外:明茶褐色 内:明灰褐色	H16 III層 台 996				
	21	II群	I類	a	胴部	凸帯文(横位・1条)(幅0.6cm) 断:丸	— —	9 均一 18.91	砂質	粗多	○	○	△	○	◎ 雲	外:ハケナデ丁寧 内:剥落	外:明茶褐色 内:明黄褐色	E15 V b層 台 710				
	22	II群	I類	a	胴部	凸帯文(弧状・2条)(幅0.6cm) 断:三角	— —	9 均一 24.12	砂泥質	1.0 少			△	△		外:ハケナデ丁寧 内:ユビナデ丁寧(横)	内外:明茶褐色	D・G10~12 II層 0008SF 東側掘乱 (ビーチロック道) 台 4539				
	23	II群	I類	a	胴部		— —	6 均一 49.2	砂質	細多			○	△			外:ユビナデ丁寧 内:指頭痕	外:橙褐色 内:灰~橙褐色	H18 V b層(砂③) X:35932.067 Y:25732.067 Z:2.598 取 160土ミ 台 160			
	24	II群	I類	a	胴部	外面:黒斑	— —	9~11 均一 32.4	砂質	粗中	○		△	○			外:ユビナデ丁寧 内:指頭痕	外:赤~黒褐色 内:明灰褐色	D18 V b層 4424SK 台 4612			
	25	II群	I類	b	胴部	外耳(弧状)	— —	9 均一 44.15	砂質	粗多			△	○	△		外:ユビナデ丁寧 内:ユビナデ丁寧	外:暗赤褐色 内:明灰褐色	D16 V b層力 0350SZ 台 1039			
	26	II群	I類	c	底部	平底 底面:砂粒付着	7.5 —	12 均一 31.91	砂質	細少				△	△		内外:ユビナデ	外:明赤褐色 内:暗黒~灰褐色	I17 II層 X:35930.498 Y:25735.142 Z:2.395 取 206土ミ 台 206			
	27	II群	I類	c	底部	上げ底状	8.6 —	6 均一 47.1	砂質	粗多					◎		内外:ユビナデ	外:明灰橙褐色 内:黒褐色	G18 V b層 1163SS 台 1996			
	28	II群	I類	d	壺胴部 (頸)	外面:光沢が顕著	— —	6~9 均一 26	砂質	粗多良	○	○				◎ 雲	外:ユビナデ丁寧(光沢) 内:ユビナデ雑	内外:暗黄褐色	D17 V b層 台 4665			
	29	II群	I類	d	壺胴部 (頸)	ラッパ状に開く	— —	8~10 均一 21	砂泥質	細少			△	△			外:ユビナデ丁寧 内:ユビナデ雑	外:明橙褐色 内:明灰褐色	I16 V b層力 0350SZ 台 960			
	30	II群	I類	d	壺口縁部	口断:舌、傾:内傾	6.4 —	9 均一 24.75	砂泥質	細少		△	△				外:ユビナデ丁寧 内:ユビナデ雑	内外:明赤褐色	C18 V b層 台 4660			
	31	II群	I類	d	壺口縁部	口断:舌、傾:内傾	5.0 —	8~10 やや不均一 9.12	砂質	粗少		△			△		内外:ユビナデ	内外:明茶褐色	G18 III層 台 653			
	32	II群	I類	e	口縁部	口断:舌、傾:直状 凸帯文(幅1.0cm)+刻目、口縁部と 胴上部に2条、部分。その間に沈線 文(横位+斜位)	21.4 —	9~10 — 163	砂質	粗多	△	△	△	△			外:ユビナデ雑(縦、 横) 内:ユビナデ雑(縦、 横)	外:暗茶褐色 内:明茶褐色	H17 V b層 X:35934.624 Y:25735.029 Z:3.002 取 288 台 4812			
	33	II群	I類	e	底部	脚台	8.8 —	10 やや均一 276	砂質	粗中			○	△	○		内外:ユビナデ丁寧	外:暗茶褐色 内:黒褐色	H17 V b層 X:35934.947 Y:25735.514 Z:3.062 取 283 台 4792			
	34	II群	I類	e	底部	脚台	3.1 —	24.9	砂泥質	粗 赤色粒 砂粒		◎		△	○		内外:ユビナデ	内外:明赤~橙褐 色	不明 II層 台 8			
	35	II群	I類	e	口縁部	口断:舌、傾:外反 沈線文(波状)深	20.2 —	7 均一 68.46	砂質	粗中	○	○			○		外:指頭痕(胴) 内:指頭痕(口・胴)	外:暗灰~赤褐色 内:暗茶~赤褐色	D・G10~12 II層 0008SF (ビーチロック道) 台 4655			

凡例 (◎)=非常に多い ○=多い △=少ない △=僅少

第12表-2 I群・II群土器観察一覧

第21図・ 版10	図番号	大分類	中分類	小分類	部位	特徴	量法		砂泥質	粒度 (mm)量	混和材					器面調整		色調		出土地
							口径 底径高 (cm)	器厚 (mm) 器重量 (g)			石英	火山 ガラス	燧石 角閃石	赤粒	白粒	砂粒	その他	外面 内面	外面 内面	
第21図・ 版10	36	II群	I類	f	底部	脚台、断(丸)	7.8	6.89	砂質	細多		○				△	内外:ユビナデ丁寧	外:明赤褐色 内:明灰褐色	H17 V b層(砂③) X:35937.201 Y:25732.933 Z:2.766 取119土ミ 台119	
	37	II群	I類	f	壺口縁部	口断:丸(肥厚、幅1.4cm) 傾:直状(短頭)	6.6	6~7 均一	砂質	細少		△	△				内外:ハケナデ丁寧	外:明赤褐色 内:明灰褐色	不明 表採 台5109	
	38	II群	I類	f	胴部	細沈線文(縦位)	—	6~8 均一	砂質	細多			○	○	△		外:ハケナデ丁寧 内:剥落	外:明赤褐色 内:明灰褐色	F18 II層 台446	
第22図 版11	39	II群	II類	—	口縁部~ 底部	口断:方形、傾:外反 口唇-沈線文 口縁部と胴上部-刺突文(又状、横位 +斜位) 頸部-凸帯文+刻目文(「Ω」字状) +押し引き文 底部:尖底(丸みを呈する)	24.6 2.4 26.3	5~7 均一	砂質	0.5・粗多		△	○	○			内外:ユビナデ丁寧	外:暗茶褐色 内:暗茶褐色	I18 V b層力 0554P+ 0555P 台1091+I11818 V b層(砂1) X:35928.285 Y:25735.964 Z:3.050 取67 台1982+1983 G17 V b層 台753	
	40	II群	II類	—	口縁部	口断:方形、傾:外反(強) 口唇-刻目文(深)、外面-刻目文(浅)	—	5 均一	砂質	0.5		○					内外:剥落	内外:暗茶褐色	H18 III層 台617	
	41	II群	II類	—	胴部	外面-刻目文(深)、幅広沈線文(不定)	—	5~6 均一	砂質	1.0 中		○	○		△		内外:ユビナデ丁寧	外:明赤褐色 内:明灰褐色	H17 II層 台256	
	42	II群	II類	—	胴部	外面-刻目文(深)、幅広沈線文(不定)	—	7 均一	砂質	1.0 中		○	○				内外:ユビナデ丁寧	外:暗茶褐色 内:明灰褐色	H17 II層 台256	
	43	II群	II類	—	壺 胴部	外面-幅広沈線文(深)、刻目文(幅 0.6cm、又状)、(横位)	—	5~9 均一	砂質	0.5 多		◎	△				内外:ユビナデ丁寧	内外:茶褐色	H17 III層 台930	
	44	II群	II類	—	口縁部~ 底部	口断:角、傾:外反(弱) 口唇-刻目文 外面-幅広沈線文(4条横位+斜位)、 刻目文(幅0.4cm)	28.6 2.2 31.2	6~7 均一	砂質	1.0 多			△		○		外:ユビナデ丁寧 内:ユビナデ雑	外:暗茶褐色 内:明茶褐色	K17 V b層(砂・砂2) X:35925.070 Y:25724.456 Z:2.997 取63 台1943+2005 K17 V b層力 0084SK 台1392	
	45	II群	II類	—	胴部	外面-凸帯文(幅1.0cm)+刻目(幅 0.4cm)、幅広沈線文(幅0.4cm)	—	7 均一	砂質	細多		○		△	△		外:ハケナデ丁寧 内:ユビナデ丁寧	外:暗茶褐色 内:明茶褐色	H17 III層 台930	
	46	II群	II類	—	口縁部	口断:角、傾:直状 口唇-刺突文 外面-細沈線文(四角形)	—	6~7 均一	砂泥質	1.0 中		△				△粘	内外:ユビナデ丁寧	外:暗灰褐色 内:明赤褐色	K16 V b層(砂2) 台2032	
	47	II群	II類	—	口縁部	口断:丸、傾:外反 外面-沈線文(横位)	—	9 均一	泥質	1.0 少			○		△		内外:ユビナデ丁寧	外:暗黄 内:明灰褐色	I18 V b層(砂③) X:35927.944 Y:25735.675 Z:2.338 取74土ミ 台74	
	48	II群	II類	—	口縁部	口断:角、傾:外反(弱) 口唇-刻目文(密) 口縁部-幅広沈線文(横位) 頸部-凸帯文(横位)部分	29.0	6 均一	砂質	多			○				内外:ハケナデ丁寧	内外:暗茶	K17 V b層(砂) X:35925.070 Y:25724.456 Z:2.997 取63 台1943+285	
	49	II群	II類	—	口縁部	口断:玉縁、傾:直状(内彎気味) 口唇-刺突文 外面-刺突文(縦位+横位)	38.5	7 均一	砂質	0.5 少		○	△	△			内外:指頭痕	外:明黒~黄褐色 内:黒褐色	J18 V b層力 X:35927.209 Y:25730.760 Z:2.929 取51 1097P 台1619	
50	II群	II類	—	口縁部	口断:丸、傾:外反(弱) 口唇-刻目文(深い)	—	7 均一	砂泥質	1.0 中			○		△		内外:指頭痕	外:暗茶褐色 内:明灰褐色	I17 V b層力 0410SZ 台1569		
51	II群	II類	—	口縁部	口断:丸、傾:外反(弱) 口唇-刻目文(深い)規則性	20.2	5 均一	砂泥質	1.0 少		△		○			内外:指頭痕	外:暗灰褐色 内:暗黒~黄褐色	H17 III層 台918		
52	II群	II類	—	口縁部	口断:丸、傾:外反(弱) 口唇-刻目文、間隔0.4~0.7cmと不 揃外面-幅広沈線文(階段状に夕口入 孔-径0.4cm、両面穿孔、焼いたあと	21.4	4 均一	砂泥質	細少		△	○		△		内外:ユビナデ丁寧	外:暗茶褐色 内:明茶褐色	J17 V b層(砂) 台4682		
53	II群	II類	—	口縁部	口断:舌、傾:外反 口唇-刻目文	21.3	5 均一	砂泥質	細少			○		△		内外:指頭痕	外:明茶褐色 内:明赤褐色	J18 V b層力 0159P 台1229 E18 V b層力 0792P 台1236 J18 V b層(砂) X:35925.474 Y:25729.963 Z:3.064 取48 台1616		
54	II群	II類	—	口縁部?	口断:舌、傾:直状 外面-沈線文(縦書、2段)	—	6 均一	粗多	○			○	○	粘	内外:ユビナデ丁寧	内外:赤褐色	I17 III層 台696			
55	II群	II類	—	口縁部	口断:丸、傾:内傾 口唇-刻目文(規則的)	11.4	6 均一	砂泥質	細粒 中			△	○			内外:ユビナデ丁寧	内外:暗茶褐色	H17 III層 台918		
56	II群	III類	a	口縁部	口断:玉縁、傾:外反(弱)	25.8	8 均一	砂質	粗粒多		○	○				内外:ユビナデ丁寧	外:暗灰褐色 内:暗赤褐色	D18 V b層 台4663		
57	II群	II類	—	胴部	傾:内傾 外面-沈線文(波状)	—	8 均一	砂質	粗粒多		○	○				外:ユビナデ丁寧 内:指頭痕	内外:暗茶褐色	H16 V b層(砂③) 台675		
58	II群	II類	—	胴部	「く」字に湾曲 外面-刺突文(横位)	—	7 不均一	砂質	0.5 多		○	○	○			外:ユビナデ(斜) 内:ハラナデ(横)	内外:暗赤褐色	H16 III層 台996		
59	II群	II類	—	胴部	「く」字に湾曲 外面-沈線文・点刻(縦位)	—	11 不均一	砂泥質	0.5 中		○					外:ハラナデ丁寧 内:ハケナデ雑(横)	内外:明赤褐色赤	D18 V b層 台885		
60	II群	III類	b	口縁部	口断:舌、傾:外反(強) 外面-沈線文(縦書、2段)	—	11 不均一	砂泥質	粗粒少				△			外:ハラナデ丁寧 内:ユビナデ雑	外:明黄~黒褐色 内:明橙~黄褐色	F16 V b層力 0350SZ 台941		
61	II群	III類	b	口縁部?	口断:舌、傾:外反(強) 有孔内層に粘土粒貼り付け凸帯文か?	—	10 均一	砂泥質	0.5 多			○	○			外:ハケナデ(縦) 内:ハケナデ(斜)	内外:暗茶褐色	G16 V b層 台439		
62	II群	III類	c	口縁部	口断:丸、傾:直状	24.6	8~9 均一	砂質	1.0 多		○		○	○		外:ユビナデ丁寧 内:剥落	外:暗茶~赤褐色 内:暗赤褐色	C18 V b層 X:35949.757 Y:25753.644 Z:3.638 取301 台4514		
63	II群	III類	b	口縁部	口断:丸、傾:外反	—	9 均一	砂泥質	1.0・粗多 アバタ		○	△		○		外:ユビナデ丁寧 内:ハケナデ(横)	内外:明茶褐色(サ ンド)	D・G10~12 II層 0008SF 東側掘削 (ピーチロック道)台4539		
64	II群	III類	c	口縁部	口断:方形、傾:直状	—	8~9 均一	砂泥質	0.5 中			△		△		外:ハケナデ 内:ユビナデ	外:暗黄褐色 内:暗黄~灰褐色	D・G10~12 II層 0008SF(ピーチロック道) 台4655		
65	II群	III類	c	口縁部	口断:方形、傾:直状、胴部張る	38.0	11 均一	砂泥質	粗粒少		△	△	△	△		外:ユビナデ丁寧 内:ユビナデ(雑)	内外:暗茶褐色	D17 V b層力 1061SK 台1208		
66	II群	III類	c	胴部	口断:方形、傾:直状	—	10 均一	砂泥質	粗粒少		△		△	△		外:ハケナデ雑 内:ハケナデ丁寧(横)	外:暗赤~灰褐色 内:暗茶褐色	C16 II層 台4053		
第25図・ 版13	67	II群	IV類	a	口縁部	口断:逆「L」字状、貼り付け、口唇 ややむむ、傾:直状、内彎気味	—	6~7 均一	砂泥質	0.5 少		△			△		内外:指頭痕	内外:明橙褐色	F・G16・17 V b層 0656SS 台1065	

凡例 (◎=非常に多い) ○=多い △=少ない ∟=僅少)

第12表-3 I群・II群土器観察一覧

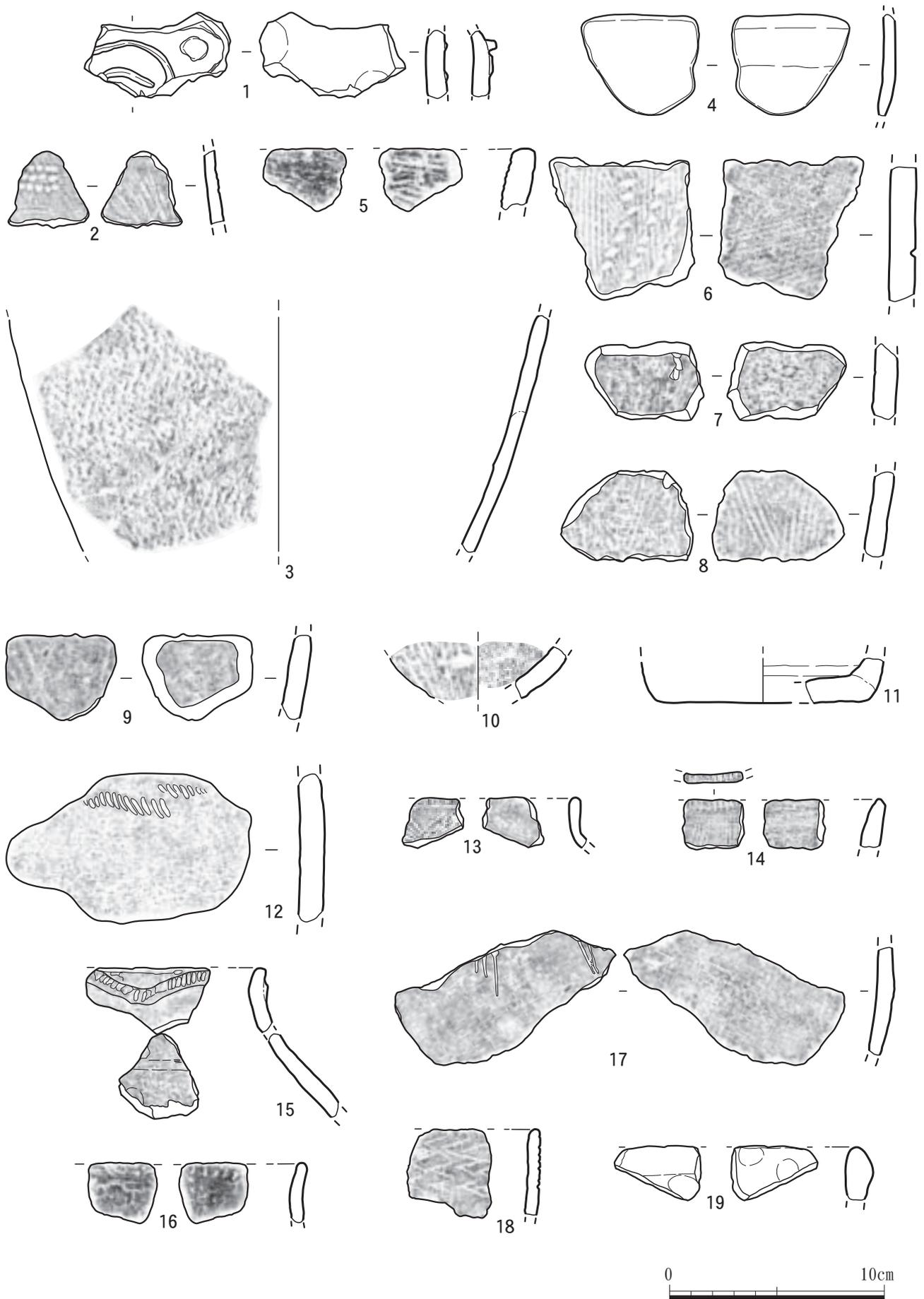
第25 版 14	図 番 号	大 分 類	中 分 類	小 分 類	部 位	特 徴	法量		砂 泥 質	粒 度 (mm)	混和材					器面調整		色調		出 土 地		
							口 径 底 径 高 (cm)	器 厚 (mm) 重 量 (g)			石 英	火 山 石 灰	輝 石 角 閃 石	赤 粒	白 粒	砂 粒	そ の 他	外 面 内 面	外 面 内 面			
第25 版 14	68	II群	IV類	a	口縁部	口断:逆「L」字状、傾:直状	— —	6 均一 20.69	砂質	粗多	○					内外:ユビナデ丁寧	内外:明橙褐色	K17 V b層(砂2) 台2005				
	69	II群	IV類	a	口縁部	口断:方形(幅0.8cm)、傾:直状 口唇:刻目文(押し引き状)外面一肥厚下に窪み、やや規則性があり、文様のようにも見える	— —	4~5 均一 20.63	砂泥質	1.0中	○					内外:指頭痕	外:明灰褐色 内:明橙褐色	I17 V b層(砂) 台1457				
	70	II群	IV類	a	口縁部	口断:角、傾:直状 口唇:幅広沈線文	19.6 —	5 均一 28.91	砂質	0.5中	△	△	△	△	外:ヘラナデ丁寧(横) 内:指頭痕	外:暗茶~橙褐色 内:暗灰~茶褐色	H17 III層 台930					
	71	II群	IV類	a	口縁部	口断:角、傾:直状、「く」字状 口唇:ユビナデ、規則的、文様?	22.0 —	5~6 均一 50.12	砂質	1.0多	○				外:指頭痕(縦) 内:ヘラナデ(横)	外:明茶褐色 内:明灰褐色	I17 III層 台374					
	72	II群	IV類	a	口縁部	口断:角、厚0.8cm、傾:直状 有孔0.4cm、内外面より穿孔。	— —	5 均一 14.37	砂質	0.5少	○				外:ユビナデ丁寧 内:ハケナデ(横)	外:明茶褐色 内:明橙褐色	K17 V b層力 0108P 台1698					
	73	II群	IV類	a	口縁部	口断:玉縁、傾:直状	— —	4~5 均一 9.08	砂質	粗中	○					内外:指頭痕	外:暗茶褐色 内:暗灰褐色	H18 III層 台732				
	74	II群	IV類	a	口縁部	口断:玉縁、傾:直状	— —	3~4 均一 10.4	砂質	粗多	○					内外:指頭痕	内外:茶褐色	I18 V b層(砂①) 台4				
	75	II群	IV類	b	口縁部	口断:舌、傾:口唇外反(弱)	— —	7 均一 43.64	泥質	0.5少		△	△			内外:指頭痕	外:明茶褐色 内:明橙~黄褐色	K16 V b層(砂2) 台2032				
	76	II群	IV類	b	薄口縁部	口断:舌、傾:外反	— —	6~7 ほぼ均一 23.34	砂泥質	0.1少			△			内外:指頭痕	外:明茶褐色 内:明茶褐色	I18 III層 台317				
	77	II群	IV類	b	口縁部	口断:舌、傾:口唇外反(弱) ヤドカリ痕	— —	7 均一 9.13	砂質	粗多	○			△		内外:剥落	内外:暗赤褐色	H18 III層 台617				
	78	II群	IV類	b	口縁部	口断:方形(肥厚)、傾:直状	— —	7 均一 11.48	砂泥質	粗中		△	○	△		内外:ユビナデ丁寧	外:明茶褐色 内:暗灰褐色	I16 II層 台181				
	79	II群	IV類	b	口縁部	口断:方形(肥厚幅1.2cm)、傾:直状	— —	5 均一 15	砂泥質	1.0少		△	△			外:ユビナデ 内:指頭痕	内外:暗茶褐色	J17 V b層 台270				
	第26 版 15	80	II群	V類	—	口縁部~胴部	口断:丸、傾:直状	27.2 2.5 23.4	7~8 均一	砂質	0.5多		○	○		外:指頭痕(斜) 内:ユビナデ	外:暗灰~赤褐色 内:明灰~茶褐色	I18 V b層(砂1) X:35928.285 Y:25735.964 Z:3.050 取67 台1982-1985				
		81	II群	VI類	a	口縁部	口断:丸、傾:内彎	4.4 —	5 均一 4.14	砂質	0.5少		○	△		内外:ユビナデ	内外:暗赤褐色	G18 II層 台387				
82		II群	VI類	a	底部	尖底?	— —	5 やや均一 33.66	砂泥質	細少	△		△	△	内外:ユビナデ	内外:茶褐色	F・G16.17 V b層 0656SS 台1065					
83		II群	VI類	b	厚口縁部?	口断:舌、傾:「く」字状内彎 沈線文(斜位+縦位、不定)	— —	7~10 不均一 37.76	砂泥質	細少	○		○		外:ユビナデ丁寧 内:ハケナデ丁寧(横)	内外:赤褐色 内部暗灰褐色	I18 V b層(砂③) X:3593.123 Y:25733.437 Z:2.251 取241 土ミ 台241					
84		II群	VI類	b	厚口縁部	口断:舌、傾:直状 口唇:刻目(不定) 外面:沈線文(波状、不定)	— —	8 不揃 18.86	砂泥質	粗少		△		△	外:ユビナデ丁寧 内:ハケナデ	内外:明褐色	G17 III層 台886					
85		II群	VI類	b	厚口縁部	口断:丸、傾:直状 外面:沈線文(横位、不定)	— —	8~9 不揃 87.84	泥質	細少	△	△	○		内外:ハケナデ丁寧 (横)	内外:暗黄褐色	D17 V b層 台888					
86		II群	VI類	b	胴部	沈線文(曲状、不定)	— —	不揃 不均一 15.86	砂泥質	1.0少			○		外:指頭痕・ハケナデ 内:指頭痕	外:暗褐色 内:暗黄褐色	F17 V b層 台5009					
87		II群	VI類	b	薄口縁部	口断:舌、傾:内彎 鞍状凸帯文(幅1.2cm)	— —	7~8 均一 8	砂質	粗0.5少			○	△	内外:ユビナデ雑	外:明赤褐色 内:明黄褐色	F18 III層 台555					
88		II群	VI類	b	薄口縁部	口断:丸、傾:外反(弱) 鞍状凸帯文(幅1.2cm)	— —	5 均一 10.75	砂質	粗少		○	△		外:ユビナデ 内:指頭痕	内外:暗灰褐色	H17 III層 台930					
89		II群	VI類	b	薄口縁部	口断:丸、傾:内彎(弱) 鞍状凸帯文(幅1.3cm)	— —	6 均一 34.42	砂質	細中		○	△		内外:ユビナデ丁寧	内外:暗茶褐色	H17 II層 台333					
90		II群	VI類	b	薄口縁部	口断:角、傾:直状 鞍状凸帯文(幅1.5cm)	— —	6~7 均一 7	砂質	1.0中		○		○	内外:ユビナデ丁寧	内外:暗茶褐色	F18 III層 台842					
91		II群	VI類	b	薄口縁部	口断:丸、傾:内彎 鞍状凸帯文(幅1.1cm)	23.0 —	8~9 やや不均一 73.61	砂質	中中		△	○	○	外:ユビナデ雑(縦mm) 内:ユビナデ・ヘラケ ズリ雑(縦mm)	内外:明赤褐色	I18 V b層(砂②) 台671					
92		II群	VI類	c	厚口縁部	口断:丸、傾:直状	— —	8~11 不揃 44.19	砂質	0.5多	△	△	○		外:ユビナデ丁寧 内:ユビナデ雑	外:暗茶褐色 内:暗赤褐色	E14 V b層 台824					
93		II群	VI類	c	口縁部	口断:舌や膨、傾:直状	— —	7~9 不揃 44.36	砂質	0.5中	△	△	○		内外:指頭痕	外:暗灰褐色 内:明茶褐色	E15 V b層 台534					
第27 版 16	94	II群	VI類	c	厚口縁部	口断:舌厚、傾:「く」字状(弱)	13.8 —	7 やや均一 31.8	砂泥質	0.5少	△	△	△		外:口縁部ユビナデ丁 寧、胴部指頭痕雑 内:ユビナデ(横)	外:暗赤~茶褐色 内:暗赤褐色	I17 V b層(砂1) 台2048					
	95	II群	VI類	c	厚口縁部~胴部	口断:丸厚、傾:直状	21.0 —	7~8 やや均一	砂質	1.0中	△		△	△	内外:指頭痕・ユビナ デ雑(胴・縦)	外:暗茶褐色 内:明茶褐色	H16 V b層力 0475P 台1926 H17 III層 台930 H16 III層 台996					
	96	II群	VI類	c	厚口縁部	口断:丸厚、傾:直状 小堀原タイプ(2009)	28.4 1.9 28.3	10~11 やや均一	砂泥質	1.0粗少			△	△	外:ヘラナデ雑 内:ハケナデ・指頭痕 雑(斜)	外:暗茶褐色 内:暗灰~茶褐色	G17 III層 台644					
	97	II群	VI類	c	厚口縁部	口断:舌厚、傾:「く」内彎 口唇突起、外細沈線文?(不定)	16.9 —	6~10 不均一 104	砂泥質	1.0中	△		△	△	外:ユビナデ(口丁寧・ 胴雑) 内:指頭痕雑	外:暗灰~茶褐色 内:暗黄~灰褐色	H17 V b層(包砂) X:35938.707 Y:25734.622 Z:3.022 取287 台4796					
	98	II群	VI類	c	厚口縁部	口断:舌、傾:「く」内彎 外一粗隆	19.0 —	11 不均一 29.82	砂泥質	粗中	△		△		外:ハケナデ丁寧 内:指頭痕・ハケナデ 雑	内外:明茶褐色	H16 V b層力 1050P 台1740					
	99	II群	VI類	c	厚胴部	外一粗隆	— —	5~9 不均一 52.87	砂泥質	粗少	△		△	△	△	外:指頭痕雑 内:ヘラケズリ雑	外:明赤褐色 内:明灰褐色	D・G10~12 II層 0008SF(ピーチロック道) 台4655				
	100	II群	VI類	c	厚口縁部	口断:舌厚、傾:内傾 外一粗隆	15.9 —	8~11 不均一 99.5	砂泥質	粗少	△		○	△	内外:指頭痕雑(縦)	外:明赤褐色 内:明褐色	D10 V b層力 0586SZ 台860					
	101	II群	VI類	c	厚口縁部	口断:舌厚、傾:外反 外一粗隆	— —	8~11 不均一 59.5	砂泥質	粗少	△		△		内外:指頭痕(縦) 内:指頭痕(縦+横)	内外:明赤褐色 (サント)	E15 V b層 台798					
102	II群	VI類	c	厚口縁部	口断:舌厚、傾:内彎 外一粗隆	— —	8 不均一 65.27	泥質	粗少			△		△	内外:指頭痕	外:明橙褐色内:暗 茶褐色	D・G10~12 II層 0008SF(ピーチロック道) 台4655					
第28 版 17	103	II群	VI類	c	薄口縁部	口断:角、傾:外反	22.5 —	6~10 均一 37	砂質	粗中	△		○	△	内外:口縁ハケナデ丁 寧、胴部ユビナデ雑	外:暗赤褐色 内:明赤褐色	H18 V b層(包砂) X:35931.617 Y:25736.901 Z:2.781 取298 台4917					

凡例 (◎=非常に多い) ○=多い △=少ない ◻=僅少

第12表-4 I群・II群土器観察一覧

第図版	図番号	大分類	中分類	小分類	部位	特徴	法量		砂泥質	粒度(mm)量	混和材					器面調整		色調		出土地					
							口径底径器高(cm)	器厚(mm)重量(g)			石英	火山ガラス	輝石角閃石	赤粒	白粒	砂粒	その他	外面 内面	外面 内面						
																							△	○	△
第28図版	104	II群	VI類	c	厚口縁部	口断:舌, 傾:「く」外反(弱) 0.9×1.0cmの貼り付け。沈線文(不規則)	—	8~9 不均一 74.11	砂質	1.0中		△		△	△		外:指頭痕 内:ハケナデ(斜)	外:明赤~灰褐色 内:暗灰褐色	E13 V b層 0586SZ 台 861						
	105	II群	VI類	c	薄口縁部	口断:丸, 傾:直状 口唇に粘土紐貼り付け明瞭	—	5~6 不均一 20.78	砂質	細中		△	△				内外:ユビナデ丁寧	内外:暗赤褐色	I16 V b層 0365P 台 1562						
	106	II群	VI類	c	薄口縁部	口断:丸, 傾:直状	—	5~8 やや不均一 24.75	泥質	0.5中		△			○	岩片	内外:指頭痕	外:明橙褐色 内:明灰褐色	H16 V b層 4318SK 台 5082						
	107	II群	VI類	c	薄口縁部	口断:舌, 傾:内彎(弱) 穿孔外径1.0、内径0.45cmで外→内	34.0	6 やや不均一 38.97	砂泥質	粗中		△					内外:指頭痕	内外:暗茶褐色	G18 III層 台 452						
	108	II群	VI類	c	薄口縁部	口断:丸, 傾:直状	27.5	6~8 やや不均一 50	砂質	1.0少							内外:指頭痕	外:暗茶褐色 内:暗茶~灰褐色	D17 V b層 台 569						
第29図版	109	II群	VI類	c	薄口縁部	口断:舌(肥厚)、傾:外反 孔a-外径1.0cm、内径0.4cm、外→内。 孔b-0.4cm、未貫通	30.0 28.1	7 不均一	砂質	1.0少						△	△	内外:指頭痕	外:暗灰褐色 内:暗茶褐色	H16 V b層 X:35940.307 Y:25733.034 Z:3.088 取 62 1050P 台 1796 H16 V b層(砂) X:35940.382 Y:25732.647 Z:3.041 取 64 台 1944					
	110	II群	VI類	c	薄口縁部~底部	口断:舌, 傾:直状	20.8 3.8 16.0	4 やや均一	砂質	粗中							○	○	内外:指頭痕	外:暗茶褐色 内:明茶褐色	D17 V b層 台 569				
	111	II群	VI類	c	薄口縁部	口断:舌, 傾:外反(弱) 不規則な波状口縁	—	6 やや不均一 98.11	砂泥質	細少							△	△	△	内外:ユビナデ丁寧	外:暗茶褐色 内:明茶褐色	G17 III層 台 886			
	112	II群	VI類	a	鉢口縁部	口断:丸, 傾:直状 口唇一刻目文 口縁-凸帯文(0.9cm)+刻目、「Q」 状、沈線文(鋸歯、斜位)の組み合わせ痕明瞭	30.2	5~9 (口唇)均一	砂質	粗中								○	△	外:ヘラナデ(縦) 内:ヘラナデ(斜)	外:暗黒~茶褐色 内:明茶褐色	H17 II層 台 333 H18 II層 台 334 H18 III層 X:35934.290 Y:25739.483 Z:3.335 取 7 台 634+738			
	113	II群	VI類	b	口縁部	口断:有段(5.0cm)、傾:直状	25.2	5 均一 108.8	砂泥質	1.0少							△	○	外:ハケナデ丁寧(縦・横) 内:ハケナデ(横)	外:暗黄褐色 内:暗黄	E15 V b層 X:35956.410 Y:25737.010 Z:2.692 取 15 0350SZ 台 831				
	114	II群	VI類	c	胴部	有段 沈線文(横、不定、深)	—	5~6 均一 13	砂泥質	0.5少								△		外:ナデユビナデ 内:指頭痕(縦)	外:黒褐色 内:明黄褐色	H18 V b層 0609P 台 1583			
	115	II群	VI類	c	口縁部	口断:丸(有段5cm)、 沈線文(細)横	—	5 均一 17	砂泥質	粗少							△	△	外:ユビナデ丁寧 内:指頭痕	内外:明橙褐色	H18 V b層 台 2008				
	116	II群	VI類	c	胴部	有段 沈線文(細)	—	6 均一 18.42	砂泥質	粗多								△	○	外:剥落 内:指頭痕丁寧	外:暗茶褐色 内:暗黄褐色	G18 III層 台 1217			
	117	II群	VI類	c	口縁部	口断:丸(有段?) 凸帯文(0.7cm)逆「Q」字状	—	9 均一 4	砂泥質	粗中								○	△	○	内外:ユビナデ丁寧	外:明灰褐色 内:明茶褐色	H18 V b層 0613P 台 1506		
	118	II群	VI類	c	口縁部	口断:角(有段5.2cm)、傾:外反(弱) 凸帯文(1.0cm)	—	5~7 均一 83.21	砂泥質	0.5少								△	△	○	内外:ユビナデ丁寧	外:明灰褐色 内:明橙褐色	H18 V b層 0612P 台 1548		
第30図版	119	II群	VII類	-	口縁部	口断:角, 傾:直状 口唇:刻目。幅広沈線文(鋸) + 凸帯文	—	5 均一 9.11	砂泥質	0.5少								△		外:ユビナデ丁寧 内:ハケナデ丁寧(横)	内外:暗黄褐色	D・G10~12 II層 0008SF 東側掘乱 (ビーチロック道)台 4539			
	120	II群	VII類	-	口縁部	口断:舌, 傾:直状 凸帯文(5) + 刻	—	6 均一 5.78	砂泥質	0.5少								○	△	内外:ユビナデ丁寧	外:明橙褐色 内:明赤褐色	H18 III層 台 732			
	121	II群	VII類	-	口縁部	口断:丸, 傾:直状	—	6 均一 8.36	泥質	粗少								△	△	外:ユビナデ(横) 内:ハケナデ(横)	外:明茶褐色 内:明灰茶	I18 III層 台 690			
	122	II群	VII類	-	口縁部	口断:三角(肥厚)、傾:外反(弱)	13.6	5~6 均一	泥質	1.0中									○		内外:ハケナデ(横)	外:明橙褐色 内:明灰褐色	I18 III層 台 690		
	123	II群	VII類	-	口縁部	口断:方形(肥厚)、傾:外反	12.4	5~6 均一 15.76	泥質	粗少									○		外:ユビナデ 内:ハケナデ丁寧(横) 口唇:ヘラナデ	内外:明橙褐色	I18 III層 台 690		
	124	II群	VII類	-	口縁部~底部	口断:角, 傾:外反	22.5 6.0 22.6	5 均一	砂質	細中									○	○	外:ユビナデ・ヘラナデ 丁寧(縦) 内:ハケナデ(横)	外:暗茶~灰褐色 内:明褐色	K18 V b層 0133P 台 1144 L18 V b層(砂) 台 3737+4080+4283 X:35920.234 Y:25726.084 Z:3.013 取 116 台 2455		
	125	II群	VII類	-	胴部	器面調整:外・内面とも丁寧	—	6 均一 96.15	泥質	細中									△	△	外:ハケナデ丁寧(斜) 内:ハケナデ丁寧	内外:明黄褐色	K17 V b層(砂2) 台 2011+2044H18 V b層(砂1) 台 1985		
	126	II群	VII類	-	壺口縁部	口断:角, 傾:外反 短頸	7.0	6 均一 30.11	泥質	1.0少									△		内外:ヤドカリ痕	内外:明橙褐色	J17 V b層 0121SK 台 1671		
	127	II群	VII類	-	口縁部	口断:角、有段(2.5cm)、傾:外反 口唇-沈線文?	—	6.5 均一 18.9	泥質	0.5少								△	△	内外:ユビナデ丁寧	内外:明赤褐色	不明 II層 台 8			
	128	II群	IX類	a	口縁部	口断:丸, 傾:直状 口唇-双状突起	—	6~7 均一 8.79	砂泥質	粗少									△		外:ユビナデ 内:ユビナデ丁寧	外:明赤褐色 内:明灰褐色	I18 V b層 0493P 台 1087		
第19図版	129	II群	IX類	a	口縁部	口断:舌(肥厚、2段)、傾:内彎	—	5~9 不均一 12.9	砂泥質	粗 0.5多								△	△	◎	内外:剥落	外:明赤褐色 内:明茶~赤褐色	I18 V b層 X:35928.713 Y:25732.906 Z:2.152 取 279土ミ 台 279		
	130	II群	IX類	b	口縁部	口断:丸, 傾:直状 双瘤 孔-径縦0.4cm、横0.5cm	—	7 均一 36.53	砂質	粗多									◎	△	△	外:ヘラナデ 内:ヘラナデ(横)	外:暗灰 内:暗茶	G17 III層 台 830	
	131	II群	IX類	b	口縁部	口断:丸, 傾:直状 縮(幅2.7)	—	6~7 均一 53	泥質	細少										△	○	外:ユビナデ丁寧 内:剥落	内外:明茶褐色	H18 V b層(砂) 台 4686	
	132	II群	IX類	b	胴部	瘤(2.1cm)	—	9 均一 17.75	砂泥質	粗多										◎	△	内外:ユビナデ	外:暗茶褐色 内:暗赤褐色	H16 III層 台 996	
	133	II群	IX類	b	胴部	瘤状突起	—	8 均一 52	砂泥質	粗多											◎	△	外:ユビナデ丁寧 内:ハケナデ(横)	外:暗茶褐色 内:暗灰褐色	H17 V b層 台 4793
	134	II群	IX類	c	壺口縁部	口断:丸, 傾:外反	8.7	6 均一 86.5	泥質	粗中											△	△	外:ユビナデ丁寧 内:ユビナデ	内外:明黄褐色 暗:黄	E11 I層(埋土) 0001SZ 台 27
	135	II群	IX類	c	壺胴部	肩部(なで肩) 沈線文、弧状、クロス	—	6~7 均一 51.93	泥質	粗少											◎	岩片	内外:ユビナデ 内:ハケナデ(斜)	内外:明黄褐色 暗:橙黄	D・G10~12 II層 0008SF(ビーチロック道) 台 4655
	136	II群	IX類	c	壺胴部	肩部(なで肩)	—	6~7 均一 25.96	泥質	粗少												○	外:ユビナデ丁寧 内:ヘラナデ	内外:明黄褐色 暗:橙黄	I16 II層 台 181

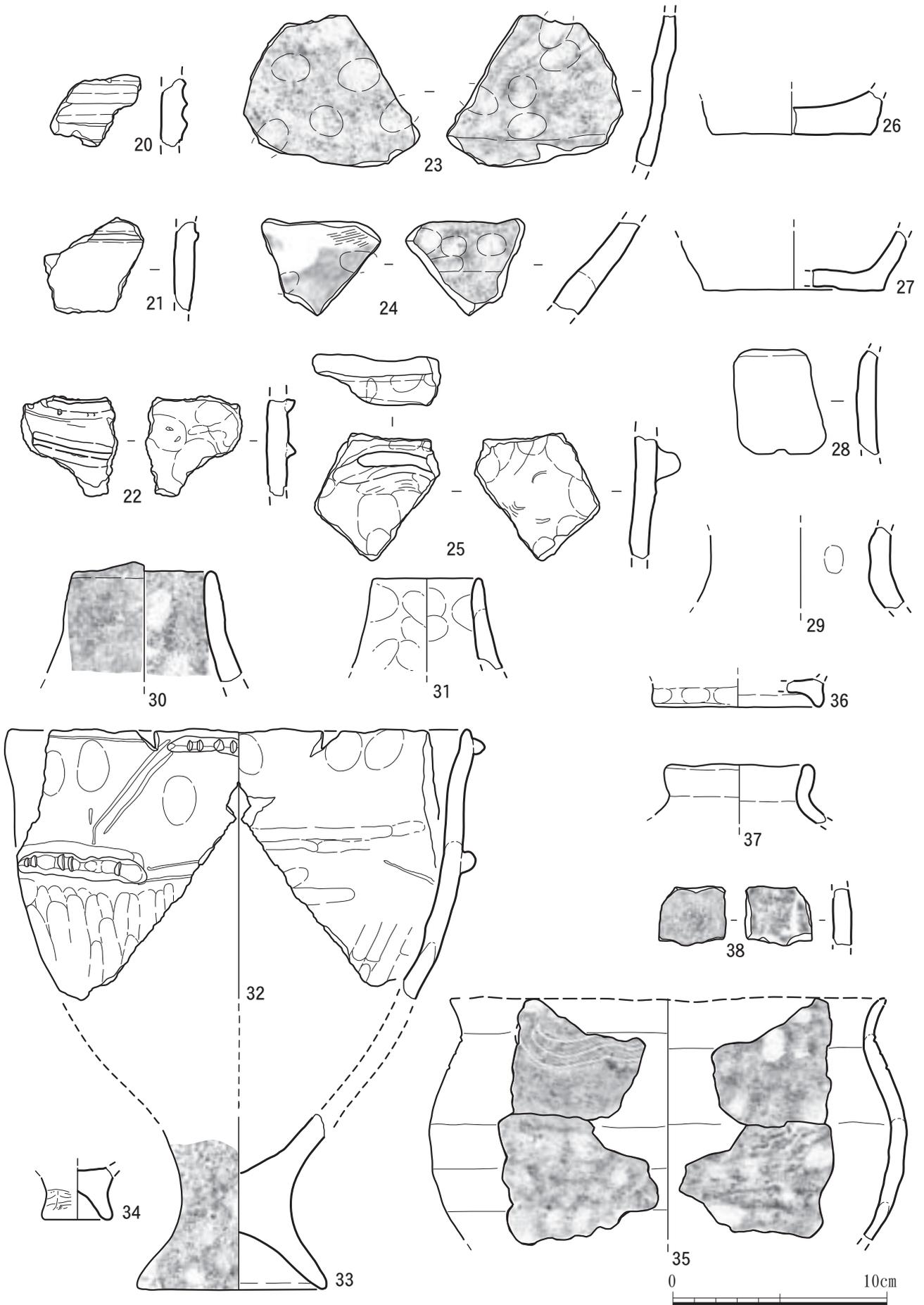
凡例 (◎=非常に多い ○=多い △=少ない △=僅少)



第20図 土器 1 (I群)



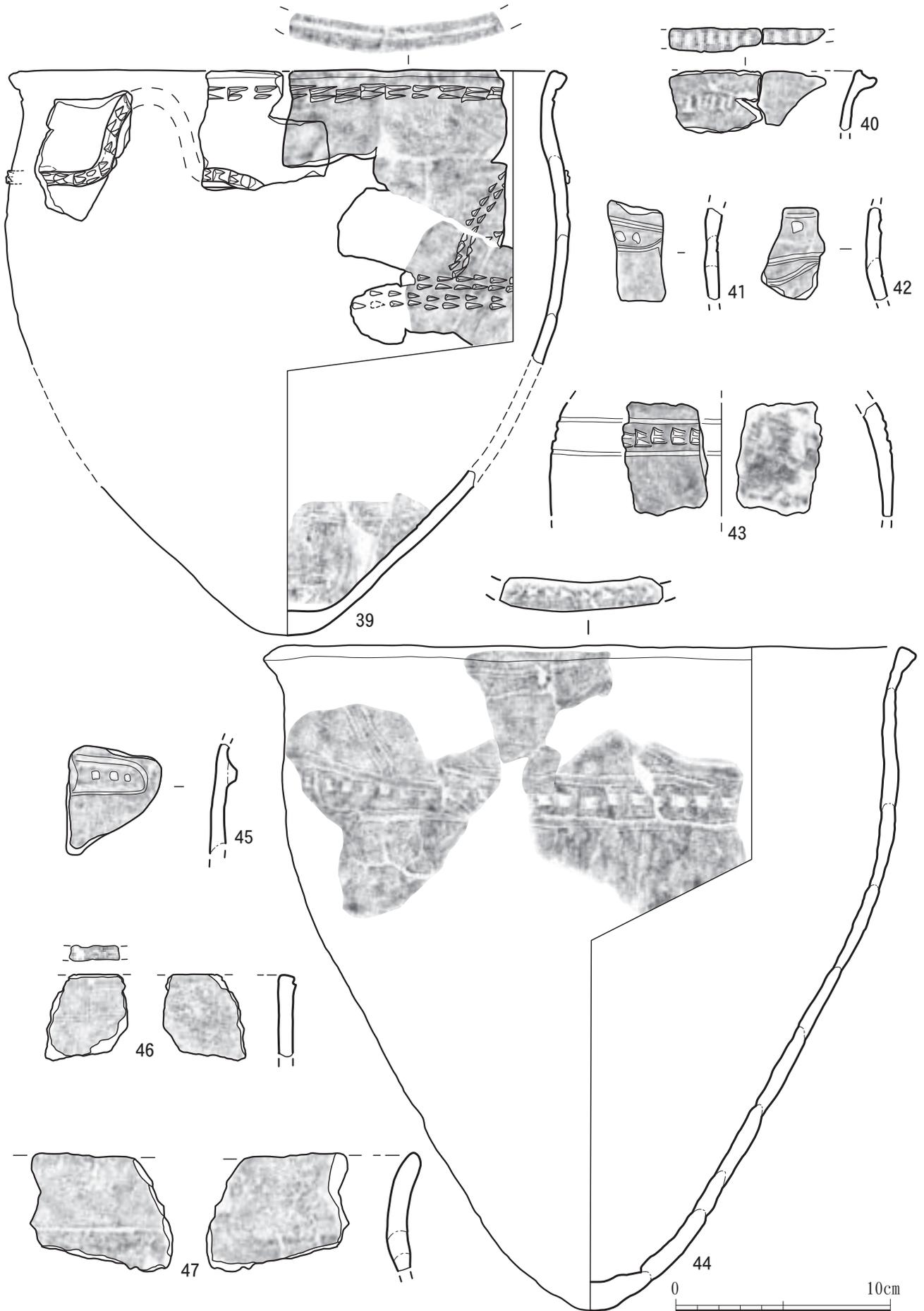
図版9 土器1 (I群)



第21図 土器2 (II-I類)



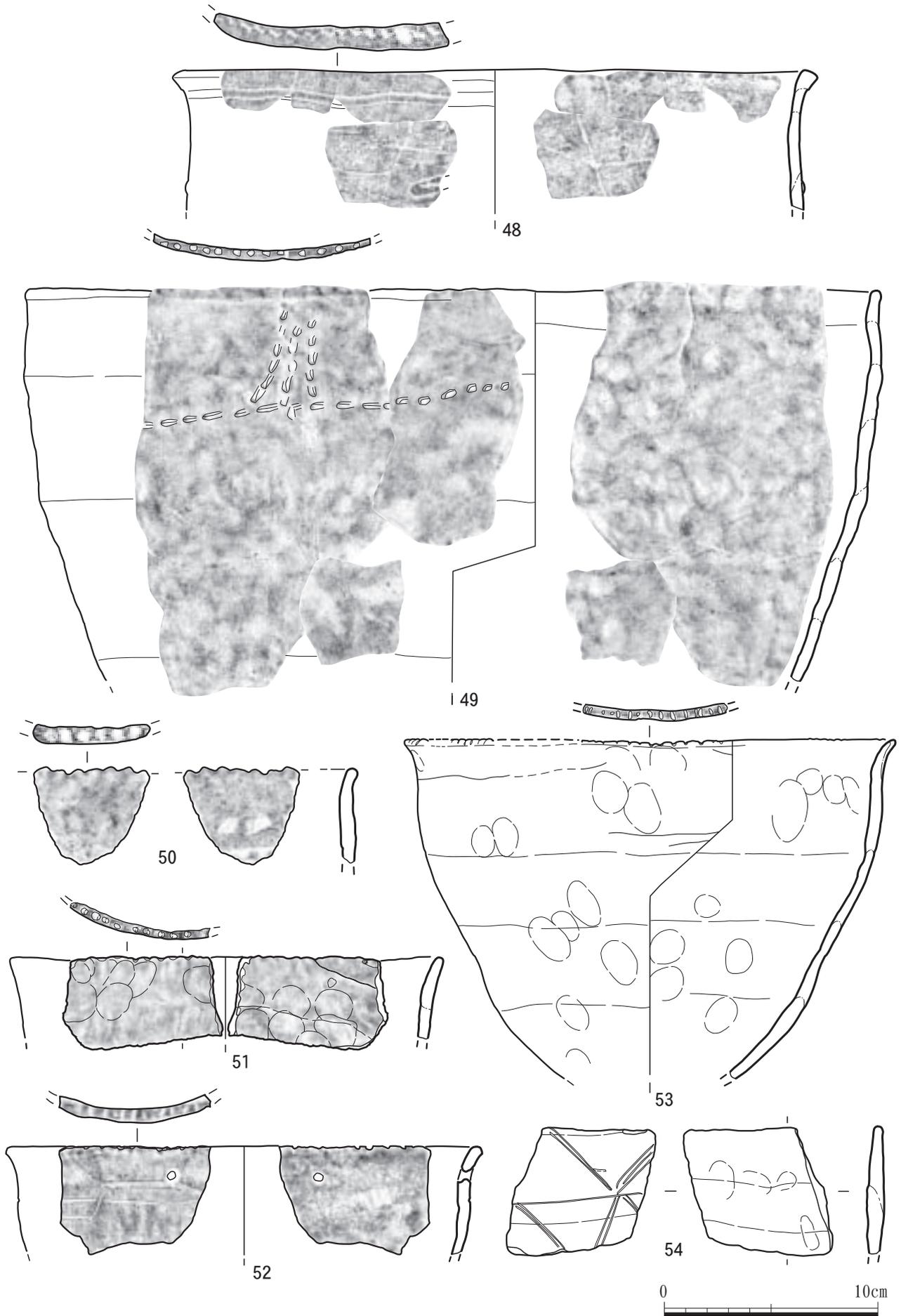
図版10 土器2 (II-I類)



第22図 土器3 (II-II類)



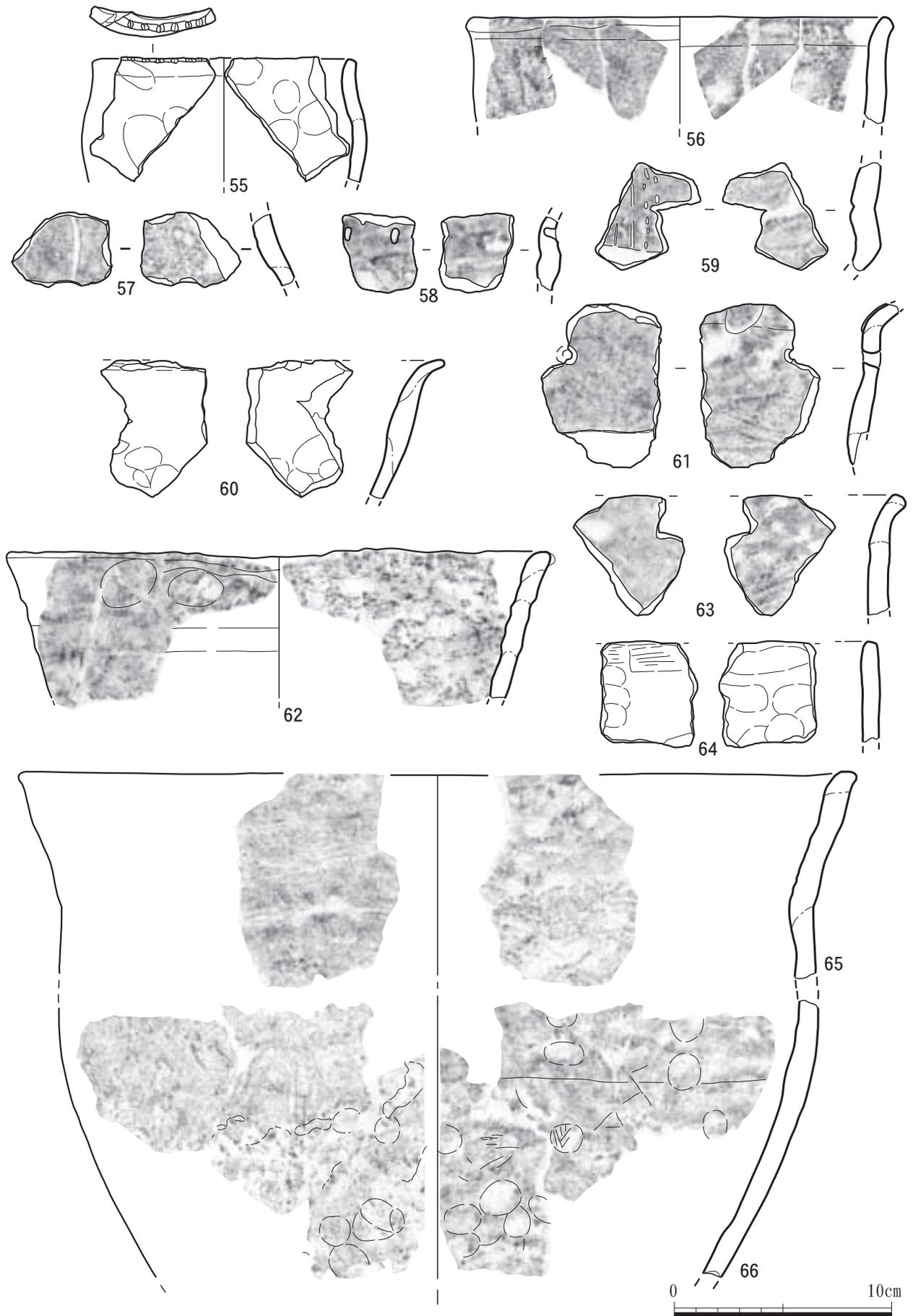
図版11 土器3 (Ⅱ-Ⅱ類)



第23図 土器4 (II-II類)



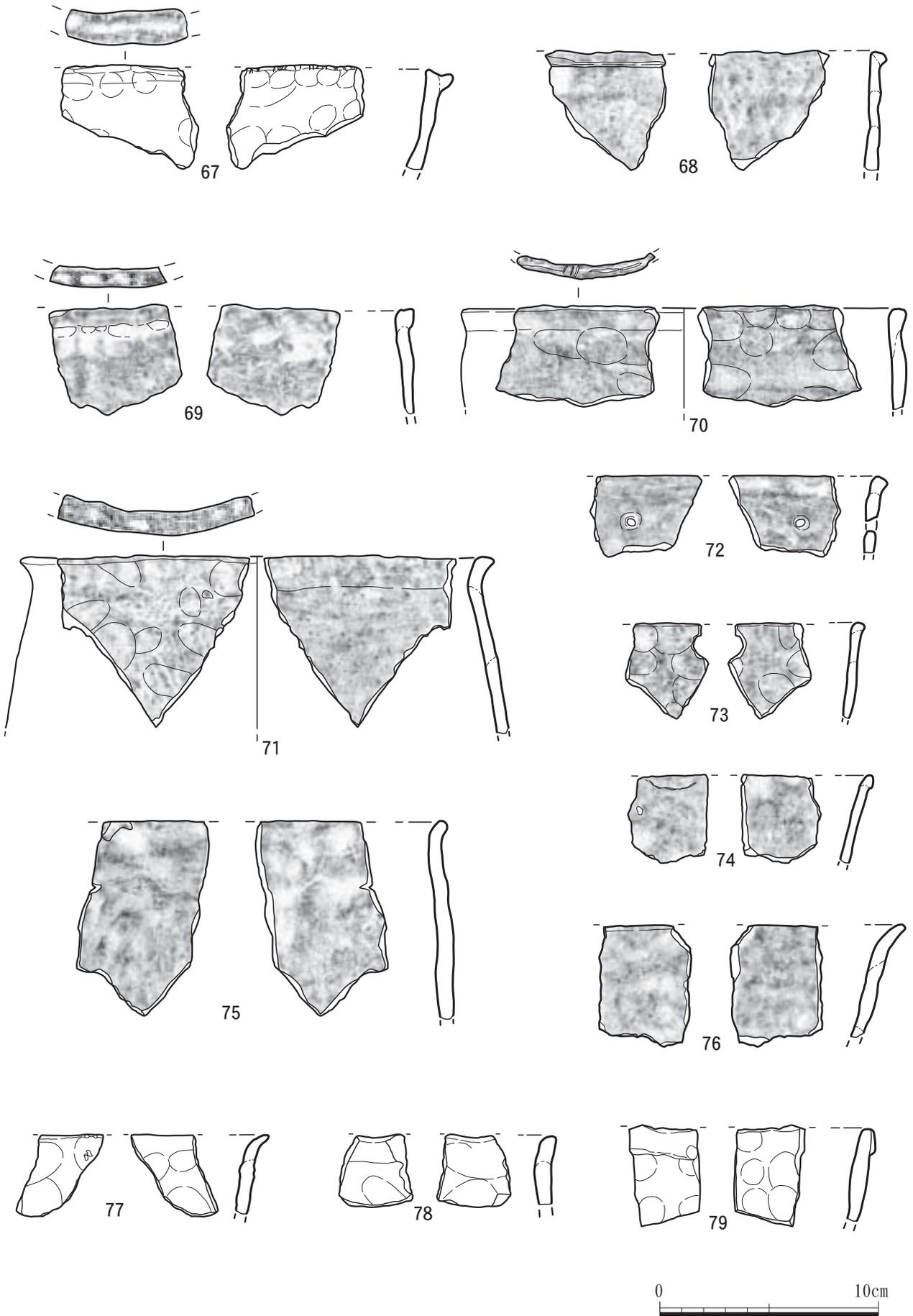
図版12 土器4 (Ⅱ-Ⅱ類)



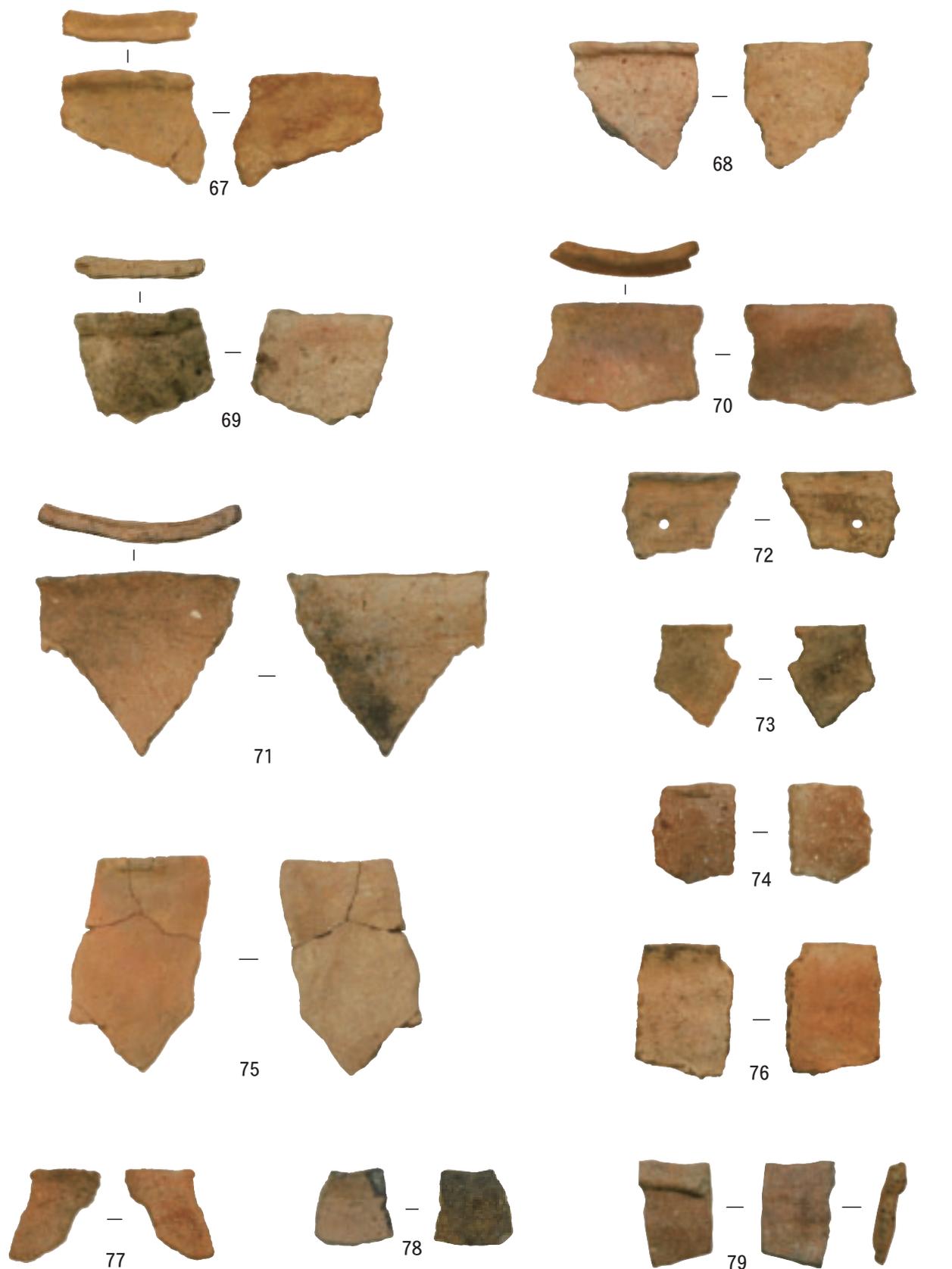
第24図 土器5 (Ⅱ-Ⅱ・Ⅲ類)



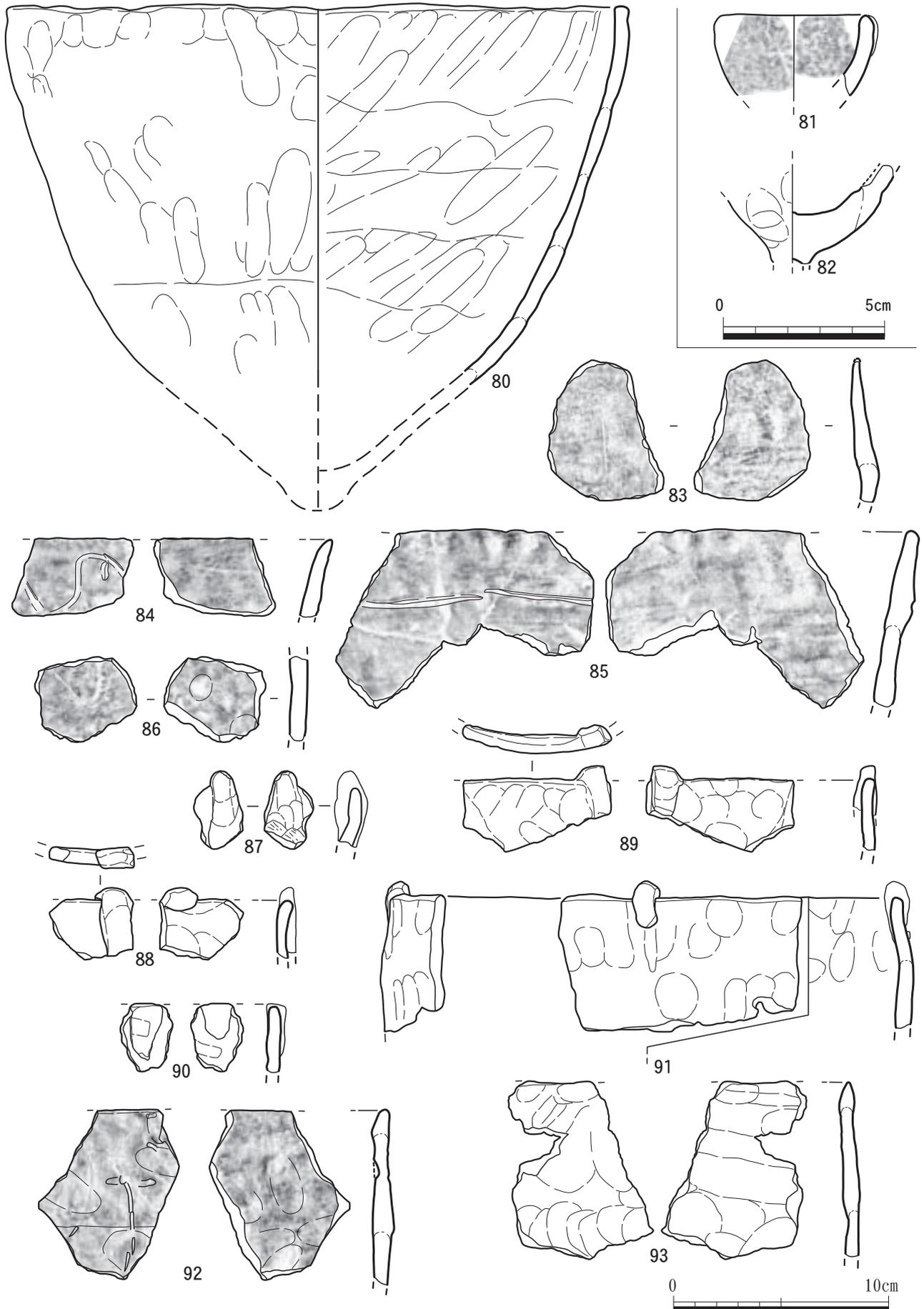
図版13 土器5 (Ⅱ-Ⅱ・Ⅲ類)



第25図 土器6 (II-IV類)



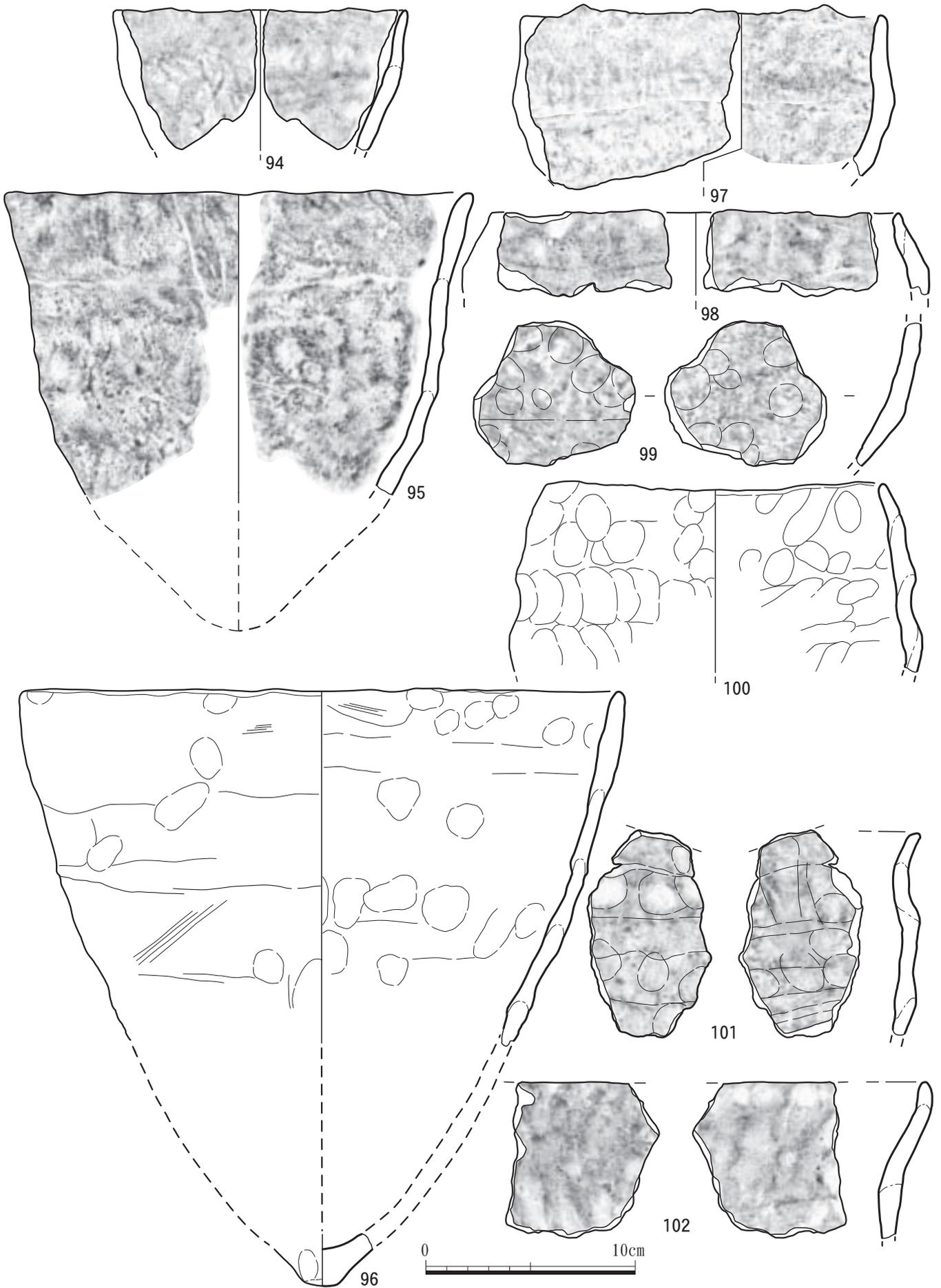
圖版14 土器6 (II-IV類)



第26図 土器7 (II-V・VI類)



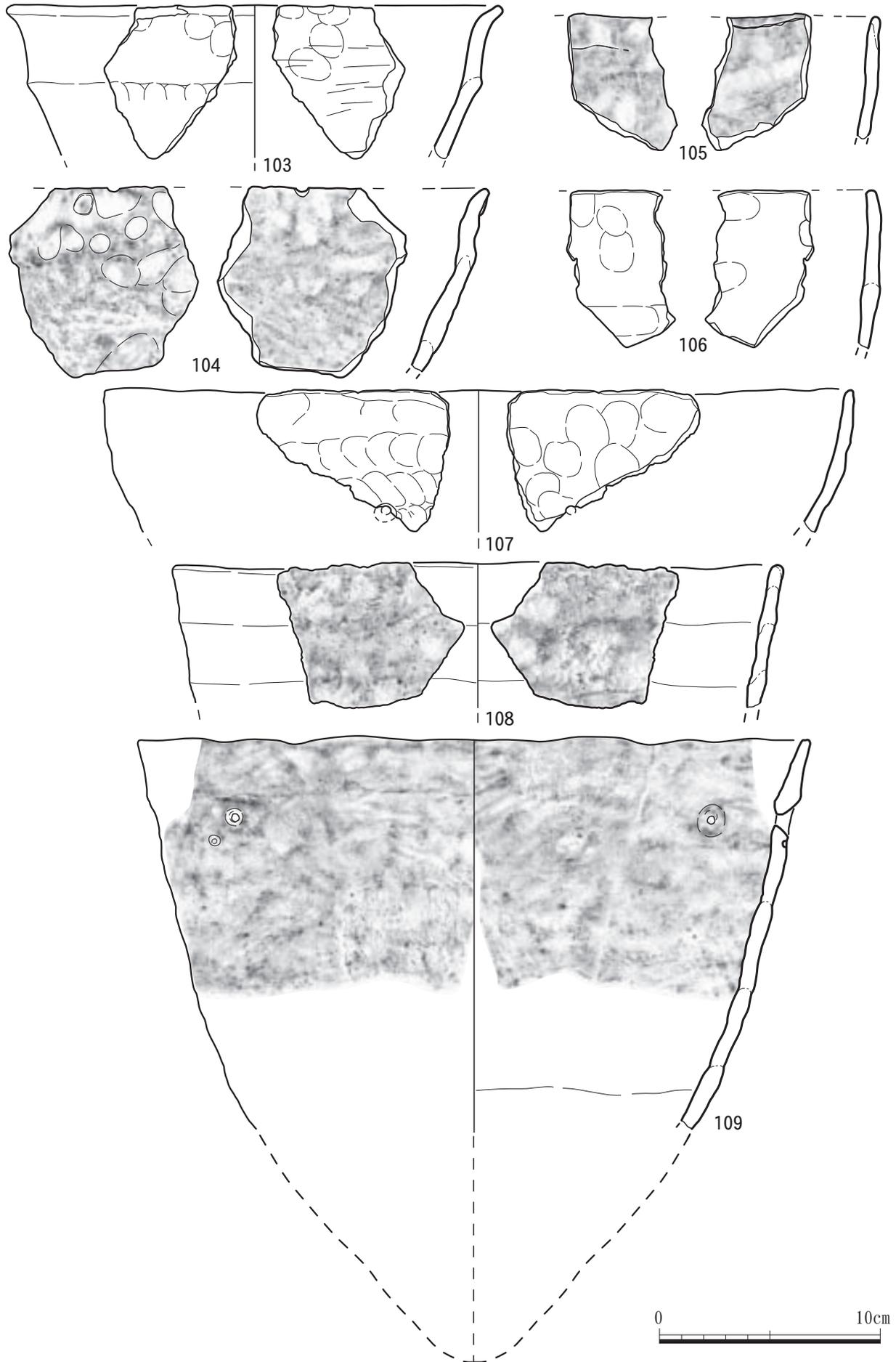
圖版15 土器7 (II-V・VI類)



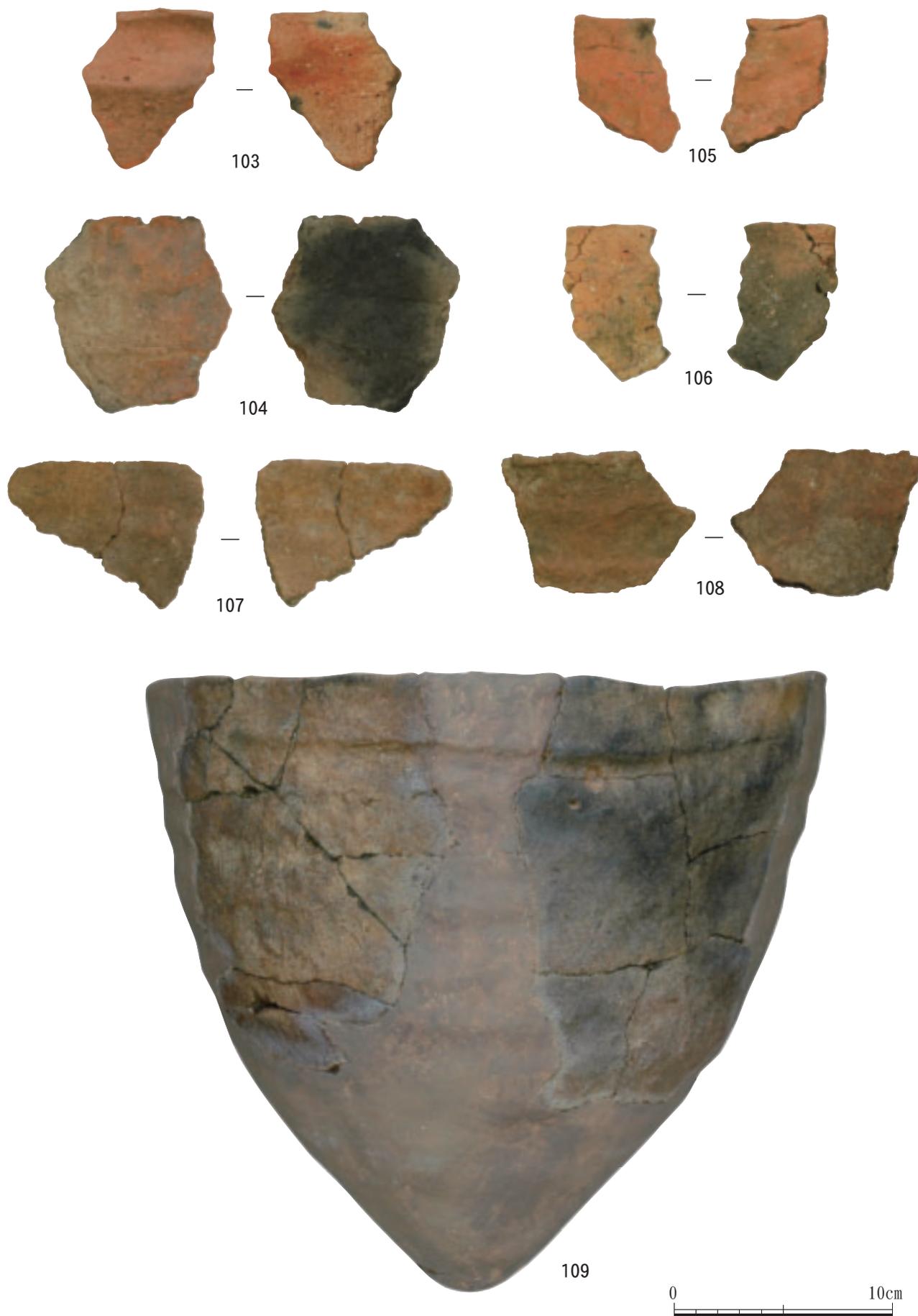
第27図 土器8 (II-VI類)



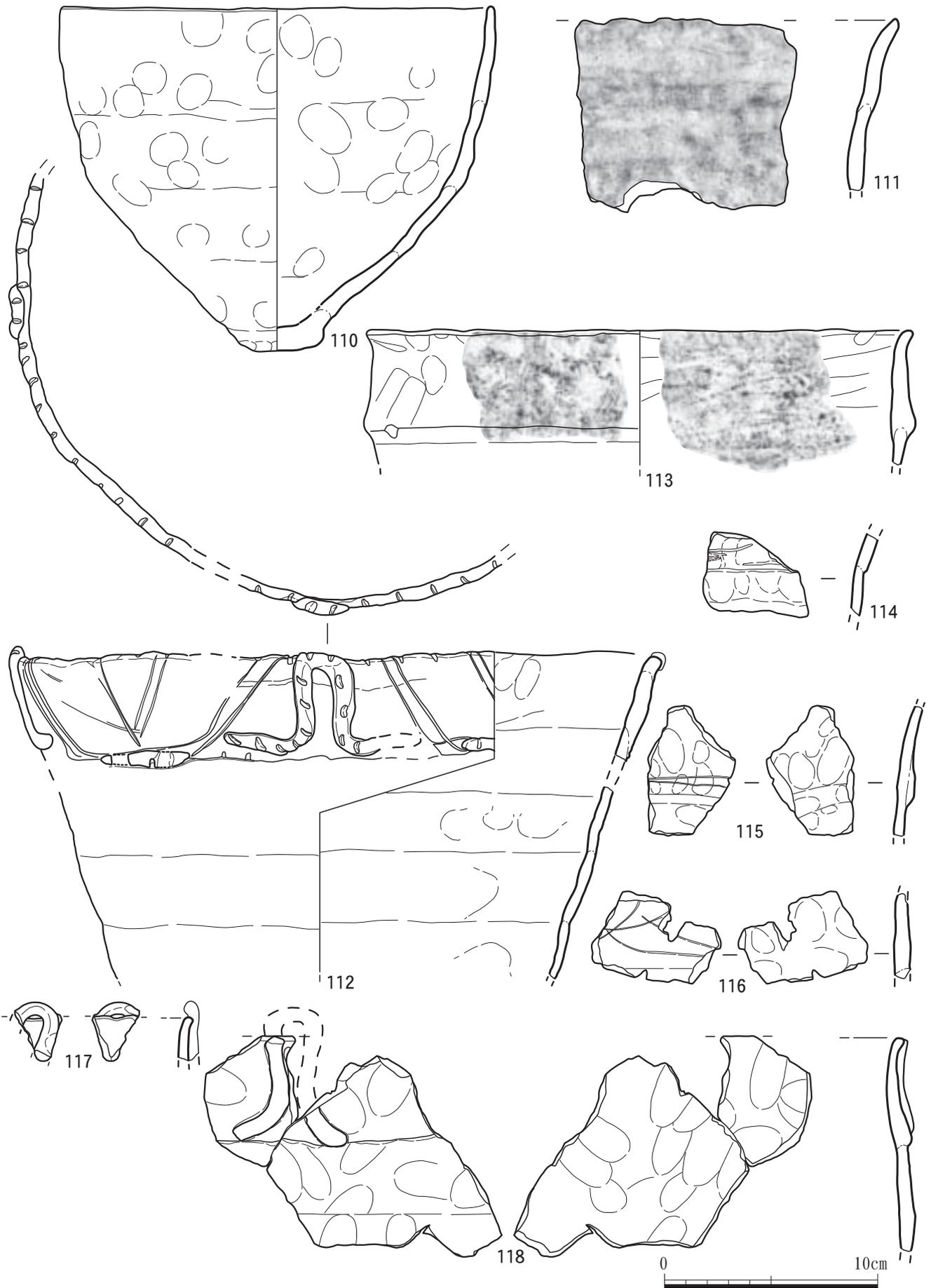
図版16 土器8 (II-VI類)



第28図 土器9 (Ⅱ-Ⅵ類)



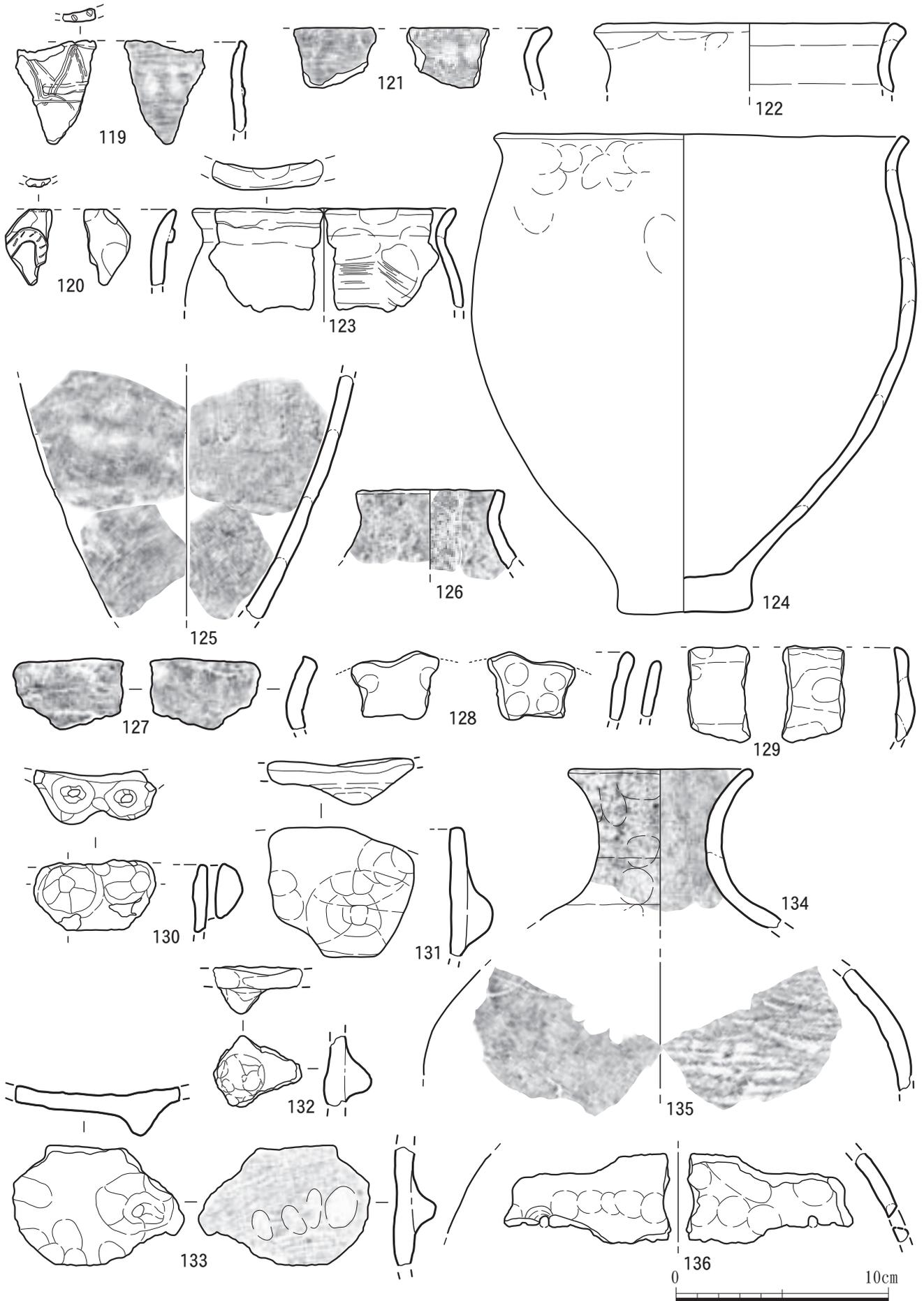
圖版17 土器9 (II-VI類)



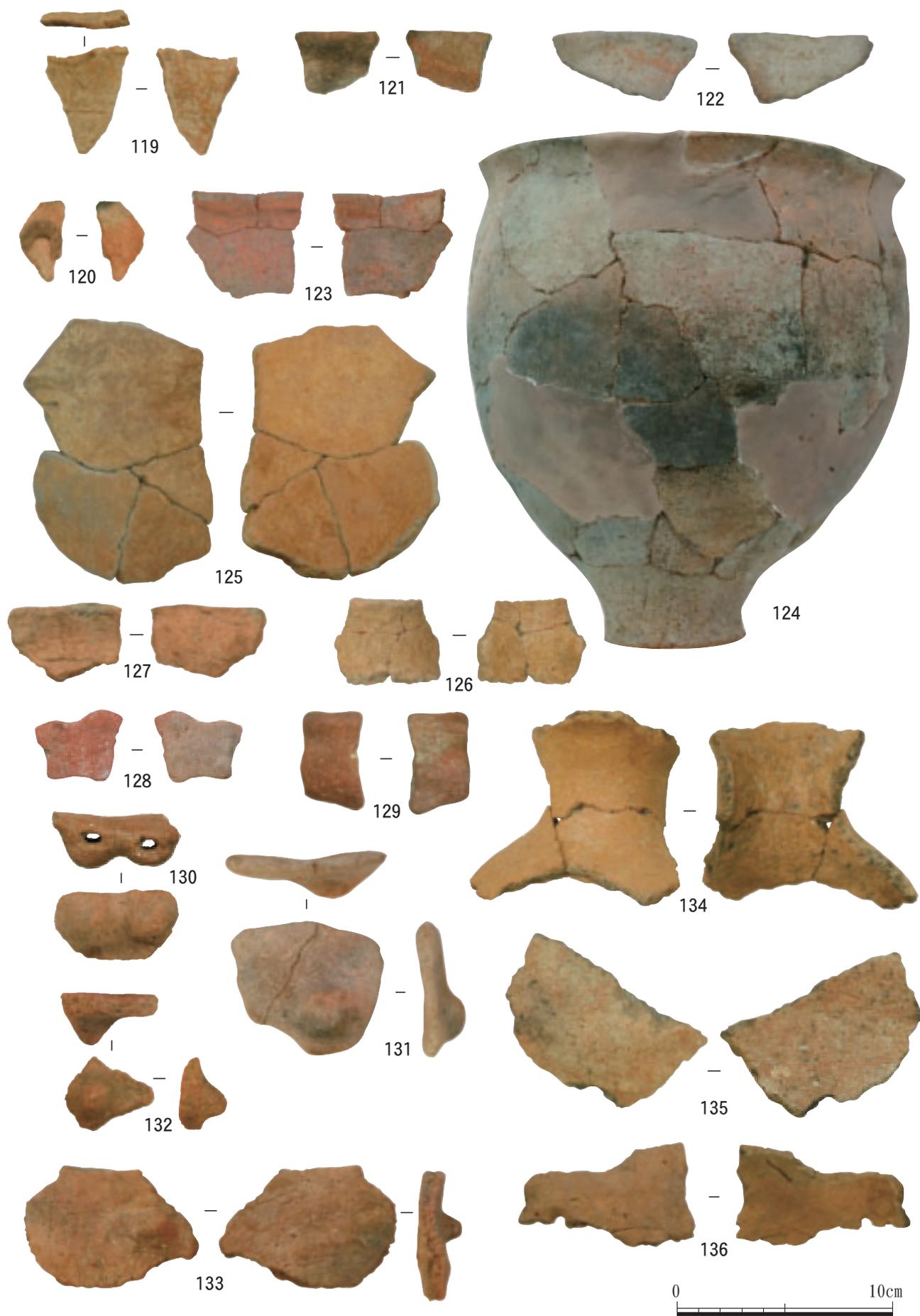
第29図 土器10 (II-VI・VII類)



圖版18 土器10 (II-VI・VII類)



第30圖 土器11 (II-VIII・IX類)



図版19 土器11 (II-VIII・IX類)

の文様に近い。

図 121 ～ 124 は無文の口縁部で、図 124 は胴部が張り、口縁部でくびれて外反するものでくびれ平底、胎土が泥質（図 125）と砂質がある。口縁部が角（図 122・124・127）、丸（図 121・123）がある。図 127 は他に比べて器厚が厚く、大ぶりである。

後述の 4409SX ではⅧ類の出土が多く、さらに細分が可能である。

図 126 はなで肩の壺と考えられ、器厚が薄く、胎土からくびれ平底系の土器である。

Ⅸ類（その他）

これまでの分類に含まれないものをその他としてここにまとめた。

a：器厚が 0.5cm 前後と薄手で口縁部が双状突起（図 128）、あるいは段をなすもの（図 129）。

b：瘤状突起を貼り付けたもの（図 130 ～ 133）。

図 130 は口縁部に乳房状に瘤を貼り付け、上方から穿孔するものである。砂質で混入量も多い。瘤は口縁部から突出しない。瘤は縦 2.8cm、横 5.3cm を測る。

図 131 ～ 133 は径 1.0cm の瘤を饅頭型に貼り付けるもので、図 131 のように口縁部近く、図 132、図 133 のように胴部に貼り付けたものがある。前者は焼成も良く、瘤は扁平、水摩を受けている。後者は焼成も弱く、瘤の形状も小さい。両者は胎土も異なる。図 133 は H 17 の標高 3.0m（第10図）で出土。

c：泥質、色も明黄褐色と在地土器と胎土が異なるが類例がなくここで扱った。図 134 は頸径 6.0cm の小振りの壺で、口縁はアサガオ状に開き、図 135 の肩部は胎土も酷似し同一個体と考えられ、これを参考にすると図 134 はなで肩の壺の可能性が高い。図 136 は同じような、なで肩タイプの壺である。

Ⅱ群〈底部〉

今回の調査で出土した底部は第13表に記載した通り、総数 480 点の出土である。遺構である 4409SX からは 235 点と全体の約半数が出土した。その詳細は遺構の項で記述し、ここではそれ以外の底部について記述する。内訳は丸底 12 点、尖底 47 点、乳房状尖底 70 点、平底 11 点、くびれ平底 48 点、脚台 3 点、尖底 or 乳房状尖底 29 点、不明 25 点の計 245 点である。乳房状尖底が最も多く、次にくびれ平底、尖底と続く。尖底、乳房状尖底を尖底系、平底とくびれ平底を平底系に大別してみると、前者が約 60%、後者が 24% の割合を示し、本遺跡では 4409SX を除いて尖底系の土器型式が主体となり、口縁部の集計でも同様な結果が得られている。出土層位を見ると遺構である E 区の 4409SX を除くと、Ⅲ層から 82 点と最も多く得られ、次いで V b 層、V b 層攪乱と続く。貝塚時代後期の層である V b 層よりグスク期のⅢ層で最も多くの底部が得られたことは、柱穴や土坑などの遺構がⅢ層面で多く検出されたためと考えられる。V b 層出土の底部をさらに詳細にみると、上部の砂 1・2 ではくびれ平底と尖底、丸底が混在して出土し、下部の砂①～⑤では尖底、乳房状尖底のみが出土する。いずれも僅かの出土ではあるが、くびれ平底と尖底系の底部には若干の時期差があるといえるのではないだろうか。

また、それぞれの器種の平面分布状況には若干の違いが見られ、第14表に示した地区ごとの器種と胎土の関係からも明らかである。尖底系の丸底、尖底・乳房状尖底は B 区での出土が多く、胎土は砂質がほとんどである。平底系は平底とくびれ平底では出土状況に違いが見られ、前者は B 区、後者は E 区と C 区で多い。胎土でも前者は砂質主体、後者では砂質と泥質があり、両者で異なる。平底が B 区で多く得られたのは、平底の分類で尖底からの流れを汲むものを平底の a とし、多く得

から、丸底に分類した。外底面を丁寧にナデ調整し、内底面は僅かに盛り上がる。胎土には角閃石や火山ガラスを含み、搬入土器の可能性もある。図138は器厚が6mmと他の丸底に比べてやや厚手で、図139は4mmと薄手である。両者とも底面は破損しているが、推算底径などにより丸底に分類した。本資料も角閃石が多量に含まれている。

bは図140の1点を図示した。上記3点と異なり底径が大きく、割と緩やかな立ち上がりを示す。器厚は3～5mmと薄手であるが、器面が剥がれ落ちた可能性もある。胎土に角閃石や石英などが含まれていることから本項で扱った。搬入の可能性も考えられる。図35に図示した口縁部と胎土や器厚、器色などが類似している。

B類（尖底）

尖底は47点が得られ、図141～159に19点を図示した。出土地はG・H17・18を中心にその周辺から出土し、乳房状尖底の出土地とほぼ一緒である。層位的にはⅢ層からの出土が21点と多く、Ⅱ層は10点、Vb層は8点である。E18の0797P・H17の0987P・K18の0132SKからそれぞれ1点ずつの出土である。形状から下記のa～cの3種に分類した。

a：底面が尖り気味のもの

b：底面がやや平らで、底径が2cm以下と小さいもの

c：底面が丸みを呈するもの

aは18点が出土し、図141～145の5点を図示した。いずれも外面は若干デコボコしており、粘土積み痕が明瞭なことから大当原式土器の底部と思われる。図141・142・144は混和材に赤色粒が目立ち、図141の内外面にはヤドカリ痕が見られる。図143・145には石英が目立ち、外器面は他に比べて丁寧に、やや古手のものかと思われる。

bは7点が出土し、図146～150の5点を図示した。いずれも底面がやや平らで底径が2cm以下と小さく、胎土に石英を含むものが多い。図147は図96の口縁部と胎土や混和材などの特徴が類似していることから、復元を試みた。図148の外底面には半弧状の細沈線が見られる。図146・149は器厚がやや薄手、他の3点はやや厚手である。

cは6点が出土し、図151～154の4点を図示した。図39は底面が丸みを呈するもので、cに分類出来る。図151は丁寧にナデ調整を行っており、器厚も均一である。混和材には少量の角閃石・石英を含む。図152は厚手の土器で、粗い黒色粒を含む。図153は砂質で、角閃石や石英を多量に含むことから、浜屋原式土器の可能性が考えられる。図154は厚手で、外面にハケ目が見られる。粘土積み痕が明瞭なことや混和材などの特徴からやや古手のタイプと思われる。

図155～159の5点は底面が破損しているが、尖底と思われるものである。図155は器厚が4mmと薄手で、細かい角閃石・石英などが含まれる。手に持つと他のものに比べて軽い感がある。在地外の土器であろうか。図156は5mm程の薄手の土器で、ナデが丁寧に滑らかである。混和材や粘土積み痕などの特徴から、大当原式土器の薄手タイプの底部と思われる。図157は外面に指頭痕が明瞭に残り、内面はナデが丁寧に施されている。胎土は砂質で、角閃石・石英を多量に含む。以上の特徴から、浜屋原式土器の底部と思われる。内面には粘土貼り付け痕が縦に明瞭に見られる。図158の胎土は泥質であるが、形状から尖底になるものと考えられる。断面を見ると、粘土貼り付け痕が明瞭である。図159はI18の0505SKとVb層出土の破片が接合出来たもので、丁寧にナデ調整が施されている。本資料にもヤドカリ痕が見られる。図155・157は近世遺構である0008SF出土である。

C類（乳房状尖底）

乳房状尖底は70点と最も多く出土し、図160～178に19点を図示した。出土地を見ると、G・

H 17・18 と D 18 を中心とするその近辺の 2 箇所でもとまりを見せる。層位的にはⅢ層からの出土が 23 点と最も多く、次いで V b 層から 25 点、Ⅱ層から 10 点が得られた。底面の乳頭部の形状によって下記の 3 種に分類した。

- a：乳頭部は小振りで外底面が丸みを呈するもの
- b：乳頭部は小～中振りで外底面が凹みを呈し、底面がほぼ平ら又は丸みをなすもの
- c：乳頭部が大振りなもの

a は 35 点が出土し、5 点を図示した。図 160～164 に図示したもので、小振りな乳頭部を呈する。図 160・161 は底厚が 25mm 以上とより厚く、乳頭部が明確である。後者は胎土や器色、混和材などから浜屋原式土器と思われる。図 162・163 も底厚が 18mm 前後とやや厚めで、前者は外底面に浅い凹みを持つが、全体的な形状から a に分類した。後者は貝集積の 0656SS (第16図) 出土である。図 164 は底厚が 15mm と上記の 4 点に比べるとやや薄く、外反度も強い。平敷屋トウバル遺跡 (1996) など類似のものがある。

b は図 165～173 に 9 点を図示した。小～中振りの乳頭部を呈するもので、外底面に凹みが有り、やや平らな面を持つものである。乳頭部の大きさ・底面部の形状などによって細分類が可能であるが、中間のものも多く、今回は一つにまとめた。図 165 は乳頭部自体が小振りで高く、外底面の凹みは深めの円形状である。図 166 は低い乳頭部を持ち、外底面の凹みは深めの楕円状を呈する。1060SK 出土である。図 167 は外底面に粘土を貼り付けて小振りの乳頭部を作り、僅かな凹みを呈する。図 168・169 は底径がほぼ同じで、外底面の凹みも楕円状である。図 170・171・173 は乳頭部が中振りで低く、外底面に浅めの凹みを呈する。図 172 は外底面に方形状の凹みを呈し、乳頭部は粘土貼り付けにより丸みが強調されている。他の b と若干違いが見られるが、全体的な形状から b に分類した。4318SK (第13図) 出土である。

c は大振りな乳頭部を呈するもので、図 174～178 の 5 点を図示した。復元土器の図 110 は、乳頭部が大振りで丸みを呈することから c に分類出来る。図 174 は底径が他に比べてやや小さいが、全体的な形状から c に分類した。外底面は混和材が粗粒のために不安定である。図 175～178 は低めの乳頭部を呈し、図 175 の外底面には白色粒が目立つ。図 178 の外底面は粘土を貼り付けることにより乳頭部が丸みを呈する。

D 類 (平底)

平底は僅か 11 点の出土で、図 179～183 に 5 点を図示した。乳房状尖底からの流れを汲むものであろうか、底径が小さく立ち上がりの角が丸みを持つものがある。出土地は東側の G 17・18 を中心とするその近辺で、遺構 1163SS (第16図) や 1049 P から得られた。層位的にはⅡ・Ⅲ層の出土で、若干の形状の違いが見られたので下記のように分類した。

- a：立ち上がり部の角はやや丸みを呈するもの
- b：立ち上がり部の角はやや角を持つもの

a は図 179～182 の 4 点を図示した。図 179～181 は、立ち上がり部と内底は丸みを呈する。乳房状尖底の c にも近いが、くびれがないことから平底とした。図 179・180 の 2 点は底径が 4 cm 以下と小さく、ほぼ同じ形状を呈する。図 181・182 は底径が大きいもので、前者は粘土積み痕の箇所が一端くびれるが、全体的な形状は平底である。両者とも内外面の指頭痕が明瞭である。図 181 は H 16 1049 P 出土である。

b は図 183 に図示した 1 点で、外底面には粗めの白色粒が見られる。

E類（くびれ平底）

くびれ平底は4409SX以外を除いて48点が得られた。4409SXの底部は遺構の項で記述し、その他のくびれ平底について略述する。乳房状尖底に次いで多く、図184～192に9点を図示した。くびれ平底の底径は、計測できないものを除くと、5～7cmのものがほぼ8割を占める。底厚との関係を見ると、ばらついており、関連性が捉えられなかった。尖底・乳房状尖底とくびれ平底の出土状況には、前記したように若干の違いが見られる。形状的には、下記に記したくびれの張りが弱いbが最も多い。その中でも、底面から低い位置でくびれるものが大半で、図124や図187のように底面からほぼ直に立ち上がり、くびれが緩やかなものは少ない。

4409SXのくびれ平底も含めて検討し、前回の分類に準じて以下のように分類した。cについては前回の基準である3cm以下はほとんど出土しないことから、今回は底径の基準を4cm以下とした。

a：くびれの張りが強いもの（底面からの角度が40°以下）

b：くびれの張りが弱いもの（底面からの角度が40°以上）

c：底径が小さいもの（4cm以下）

d：くびれの張りがより強く、鏢状を呈するもの

aは僅か4点の出土で、図184～186の3点を図示した。図184は両面共に指頭痕が顕著で、器厚は約3mm、底厚は5mmと薄手の底部である。僅かに上げ底状を呈し、粗めの赤色粒を多量に含む。図185も上げ底を呈し、器厚は4mmと薄い。底厚は9mmとやや厚手で、外底の一部には粘土が貼り付けられている。図186の外表面は丁寧なナデが施されている。

bは20点が出土し、図187～189の3点を図示した。本遺跡で最も多いタイプのくびれ平底で、4409SXでも多量に出土した。立ち上がり角の違いによってア：直に立ち上がるもの、イ：底面からスムーズにくびれ、立ち上がり角が比較的明瞭なもの、ウ：立ち上がり部が丸みを呈するものに細分したが、イがほとんどである。図187はbアに分類出来るもので、他に復元土器の図124がある。前者は外表面に粘土を貼り付けていることから、やや内彎しているようにも見える。図188はbイで、僅かに上げ底状を呈し、くびれもスムーズで均整のとれた底部である。0250SK出土で、図53の口縁部も出土しているが本資料とは別個体である。図189は立ち上がり部の角が丸みを呈するもので、bウの底部である。底厚が10mmと厚く、外底の中央部はヘラナデによって僅かに上げ底状となる。

cは前回の分類基準によると底径が3cm以下のものであるが、今回は4cm以下をcとした。全て4409SXからの出土で、詳細は4409SXの項で記述する。

dは5点が得られ、図190・191の2点を図示した。dも立ち上がり角の形状でア：立ち上がり角が丸みを持つ、イ：立ち上がり角は明瞭、ウ：立ち上がりは直の3タイプに細分した。図190はdアで、立ち上がり角が丸みを呈し、外底を削っているのか、上げ底を呈する。泥質で重量感のある底部である。図191はdイで、dアに比べるとくびれが強くて立ち上がり角も明瞭である。内底は丸みを呈し、底厚も23mmと分厚い。dアの図190とはかなり質感が異なる。

その他

図192の1点はくびれ部分がやや長く、底厚が14mmと厚い。外面のナデは丁寧に施され、内底は平坦ではないことから、乳房状尖底の大きいものとも考えられるが、底面が平らでくびれを呈することから、くびれ平底に分類した。1点のみの出土のため、分類外とした。小堀原遺跡(2012)でも類似のタイプが出土している。

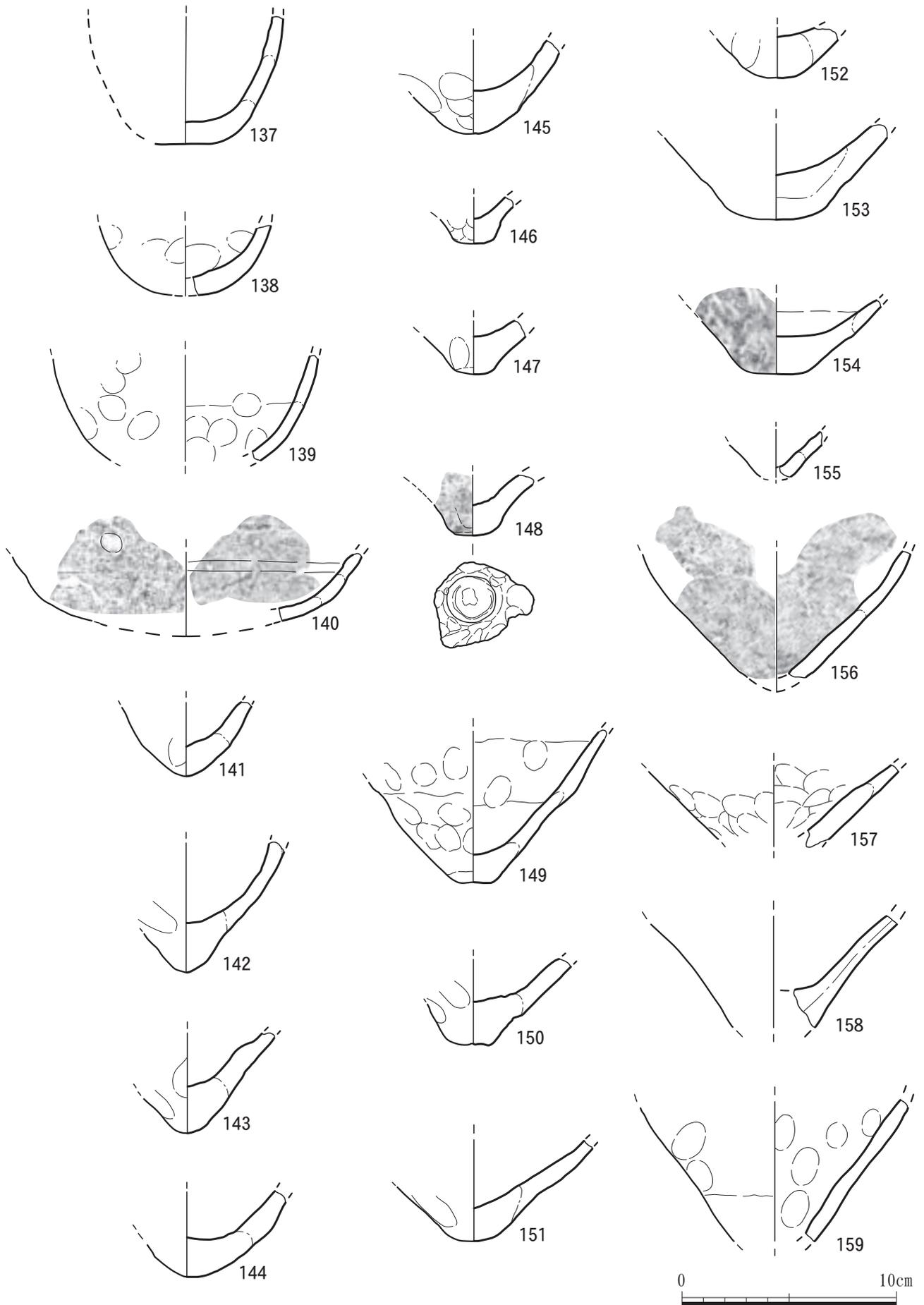
F類（脚台）

脚台は3点が出土した。1点は4409SX、2点は搬入土器と思われることからそれぞれの項で記述し、本項では省略する。

第15表-1 II群土器(底部)観察一覧

第図図版	図番号	大分類	小分類	特 徴	法量		胎土	粒度量	混和材					器面調整		色調		出土地
					底径(cm) 重量(g)	器厚 底厚(mm)			石英	礫石 角閃石	赤粒	白粒	砂粒	その他	外面 内面	外面 内面		
第31 図 ・ 図 版 20	137	丸底	a	小型 外底面-平ら 内底面-膨らむ 薄い均一	3 59.41	4 9	砂質	細粒 多量	○	◎		○	火山 ガラス	外:コピナデ丁寧 内:コピナデ雑	内外:茶褐色		G18 V b層(砂) 台1302	
	138	丸底	a	小型 外底面-丸み	- 18.42	6 10	砂泥質	細粒 少量	○	△		△	灰色粒	内外:コピナデ	外:赤褐色 内:灰茶褐色		G18 II層 台348	
	139	丸底	a	小型	- 33.08	4 -	砂泥質	細粒 多量	○	◎	○	○		内外:コピナデ	内外:茶褐色		I17 III層 台696	
	140	丸底	b	底径大外底面-丸み	10 (推定) 22.50	3~5 -	砂質	細粒 中量	○	○		○		内外:コピナデ・ハケナデ	内外:赤褐色 外底面:黒褐色・煤?		E8 III層 台985	
	141	尖底	a	外-ヤドカリ痕	- 21.92	4~8 -	砂泥質	粗粒 多量	○	◎		○		内外:コピナデ	内外:赤褐色		H17 III層 台918	
	142	尖底	a		- 55.33	6~8 23	砂泥質	粗粒 多量	○	◎		△		内外:コピナデ	内外:赤褐色		G18 III層 台625	
	143	尖底	a	外-器面調整丁寧	- 58.85	7~ 1022	砂泥質	細粒 少量	○			△		内外:コピナデ丁寧	内外:茶褐色		G16 V b層力 0350SZ 台980	
	144	尖底	a	積み痕が明瞭	- 67.62	8 18	砂泥質	やや粗粒 中量	○	○		○		内外:コピナデ	外:赤褐色 内:暗褐色		G18 III層 台653	
	145	尖底	a	石英が多量	- 110.07	8 20	砂泥質	粗粒多量	◎	△	△	○		内外:コピナデ丁寧・指頭痕	内外:赤褐色		E18 V b層力 0797P 台1279	
	146	尖底	b	底面-やや平ら	1.8 15.47	6 12	砂泥質	やや粗粒 少量	△			△		内外:コピナデ	外:茶褐色 内:暗褐色		D17 V b層 台888	
	147	尖底	b	復元土器 図96	1.9 -	917	砂泥質	やや粗粒 少量	△			△		内外:コピナデ	内外:茶褐色		G17 III層 台644	
	148	尖底	b	外底面-半弧状の細沈線	2 25.90	7 14	砂泥質	細粒 少量	△			△		内外:コピナデ	外:茶褐色内:暗褐色		C18 II層 台4050	
	149	尖底	b	器厚-薄い	1.8 100.90	5~7 13	砂泥質	細粒 少量	△			△		内外:コピナデ・指頭痕	内外:赤褐色		H18 V b層(砂1) 台2008	
	150	尖底	b	底面-やや平ら	1.7 56.37	6~8 20	泥砂質	中粒 少量	△		△	△		内外:コピナデ・指頭痕	内外:淡茶褐色		E18 II層 台478	
	151	尖底	c	器厚-均一	2.3 79.66	6~9 16	泥砂質	中粒 少量	△	○		△	△	内外:コピナデ丁寧	外:灰橙褐色 内:灰褐色		G18 III層 台653+ F17 III層 台679	
	152	尖底	c	器厚-厚い	3.9 52.07	10 19	砂泥質	粗粒 多量	△		○	△	△	黒色粒 (多)	内外:コピナデ	内外:灰橙褐色		I17 III層 台282
	153	尖底	c	内-粘土貼り付け痕明瞭 (縦)	3.9 77.76	9 20	砂質	やや粗粒 多量	◎	◎		○		内外:コピナデ	内外:茶褐色		E13 II層 台512	
	154	尖底	c	外-ハケ目	3 96.33	4~8 17	砂泥質	粗粒やや 多量	△		○	○	△	内外:コピナデ・ハケナデ	内外:赤褐色		G18 III層 台625	
	155	尖底		底面破損	- 4.71	4~5 -	砂質	細粒 中量	○	○		○		内外:コピナデ・指頭痕	内外:黄茶褐色		D・G10~12 II層 0008SF 東側攪乱 台4539	
	156	尖底		底面破損	- 57.84	7~5 -	砂泥質	細粒やや 多量	○	○		○		内外:コピナデ丁寧	内外:赤褐色		I18 V b層(砂1) 台1985	
157	尖底		底面破損	- 51.72	4~9 -	砂質	細粒多量	○	◎		○	光(黄)	内外:コピナデ・指頭痕	外:赤褐色 内:黄茶褐色		D・G10~12 II層 0008SF 台4534		
158	尖底		底面破損	- 26.44	6~8 -	泥質	やや粗粒 中量			○	○		内外:コピナデ	外:橙褐色 内:淡白橙色		E13 V b層力 0586SZ 台861		
159	尖底		底面破損ヤドカリ痕	- 42.44	5 -	泥砂質	粗粒 多量			○	○	○	内外:コピナデ・指頭痕	外:茶灰褐色 内:橙茶褐色		I18 V b層(砂) 台-1299+ I18 V b層力 0505SK 台1185		
第32 図 ・ 図 版 21	160	乳房状 尖底	a	摩耗	1.3 35.37	5 25	砂泥質	粗粒 多量	○	◎		○	摩耗のため不明	外:赤褐色 内:暗褐色		H16 V b層(砂◎) 台675		
	161	乳房状 尖底	a		2.0 30.04	- 26	砂質	細粒多量	○	◎		○		内外:コピナデ	外:黄茶褐色 内:黄		D17 V b層(砂) 台4705	
	162	乳房状 尖底	a	外底面-楕円状の凹み・浅め	1.3 24.70	6 18	砂泥質	やや粗粒 多量	○		○	○		内外:コピナデ	内外:赤褐色		I18 V b層力 0550P 台1129	
	163	乳房状 尖底	a	外底面-丸味	2.5 61.53	5~9 19	砂泥質	やや粗粒 多量				○		外:コピナデ雑 内:コピナデ	内外:茶褐色		F・G16.17 V b層 0656SS 台1065	
	164	乳房状 尖底	a	外反度大	2 31.91	5 15	砂泥質	粗粒 多量	◎	△		○		内外:コピナデ	内外:茶褐色		G18 III層 台653	
	165	乳房状 尖底	b	外底面-円形状の凹み・深め	2.0 44.83	3~6 15	砂泥質	粗粒 多量			◎	○		外:コピナデ雑 内:コピナデ	内外:茶褐色		G17 III層 台888	
	166	乳房状 尖底	b	外底面-方形状の凹み・深め	2.0 45.08	6 19	砂泥質	やや粗粒 少量	○		○	△		内外:コピナデ・指頭痕	内外:茶褐色		D18 V b層力 1060SK 台1242	
	167	乳房状 尖底	b	外底面-僅かに上げ底状・ 外底面粘土貼り付け	2.0 15.85	5 15	砂泥質	粗粒 少量			○	○		内外:コピナデ	内外:茶褐色		F16.17 V b層 0658SS 台1049	
	168	乳房状 尖底	b	外底面-僅かに円形状の 凹み	2.5 27.04	6 13	砂泥質	やや粗粒 やや多量	○		○	△		内外:コピナデ・指頭痕	内外:茶褐色		F18 III層 台555	
	169	乳房状 尖底	b	外底面-円形状の凹み・や や浅め	2.5 26.44	7 14	砂泥質	やや粗粒 中量	○		○	△	△	内外:コピナデ・指頭痕	外:茶褐色 内:灰褐色		E15 II層 台741	
170	乳房状 尖底	b	外底面-僅かに楕円状の 凹み	2.6 46.46	7 13	やや 砂質	細粒 やや多量	○			△	△	内外:コピナデ・指頭痕	外:茶褐色 内:暗褐色		G18 III層 台625		
171	乳房状 尖底	b	外底面-僅かに楕円状の 凹み	3 39.18	5 16	砂泥質	細粒 少量				△	△	内外:コピナデ・指頭痕	内外:茶褐色		F17 III層 台679		
172	乳房状 尖底	b	外底面-方形状の凹み・底 面粘土貼り付け・深め	3 82.65	5 17	やや 砂質	やや粗粒 多量	○		△	○	○	内外:コピナデ・指頭痕	外:赤褐色 内:暗茶褐色		H16 V b層 4318SK 台5082		

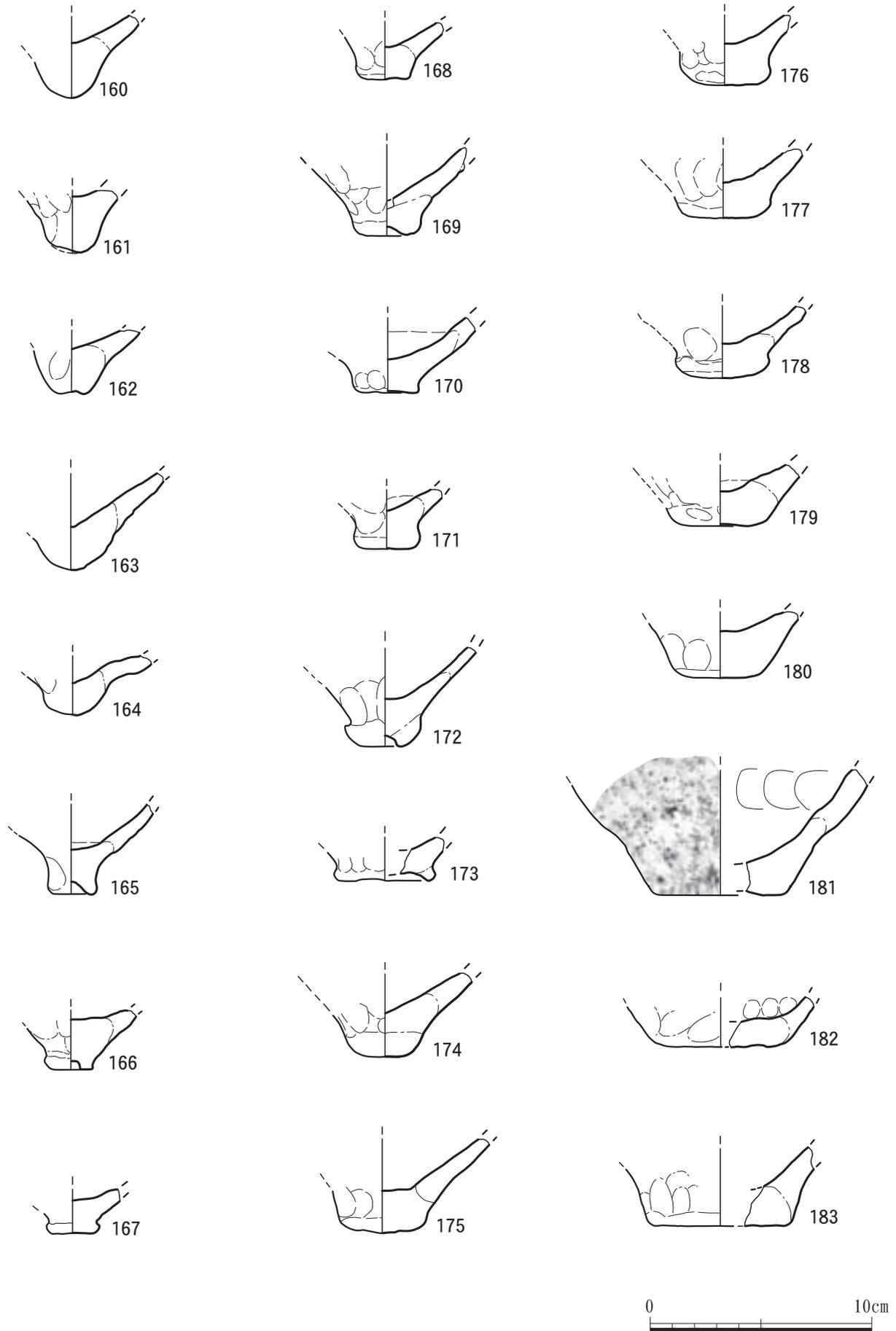
凡例 (◎)=非常に多い ○=多い △=少ない ≡=僅少



第31図 土器12 底部 (丸底・尖底)



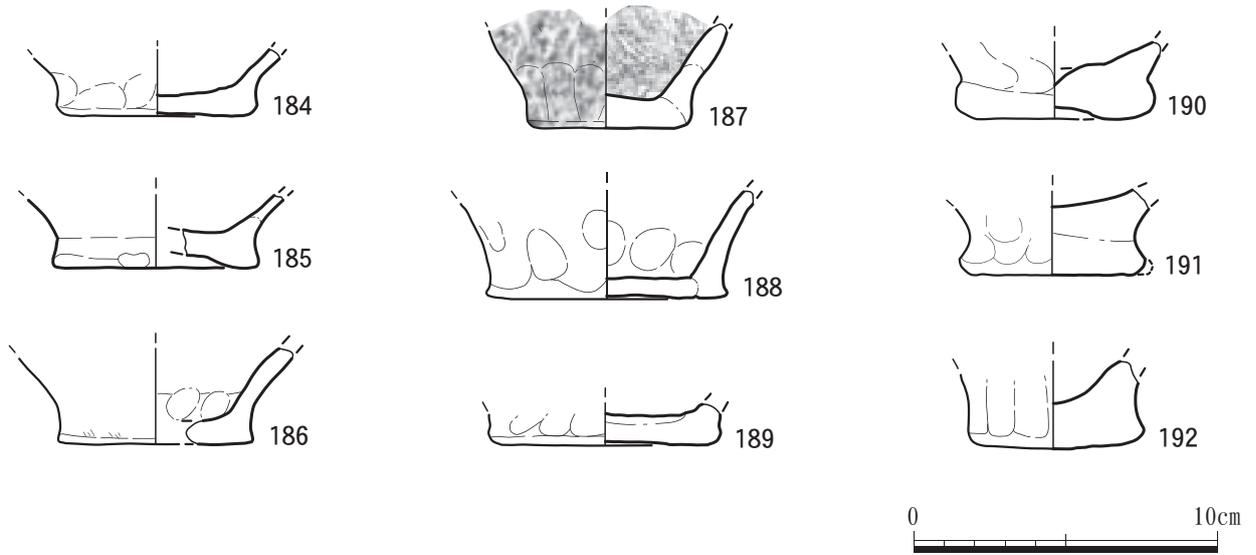
图版20 土器12 底部 (丸底・尖底)



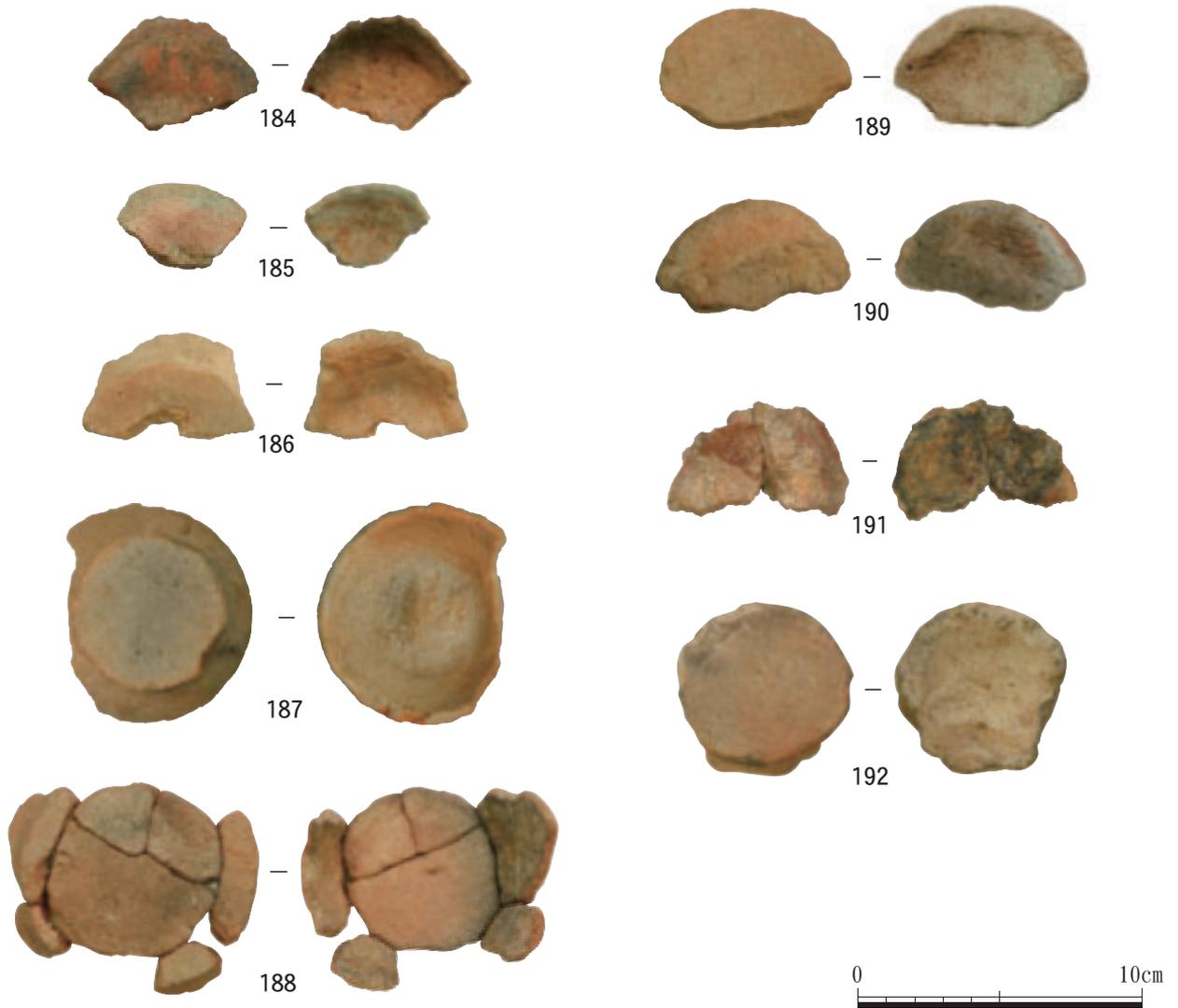
第32図 土器13 底部 (乳房状尖底・平底)



图版21 土器13 底部 (乳房状尖底·平底)



第33図 土器14 底部（くびれ平底）

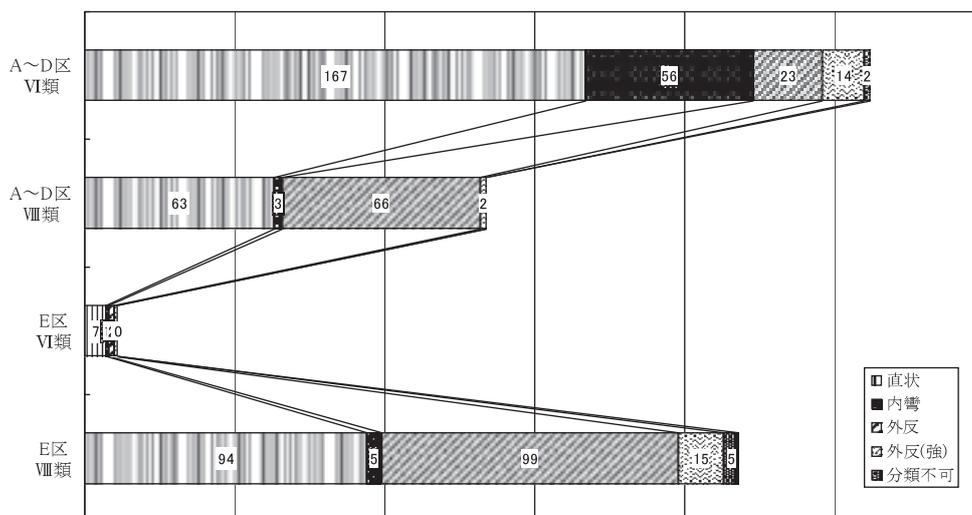


図版22 土器14 底部（くびれ平底）

第15表-2 II群土器(底部)観察一覧

第図図版	図番号	大分類	小分類	特 徴	法量		胎土	粒度量	混和材					器面調整		色調		出土地
					底径(cm) 重量(g)	器厚底厚(mm)			石英	礫石/角閃石	赤粒	白粒	砂粒	その他	外面 内面	外面 内面		
第32図版	173	乳房状尖底	b	外底面一楕円状の凹みや浅め	3.4 9.07	7 11	砂質	やや粗粒 やや多量	○				○		内外:コビナデ	内外:黄茶褐色	H17 V b層カ 1035SZ 台 1592	
	174	乳房状尖底	c	外底面一混和材粗粒のために手触りザラザラ・乳頭部大	2.5 71.45	6 20	砂泥質	粗粒多量	○		○		○		内外:コビナデ・指頭痕	内外:茶褐色	H18 III層 台 738	
	175	乳房状尖底	c	外底面一白色粒多い乳頭部大	3.8 68.06	5 18	砂泥質	やや粗粒 やや多量	○		○	○	○		内外:コビナデ・指頭痕	内外:茶褐色	G18 III層 台 653	
	176	乳房状尖底	c	乳頭部大	4 43.43	6 19	砂泥質	やや粗粒 少量	△	△			○		内外:コビナデ・指頭痕	内外:茶褐色	E12 V b層カ 0586SZ 台 876	
	177	乳房状尖底	c	乳頭部大	4 55.10	7 56	砂泥質	粗粒多量	△	◎			○		内外:コビナデ・指頭痕	内外:橙褐色	D16 V b層カ 0350SZ 台 970	
	178	乳房状尖底	c	外底面一粘土貼り付け・乳頭部大	4.2 55.70	6 16	やや砂質	やや粗粒 多量	◎	○	◎		○		内外:コビナデ・指頭痕	内外:赤褐色	I18 V b層(砂③) 台 108	
	179	平底	a	内底一中央部凹み外底一若干上げ底角一丸み	3.6 49.03	8 14	砂泥質	粗粒多量	○		◎	○	○		内外:コビナデ・指頭痕	内外:赤褐色	H18 III層 台 738	
	180	平底	a	角一丸み	3.8 92.90	7 21	やや砂質	粗粒多量	○		◎		○		内外:コビナデ・指頭痕	内外:灰茶褐色	E15 III層台 710	
	181	平底	a	ナデ(外一雑)角一丸み	5.6 100.65	8 15	砂泥質	粗粒多量	○		◎		○		内外:コビナデ・指頭痕	外:茶褐色 内:暗茶褐色	H16 V b層カ 1049P 台 1626	
	182	平底	a	ナデ(外一雑)角一丸み	6.4 28.45	5 13	砂泥質	粗粒 やや多量	○		○		○		内外:コビナデ・指頭痕	内外:赤褐色	G18 III層 台 773	
	183	平底	b	ナデ(外一雑)外底面一手触りザラザラ	5.4 44.48	9 -	砂泥質	粗粒 やや多量	○		○		○		内外:コビナデ・指頭痕	内外:黄茶褐色	G17 II層 台 394	
	第33図版	184	くびれ平底	a	外底一僅かに上げ底	6.4 23.56	3 5	やや砂質	粗粒 やや多量	△		◎	△	○		内外:ハケナデ・指頭痕	内外:茶褐色	H18 III層 台 732
185		くびれ平底	a	外底一僅かに、上げ底(不安定)ヤドカリ痕	5.4 16.72	4 9	泥質	細粒 少量				△	△		内外:コビナデ	内外:灰褐色	J16 II層 台 137	
186		くびれ平底	a	外面一ハケ目・ナデ(丁寧)ヤドカリ痕	6 22.05	4 6	泥質	粗粒 やや多量			◎		○		内外:コビナデ	外:淡灰褐色 内:橙褐色	I18 III層 台 690	
187		くびれ平底	b	薄手内底一膨らみ	5.2 80.57	4~7 11	砂質	細粒 中量	○	△			○		外:コビナデ・指頭痕 内:ハケナデ(条痕明瞭)	内外:淡橙褐色	I18 III層 台 690	
188		くびれ平底	b	外底一僅かに上げ底	8 61.94	5 6	砂質	細粒 中量	○	△			△		外:コビナデ丁寧・指頭痕 内:コビナデ・指頭痕	内外:茶褐色	J18 V b層カ 0250SK 台 1326	
189		くびれ平底	b	底厚が厚い	7.2 31.41	- 10	砂質	やや粗粒 少量	△				△		内外:指頭痕	内外:灰橙褐色	J17 V b層カ 0313SK 台 1963	
190		くびれ平底	d	外底一上げ底ヤドカリ痕	6.6 46.01	6 -	泥質	粗粒 多量			◎		○		内外:コビナデ	外:灰橙褐色 内:暗灰褐色	I18 III層 台 690	
第22図版	191	くびれ平底	d	底厚がより厚い	5.4 49.57	7 23	砂泥質	粗粒 少量					○	△	灰色粒 茶色粒	内外:コビナデ	外:茶褐色 内:黒褐色	G16 V b層カ 0350SZ 台 980
	192	くびれ平底		底厚が厚い	5.6 82.66	7 14	やや砂質	細粒 少量					○		灰色粒 茶色粒	内外:コビナデ	外:橙褐色 内:淡灰褐色	表採 台 5109

凡例 (◎)=非常に多い ○=多い △=少ない △=僅少



第34図 II群VI・VIII類口縁部傾き別構成比

〈4409SXの土器〉

本遺構から出土した土器は全体の27.2%（第10表）と狭い範囲で大量に出土した。出土遺物は4409SXでも述べたようにⅣ層とⅤa層にまとめられるが、堆積状況により1層～5層に分層して取り上げた。遺構の性格を明らかにするため、4409SXの遺構の項（第4節1）では土器を層ごとに図示した。ここでは、土器の分類に従い、略述する。

第10表に示したようⅡ群Ⅷ類（くびれ平底系土器）が主体で、口縁部～底部まで残る土器は少ないが、第37図55の口縁部は残りが良いため、同じ層のくびれ平底から形状や胎土などを考慮し、復元を試みた。4409SXで出土した土器は口縁部2759点、底部235点で口縁部から底部まで含めた分類は困難なため、それぞれで分類した。口縁部、底部の順で略述する。

〈口縁部〉

Ⅰ群〈貝塚時代前期土器〉

Ⅰ類4点、Ⅱ類1点、Ⅲ類1点、Ⅳ類3点の計9点の出土である（第9表）。

Ⅰb類（船元系土器）

図1・図2は船元系土器で、凸帯文、器厚は前者が0.7cm、後者0.8~1.0cmと差がある。図3は器面が剥落し文様は明瞭でないが、胎土からここに含めたが、他の可能性も考えられる。図1は2層、図2はⅤa層の出土。

Ⅲ類（面縄前庭式土器）

図4は幅1.2cmの肥厚帯で一见、仲泊式に似るが、内面のハケ目が顕著で、他に比べて赤味が強い土器である。小破片ではっきりしない。

Ⅳ類は小破片のため、図は省略した。

Ⅱ群〈貝塚時代後期土器〉

Ⅰ類～Ⅹ類まで出土したが、最も多いのはⅧ類である。以下、主なものについては第16表に観察一覧、第35～39図、図版23～27に示した。以下、分類順に略述する。

Ⅰ類（搬入土器）

口縁部の形状、胎土などから搬入された可能性が高いもので4点出土した。図5・図6は胎土に鉍物を多量混入するもので、いずれも口縁部でわずかにくびれて外反し、舌状をなすものである。前者は胎土も緻密で、縄文晩期系、後者がやや粗めの混入物で、弥生系の可能性が高い。図7は器厚0.5cmで、断面が三角形をなす凸帯文で、第21図22に類似する。図8は器厚が0.4cmと薄手であるが、均一で口縁部が逆「L」字状を呈し、直状するもので、口唇に斜沈線文を密に施すもので、内面は丁寧にハケで調整されるが、類例がなくここに含めた。

Ⅱ類（晩期系土器・有文）

口縁部の作りが丁寧に、文様を有するものである。図9・10は器厚が0.5cmと薄く、前者は口唇と外面に刻目文を施すもので、施文は口唇は深く外面は浅い。さらに後者は外面に幅広沈線文を施すものである。図11は口唇に不規則に刻目文を施すものであるが、胎土は砂泥質で、器面は丁寧に仕上げられ、口唇に序々に細くなる。図12・図13は外面に沈線文を施すもので、前者が斜位状、後者は不規則な沈線文を横位に施すものである。口縁部の作りは異なり、前者が丸く、口唇に深い斜沈線文、後者が口唇に膨らみを持たすものである。胎土をみると図9・図10・図13に角閃石などが含まれ、搬入あるいは浜屋原系土器の要素も見られる。

Ⅲ類（晩期系土器・無文）

器厚が0.8cmと厚手で、均一であることからやや古手の無文土器でⅢ類に分類される。

図14は直状口縁であるが、やや外反気味である。図15は口径25.8cmと大きく、外反口縁を呈し、口縁下3.0cmで外側にゆるやかに屈曲する。胎土は前者が赤粒を含みやや泥質で内面のハケ目調整が顕著である。後者は角閃石などの鉱物を多く含み、いわゆる浜屋原式土器の胎土に近い。図16は胴部で幅0.5cmの隆帯がみられる。凸帯文かあるいは、有段口縁の一部とも考えられる。胎土に砂粒を混入するが緻密で、器厚が0.5cmと薄手の土器である。

Ⅵ類（大当原式土器）

器厚が0.4～0.8cmと不安定で口縁部が細く、やや外反するものでいわゆる大当原式土器の範疇に分類されるもので、有文（図17～19）と無文（図20）がある。有文はすべて沈線文で、図17は2条1組で、緩やかな斜沈線、図18・19は不定形の沈線文で描く。胎土をみると図17は砂質で角閃石を含み、いわゆる浜屋原式土器に近い。図18・19は赤粒が多い。

Ⅷ類（くびれ平底系土器）

本遺構の主体の土器で、他区より出土数が多いため、ここで細分を試みた。器種は鉢と小型と壺があり、さらに鉢はa有文、b無文に分け、無文は口縁部の傾きで直状、有段、外反口縁に分けられる。

・鉢

a有文：文様の種類は①沈線文、幅広沈線文、②凸帯文上に刻目文の種類がある。

①沈線文：図21は外反気味の玉縁口縁で、頸部でくびれ、外面に縦位の斜沈線文を施すが、破片のため詳細は不明である。施文が深く、その構図から面縄前庭式土器にも似るが、胎土からⅧ類に近いことここを含めた。

図22は叉状の工具で浅い沈線文を屈曲して描くものである。上面から見ると口縁は角をなすもので、注口かあるいは方形口縁の可能性が考えられる。図23は口唇に深い刻目文を部分的に施し、外面は口縁を指で調整した後に幅1.0cmのハケで口縁を圍繞する。一見、文様のようでもある。その下位に幅0.5cmの幅広沈線文を鋸歯状に施すものである。口唇部の幅0.7cmと胴部に比べて厚く、角をなす。裏面に本類の特徴である横位のハケ目が見られる。図26は口唇に、短沈線文と刻目文の2種の文様を施すもので、外面に文様は見られない。類例がなく今後の資料の追加を待ちたい。砂質で器厚は0.5cm前後と均一である。内外面の口縁部は指頭痕が見られ、胴部は外面が縦位にナデ、内面は横位にハケ目調整が顕著である。取り上げ番号308（第36図26）、4409SX V a層（5層）の出土で、本遺構の時期を示す土器である。

②凸帯文：図24は口唇に刻目、口縁部に刻目+凸帯文を施すものであるが、口縁部が丸状、凸帯文が逆「U」字状を呈する。図25は口径13.2cmと小振りで、幅0.8mmの口唇に刻目文を施し、外面に幅0.7cmの凹文を圍繞し、その下位の凸帯文には刻み目を施す。厚は0.6cmと他よりは厚く、口縁部の形状からⅧ類よりは古手の可能性もあるが、やや砂質で焼成が良いことからここに含めた。

b無文：Ⅷ類の無文口縁には①直状、②有段、③外反口縁（強弱）がある。

①直状：口縁部はほぼ直状（図27・28）あるいは内彎（図32）をなすものである。

口縁断面は図27が舌状、図28は内面に粘土紐を貼り付け、補強する。そのため、やや内彎気味である。器面調整は内外面とも指頭痕が確認されるが、図30～32の内面はハケ目で横位に調整する。器厚は0.5～0.6cmであるが、図29は器厚が0.4cmと他に比べて薄手で、色調は灰～橙褐色

を呈する。図30がやや砂質で口縁部の作りも丁寧で、口唇を撮み出す様に角をなすもので、土器の作りは古手の様相を示す。図32は内彎気味で、焼成も非常に良く、やや新しいようである。図30以外は泥質を呈する。

②有段：口縁部に粘土紐を貼り付けるもので、幅が（イ）0.4～0.9cmの肥厚的なもの、（ロ）1.0～1.9cmの有段を呈するものがある。以下、それぞれについて略述する。

イ（0.4～0.9cm）：有段0.4cm～0.9cmの肥厚的なものである。いずれも泥質で、口縁部も整うもので丁寧な仕上げである。図33は粘土幅が0.4cmと細く、逆「L」字状の口縁である。器面調整もよく、黒褐色を呈し、内唇に若干入り突出する点で、他とは異なるが、泥質であることからここに含めた。図34・35は有段の幅が0.6～0.7cmと前者よりは太く、断面は三角形状を呈する。図36は有段幅が0.9cmで、段の部分がナデ消されるように胴部に至る。他に比べて雑な仕上げである。

ロ（1.0～1.9cm）：粘土紐を口縁部に貼り付けるものである。図37・38は1.0cmと狭く、胴部方向になでる。図40～43は復元可能で図40～42は口径と胴径はほぼ同じで胴部が張るもので、図43は口径が大きく鉢形になる。図39・44も同じような形状と思われる。粘土紐を貼り付けて、さらにナデ消し、口縁部を補強する作り方は本タイプの特徴を示すものである。

図40は幅1.3cmの粘土紐、口唇に粘土の境、器面の調整は良い。内面は頸部より下は横ヘラナデが顕著である。図41は径18.9cmとやや小振りで、口縁部は角を呈し、部分的に幅約1.0cmの粘土紐を貼り付け、若干胴部が張る。粘土紐は囲繞しない。口縁を補強するためのものと思われる。口縁部はゆるやかな波状をなす。

図43は口径24.2cmと中型で、口縁部は外反しながら丸味をだし、粘土紐貼り付け、玉縁状を呈する。いずれも焼成は非常に良く、泥質で裏面をハケで調整する点で共通する

③外反口縁

イ（外反-弱）：（図45～49）は外反が弱い。口縁部は不安定なものが主であるが、その中では図47は整っている。図47と図48は穿孔が見られる。色調をみると図45・48は暗褐色を呈し、他は赤～橙褐色を呈する。胎土は泥質が主体である。図45は胎土からやや古手の可能性もあるが、器面調整が類似することからここに含めた。

ロ（外反-強）：（図50～56）は前者に比べて外反の強い口縁で、口縁部は整っているものと不安定なものがある。図50は口縁が整い、他に比べて外反が大きい。また、図53・54は図28と同様、口唇に粘土紐の貼り付けが見られるが、外面では認められないためここに分類した。図51は推定口径18.3cmを測る。図54は口唇に斜沈線文が確認できる。施文は図26と同様、部分的なものと思われる。図55は口縁部が外反するもので、口径22.8cmを測るもので、図101の底部を用いて復元を試みた。同じくびれ平底である第30図124に比べて、胴部の張りが弱い。器厚も0.5cmとほぼ均一で、胎土は泥質で、焼成も非常に良好である。4409SXのV a（5層）層の出土、本遺構の基準となる土器である。

図56は頸部で一端屈曲して外反するくびれの強い口縁で、口唇は角を呈し、器厚は1.0cmとⅧ類の中では厚く、焼成も非常によい。Ⅷ類の中では異質で、新たな分類も可能であるが、資料が1点のみのため一応、ここに含めた。

・小型

口径15.0cm以下もので、器厚が0.4cm前後（図57～58）、0.5cm前後（図60～61）、0.6cm前後（図59）がある。薄手の図57と図58はやや外反気味で、さらに図58は鋸歯状に沈線文を施

している。図 59 は口縁部が明瞭な角を持ち、他に比べて厚く、器面調整は内面に顕著なハケ目が見られ、他の小型土器と様相を異にする。図 63・62 は口縁部がくびれ、そのため胴部の張るもので、口唇の作りはいずれもの丁寧で、後者は内唇にヘラ調整が顕著に見られる。前述した有文の図 25 も口径 13.2cm を測り、ここに含まれるものである。

・壺 a (有文) と b (無文) がある。

a (有文) : 凸帯文を口縁部に施したもの (図 64)、頸部に施したもの (図 65)、口縁部及び頸部に施したもの (図 67) がある。図 64 は幅 0.9cm の粘土紐を口縁部に圍繞させ、図 65 は頸部に幅 0.9cm の粘土紐を圍繞させ、断面をカマボコ状に調整するものである。

図 67 は幅 0.6cm の粘土紐を口唇に貼り付け、内外面に張り出すもので、さらに頸部に逆「V」字状に凸帯文を貼り付け、口縁部の接続部分では 1.2cm と口唇の幅が広くなり、上面からみるとやや方形を呈するようである。胎土に赤粒の混入が顕著で他と様相を異にする。

b (無文) : 図 66 は口径 5.0cm、なで肩の壺である。泥質で、外面に縦 0.9×横 0.8 (0.4) cm の混和材が抜けた孔がある。図 68 は前述と類似の形状を呈するが、破片が小さいため傾きははっきりしない。若干外反し、内面の器面調整も他の壺に比べて丁寧であることから甕の可能性も考えられる。

図 69 は口径 11.3cm と広口の壺で、口縁幅が 1.1cm と広く、口縁外面に粘土紐を貼り付け、内唇に張り出す。口唇の角は明瞭である。泥質で焼成は良い。

X類 (型式不明 - c)

図 70 は器厚が 1.1cm と厚手の土器である。大きさが 6.1cm×1.8cm の外耳を横位に貼り付けるもので、器厚及び耳の大きさから大ぶりの土器と思われる。粒の粗い石英や砂を多量混入する。外耳土器は伊礼原遺跡 (2007) で見られるが、本品は厚手で、耳部分はヘラで整えられており、所属時期は明瞭でない。

〈底部〉

4409SX の底部は総数 235 点の出土である。出土状況は第13表の通りで、堆積層序ごとに集計を行った。1・2・5層からの出土が多く、3・4層は僅かである。

底部の種別をみると、くびれ平底が 200 点と突出しており、全体の 85% と高い割合を占める。他には尖底が 8 点、乳房状尖底が 9 点と僅かの出土で、4409 SX はくびれ平底が主体となる。

以下、底部の分類に準じて記述し、個々の詳細は第16表の観察一覧に記した。

A類 (丸底)

丸底は僅か 3 点の出土で、図 71 の 1 点を図示した。底面が僅かに残り、全体的な形状から丸底と判断した。砂質で石英を多量に含むなど、全体的な特徴からくびれ平底より古いと思われる。

B類 (尖底)

尖底も 8 点の出土と少なく、図 72～75 に 4 点を図示した。図 72 は外底面がやや尖り気味で、a タイプの典型的な尖底である。図 73 は c タイプに分類出来るもので、外底面が丸みを呈し、小振りである。図 74 も外底面が丸みを呈するが、外側へかなり開き気味である。図 75 は底面が破損しているが、残存部の形状から尖底になるものと考えられる。

C類 (乳房状尖底)

乳房状尖底も 9 点と僅かの出土で、4 点を図示した。図 76 は、乳頭部が小振りな a タイプである。図 77 は外底面が凹みを呈するもので、b タイプである。

図 78・79 は乳頭部がやや大振りのもので、c タイプである。後者は、立ち上がりがナデ調整によりくびれが目立つ。

D類（平底）

平底は3点のみの出土で、2点を図示する。図 80 は底径が 4cm と小さく、小型の土器であろうか。胎土に白色粒を多量に含む砂質の底部である。胎土や混和材などの違いから、くびれ平底の時期より古手のものと考えられる。図 81 は立ち上がりの角が丸みを呈し、a タイプの平底である。底面もやや丸みを呈し、乳房状尖底の流れを汲むものであろうか。胎土に粗めの赤色粒や石英を含み、底厚もやや厚めである。

E類（くびれ平底）

くびれ平底は 200 点の出土で、b が最も多い。第13表をみると、4409SX 出土のくびれ平底は 85% と高い割合を示した。第14表の地区ごとにおける胎土分類からすると、胎土分析に出した図 101 と同じ泥質のくびれ平底が 78.5%、砂質が 17.5% の割合で、前者がかなり多いことがわかる。また、第11表に示した口縁部の胎土分類からもほぼ同様な割合であることがわかり、本遺跡のくびれ平底の特徴が一致していることが窺える。くびれ平底の底径は 5～7 cm のものが 130 点と多数を占め、中でも 6 cm 台が多い。復元した図 124 のくびれ平底土器の底径も 6.0cm である。また、4409SX からは 4.0cm 以下の底径を持つものが 8 点出土し、それらの口縁部には図 57・59・60～62 などのような小型のものが想定出来る。器面調整を見ると、外面に指頭痕、内面にはハケ目痕が目立つものが多い。以下、分類別に記述する。

a タイプのものは 16 点が得られ、図 82～85 の 4 点を図示した。図 82 はくびれの張りが強く、かなり外側へ開く。図 83～85 の 3 点は前者に比べてくびれの張りが弱く、立ち上がりの角度は 40° 以下で外側へ開く。b タイプはくびれ平底の中で最も多いタイプで、131 点が得られた。立ち上がりが直で、途中からくびれる b アタイプは図 86～88 の 3 点を図示した。図 86 は内底が若干盛り上がる。b イタイプは図 89～103 に図示した。底面からスムーズにくびれ、立ち上がりの角が比較的明瞭なもので、図 89 は底径が 4.6cm と小さく、立ち上がりが若干鏢状に見える。底径は概ね 5～7 cm が多い。

図 91 や図 95・96 など内底が若干盛り上がるものもある。図 100・103 には外底面に沈線文が見られる。前者は二本の幅広沈線（約 3 mm）がほぼ平行に施され、凹み面は外底面と同色であることから、当時のものと考えられる。そのうちの 1 本には、先端がやや丸みを帯びた半裁竹管状の起点が残る。後者の沈線は凹み面の器色が新しいことなどから発掘時に付けられたものと思われる。b イタイプの図 101 は胎土分析したところ、粗粒シルトで砂粒自体が微量しか含まれず、その中には石英と斜長石がやや多く、他には角閃石や不透明鉱物、チャートなどが含まれるとの結果が出た。くびれ平底の泥質としたものにはこのような胎土が多い。b ウタイプは図 104 の 1 点で、立ち上がり部が若干丸みを呈する。c タイプは図 105 で、底径が 4 cm と小さい。立ち上がりも直で、小型の土器が想定される。d タイプは図 106～108 の 3 点を図示した。

図 108 は鏢状が明瞭で、外底面には煤らしき黒色の直線が 3 本見られる。焼けた工具を押し付けたのであろうか、1 本は僅かに凹みを呈する。

F類（脚台）

図 109 に図示したように中空脚台が 1 点得られた。立ち上がりのくびれがあまり目立たず、中空部分も短くて安定している。第21図 33 の中空脚台と比べると、中空部分の長さやくびれ、胎土などに若干の違いが見られる。

第16表-1 4409SX 出土 土器観察一覧

第 図 版	図 番 号	大 分 類	中 分 類	小 分 類	部 位	特 徴	法 量		胎 土	混 和 材						器 面 調 整		色 調	出 土 地	
							口 径 (底 径) (cm) 重 量 (g)	器 厚 底 厚 (mm)		粒 度 量	石 英	輝 石・ 角 閃 石	赤 粒	白 粒	砂 粒	そ の 他	外 面 内 面			外 面 内 面
第 35 図 版	1	I	I	b	口縁部	口断：丸、傾：直状 有り（外-細凸帯） 曲文	- 9.86	7 -	砂質	細粒 多量	◎			○	○	光（黄）	ナデ・指頭痕	茶褐色	B12 IV層 4409SX (2層) 台4571	
	2	I	I	b	胴部	有り（外-細凸帯） 凸帯-弧状	- 11.05	8~10 -	砂質	やや粗粒 多量	◎				△	火山ガラス	ナデ	暗褐色	B13 Va層 4409SX 台5088	
	3	I	I	b	口縁部	口断：玉縁、傾：外反 無文	- 23.0	5 -	砂質	細粒 やや多量	△	◎	△				ナデ・指頭痕	暗褐色	B13 Va層 4409SX 台5087	
	4	I	III	-	頸部	有（外-凸帯上に貝殻文？）+直下 に縦沈線文2条	- 12.0	5 -	砂質	粗粒 多量	◎			◎			内：ハケ（条痕 顕著）	茶褐色（明）	C13 IV層 4409SX (1層) 台4556	
	5	II	I	-	口縁部	口断：舌、傾：外反 有孔（孔径4mm）	- 14.0	9 -	砂質	細粒 やや多量	◎	○			○		ナデ（丁寧）指 頭痕	暗茶褐色	B13 IV層 4409SX (3層) 台4636	
	6	II	I	-	口縁部	口断：舌、傾：上端外反 無文	- 19.0	12 -	砂質	細粒 多量	△	◎		△			ナデ・指頭痕	淡橙褐色	B13 IV層 4409SX (1層) 台4566	
	7	II	I	-	胴部	有り（外-凸帯文）	- 5.56	5 -		細粒 少量			△	△			ナデ	茶褐色	B12 IV層 4409SX (1層) 台4562	
	8	II	I	-	口縁部	口断：平、傾：外反 有り（口唇-斜沈線） シャープな沈線	- 3.36	4 -	やや 砂質	細粒 少量			△	△			ナデ	橙褐色	B12 Va層 4409SX 台4646	
	9	II	II	-	口縁部	口断：丸、傾：外反 有り（口唇-刻目文・外面-刻目文）	- 8.67	5 -	砂質	細粒 多量	◎	○			○		ナデ・指頭痕	淡灰褐色	B13 IV層 4409SX (1層) 台4566	
	10	II	II	-	口縁部	口断：舌、傾：上端外反 有り（外-幅広沈線文）	- 7.83	6 -	砂質	やや粗粒 多量	◎	◎	◎		○		ヘラナデ	外-暗褐色 内-淡茶褐色	B12 IV層 4409SX (1層) 台4562	
	11	II	II	-	口縁部	口断：丸、傾：直状 有り（口唇-刻目文）	- 26.62	5~8 -	砂泥質	細粒 少量	○				○	△		ナデ・指頭痕	暗橙褐色	C12 IV層 4409SX (1層) 台4555
	12	II	II	-	口縁部	口断：丸、傾：直状 有り（口唇-斜沈線・外-シャープな 斜沈線）	- 7.50	6 -	砂質	粗粒 多量	◎			△	△	雲母	ナデ・指頭痕	暗茶褐色	B13 IV層 4409SX 台4583	
	13	II	II	-	口縁部	口断：丸、傾：外反、有り 有孔（口唇-刻目文、外-沈線（横））	17.4 16.75	6 -	やや 砂質	粗粒 多量	◎	△	△	○		火山ガラス ？	ナデ・指頭痕	外-灰茶褐色 内-暗灰褐色	B13 IV層 4409SX (3層) 台4638	
	14	II	III	-	口縁部	口断：舌、傾：直状 無文	- 21.16	8 -	砂泥質	粗粒 多量	○	◎		○	△		ナデ内-ハケ目	茶褐色	C12 IV層 4409SX (2層) 台4579	
	15	II	III	-	口縁部	口断：舌、傾：外反 外-外面に斜位の細沈線文？	25.8 42.71	5~8 -	やや 泥質	やや粗粒 多量	△	◎	△	△			ナデ・ハケ目指 頭痕	淡灰褐色	C12 IV層 4409SX (1層) 台4555	
	16	II	III	-	胴部	有段？	- 7.2	4 -	泥質	細粒 少量	△			△		光（白）	ナデ	外-茶褐色 内-暗褐色	B12 Va層 4409SX 台4646	
	17	II	VI	-	口縁部	口断：丸、傾：直状 有り（外-斜沈線） 沈線幅-約2mm、沈線-やや弧状	- 13.31	6~9 -	砂質	やや粗粒 多量	◎	△	△		△		ナデ	赤褐色	B12 Va層 4409SX 台4646	
	18	II	VI	-	胴部	有り（外-沈線） 曲+直線	- 7.57	3~8 -	砂質	やや粗粒 多量		○	◎		△		ナデ	灰茶褐色	B12 IV層 4409SX (2層) 台4571	
	19	II	VI	-	口縁部	口断：丸、傾：やや外反 有り（外-沈線）、弧状	26.8 28.83	5~10 -	砂泥質	粗粒 多量	△		◎				ナデ・指頭痕	外-橙色内-灰 橙褐色	B13 IV層 4409SX (3層) 台4636	
	20	II	VI	-	口縁部	口断：舌、傾：外反 無文	- 21.94	6~10 -	やや 砂質	細粒 少量	○		△		△		ナデ・指頭痕	茶褐色	B12 Va層 4409SX 台4646	
	21	II	VII	a	口縁部	口断：玉縁、傾：外反 有り（外-斜沈線） 口唇部強調	- 5.70	5 -	泥質	細粒 少量					△	灰色粒	ナデ・指頭痕	灰褐色	B12 IV層 4409SX (2層) 台4571	
	22	II	VII	a	口縁部	口断：平、傾：直状 有り（外-沈線）、横+斜位	- 7.62	3~7 -	泥砂質	やや粗粒 多量			◎		△		ナデ・指頭痕	淡灰褐色	B12 IV層 4409SX (2層) 台4571	
	23	II	VII	a	口縁部	口断：平、傾：外反 有り（口唇-刻目文・外-斜沈線・ 鋸歯状）	- 17.84	5 -	泥質	細粒 少量			○		○		指頭痕・ハケ目	外-橙色内-灰 褐色	B12 Va層 4409SX 台4646	
	24	II	VII	a	口縁部	口断：丸、傾：外反 有り（外-逆「U」字状に凸帯文+ 刻目文・刺突文）	- 6.29	4 -	やや 泥質	細粒 少量	○				○		ナデ	赤褐色	C12 IV層 4409SX (1層) 台4555	
	25	II	VII	a	口縁部	口断：玉縁、傾：直状 有り（外-凸帯に刻目目・口唇-刻目 文）	13.2 9.14	4 -	やや 砂質	細粒 中量	△		○	△		光（白）	ナデ	灰橙褐色	C12 IV層 4409SX (1層) 台4555	
第 36 図 版	26	II	VII	a	口縁部	口断：丸、傾：外反 有り（口唇-短沈線文・刻目文）	21.8 15.40	5 -	砂質	粗粒 多量	△		◎		○		ナデ・ハケ目	外-暗灰褐色 内-灰茶褐色	B13 IV層 4409SX (4層) X:35973.328 Y:25734.667 Z:1.756 取308 台4732	
	27	II	VII	b	口縁部	口断：舌、傾：ほぼ直状 無文	24.0 41.85	7 -	泥砂質	粗粒 やや多量	○	○	△		△	灰色粒	ナデ・指頭痕	灰褐色	B12 Va層 4409SX 台4646	
	28	II	VII	b	口縁部	口断：平、傾：直状 無文	- 11.70	5 -	砂泥質	細粒 少量	△				△		ナデ・指頭痕	外-暗褐色 内-赤褐色	C12 Va層 4409SX 台4631	
	29	II	VII	b	口縁部	口断：丸、傾：直状 有り（外-三角刺突文・横位）	- 4.59	4 -	泥質	細粒 少量			○		△		ナデ	灰色	B12 Va層 4409SX 台4646	
	30	II	VII	b	口縁部	口断：平、傾：上端外反 無文	- 24.04	5 -	やや 砂質	細粒 少量	○			△	△		指頭痕・ハケ目 外-縦・内-横	外-灰橙褐色 内-淡灰褐色	C12 IV層 4409SX (1層) 台4555	
	31	II	VII	b	口縁部	口断：平、傾：外反（強） 無文	- 3.98	6 -	泥質	細粒 少量			△		△	光（白）	ハケ・指頭痕	灰橙褐色	C12 Va層 4409SX 台4631	
	32	II	VII	b	口縁部	傾：上端内彎 無文	- 13.69	5 -	泥質	細粒 少量			△		△		内-ハケ目	灰褐色	B13 Va層 4409SX 台5088	
	33	II	VII	b	口縁部	口断：平、傾：直状 無文	- 6.26	5 -	泥質	細粒 少量			○		△		ナデ・指頭痕	黒褐色	B13 Va層 4409SX 台5088	
	34	II	VII	b	口縁部	口断：平、傾：直状 有り（外-凸帯文、凸帯幅-6mm）	- 6.03	4 -	泥質	細粒 少量			○		△	灰色粒	ナデ	淡褐色	C12 IV層 4409SX (4層) 台4696	
	35	II	VII	b	口縁部	口断：平、傾：上端外反 有り（外-凸帯文）	- 9.95	5 -	泥質	細粒 少量			○	△			ナデ・指頭痕	淡褐色	C13 IV層 4409SX (1層) 台4556	

凡例 (◎)=非常に多い ○=多い △=少ない ▽=僅少

第16表-2 4409SX 出土 土器観察一覧

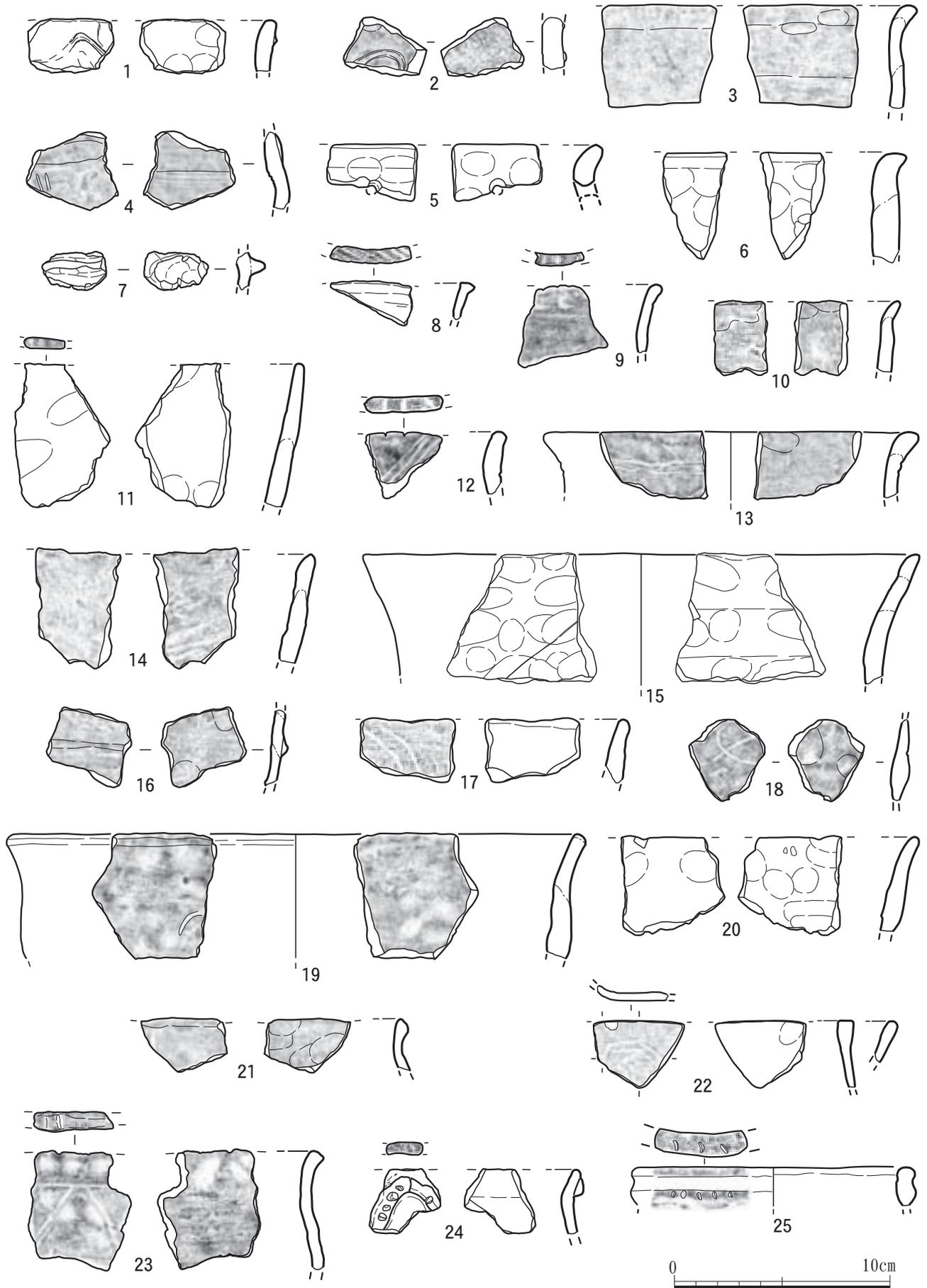
第図版	図番号	大分類	中分類	小分類	部位	特徴	法量		胎土	混和材					器面調整		色調		出土地
							口径(底径)(cm) 重量(g)	器厚底厚(mm)		粒度量	石英	輝石・角閃石	赤粒	白粒	砂粒	その他	外面	内面	
第36図	36	II	VII	b	口縁部	口断：平、傾：外反(弱)有り(微弱肥厚)肥厚幅-約10mm	11.8	5	泥質	やや粗粒 やや多量	◎	△	△	光(白)	ナデ・指頭痕	外-灰橙褐色 内-灰褐色	C12 Va層 4409SX 台4631		
	37	II	VII	b	口縁部	口断：丸、傾：外反有り(微弱肥厚)、肥厚幅-約10mm	21.55	4	泥質	細粒 少量	○	△	△	光(白)	ハケ・指頭痕	外-暗褐色 内-灰褐色	B12 Va層 4409SX 台4711		
	38	II	VII	b	口縁部	口断：やや丸、傾：直状有り(折り曲げ肥厚・微弱)幅-約13mm	9.88	5	泥質	やや粗粒 多量	◎	△	△		ナデ・指頭痕	灰褐色	C12 Va層 4409SX 台4631		
	39	II	VII	b	口縁部	口断：やや丸、傾：外反有り(外-凸帯文)二重	7.36	3	泥質	細粒 少量		△	△	光(白)	ナデ	灰褐色	C12 IV層 4409SX (1層) 台4555		
第24図	40	II	VII	b	口縁部	口断：丸、傾：外反無文	16.7 39.22	6	泥質	細粒 少量	△		△	光(白) 茶色粒	ナデ・指頭痕	淡橙灰褐色	B12 Va層 4409SX 台4711		
	41	II	VII	b	口縁部	口断：平、傾：外反有り(微弱肥厚)、肥厚幅-13mm	18.9 31.19	7	泥質	細粒 少量		○	△		ナデ 内-ハケ目	淡灰褐色	B12 Va層 4409SX 台4646		
	42	II	VII	b	口縁部	口断：玉縁、傾：外反有り(微弱肥厚)、肥厚幅-約17mm	23.08	6	泥質	細粒 少量		○	△	光(白)	ヘラナデ・ 指頭痕	外-橙色 内-灰橙褐色	C12 Va層 4409SX 台4631		
	43	II	VII	b	口縁部	口断：玉縁、傾：外反無文	24.2 33.23	5	泥質	細粒 少量	△		△	光(白)	ナデ・指頭痕ハ ケ目	灰橙褐色	B12 Va層 4409SX 台4646		
第37図	44	II	VII	b	口縁部	口断：丸、傾：やや外反有り(微弱肥厚)、肥厚幅-約20mm	20.22	6	泥質	細粒 少量		◎	△	光(白)	ナデ・ハケ目 指頭痕	外-灰褐色 内-橙色	B12 Va層 4409SX 台4646		
	45	II	VII	b	口縁部	口断：玉縁、傾：外反無文	14.35	6	砂質	細粒 少量	○	○	△		ナデ・指頭痕	暗褐色	B12 Va層 4409SX 台4646		
	46	II	VII	b	口縁部	口断：玉縁、傾：やや外反無文	17.78	7	砂泥質	粗粒 多量	△	◎	○		ナデ・ハケ目	赤褐色	C12 IV層 4409SX (4層) 台4696		
	47	II	VII	b	口縁部	口断：玉縁、傾：外反有り(外-舌孔)孔径-3×5mm・楕円形・内-貫通しない別の孔が有り(径-3mm)	14.43	7	やや砂質	粗粒 やや多量	○	◎	△	光(白)	ナデ・指頭痕	赤褐色	B13 Va層 4409SX 台5088		
	48	II	VII	b	口縁部	口断：丸、傾：外反有り(口唇・外-不規則刻目・細沈線)有孔(径4mm・両方から穿孔)	9.66	5	泥質	やや粗粒 やや多量	△	◎			ナデ	暗褐色	B12 Va層 4409SX 台4646		
	49	II	VII	b	口縁部	口断：丸、傾：外反(若干波状)無文	14.51	6	砂泥質	細粒 少量	○	○	○		ナデ・指頭痕	灰橙褐色	B12 IV層 4409SX (2層) 台4571		
	50	II	VII	b	口縁部	口断：平、傾：外反(強)有り(外-斜位の沈線・幅-0.5mm程)	17.33	7	泥砂質	細粒 少量			△	△	光(白)	ナデ	赤褐色	B12 Va層 4409SX 台4646	
	51	II	VII	b	口縁部	口断：丸、傾：外反無文	18.3 11.06	7	泥砂質	細粒 少量		△	△	△	光(白)	ナデ・指頭痕	赤褐色	B12 Va層 4409SX 台4646	
	52	II	VII	b	口縁部	口断：丸、傾：外反有り(外-沈線)、縦位に2本	12.93	7	やや砂質	やや粗粒 やや多量	△	◎	○		ナデ・指頭痕	淡褐色	C12 IV層 4409SX (2層) 台4579		
	53	II	VII	b	口縁部	口断：舌、傾：やや外反有り(折り曲げ肥厚・微弱)幅-6mm	8.68	3	泥質	やや粗粒 少量		△	△		ナデ・指頭痕	灰褐色	C12 Va層 4409SX 台4631		
	54	II	VII	b	口縁部	口断：丸、傾：外反無文	18.33	6	砂質	粗粒 多量	◎	○	○		ナデ・指頭痕	灰黄褐色	B13 IV層 4409SX (3層) 台4649		
	55	II	VII	b	口縁部	口断：丸、傾：外反無文 推定器高-25.7cm	22.8 212.26	5	泥質	細粒 少量	△	○	△		ナデ内-ハケ目	橙褐色	B12 Va層 4409SX 台4646		
	56	II	VII	b	口縁部	口断：平、傾：やや外反無文	48.69	10	泥質	細粒 少量			△	△	ナデ・指頭痕 内-ヘラナデ	灰橙褐色	B12 IV層 4409SX (2層) 台4571		
	57	II	VII	-	口縁部	口断：舌、傾：外反無文・小型	9.8 8.8	5	泥砂質	細粒 少量	△	○	△	光(白)	ナデ・指頭痕	淡灰褐色	B13 IV層 4409SX (3層) 台4636		
	58	II	VII	-	胴部	有り(外-鋸歯状沈線・沈線幅-1mm)	4.61	4	泥質	細粒 少量			△	△	ナデ	外-暗灰褐色 内-橙褐色	B12 Va層 4409SX 台4646		
	59	II	VII	-	口縁部	口断：平、傾：外反有り(外-孔)、貫通していない→途中?	12.0 24.11	7	泥質	細粒 少量		○	△		ハケ(外-縦・内-横) 指頭痕	灰橙褐色	B12 Va層 4409SX 台4646		
60	II	VII	-	口縁部	口断：平、傾：上端外反無文・小型	13.6 18.08	4	泥質	細粒 少量		△	△		ナデ・指頭痕	淡灰褐色	C12 IV層 4409SX (1層) 台4555			
61	II	VII	-	口縁部	口断：丸、傾：上端外反無文・小型	15.0 14.0	4	泥質	細粒 少量		△	△	灰粒	指頭痕・ハケ目	灰橙褐色	C12 IV層 4409SX (2層) 台4579			
第38図	62	II	VII	-	口縁部	口断：舌、傾：外反無文・小型	11.9 9.8	6	泥質	細粒 少量		△	△		ナデ・指頭痕	灰褐色	B12 IV層 4409SX (2層) 台4571		
	63	II	VII	-	口縁部	口断：平、傾：外反有り(外-沈線)、斜位	8.87	4	泥質	細粒 少量		○	△		ナデ・指頭痕	淡褐色	B13 IV層 4409SX (3層) 台4649		
	64	II	VII	a	壺口縁部	口断：平、傾：直状有り(外-凸帯文、凸帯幅-8mm)	5.8 6.32	4	泥質	細粒 少量			△	△	ナデ	淡褐色	C12 IV層 4409SX (1層) 台4555		
	65	II	VII	a	壺頭部	有り(外-凸帯文)	6.8(頭径) 8.99	7	やや砂質	細粒 少量	△	○	△	光(白)	ナデ	淡橙褐色	B13 IV層 4409SX 台4583		
	66	II	VII	b	壺口縁部	口断：丸、傾：直状無文	5.0 11.68	5	泥質	粗粒 多量		◎	△		ヘラナデ 指頭痕	外-暗灰褐色 内-灰橙褐色	B12 Va層 4409SX 台4646		
	67	II	VII	a	壺口縁部	口断：平、傾：直状有り(外-凸帯文)、凸帯は横+逆「V」字状	10.4 13.91	6	やや砂質	粗粒 多量		◎	△		ナデ	淡褐色	B13 Va層 4409SX 台5087		
	68	II	VII	b	壺口縁部	口断：やや丸、傾：直状無文・肩部張りだし	15.40	6	泥質	細粒 少量	△	△	△	光(黄)	ナデ・指頭痕	淡灰褐色	B12 IV層 4409SX (1層) 台4562		
	69	II	VII	b	壺口縁部	口断：平無文	11.3 26.5	4	砂泥質	細粒 少量		○	△	△	ナデ・指頭痕	灰褐色	B11 Va層 4409SX X:35976.342 Y:25735.326 Z:2.100 取502 台5230		
	70	II	X	-	胴部	横耳凸帯	60.53	11	砂質	粗粒 多量	◎	△	△	△	ナデ	灰茶褐色	B13 IV層 4409SX (4層) 台4722		
	71	A	-	-	底部	外底面が僅かに残る	7.30	4	砂質	やや粗粒 やや多量	◎		○	黒色粒	ナデ	外-赤褐色 内-淡灰褐色	C12 IV層 4409SX (4層) 台4696		
72	B	a	-	底部	底面が尖る	13.06	7 11	砂質	細粒 少量	○		△	△	ナデ	外-灰褐色 内-淡灰褐色	B13 IV層 4409SX 台4583			

凡例 (◎)=非常に多い ○=多い △=少ない △=僅少

第16表-3 4409SX 出土 土器観察一覧

第 38 図 ・ 図 版	図 番 号	大 分 類	中 分 類	小 分 類	部 位	特 徴	法量		胎 土	混和材						器面調整		色調		出 土 地	
							口 径 (底 径) (cm) 重 量 (g)	器 厚 底 厚 (mm)		粒 度 量	石 英	輝 石 ・ 角 閃 石	赤 粒	白 粒	砂 粒	そ の 他	外 面 内 面	外 面 内 面	外 面 内 面		外 面 内 面
第 38 図 ・ 図 版	73	B	c	-	底部	底面が丸い	2.5 46.0	6 16	やや 砂質	粗粒 多量	◎	△	◎	○	光(白)	ナデ	外一赤褐色 内一黄茶褐色	B12 IV層 4409SX (1層) 台 4562			
	74	B	c	-	底部	丸底の底面が丸みを呈する	3.0 15.75	9 13	砂質	やや粗粒 普通	○		△	△	光(白)	ナデ	外一灰褐色 内一淡灰褐色	B12 Va層 4409SX 台 4646			
	75	B	-	-	底部	底面破損	- 19.01	5 -	やや 砂質	細粒少量			△	△		ナデ(丁寧)	外一淡褐色 内一灰褐色	C12 IV層 4409SX (1層) 台 4555			
	76	C	a	-	底部	乳頭部が小振り	2.3 39.0	8 22	砂泥質	やや粗粒 普通			○	○		ナデ	外一灰褐色 内一灰褐色	C12 IV層 4409SX (1層) 台 4555			
	77	C	b	-	底部	乳頭部は小～中底面に凹みを呈する	2.2 41.0	6 15	やや 砂質	細粒 少量	○		○	△	光(白)	ナデ・指頭痕	茶褐色	B13 IV層 4409SX 台 4583			
	78	C	c	-	底部	乳頭部が大振り	2.0 18.33	- 20	砂泥質	粗粒 普通	○			△		ナデ	赤褐色	C12 Va層 4409SX 台 4631			
	79	C	c	-	底部	乳頭部が大振り	3.2 14.49	- 10	砂泥質	細粒 少量	△		○	△		ナデ	外一赤褐色 内一灰褐色	B13 IV層 4409SX (1層) 台 4566			
	80	D	b	-	底部	底径が小・底厚薄・立ち上がりの角が直	4.0 4.63	- 4	砂質	粗粒 多量	△	○	△	◎		ナデ	外一黒褐色 内一茶褐色	B13 IV層 4409SX (1層) 台 4634			
	81	D	a	-	底部	尖底的立ち上がり角が丸い	4.3 54.51	10 14	やや 砂質	粗粒 多量	○		◎	○		ナデ	外一灰赤褐色 内一暗茶褐色	B13 IV層 4409SX (4層) 台 4722			
	82	E	a	-	底部	くびれの張りが強い	5.9 7.58	4 7	泥質	細粒 少量				△	△	ナデ	外一灰褐色 内一灰褐色	B12 IV層 4409SX (1層) 台 4562			
83	E	a	-	底部	くびれの張りが強い	- 9.86	7 6	泥質	細粒 少量			◎		光(白)	ナデ	外一褐色 内一淡褐色	C12 IV層 4409SX (2層) 台 4629				
84	E	a	-	底部	くびれの張りが強い	5.0 9.07	4 8	砂質	粗粒 多量	○			△	△	光(白) 茶色粒	ナデ	外一灰褐色 内一褐色	B12 IV層 4409SX (2層) 台 4571			
85	E	a	-	底部	くびれの張りが弱い	6.6 9.89	6 10	泥砂質	やや粗粒 やや多量	○		◎		灰色粒 光(白)	ナデ	外一灰褐色 内一淡褐色	C12 IV層 4409SX (2層) 台 4579				
第 39 図 ・ 図 版	86	E	b	γ	底部	くびれの張りが弱い 立ち上がりが直	5.2 17.0	3 6	やや 砂質	細粒 普通			◎	○		ナデ(丁寧) 内底一ハケ目	外一灰赤褐色 内一赤褐色	C12 IV層 4409SX (1層) 台 4555			
	87	E	b	γ	底部	くびれの張りが弱い 立ち上がりが直	4.4 6.37	4 5	泥質	粗粒 多量			◎	○		ナデ・ハケ目	灰褐色	C12 IV層 4409SX (1層) 台 4555			
	88	E	b	γ	底部	くびれの張りが弱い 立ち上がりが直	5.8 14.0	6 5	泥質	やや粗粒 やや多量			◎	○	光(白)	ナデ	外一灰茶褐色 内一灰褐色	B12 Va層 4409SX 台 4646			
	89	E	b	ι	底部	くびれの張りが弱い 立ち上がりの角が比較的明瞭	4.6 6.22	4 5	泥質	細粒 少量			△		灰色粒 茶色粒	ナデ	外一灰褐色 内一灰褐色	C12 IV層 4409SX (2層) 台 4579			
	90	E	b	ι	底部	くびれの張りが弱い 立ち上がりの角が比較的明瞭	4.5 18.65	5 7	泥質	細粒 少量			△		茶色粒 光(白)	ナデ 内一ハケ目	灰褐色	C12 Va層 4409SX 台 4631			
	91	E	b	ι	底部	くびれの張りが弱い 立ち上がりの角が比較的明瞭	5.4 25.47	6 11	泥質	やや粗粒 普通			△	○	△	光(白)	ナデ(丁寧) 内底一ハケ目	灰黄褐色	C12 IV層 4409SX (1層) 台 4555		
	92	E	b	ι	底部	くびれの張りが弱い 立ち上がりの角が比較的明瞭	5.4 16.53	3 3	泥質	粗粒 多量				△	△	灰・黒粒 光(白)	ナデ	灰褐色	C12 IV層 4409SX (2層) 台 4579		
	93	E	b	ι	底部	くびれの張りが弱い 立ち上がりの角が比較的明瞭	6.0 8.0	3 4	泥質	細粒 少量				△	△	光(白) 灰色粒	ナデ	外一淡褐色 内一灰褐色	C12 IV層 4409SX (2層) 台 4579		
	94	E	b	ι	底部	くびれの張りが弱い 立ち上がりの角が比較的明瞭	6.0 21.96	7 5	泥質	細粒 少量				△	△	灰色粒	ナデ・指頭痕	外一灰褐色 内一灰褐色	B13 IV層 4409SX (3層) 台 4649		
	95	E	b	ι	底部	くびれの張りが弱い 立ち上がりの角が比較的明瞭	6.6 28.57	3 9	砂泥質	細粒 少量	△		◎			ナデ	灰褐色	C13 IV層 4409SX (2層) 台 4574			
	96	E	b	ι	底部	くびれの張りが弱い 立ち上がりの角が比較的明瞭	6.3 27.14	4 10	泥質	やや粗粒 やや細粒		△	○	△		ナデ内一ハケ目	外一灰褐色 内一灰褐色	B12 Va層 4409SX 台 4646			
	97	E	b	ι	底部	くびれの張りが弱い 立ち上がりの角が比較的明瞭	6.6 38.25	- 11	泥質	やや粗粒 普通			△		△	茶色粒	ナデ	灰褐色	B13 IV層 4409SX (3層) 台 4649		
	98	E	b	ι	底部	くびれの張りが弱い 立ち上がりの角が比較的明瞭	6.8 53.61	7 9	泥質	やや粗粒 普通			○		△		ナデ内一ハケ目	灰褐色	B12 Va層 4409SX 台 4711		
	99	E	b	ι	底部	くびれの張りが弱い 立ち上がりの角が比較的明瞭	6.6 28.04	47	泥質	細粒 少量	△			△	光(白) 灰色粒	ナデ・指頭痕 内一ハケ目	外一灰褐色 内一灰褐色	B12 Va層 4409SX 台 4646			
	100	E	b	ι	底部	くびれの張りが弱い 立ち上がりの角が比較的明瞭	8.3 25.51	58	泥質	細粒 少量	△		○	△	光(白)	ナデ内一ハケ目	灰褐色	B12 Va層 4409SX 台 4646			
	101	E	b	ι	底部	くびれの張りが弱い 立ち上がりの角が比較的明瞭	7.0 29.57	58	泥質	細粒 微量	△			△	光(白)	ナデ・ハケ目	灰褐色	C12 Va層 4409SX 台 4631			
	102	E	b	ι	底部	くびれの張りが弱い 立ち上がりの角が比較的明瞭	8.0 33.62	59	砂泥質	粗粒 多量	○		◎		△	ナデ	灰褐色	B13 IV層 4409SX (2層) 台 4635			
	103	E	b	ι	底部	くびれの張りが弱い 立ち上がりの角が比較的明瞭	8.5 29.90	54	泥質	細粒 少量			△	△	△	光(白)	ナデ・ハケ目	灰褐色	C12 Va層 4409SX 台 4631		
	104	E	b	η	底部	くびれの張りが弱い 立ち上がり部が丸みを呈する	4.6 52.89	- 10	砂泥質	やや粗粒 多量		△	○	△		ナデ・ハケ目	外一灰褐色 内一灰褐色	C13 IV層 4409SX (2層) 台 4574			
105	E	c	-	底部	底径が小	4.0 4.8	5 7	やや 砂質	細粒 少量				○	△	ナデ	外一褐色 内一灰褐色	B12 IV層 4409SX (2層) 台 4571				
106	E	d	γ	底部	鈎状を呈するもの 立ち上がり角が丸みを持つ	6.0 43.51	6 10	泥質	細粒 多量			◎	○	△	外一ナデ丁寧 内一雑 (渦巻き状)	茶赤褐色	C12 IV層 4409SX (4層) 台 4713				
107	E	d	ι	底部	鈎状を呈するもの 立ち上がり角は明瞭	5.8 16.33	5 8	泥砂質	やや粗粒 普通	△		○	○	光(白)	ナデ・ハケ目	黄褐色	C12 IV層 4409SX (4層) 台 4696				
108	E	d	γ	底部	鈎状を呈するもの 立ち上がり角が丸みを持つ	6.4 27.59	5 9	泥質	粗粒 多量	△		◎		△	内一ヘラナデ	灰褐色	B12 Va層 4409SX 台 4646				
109	F	-	-	底部	中空 くびれの張りが弱い	7.0 61.0	11 12	やや 砂質	細粒 少量				○	○	光(白)	ナデ・指頭痕	外一灰褐色 内一黒褐色	B13 Va層 4409SX 台 5087			

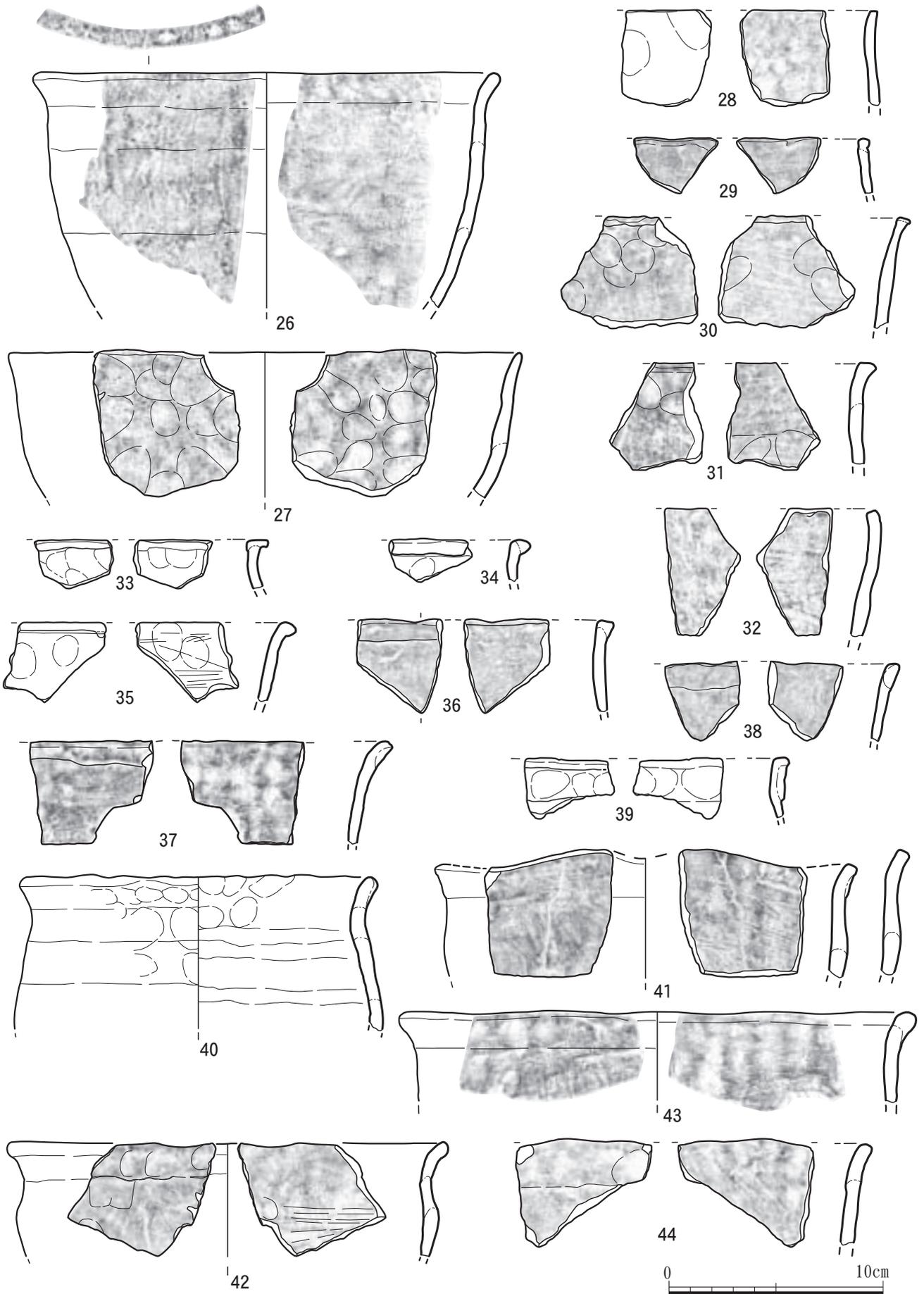
凡例 (◎)=非常に多い ○=多い △=少ない ▽=僅少



第35図 4409SX 土器 1 (I群・II-I・II・III・VI・VIII類)



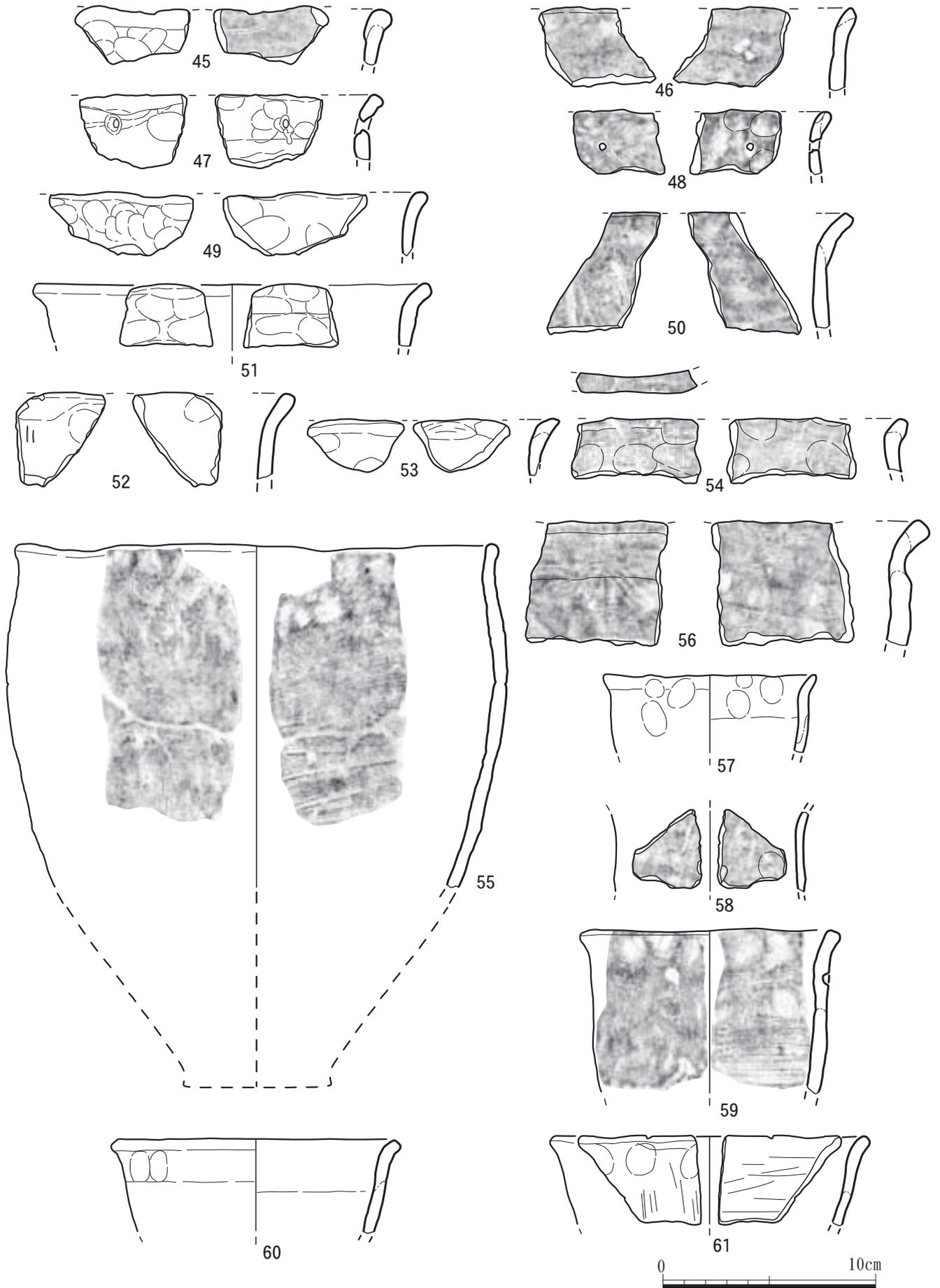
図版23 4409SX 土器 1 (I群・II-I・II・III・VI・VIII類)



第36図 4409SX 土器2 (Ⅱ-Ⅷ類)



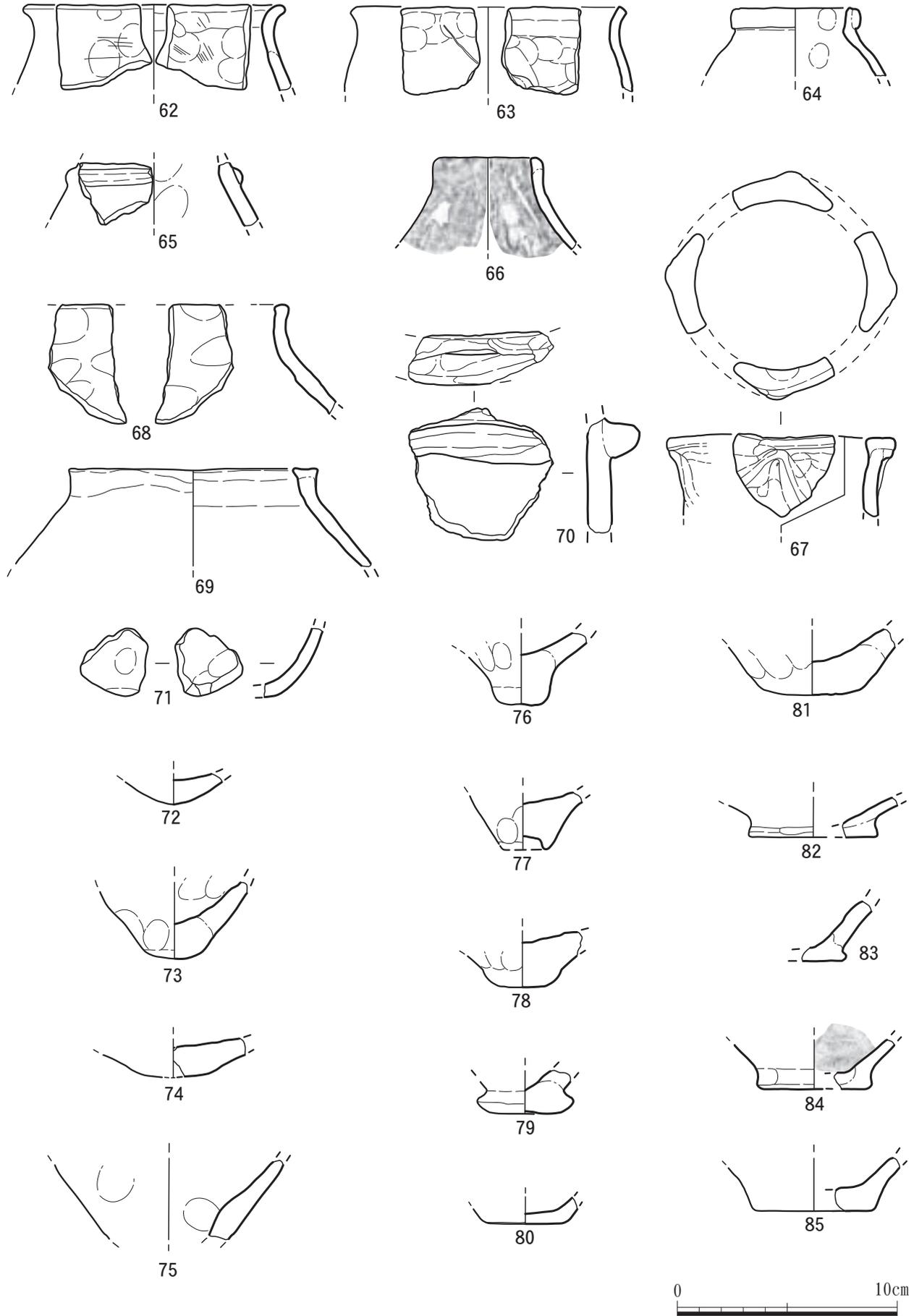
図版24 4409SX 土器2 (II-VIII類)



第37図 4409SX 土器3 (II-VIII類)



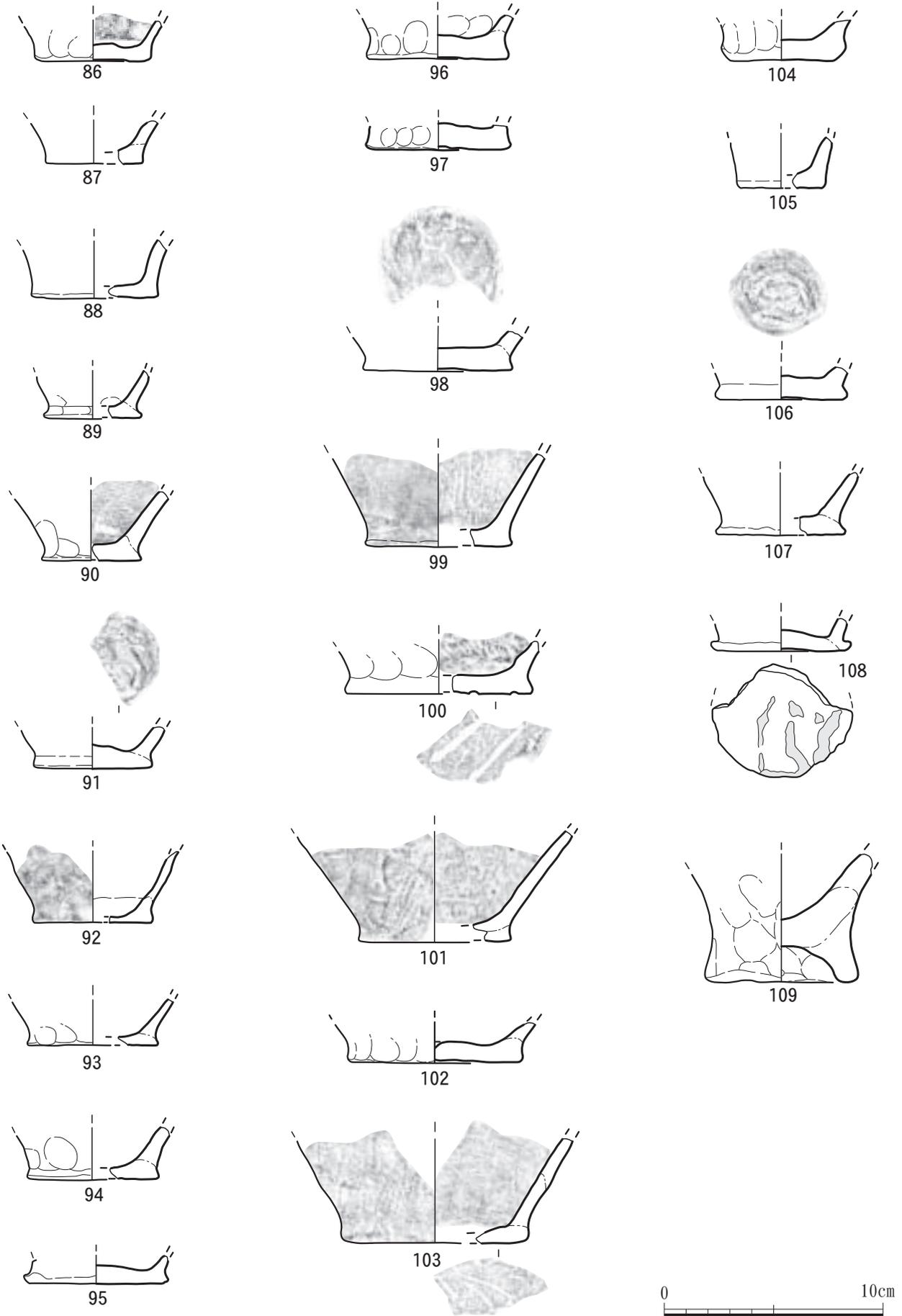
圖版25 4409SX 土器3 (II-VIII類)



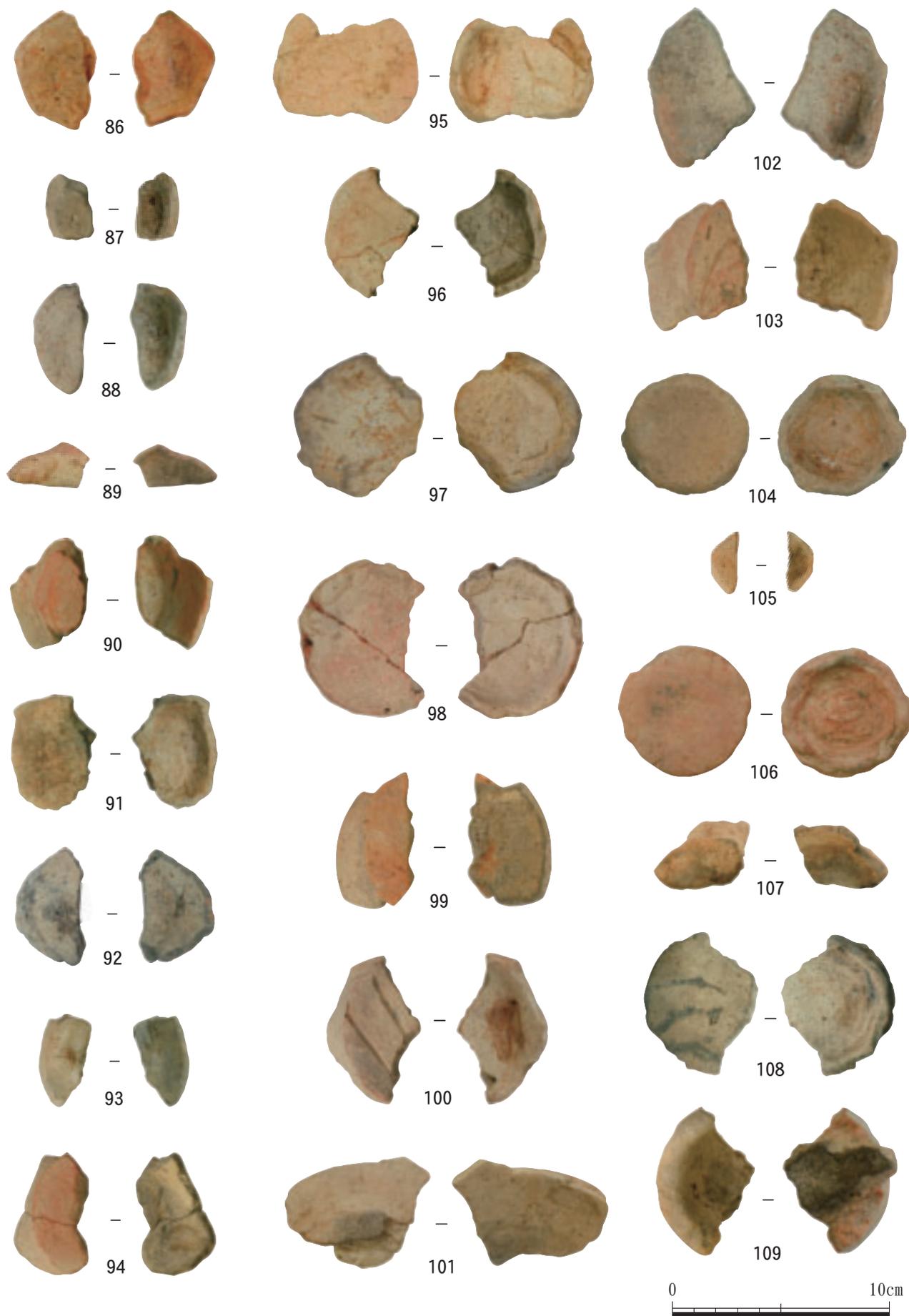
第38圖 4409SX 土器4 (Ⅱ-Ⅷ・X類・底部1)



図版26 4409SX 土器4 (II-VIII・X類・底部1)



第39圖 4409SX 土器5 (底部2)



図版27 4409SX 土器5 (底部2)

以上、各土器の概略を述べた。第11表にまとめたように本遺跡の土器を分類した結果、そのほとんどはⅥ類 (56.2%)、Ⅷ類 (37.4%) が占め、地区別にみるとⅥ類が A～D 区、Ⅷ類が E 区で主体を示す。ここではⅡ群土器の中で主体を示すⅥ類とⅧ類の口縁部の傾きと形態の関連を検討した (第18表)。

A～D 区についてみるとⅥ類の口縁部の傾きは直状が 63.7%、内彎が 21.4%、外反 (外反強を含む) が 14.1% で直状が多い。口縁形態をみると直状、内彎、外反とも厚手は「舌」が多く、薄手は「舌」と「丸」がほぼ同じ量が得られる。

Ⅷ類の口縁部の傾きをみると外反が 49.2%、直状が 47.0% と前者に比べて外反が多くなる。口縁形態をみると外反は「有段」、直状は「丸」の割合が高くなる。「有段」は薄手で加飾というよりは、口縁部に粘土紐を貼り付け、外反を強化するためと思われ、胎土は中間タイプが主体であるが、本区ではⅧ類は砂質と中間の割合が高い。

E 区についてみるとⅧ類土器が主体である。Ⅷ類は砂質と中間、泥質に分けられるが、本地区では泥質の割合が 48% とほぼ半数を占める。

口縁部の傾きをみると直状が 43.1%。外反が 45.1% を占め、Ⅵ類と比較すると外反の割合が高くなる。口縁形態は直状及び外反では「丸」や「角」の割合が高く、Ⅵ類に比べて「舌」が減る傾向が見られる。しかし、胎土でみると直状は砂質の割合が高く、外反では泥質の占める割合が高い。

底部についてみると A～D 区では乳房状尖底・尖底は 59.6% と多く、くびれ平底は 19.6% と低くなる。胎土でみると乳房状尖底・尖底ともに砂質が突出し、くびれ平底は砂質と泥質の割合が 40% 台とほぼ同じ割合である。

E 区ではくびれ平底が 85.1% を占め、その胎土をみると泥質が 78.5% を占める。

以上の状況から砂質主体の乳房状尖底及び尖底は A～D 区、泥質主体のくびれ平底は E 区に多い。また、口縁部はⅥ類が A～D 区に多く、口縁部も直状で「舌」が主体をなし、Ⅷ類は E 区に多く、口縁部も外反で「丸」や「角」の割合が高く、第17表に示したようなことが想定される。

A～D 区と E 区の主体土器が異なり、南区取り上げ資料 (第10図) に示したように V b 層下位 (砂①～⑥) でⅥ類が多く、乳房状尖底が出土する。V b 層上位及びⅢ層ではⅧ類とくびれ平底が多くなる傾向が見られることから時期差が確認された。

E 区の 4409SX のⅧ類はくびれ平底系土器で、出土するⅧ類の資料が文様や胎土 (泥質) からいわゆる「フェンサ下層式土器」と酷似する。

第17表 Ⅱ群Ⅵ・Ⅷ類口縁部形態と傾きの関係

地区・分類	口縁形態	直状										内彎				外反				外反-強				小計	地区別計							
		L	肥厚	玉縁	有段	舌	角	丸	玉縁	舌	角	丸	L	肥厚	玉縁	有段	舌	角	丸	-	L	玉縁	有段			舌	角	丸	肥厚	舌	丸	-
A D	Ⅵ類	厚手					56	1	29				26		12				6		2						6	3	1	1	145	396
		薄手			1	1	36	3	38	1	13		4				1	5	5	4						3				117		
	Ⅷ類	砂	3		7		5	7	22				1				2	2	1	4										54		
		中				1	1	3	1	5				2				1	1	2	4										60	
		泥	1				1			6						1	1	1		3	4						1				20	
小計	4	0	11	3	100	12	100	1	41	0	17	1	1	3	41	14	11	18	0	0	1	0	9	0	6	0	1	1	0	396		
E	Ⅵ類	厚手						2				2						1												6	229	
		薄手						2										1											5			
	Ⅷ類	砂	3	1	1	1	1	10	4								4	1	3	7									2	38		
		中	2		6		4	13	12		1	1		2		5	2	2	15	2		2				1	1	1	1	74		
		泥	3	2	3	7	1	8	12			2	1		1	6	2	2	20	25		3		1	1	1	5			106		
小計	8	3	10	8	8	32	32	0	2	3	1	2	1	15	2	6	26	47	2	3	2	1	1	2	7	1	0	1	3	229		
-	Ⅵ類	厚手					2																							2	21	
		薄手					4	1				1																	6			
	Ⅷ類	砂			1			1	2																					4		
		中				1																							2			
		泥						1									1												7			
小計	0	0	2	0	6	3	2	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	21		
合計	344										66				195				34				7				646					

(2) 土製品

土製品とした資料が2点出土している。素材は土器で、陶磁器や瓦類を円盤状に二次加工した遊具等の円盤状製品とは用途が異なるものと推測し土製品として扱った。

図1は土器底部の破損品を利用したものと考えられる。底の部分にあたる箇所縁の角をおとし丸みをつけているが、断面に明瞭な研磨は確認できない。両面ともひび割れが生じ、外面は指で押圧した痕跡がみられる。色調は突出した部分は白っぽく変色し窪みの部分は暗赤褐色を呈す。内面は凹凸がなく平たく器面調整しているようである。

図2は、前者のものより薄手の資料で打割したような痕跡が確認できるが、破損しており正円ではない。外面は指の押圧より小さな押突がみられ、色調は淡灰色～砂色を呈す。内面は、やや平坦で器面は橙赤褐色に焼けた色調を呈す。

土製品は本町の伊礼原E遺跡でも出土している。本遺跡以外にも土製品は、今回の調査で土器資料にみられた船元式土器と関連する遺跡として船元式土器の出土する里木貝塚でも出土しており、土版状を呈し用途は不明としている。

又、台付き皿型土器が本町の伊礼原E遺跡で出土しているが、その台付き皿型土器や市来式土器、の出土する草野貝塚でも土製品が大量に出土しており、草野貝塚では土製品に限らず軽石加工品にも円盤形の資料が出土している。その他、鹿児島県内の遺跡でも軽石円盤の記録がある。これらの用途不明の土版、又は円盤状の製品が九州南部各地の遺跡で見られるが、用途の判別は未だ確定されていない。

〈参考文献〉

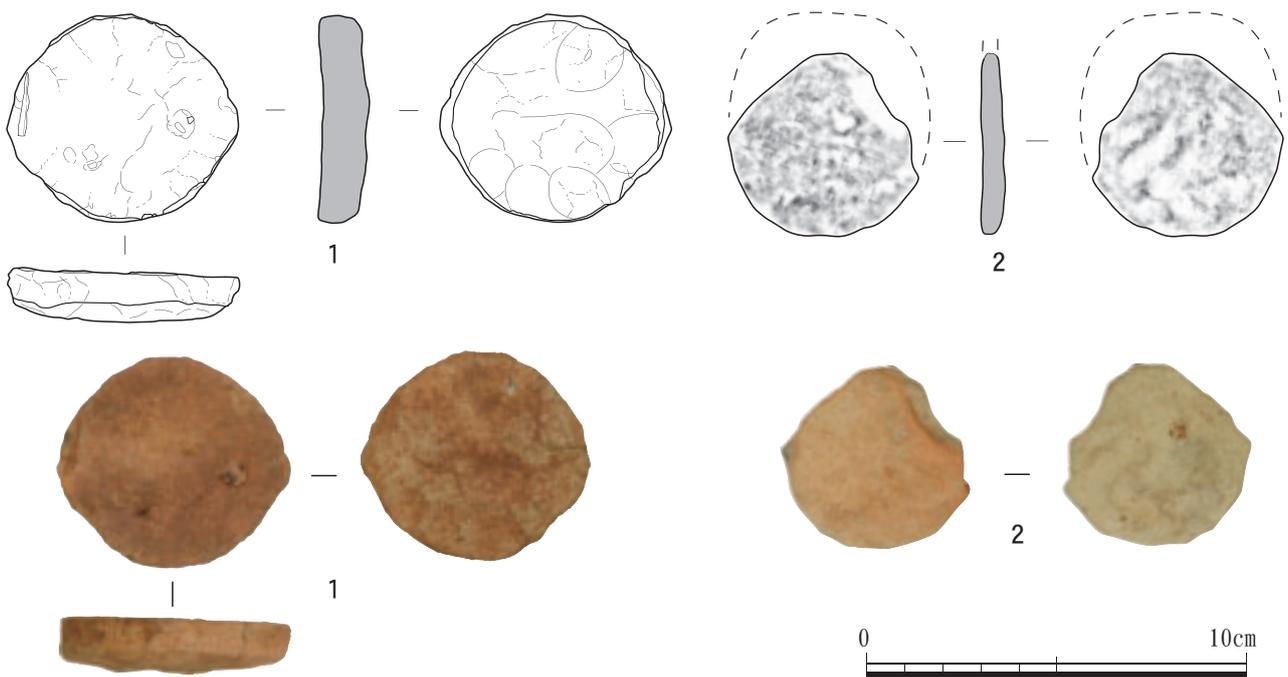
2010 『伊礼原E遺跡』(第二分冊) 北谷町文化財調査報告書 第31集 北谷町教育委員会

1971 『里木貝塚』-開館二十周年記念特集-倉敷考古館 倉敷考古館研究集報 第7号

1988 『草野貝塚』-宅地造成に伴う第1次・第2次緊急発掘調査報告書- 鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 鹿児島市教育委員会

第18表 土製品観察一覧

第図 図版	番号	素材	形状	計測値 (cm/g)				出土地
				縦	横	厚さ	重さ	
図第40 版28図	1	土器	やや正円	5.5	6.1	1.3	40.8	K17 V b層 台1989
	2	土器	略三角形	4.8	5	0.6	12.4	C12 IV層 4409SX (2層) 台4579



第40図・図版28 土製品

(3) 石器

今回の調査で石器は86点の資料が得られた。器種は石斧、敲石、磨石、敲石兼磨石、石皿、台石、砥石、チャート剥片、用途不明石器である。石斧類と敲打器類は出土した点数に比べ破損資料が多く集計は完形と破損状態で分類した。

第19表は器種別に出土した石器を層序ごとに示したもので層序はI層～Vb層である。I層では青磁、染付、沖縄産施釉陶器と共に用途不明石器が1点出土、II層は32点の出土で、近世～近代の包含層出土が多く24点、遺構出土は5点、攪乱から3点である。

III層は14点の出土で包含層から10点、遺構出土は4点である。IV層は4409SXのみ10点出土している。Va層も同じく4409SX出土の5点である。Vb層の出土は24点で砂層から14点、攪乱遺構出土9点、遺構出土1点である。(第20表)

検出遺構で石器が出土したのは17箇所、最も多いのは4409SXの15点である。敲打器類の資料が得られているが、石斧の出土はない。

石器出土の土坑は6基、0101SK、0743SKは青磁、染付も出土し、石器は磨石が出土している。0131SK、0692SK、0702SK、0723SKは石器以外の遺物はなく石斧、磨石などが1点ずつ出土し性格は明確でない。

柱穴は7基で0148P、0514Pから青磁、褐釉陶器、焼土と共に砥石、用途不明石器が出土している。0456P、0533P、0992P、1096P、1127Pは石器のみ1点ずつ出土している。

貝集積0656SSはVb層で磨石の破損品が1点出土している。0586SZでは染付、褐釉陶器と共に石斧の完形2点、破損品1点が出土している。

0008SFは近・現代のものと捉えられており、石斧の基部や敲打器類の破損品が5点出土している。(第20表)

第19表に器種別の出土状況を示し、主な石器を第43～52図・図版29～38に、全ての石器一覧を第24表に記した。

第19表 石器出土量

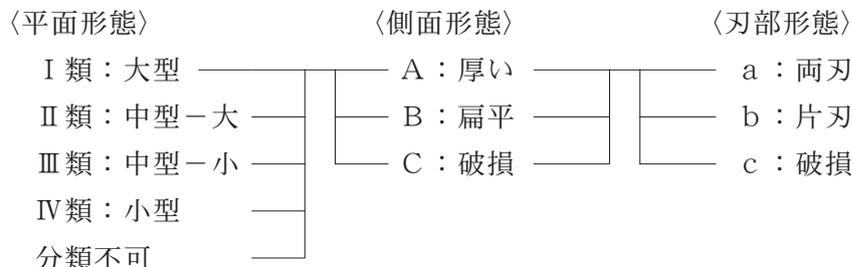
層	器種分類	石斧					敲打器類					石皿	砥石	台石	用途不明石器	チャート剥片	合計	
		完形		破損品			敲石	磨石			敲石兼磨石							
		刃部		基部	完形	完形		破損品	破片	完形	破損品							
		刃両	刃片				刃両											刃片
I															1		1	
II (攪乱)		2															3	
II (遺構)			1		1		1	6	4	2	2	1	3		2		24	
III					1		1		1		1		1				5	
III (遺構)								3	1		1				1	1	10	
III (遺構)								2					1		1		4	
IV (遺構)							1	5	1			1		1	1		10	
Va (遺構)								2		2	1						5	
Vb (攪乱)		1						1	2	1	1		1		2		9	
Vb		1				2		3	1	3	1	3					14	
Vb (遺構)								1									1	
小計		6	2	1	1	2	2	3	23	10	8	7	5	6	1	8	1	86
合計		12					53					5	6	1	8	1	86	

- II (攪乱) : (SZ) 0586
- II (遺構) : (SF) 0008, (SZ) 0586
- III (遺構) : (P) 0148,0514, (SK) 0101,0743
- IV (遺構) : (SX) 4409 (1～4層)
- Va (遺構) : (SX) 4409 (3・4層)
- Vb (攪乱) : (P) 0456,0533,0992,1096,1127, (SK) 0131,0692,0702,0723
- Vb (遺構) : (SS) 0656

1. 石斧 (第43・44図 1～10)

石斧は12点出土した。そのうち完形の石斧が8点(両刃6点、片刃2点)である。破損品は基部2点、刃部が2点(両刃1点、片刃1点)である。ほとんどの石斧がⅡ層、Ⅲ層の出土で3点はⅡ層攪乱の0586SZで出土している。二次使用で刃が潰れた資料を含めても点数は少ないが分類は以下のように行った。

石斧形態分類



〈平面形態〉

I類：長さが15cm以上、又は基部の幅、厚みから仮に復元して同程度と推測されるもの

Ⅱ類：平面観の長さが15cm未満～12cm以上、又は同程度と推測されるもの

Ⅲ類：長さが12cm未満～10cm以上の資料、あるいは同程度と推測されるもの

Ⅳ類：平面の長さが10cm以下の資料、あるいは同程度と推測されるもの

分類不可：基部のみ、又は刃部のみで二分の一以下の残存資料、平面観が推測不可能なもの

〈側面形態〉

A：側面観から基部に厚みがあり、刃部に向かうにつれ薄くなるもの

B：側面の基部が扁平で、刃部まではほぼ均一な厚みを持つもの

C：表面、裏面の片側が破損、側面の厚みが判断不可能な資料

〈刃部形態〉

a：刃部の研磨が両面から均等に刃を研ぎ出す(二次使用の資料も含む)

b：刃の研磨において片側が主に強く研ぎ出すもの

c：刃部破損により、刃の研磨状態が判断不可能な資料

第43図(石斧1)の石斧4点は基部に厚みがあり両刃(図1は除く)の資料を、第44図の6点(石斧2)は基部が薄いタイプで両刃と片刃のものを図示した。第44図8・9の2点の石斧は小型で幅が小さく細身、片刃の資料である。

2. 敲石 (第46図 19・20)

敲石は2点の出土で敲打痕の顕著なものを敲石としたが、微かに研磨痕も確認される。形態は扁平に近い資料と厚手で重量のある資料がみられ、どちらも完形で側面の中央部がくびれを成し分銅形を呈す。図19は扁平形で表裏面と側面下部に敲打痕が確認でき両側面には、抉りのようなくびれを持つ資料である。図20は円筒形に近い形態で上下端部に敲打痕を有し明瞭な面をつくる。この資料も両側面に浅いくびれのようなノッチを有し大略的に分銅形を呈す。

3. 磨石 (第49図 25)

磨石は36点で完形3点、破損品23点、破片10点である。集計で破損品と破片を分けているが研磨痕のある断片が資料にみられた為で、それも磨石に含め剥離片の要素が強いものを破片とした。

全体に破損品が多く形態的特徴は掴めなかった。図25は形状が不定形で扁平に近い資料である。研磨は表裏面にみられ、上端部と裏面は節理面から欠損したものと思われる。

4. 敲石兼磨石 (第45～49図 11～18・21～24・26)

敲石兼磨石は15点で完形8点、破損品7点、図・図版には13点を示した。敲石と磨石の用途を兼ねたものである。小型のものに同類の形態はなく、中型のものには石鹼状磨石と呼ばれるもの、大型の資料には厚みのある楕円状のものが数点みられた。

図21は完形で重量感があり、表裏面の研磨痕が非常に滑沢明瞭で使用頻度が高い。図26は大型資料で略三角形を呈し両面に研磨痕が、三角形の頂点部、下部2箇所には敲打痕が認められる。

又、その他の資料は完形のものほど研磨痕が浅く、破損しているものほど研磨痕が明瞭な傾向にある。敲打器類のサイズは縦・横の計測値が大きい程、厚みも増し厚みは縦・横の大きさに比例するようである。

5. 石皿 (第50・51図 28～30)

石皿は5点の出土で完形3点、破損品2点である。図28は大型の完形資料で中央に深い窪みの使用面を有し、図の縦断面、横断面で判るように使用面の上下左右で6cm前後の高低差がみられる。

図29は破損資料で大型と推測され、破損以前の原形が推測できないが使用面の中心部から破損している。図30は大型の完形資料で長楕円を呈し、表面中央に磨石の使用痕跡が明瞭に残る好資料である。今回の調査では両面(表裏)使用、薄手の資料は確認できなかった。

6. 台石 (第50図 27)

台石は1点の出土で完形である。図27は加工痕として石皿のような研磨面はなく、表面中央に敲打痕のみ認められる。敲石を使用する際の敷石とした可能性が考えられる。

7. 砥石 (第52図 32～36)

砥石は6点の出土で完形資料はなく半欠品3点、破損品3点である。原形の大きさが判断でき全体の二分の一以上と思われる資料を半欠品、原形の大きさが判断できない資料を破損品とした。

図33・34は同素材でシルト岩の砥石である。1面ないし2面に研磨面を有す。図33は一部に溝状の研磨痕がみられ細い棒状のものを研磨したものと思われる。図35は破損品だが残存部上端に孔を穿った痕跡が確認され、図35・36どちらもグスクの時期にみられる懸垂型砥石と考えられる。

8. チャート剥片 (第52図 31)

チャート剥片は1点の出土である。図31は加工痕の認められる資料で剥離調整され形成しているが、使用痕は確認できず用途が明確でない為チャート剥片とした。G18Ⅲ層出土である。

9. 用途不明石器

破損品で研磨痕が一部に認められるものの器種全体の形状が判別不能で、残存状態の形状から属す器種が特定できない資料を含めた。8点の出土である。

第41図は数量分布に出土状況を表わしたものである。全体に石器は調査範囲の南側グリッド16～18に多く集中し又、遺構4409SX(B12・13、C

第20表 遺構出土石器

遺構番号	器種 グリッド	石斧		磨石	敲石 兼 磨石	石皿	台石	砥石	用途 不明 石器	小計	合計
		完形	破損								
0586SZ	E12	2	1							3	3
0008SF	D・G10～12		1	2	1			1		5	5
0101SK	J17			1						1	6
0131SK	K18								1	1	
0692SK	F18				1					1	
0702SK	F18			1						1	
0723SK	F18	1								1	
0743SK	F18			1						1	
0148P	K18								1	1	7
0514P	J17							1		1	
0456P	H17			1						1	
0533P	I17			1						1	
0992P	H17				1					1	
1096P	J18							1		1	
1127P	G17								1	1	
0656SS	G17F16・17			1						1	1
4409SX	B12			3	3	1				7	15
	B13			3						3	
	C12			2			1		1	4	
	C13			1						1	
合計			5	17	6	1	1	3	4	37	37

12・13) にも点在する傾向にある。個別のグリッドから出土する石器の点数は極端な偏りはなく全て10点以下である。細分すると図のような状況で、5点以上の出土はB 12 (4409SX) 7点、F 18が6点、H17が8点、I18が5点の4箇所である。

器種の内訳は、B 12 (4409SX) で磨石3点、敲石兼磨石3点、石皿1点、F 18の出土は、石斧2点、磨石3点、敲石兼磨石1点、H17では石斧1点、磨石4点、敲石兼磨石1点、石皿1点、砥石1点、I18は石斧1点、磨石1点、敲石2点、砥石1点である。

次いで2～4点の出土が19箇所でもっとも多く、これもやはり南側グリッド16～18に集中している。1点のみの出土は8箇所でもっとも多く、これもやはり南側グリッド16～18に集中している。

又、下記の分布図と第41図の点上げ遺物の状況を合わせみると、平面とレベルの両面から石器の出土状況を確認することができる。又、第8図の層序(南壁)では層序が東～南へ傾斜するのと同じく点上げ石器が層位で一致することが判る。



第41図 石器平面分布

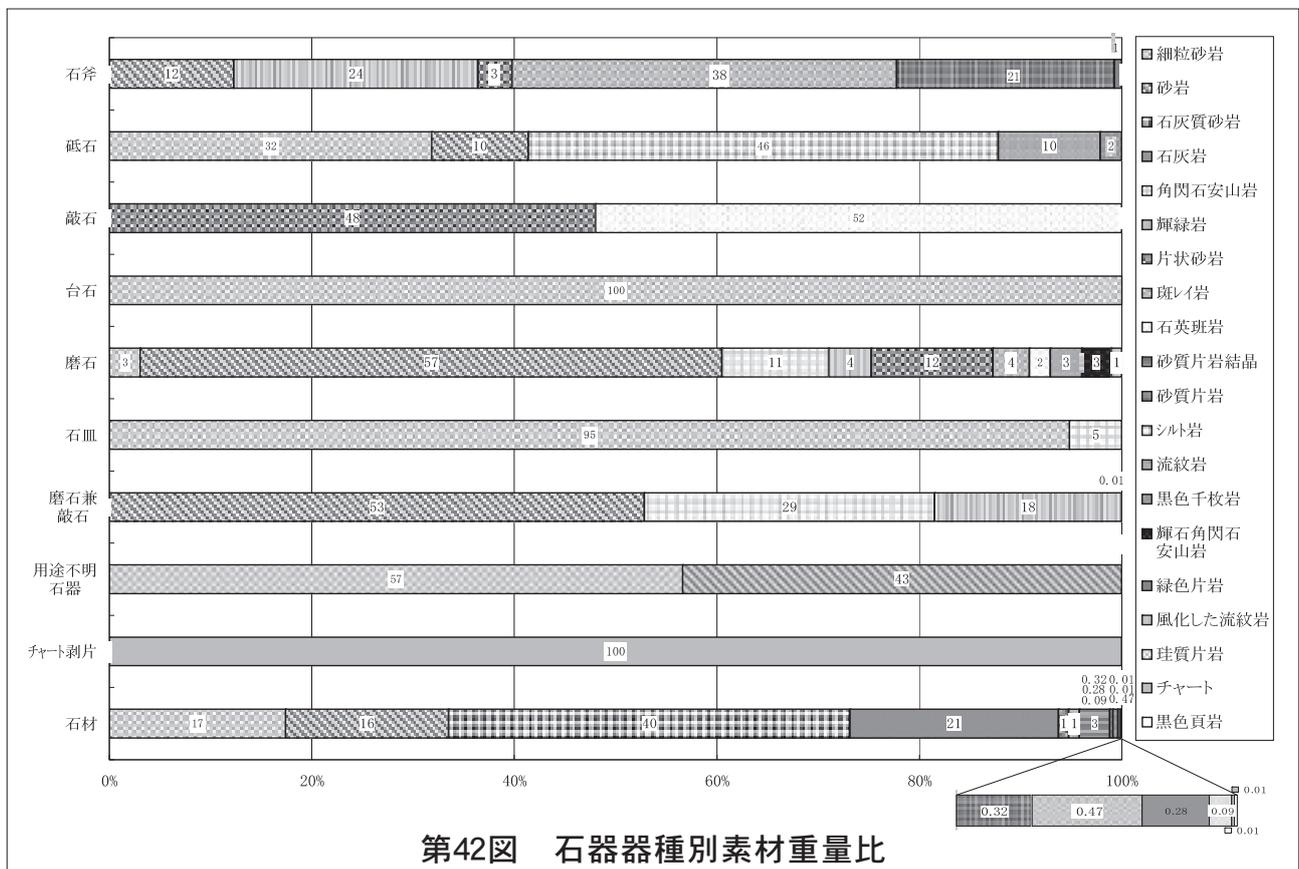
第21表 4409SX 石器出土量

全体層序	埋土層	器種 完/破	磨石			敲石兼磨石		石皿	台石	用途不明石器	合計
			完形	破損	破片	完形	破損	完形	完形	破片	
IV層	1層			2						1	3
	2層			1	1						2
	3層			1							1
	4層		1	1			1	1			4
Va層	5層			2	2	1					5
小計			1	7	1	2	1	1	1	1	15
合計				9		3		1	1	1	

4409SX 出土の石器は 15 点である。ほとんどが破損品で完形は 15 点中 5 点、図化した資料は 4 点である。調査時に埋土層を 5 層に分層、状況を確認したが層位に明確なものは得られなかった。1 層出土の石器が 3 点、2 層 2 点、3 層 1 点、4 層 4 点、5 層 5 点である。1 層～4 層は全体層序の IV 層に、5 層が V a 層にあたる。全体層序の場合では、IV 層から出土した石器が 10 点、V a 層出土が 5 点となる。石器の種類は磨石、敲石兼磨石、台石、石皿で、石斧の出土はない。

土器が大量に出土したことから、石器も状況確認をしたが石器では層位的な変化はみられなかった。4409SX から土器、石器以外に土製品、青磁、瓦も出土している。結果的に遺構の性格は明確に把握できず不明遺構として捉えることとした。

第42図は器種別に石質の割合を重量比で表したものである。器種では磨石が多く種類の岩石を用いており 10 種類、内訳は細粒砂岩 3 %、砂岩 57 %、角閃石安山岩 11 %、輝緑岩 4 %、片状砂岩 12 %、斑レイ岩 4 %、石英斑岩 2 %、流紋岩 3 %、輝石角閃石安山岩 3 %、風化した流紋岩 1 % である。磨石のうち稀なものは石英斑岩、流紋岩、輝石角閃石安山岩などで、これまで報告した北谷町の遺跡でもあまり出土のないものである。石斧に使用された岩石は砂岩、輝緑岩、片状砂岩、斑レイ岩、砂質片岩、緑色片岩である。



第22表 石器器種別素材重量

種類	細粒砂岩	砂岩	石灰質砂岩	石灰岩	角閃石安山岩	輝緑岩	片状砂岩	斑レイ岩	石英斑岩	砂質片岩結晶	砂質片岩	シルト岩	流紋岩	黒色千枚岩	輝石角閃石安山岩	緑色片岩	風化した流紋岩	注質片岩	チャート	黒色頁岩	合計	
石質																						
石斧		321				628	88	990			560					19						2,606
敲石							1,035		1,120													2,155
磨石	194	3,686			677	269	771	230	132				200		185		68					6,412
磨石兼敲石		5,901			3,200	2,063													1			11,165
石皿	56,908				3,100																	60,008
台石	20,000																					20,000
砥石	358	107										522	113	24								1,124
用途不明石器	188	144																				332
チャート剥片																				9		9
石材	6,189	5,733	14,107	7,330			353	377		1,070	113			166		101			33	5	4	35,581
合計 (g)	83,837	15,892	14,107	7,330	6,977	2,960	2,247	1,597	1,252	1,070	673	522	313	190	185	120	68		33	15	4	139,392

石質でみるとトータルでは細粒砂岩が多く、石皿に占める割合が最も多い。次いで砂岩が多く敲石兼磨石や磨石に用いている。角閃石安山岩は使用されている種類は少なく大型の敲打器類と石皿などである。石材では13種類の岩石が確認できたが、石器に使用された素材として出土のない岩石も6種類ほどみられた。輝緑岩が石垣島の於茂登岳周辺で産出されることは知られているが、沖縄本島では北部の名護、本部、国頭周辺で岩脈がある可能性も示唆される。

地質・石材

北谷町の地質は島尻層群（砂岩・泥岩）、琉球石灰岩等の地層が確認されている。又、本町は国頭礫層の南限であり、本島北部と同じ条件の岩石が採取可能と考えられる。今回の調査でほとんどの資料に砂岩が用いられ、石斧には斑レイ岩が多く使用されている印象を得た。

本遺跡で採取された石材は48点で、石器の素材として意図的に集められた痕跡はなく、石材集中部等の遺構は検出されていない。石器素材として不向きと判断した岩石はサンゴ礫、石灰岩（大型板状の素材は含まない）、10g以下の小破片でこれらは石材の範疇から除外した。

まとめ

石器は全体に出土量が少なく、層序はⅡ層やⅢ層、攪乱層からの出土も多い。層序的に上部の層から出土した資料も帰属時期は貝塚時代後期に属す資料と考えられる。

石斧の点数は破片を含め僅かで、形態的に基部が厚い両刃石斧、後期に出土する基部の薄い扁平片刃石斧、グスク期によく見られる刃部の幅が小さい石斧が出土した。石斧のほとんどが刃こぼれや潰れで刃の消耗が激しく使用頻度の高いことが把握できる。刃縁の潰れ方をみると敲石に転用されたと思われる資料も数点みられた。石斧は貝塚時代後期前半からグスク時代にかけて遺跡からの出土が減少していくとされ、本遺跡の石器に石斧の出土が少ないのも頷ける。

又、出土した資料のなかに有孔砥石が2点みられたが、これは懸垂型砥石と想定され後期末相当～グスク期と捉えられる。この種の砥石は鉄が広まるグスク時代にみられ石斧の出土が少ない理由と関係があるように思われる。詳細については今後、周辺遺跡の調査報告の成果に委ねることとする。

〈引用・参考文献〉

前田四郎編 沖縄産岩石鉱物図説 1967年 琉球政府立理科教育センター
 加藤祐三著 奄美沖縄岩石鉱物図鑑 1984年 新星図書出版（株）
 五十嵐俊雄 考古資料の岩石学 平成18年 パリノ・サーヴェイ株式会社
 加藤祐三著 軽石－海底火山からのメッセージ 2009年（株）八坂書房
 上原静 琉球砥石考 南島考古 第29号 2010年 沖縄考古学会
 遅沢壮一・渡辺康志 名護・やんばるの地質 2011年 名護博物館
 北谷町文化財調査報告書 第33集 平安山原地区試掘調査 2011年 沖縄県北谷町教育委員会
 中山清美 2004 「奄美諸島の石器・石製品」 高宮廣衛・知念勇編 『考古資料大観12 貝塚後期文化』 小学館
 岸本義彦 2004 「奄美諸島の石器・石製品」 高宮廣衛・知念勇編 『考古資料大観12 貝塚後期文化』 小学館

第23表－1 石器 観察一覧

第図 図版	図 番号	器種	平面 形態	側面 形態	刃部 形態	残存 状況	加工痕/ 使用痕の 有無	刃の 使用状況	石 質	縦(cm) 横(cm) 厚み(cm) 重量(g)	観 察 事 項	出土地
第 43 図 ・ 図 版 29	1	石斧	Ⅱ類	A	a	完形	形成痕のみ/ 研磨なし	刃縁あり/ 未研磨/ 未使用	砂質片岩	14.5 6.6 3.2 400	初段階の剥離成形は良い。側面、刃部も細部まで整形されており完成形の形態が推測される。研磨は施されていないが刃部は両刃である。	H17 Ⅲ層 取22 台838 X：35938.073 Y：25735.007 Z：3.170
	2	石斧	Ⅰ類	A	a	破損品/ 刃部残存	研磨痕	刃こぼれ 激しい	砂 岩	7.6 8.05 2.55 321	基部の殆どは折れて欠損している。残存する基部の幅は一定である。刃渡りの幅があり、これに見合う基部の長さは、大型の石斧と推測される。両刃である。表裏、両側面に研磨が確認できる。	E12 Ⅱ層 0586SZ 取16 台832 X：35963.383 Y：25725.806 Z：2.316
	3	石斧	Ⅲ類	A	a	完形	研磨痕	刃縁潰れ 二次使用	斑レイ岩	11.9 5.0 3.2 354	刃部の研磨は顕著で刃縁は擦りによる潰れで消滅している。磨石の代用に転用したものか。基部、刃部ともに全面研磨されており、刃部は両刃である。	F18 Vb層力 0723SK 取61 台1795 X：35940.480 Y：25741.877 Z：3.346
	4	石斧	Ⅲ類	A	a	完形	成形痕及 び研磨	刃縁潰れ 二次使用	斑レイ岩	10.5 6.1 3.4 358	基部の一部と刃部に研磨痕が認められる。刃部の研磨は二、三度研ぎなおした痕跡が確認できる。刃縁は擦りによる潰れで消滅、磨石に転用したものと推測される。両刃である。	I18 Vb層 取200石ミ 台652 X：35931.678 Y：25735.113 Z：2.468
第 44 図 ・ 図 版 30	5	石斧	Ⅱ類	B	a	完形	研磨痕	刃こぼれ 激しい	輝緑岩	13.7 5.6 2.2 334	基部は全体に良く研磨され、両側も面を成す。厚みは側面に向かうにつれ薄くなる。刃部は両刃で使用頻度が高く刃こぼれが激しい。	F17 Ⅲ層 取20 台836 X：35943.509 Y：25742.460 Z：3.550
	6	石斧	Ⅲ類	B	a	完形	/研磨痕	刃こぼれ 微かにあり	斑レイ岩	10.6 6.3 2.1 270	基部、刃部に研磨がみられる。基部の幅は一定で、研磨は顕著である。刃部の範囲は小さく両刃である。	E12 Ⅱ層 0586SZ 取19 台832 X：35963.931 Y：25722.844 Z：2.505
	7	石斧	Ⅳ類	B	a	完形	研磨痕	刃こぼれ 微かにあり	輝緑岩	8.2 5.7 1.6 146	全面研磨され、研磨状態は明瞭である。基端まで研磨が及び、平面観は基部全体の長さが短く折れた後、基端頭部を再度研磨した印象を窺わせる。両刃である。	E12 Ⅱ層 0586SZ 取17 台833 X：35963.330 Y：25724.998 Z：2.202
	8	石斧	Ⅳ類	B	b	完形	研磨痕	刃こぼれ 微かにあり	片状砂岩	9.3 3.9 1.7 87.6	基部の幅は細く、右側に厚みが偏る。研磨は表面と基部側面、刃部にみられ、小さい刃こぼれが数カ所確認される。刃部は片刃である。	H18 Ⅲ層 取12 台641 X：35933.778 Y：25736.676 Z：3.236
	9	石斧	Ⅳ類	B	b	破損品/ 刃部残存	研磨痕	刃こぼれ 微かにあり	輝緑岩	4.84.71.8 61.5	図8と同じく基部の幅が細い。横断面から刃縁のゆがみが確認でき刃を研ぎ直した際に偏りが生じたと考えられる。基部、刃部に研磨がみられ、片刃である。	F18 Ⅱ層 台781
	10	石斧	Ⅳ類	B	b	完形	成形痕及 び研磨	刃こぼれ 激しい	砂質片岩	8.6 5.4 2.0 160	基部は薄手で剥離調整は良く、表面の研磨は部分的で基部中央部と刃部の一部にみられる。裏面は刃部のみ研磨し、刃を付けている。刃部は片刃である。	I16 Ⅱ層 取1 台156 X：35933.783 Y：25726.416 Z：2.892

第23表－2 石器 観察一覧

第図 図版	図 番号	器 種	分類 サイズ	分類Ⅱ 形態	残存 状態	石 質	縦(cm) 横(cm) 厚み(cm) 重量(g)	観 察 事 項	出土地
第 45 図 ・ 図 版 31	11	敲石兼磨石	小型	円形	完形	輝緑岩	5.4 5.1 3.4 170	形状はやや扁平で円形を呈す。使用痕は明瞭で、表裏面に研磨痕、側面に擦痕と小さい窪みを成す。	G16 II層 台251
	12	敲石兼磨石	小型	不定形	破損品	砂 岩	7.0 6.5 4.9 246	表面中央に小さい敲打痕、表裏面には研磨痕が確認され、特に裏面の研磨が顕著である。下部面に擦痕がみられる。	D・G10～12 II層 0008SF (ビーチロック道) 台4537
	13	敲石兼磨石	小型	楕円形	破損品	砂 岩	8.3 5.9 4.8 390	形状は卵型を呈す。使用痕は、表面中央に研磨と敲打痕が確認される。	I16 II層 台141
	14	敲石兼磨石	小型	不定形	破損品	砂 岩	8.3 6.2 3.3 197	残存する資料は小型の破損品で完形の状態は想定できない。使用面の研磨は顕著で側面に敲打が僅かにみられる。	B12 Va層 4409SX (3層) 台4641
	15	敲石兼磨石	中型	石鹼状	破損品	砂 岩	9.6 9.1 5.6 740	石鹼状磨石の変形したもので研磨は表裏面にあり、両面とも中央に敲打痕がみられる。横断面の形状は良好である。	J18 Vb層 台4679
	16	敲石兼磨石	中型	石鹼状	完形	砂 岩	8.6 7.3 4.4 480	石鹼状磨石と呼称される資料である。研磨痕は表裏面にみられ、両面とも中央に僅かな敲打が確認できる。	K17 Vb層 台1967-2
第 46 図 ・ 図 版 32	17	敲石兼磨石	中型	楕円形	破損品	砂 岩	7.7 7.5 6.8 500	破損しているが完形の状態は厚みのある楕円を呈すと想定される。表裏面中央に窪み状の敲打痕を残す。表裏面に研磨痕あり。	F16 II層 台366
	18	敲石兼磨石	中型	長楕円	完形	輝緑岩	11.0 5.2 4.8 473	石鹼状磨石を二分した形状で全面に研磨痕あり。破損後に側面も使用し、研磨されたと考えられる。	F18 Vb層カ 0692SK 台1218
	19	敲石	大型/ 扁平	分銅型	完形	片状砂岩	16.1 9.2 4.3 1.035	形態は整い、両側面中央はくびれの形状を示す。表裏面、両側面に敲打痕あり。研磨痕は表裏面に僅かに確認できる。	I18 Vb層 取37石ミ 台644 X：35928.319 Y：25734.127 Z：2.190
	20	敲石	大型/ 厚手	分銅型	完形	石英斑岩	14.3 7.3 6.0 1.120	上下両端に敲打痕の面を残す。両側面中央は窪み、表面の中央、側面に敲打の痕跡が明瞭である。裏面は平坦でやや研磨がみられる。	I18 Vb層 取66 台1981 X：35930.385 Y：25735.552 Z：3.021
第 47 図 ・ 図 版 33	21	敲石兼磨石	大型	楕円形	完形	角閃石安山岩	13.2 12.0 7.1 1.620	表裏面に研磨痕が認められ、研磨の状態は滑沢で顕著である。下側面に擦痕が確認できる。	B12 Va層 4409SX (4層) 台4737
	22	敲石兼磨石	大型	楕円形	完形	チャート	12.2 10.3 5.5 1.150	大型の石鹼状を呈し使用面は全面に研磨痕がみられる。敲打痕が表裏面、両側面、上下面の六面にみられる。石質の性質上、研磨痕がみられるのは稀な資料である。	H18 Vb層 取292 台4887 X：35933.030 Y：25739.013 Z：3.029
第 48 図 ・ 図 版 34	23	敲石兼磨石	大型	楕円形	破損品	砂 岩	14.5 10.5 7.5 1.590	表裏面に研磨面あり。研磨の状態は顕著、上面に角度を変えた擦痕面が2面みられる。	H17 Vb層カ 0992SD 台1892-2
	24	敲石兼磨石	大型	楕円形	破損品	角閃石安山岩	14.9 10.2 8.0 1.580	磨りの痕跡が顕著にみられる。表面中央と下端部に敲打痕が僅かに確認できる。	F12.13 III層 台1058

第23表－3 石器 観察一覧

第図 図版	図 番号	器 種	分類Ⅰ サイズ	分類Ⅱ 形態	残存 状態	石 質	縦(cm) 横(cm) 厚み(cm) 重量(g)	観 察 事 項	出土地
第49図・ 図版35	25	磨石	大型	不定形	破損品	砂岩	10.5 13.1 5.5 1.270	形状は不定形、上端部は節理面から剥落したものとみられる。表裏面には研磨痕が確認でき裏面のほうが顕著であるが、裏面は大きく打割により剥離している。	H18 Vb層 取296 台4930 X：35933.618 Y：25737.089 Z：2.914
	26	敲石兼磨石	大型	略三角形	完形	輝緑岩	12.6 13.7 5.5 1.420	形態は特徴的な略三角形を呈す。表裏面は研磨痕が顕著で上下、両側面に敲打痕が数カ所認められる。三角形を成す角は敲打により丸みを帯びる。	K17 Vb層 取69 台1984 X：35923.512 Y：25723.219 Z：2.700
第50図・ 図版36	27	台石	大型	不定形	完形	細粒砂岩	33.6 29.4 14.6 20.000 (20kg)	大型の資料だが原形をとどめている印象はなく破損品と思われる。表面中央部は窪みを有すが研磨痕は認められず、細かい敲打の痕跡がみられたため敲石とセットの台石と考えられる。	C12 IV層 4409SX (4層) 台4730
	28	石皿	大型	不定形	完形	細粒砂岩	39.1 44.8 19.5 32.000 (32kg)	大型の石皿で、形態を成形した様子はみられない。中央部にかなり深い窪みを呈す。器形の上下左右には高低差があり、据わりの悪い形状を成す。	B12 IV層 4409SX (4層) 取307 台4731 X：35974.999 Y：25735.805 Z：1.727
第51図・ 図版37	29	石皿	大型	不定形	破損品	角閃石安山岩	20.2 15.4 7.9 3.100	残存部の右寄りに使用痕による窪みが確認できる。器形の中央から破損し原形をとどめていないが、残存状態よりさらに大きい資料であったと考えられる。使用痕は表面のみみられる。	H16 Vb層 取98石ミ 台648 X：35939.491 Y：25727.492 Z：2.472
	30	石皿	大型	楕円形	完形	細粒砂岩	50.7 26.9 10.7 18.500 (18.5kg)	形態は縦長の楕円状を呈す。使用面は中央が深く外側へ向け序々に浅く広がる。中央部は使用痕が顕著でセットで使用した磨石の大きさが判る程である。	H16 Vb層 取85石ミ 台639 Z：35939.237 Y：25730.074 Z：2.816
第52図・ 図版38	31	チャート剥片	小型	不定形	完形	チャート	3.3 2.8 0.8 9	チャートを加工した剥片と考えられる。丁寧に剥離調整し、加工痕跡は明瞭だが使用痕は確認できない。	G18 III層 台656
	32	砥石	中型	長方円	半欠品	砂 岩	10.1 3.4 2.7 107	細長の資料で研磨の状態から砥石と考えられる。側面に研磨による面が数カ所みられる。	H17 II層 台284
	33	砥石	中型	不定形	半欠品	シルト岩	11.3 6.4 3.4 265	棒状のものを研いだ痕跡と、擦り切りのような痕跡がみられる。刃の薄い対象物を研いだものと考えられる。	J18 II層 台210
	34	砥石	中型	不定形	半欠品	シルト岩	10.3 6.2 3.6 257	表面と側面に使用痕がみられる。表面の研磨痕は明瞭で細かい傷が確認でき、図33の資料と同様に刃先の鋭いものを研いだ可能性がある。	I18 II層 台243
	35	砥石	小型	角棒型	破損品	黒色千枚岩	4.9 2.0 1.4 24	残存部の形状から小型の懸垂型砥石と推測される。形態の上下は破損し、上部に孔を穿った痕跡がみられ穿孔部分から欠損している。	F11 II層 0008SF 台59
36	砥石	中型	板状	破損品	流紋岩	9.7 4.9 1.7 113	懸垂型砥石と考えられる。短冊形を呈し、六面に研磨痕が確認される。孔の穿ちは両面から穿孔し、雑な痕跡を残す。	J17 III層 0514P 台1294	

第24表 石器出土一覽

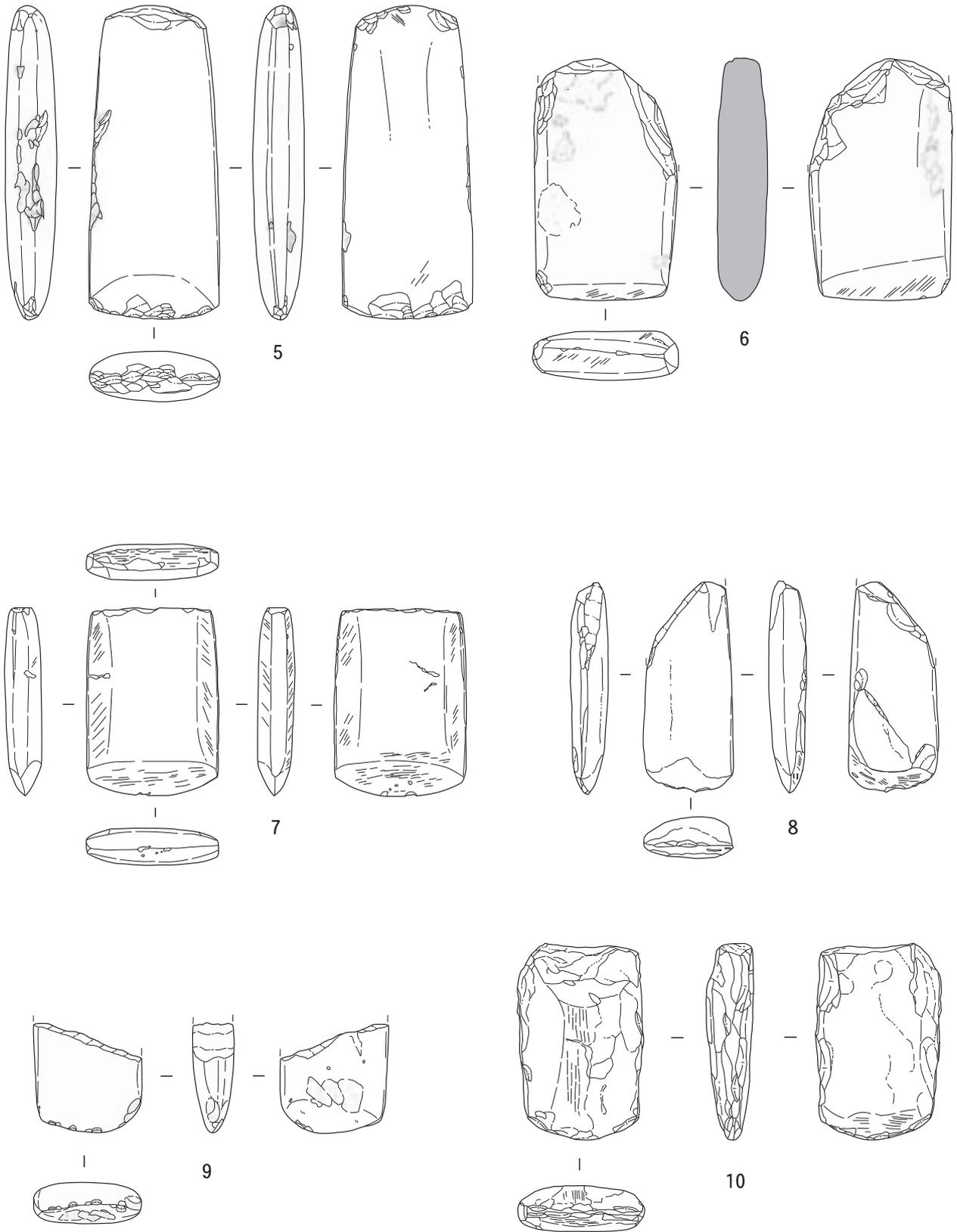
番号	器種	石斧刃部形態	残存状態	加工痕/使用痕の有無	研磨状況	石質	縦 (cm)	横 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	グリッド	層序	遺構	dot 上げ取り上げ地点			挿入 番号
														X	Y	Z	
1	石斧	両刃	完形	刃部、基部に研磨	全面研磨/明瞭	輝緑岩	8.2	5.7	1.6	146	E12	II (攪乱)	0586SZ	35963.330	25724.998	2.202	第44図7
2	石斧	片刃	完形	成形痕及び研磨	基部と刃部の一部	砂質片岩	8.6	5.4	2.0	160	I16	II		35933.783	25726.416	2.892	第44図10
3	石斧	両刃	完形	研磨痕	刃部、基部に研磨	斑レイ岩	10.6	6.3	2.1	270	E12	II (攪乱)	0586SZ	35963.931	25722.844	2.505	第44図6
4	石斧	片刃	完形	研磨痕/刃こぼれ	刃部、基部側面のみ	片状砂岩	9.3	3.9	1.7	87.6	H18	III		35933.778	25736.676	3.236	第44図8
5	石斧	両刃	完形	刃縁つぶれ/二次使用	刃縁つぶれ/二次使用	斑レイ岩	11.9	5.0	3.2	354	F18	Vb(攪乱)	0723SK	35940.480	25741.877	3.346	第43図3
6	石斧	両刃	完形	研磨痕	全面に研磨/良好	輝緑岩	13.7	5.6	2.2	334	F17	III		35943.509	25742.460	3.550	第44図5
7	石斧	両刃	完形	成形痕のみ	研磨なし	砂質片岩	14.5	6.6	3.2	400	H17	III		35938.073	25735.007	3.170	第43図1
8	石斧	両刃	完形	成形痕及び研磨	基部の一部と刃部	斑レイ岩	10.5	6.1	3.4	358	I18	Vb		35931.678	25735.113	2.468	第43図4
9	石斧	両刃	破損品/刃部	研磨痕/刃こぼれ/基部折損	表裏面/両側面研磨	砂岩	7.6	8.0	2.55	321	E12	II (攪乱)	0586SZ	35963.383	25725.806	2.316	第43図2
10	石斧	片刃	破損品/刃部	研磨痕	刃部、基部に研磨有り	輝緑岩	4.8	4.7	1.8	61.5	F18	II					第44図9
11	石斧	破損品/基部	研磨痕	表面の一部	輝緑岩	5.6	6.8	1.5	86	D・G10~12	II (遺構)	0008SF					
12	石斧	破損品/基部	研磨痕	両側面のみ	緑色片岩	2.8	4.4	0.9	19	E18	II						
13	蔽石	完形	表面/上下/両側面/敲打痕	僅かに有り	片状砂岩	16.1	9.2	4.3	1035	I18	Vb		35928.319	25734.127	2.190	第46図19	
14	蔽石	完形	敲打痕	僅かに有り	石英斑岩	14.3	7.3	6.0	1120	I18	Vb		35930.385	25735.552	3.021	第46図20	
15	磨石	完形	円礫使用	研磨有	砂岩	5.9	4.4	2.7	100	G18	II						
16	磨石	完形	転石利用 /研磨痕のみ	部分的研磨有り	砂岩	5.1	3.9	3.7	101	D・G10~12	II (遺構)	0008SF					
17	磨石	完形	研磨痕	表面二箇所に研磨有り	片状砂岩	13.0	9.3	4.6	771	C13	IV (遺構)	4409SX					
18	磨石	破損品	研磨痕 (裏面打割破損)	表面と裏面の一部	砂岩	9.8	7.2	6.1	418	K17	Vb						
19	磨石	破損品	研磨痕/大型磨石	1面に研磨面有り	砂岩	9.0	6.3	2.7	177	B13	IV (遺構)	4409SX					
20	磨石	破損品	転石使用・研磨痕のみ	表面中央部のみ	砂岩	8.3	6.1	4.3	257	E16	II						
21	磨石	破損品	研磨痕/磨りの後縁	研磨は顕著	流紋岩	7.3	4.9	3.3	200	I18	Vb		35930.614	25734.657	2.359		
22	磨石	破損品	半円状/表面のみ研磨	研磨有	砂岩	8.2	4.4	2.3	86	B12	IV (遺構)	4409SX					
23	磨石	破損品	研磨痕と敲打痕	有り	砂岩	9.6	5.1	4.4	211	B12	Va (遺構)	4409SX					
24	磨石	破損品	磨りの痕跡	不明瞭	輝石角閃石安山岩	7.2	3.7	4.9	185	B12	Va (遺構)	4409SX					
25	磨石	破損品	研磨痕	部分的に研磨有り	砂岩	6.0	6.4	3.7	185	B13	IV (遺構)	4409SX					
26	磨石	破損品	研磨痕・6/1残存	一部研磨有り	砂岩	5.5	7.2	3.8	224	C12	IV (遺構)	4409SX					
27	磨石	破損品	研磨痕/敲打痕	表裏面の一部	石英斑岩	6.4	4.2	3.8	132	H17	III						
28	磨石	破損品	研磨痕	研磨面・1面のみ	砂岩	10.8	6.5	4.5	339	B13	IV (遺構)	4409SX					
29	磨石	破損品	6/1残存・研磨痕と後縁	表裏面と側面の一部	砂岩	6.8	5.2	2.7	135	F16・I7・G17	Vb(遺構)	0656SS					
30	磨石	破損品	転石使用・研磨痕のみ	表面の一部のみ	砂岩	10.0	4.4	3.0	128	E17	II						
31	磨石	破損品	転石使用・研磨痕のみ	表面と側面の一部	砂岩	4.5	7.0	3.7	140	E17	III (遺構)	0101SK					
32	磨石	破損品	研磨痕のみ	表裏面に研磨痕	砂岩	8.4	6.8	3.9	299	J17	II						
33	磨石	破損品	二次加工打割	僅かに有	砂岩	8.6	5.4	2.2	125	D18	II						
34	磨石	破損品	研磨痕のみ	表面の一部/裏面全体	砂岩	11.9	4.0	4.9	276	H17	Vb(攪乱)	0456P					
35	磨石	破損品	転石使用・浅い研磨痕	表面と裏面の一部	砂岩	8.6	5.0	3.8	241	F18	III (遺構)	0743SK					
36	磨石	破損品	研磨痕	表裏面に研磨有り	斑レイ岩	7.6	3.5	4.9	230	D17	III						
37	磨石	破損品	風化・研磨・確認不可・形態調整	研磨剥がれ	砂岩	7.9	5.6	4.0	176	H17	III						
38	磨石	破損品	研磨痕/断面中央に敲打痕	研磨有	角閃石安山岩	6.9	8.4	6.0	649	F18	II						
39	磨石	破損品のみ	研磨痕のみ	表面と裏面の一部	砂岩	7.5	4.4	2.7	130	H17	II						
40	磨石	破損品	研磨痕	表裏面に研磨痕	砂岩	10.5	13.1	5.5	1270	H18	Vb		35933.618	25737.089	2.914	第49図25	
41	磨石	破片	研磨痕のみ	表面の一部のみ	風化した流紋岩	4.9	4.0	3.2	68	F18	Vb(攪乱)	0702SK					
42	磨石	破片	研磨痕のみ	表面の一部	角閃石安山岩	5.2	3.2	1.6	28	H16	II						
43	磨石	破片	研磨痕のみ	表面の一部	細粒砂岩	5.3	3.0	1.5	28	E17	III						
44	磨石	破片	研磨痕	表面の一部	輝緑岩	4.0	4.9	2.0	37	J18	Vb						
45	磨石	破片	研磨痕/縁辺部二次加工	表面中央部のみ	砂岩	5.1	4.2	1.4	40	F16	II						
46	磨石	破片	研磨痕	表面の一部分のみ	細粒砂岩	5.9	7.5	3.1	98	I17	Vb(攪乱)	0533P					
47	磨石	破片	研磨痕	一部研磨有り	砂岩	5.7	3.3	2.0	27	C12	IV (遺構)	4409SX					
48	磨石	破片	研磨痕	表面の一部のみ	輝緑岩	5.4	3.8	1.1	25	J16	II						
49	磨石	破片	敲打痕/研磨痕	二箇所に部分的	輝緑岩	8.4	4.2	2.0	77	D・G10~12	II (遺構)	0008SF(剥離)					
50	磨石	破片	成形痕なし・研磨痕のみ	表面の一部のみ	細粒砂岩	8.1	5.0	1.5	68	G18	II						
51	蔽石兼磨石	完形	敲打痕/研磨痕	表裏面/明瞭	砂岩	8.6	7.3	4.4	480	K17	Vb						第45図16
52	蔽石兼磨石	完形	研磨痕	表裏面・側面に有り	角閃石安山岩	13.2	12.0	7.1	1620	B12	Va (遺構)	4409SX					第47図21
53	蔽石兼磨石	完形	研磨痕/敲打痕	表裏面、側面	輝緑岩	11.0	5.2	4.8	473	F18	Vb(攪乱)	0692SK					第46図18
54	蔽石兼磨石	完形	研磨痕/側面擦痕	表裏面の研磨良好	輝緑岩	5.4	5.1	3.4	170	G16	II						第45図11
55	蔽石兼磨石	完形	転石使用・敲打痕/研磨痕	表裏面に浅い研磨痕	砂岩	10.5	4.2	3.0	248	K18	II						
56	蔽石兼磨石	完形	研磨痕	表面一部に有り	砂岩	14.3	10.2	7.0	1510	B12	Va (遺構)	4409SX					
57	蔽石兼磨石	完形	研磨痕/敲打痕	表裏面研磨良好	輝緑岩	12.6	13.7	5.5	1420	K17	Vb		35923.512	25723.219	2.700	第49図26	
58	蔽石兼磨石	完形	研磨痕/敲打痕	表裏面に研磨痕	チャート	12.2	10.3	5.5	1150	H18	Vb		35933.030	25739.013	3.029	第47図22	
59	蔽石兼磨石	破損品	敲打痕/研磨痕	表裏面に顕著	砂岩	14.5	10.5	7.5	1590	H17	Vb(攪乱)	0992P					第48図23
60	蔽石兼磨石	破損品	敲打痕/研磨痕	表裏面に研磨痕	砂岩	9.6	9.1	5.6	740	J18	Vb						第45図15
61	蔽石兼磨石	破損品	敲打痕/研磨痕	裏面明瞭	砂岩	7.0	6.5	4.9	246	D・G10~12	II (遺構)	0008SF					第45図12
62	蔽石兼磨石	破損品	破損品を二次使用	多面的に研磨	砂岩	8.3	6.2	3.3	197	B12	Va (遺構)	4409SX					第45図14
63	蔽石兼磨石	破損品	4/1残存・敲打痕/研磨痕	裏面明瞭	砂岩	7.7	7.5	6.8	500	F16	II						第46図17
64	蔽石兼磨石	破損品	敲打痕/研磨痕	明瞭	砂岩	8.3	5.9	4.8	390	I16	II						第45図13
65	蔽石兼磨石	破損品	研磨痕/敲打痕	部分的に顕著	角閃石安山岩	14.9	10.2	8.0	1580	F12・F13	III						第48図24
66	石皿	完形	使用の際の擦痕	表面のみ顕著	細粒砂岩	50.7	26.9	10.7	18.5kg	H16	Vb		35939.237	25730.074	2.816	第51図30	
67	石皿	完形	中央部に深い窪み	なし	細粒砂岩	39.1	44.8	19.5	32kg	B12	IV (遺構)	4409SX	35974.999	25735.805	1.727	第50図28	
68	石皿	完形	研磨痕一部分 /僅か	表面のみ	細粒砂岩	33.2	25.7	5.9	6.100	H17	Vb	接合済	35935.166	25736.692	2.958		
69	石皿	破損品	表面に磨りあとの研磨痕	部分的に顕著	角閃石安山岩	20.2	15.4	7.9	3100	H16	Vb		35939.491	25727.492	2.472	第51図29	
70	石皿	破損品	研磨痕	研磨僅か一部	細粒砂岩	7.1	10.9	2.6	308	G17	II						
71	砥石	半欠品	研磨痕のみ	明瞭	砂岩	10.1	3.4	2.7	107	H17	II						第52図34
72	砥石	半欠品	研磨痕のみ	表面/側面	シルト岩	11.3	6.4	3.4	265	J18	II						第52図33
74	砥石	破損品	研磨痕/穿孔	表裏面/側面研磨良好	流紋岩	9.7	4.9	1.7	113	J17	III (遺構)	0514P					第52図36
75	砥石	破損品	研磨痕/穿孔	表裏面/両側面研磨	黒色千枚岩	4.9	2.0	1.4	24	F11	II (遺構)	0008SF					第52図35
76	砥石	破損品	2面に研磨	研磨有	細粒砂岩	9.0	6.9	4.8	358	J18	Vb(攪乱)	1096P					
77	台石	完形	窪み部分に敲打痕	なし	細粒砂岩	33.6	29.4	14.6	20kg	C12	IV (遺構)	4409SX					第50図27
78	用途不明石器	破損品	研磨痕	一部分に研磨痕有り	砂岩	6.7	4.1	2.7	55	K18	Vb(攪乱)	0131SK					
79	用途不明石器	破損品	板状・不定形	僅かに有	砂岩	5.5	7.5	1.2	68	E15	I	0005SZ					
80	用途不明石器	破損品	研磨痕のみ	残存資料の一部分	細粒砂岩	8.5	8.3	2.1	159	G18	III						
81	用途不明石器	小破片	一部分に研磨痕	研磨有	細粒砂岩	4.8	2.7	0.7	9	K18	III (遺構)	0148P					
82	用途不明石器	小破片	僅かに研磨	研磨有	細粒砂岩	3.3	3.0	0.9	11	K18	II						
83	用途不明石器	小破片	一部研磨のみ	研磨有	細粒砂岩	4.9	2.3	0.9	9	G17	Vb(攪乱)	1127P					
84	用途不明石器	小破片	研磨痕のみ	研磨有	砂岩	3.7	2.1	1.6	10	J16	II						
85	用途不明石器	小破片	一部研磨/磨石	僅かに有	砂岩	5.0	1.8	1.6	11	C12	IV (遺構)	4409SX					
86	チャート剥片	完形	剥離痕あり/使用痕なし	研磨なし	チャート	3.3	2.8	0.8	9	G18	III						第52図31



第43圖 石器 1 (石斧)



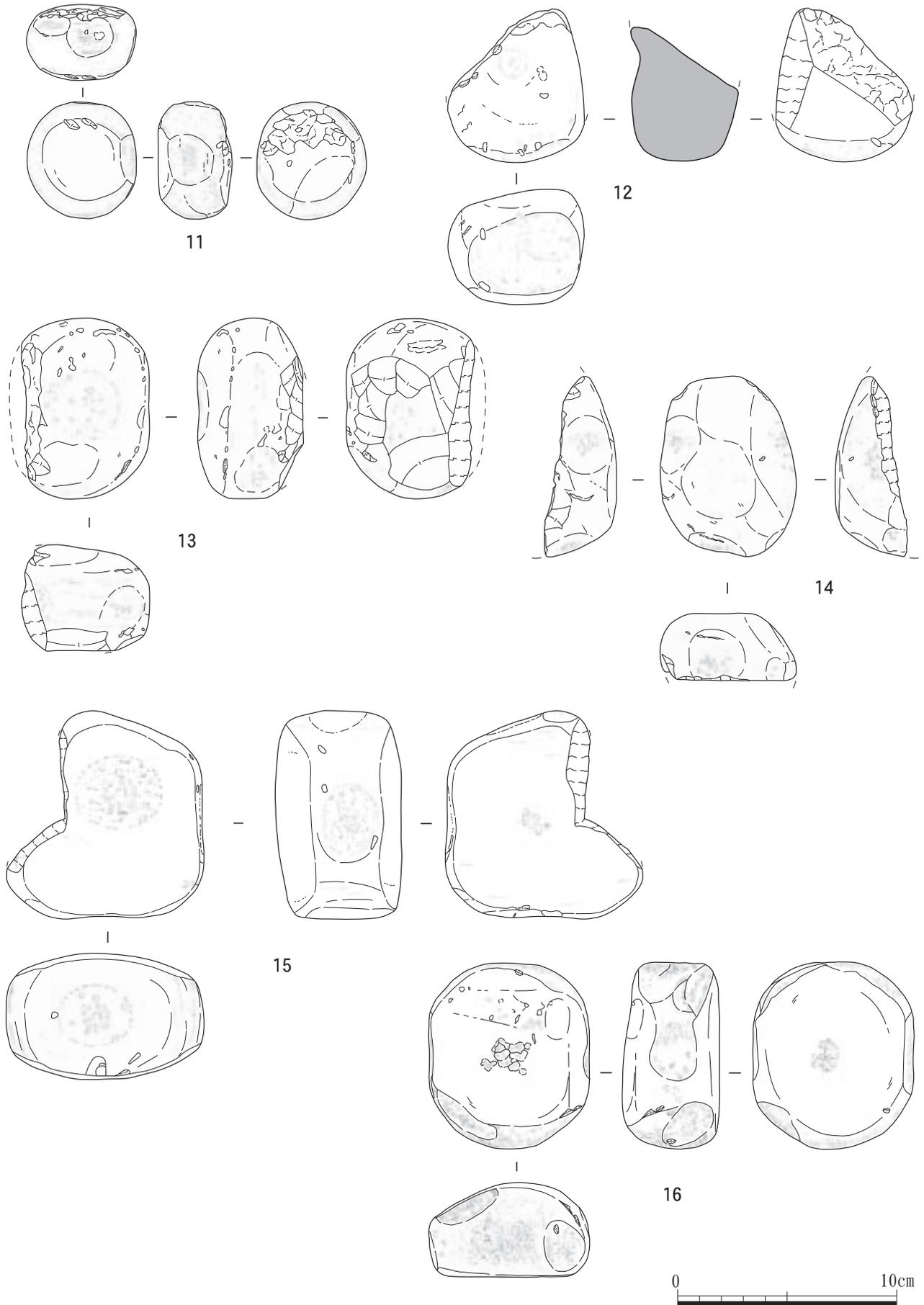
図版29 石器 1 (石斧)



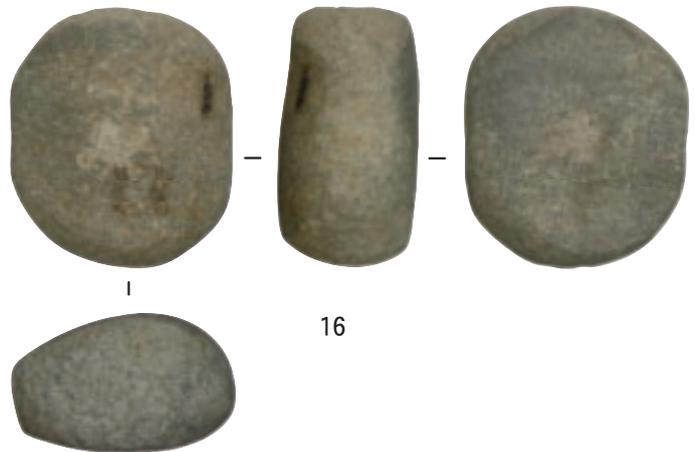
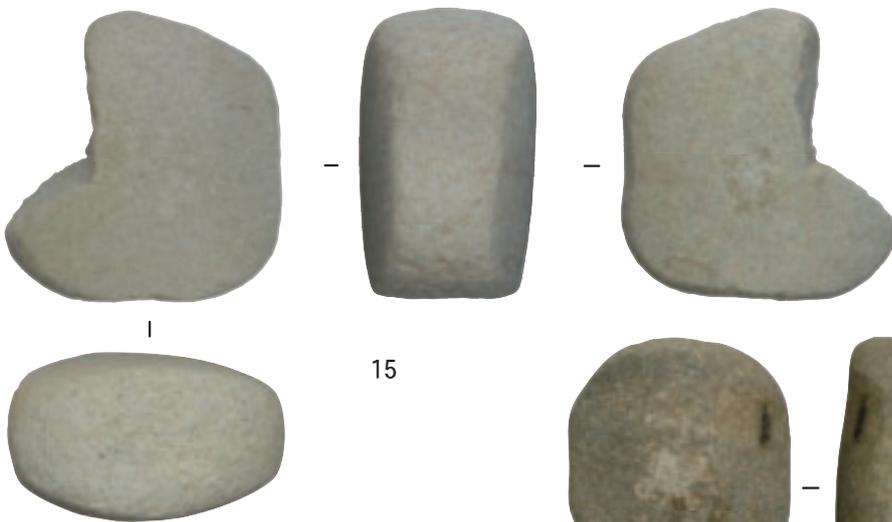
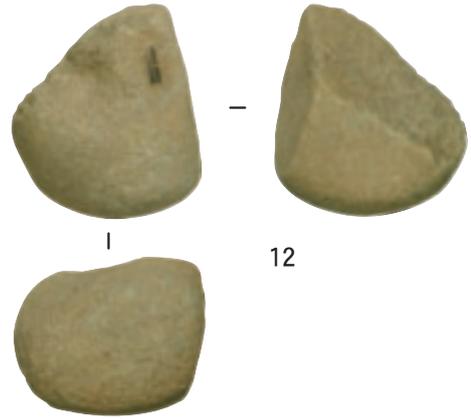
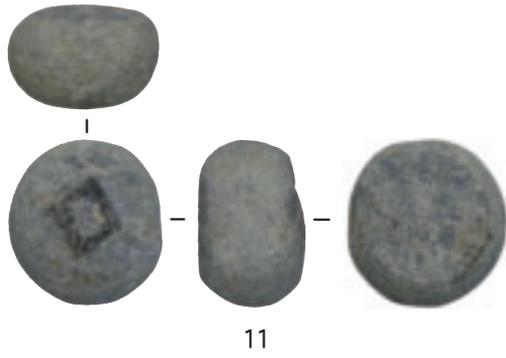
第44圖 石器 2 (石斧)



圖版30 石器 2 (石斧)



第45圖 石器3 (敲打器類)



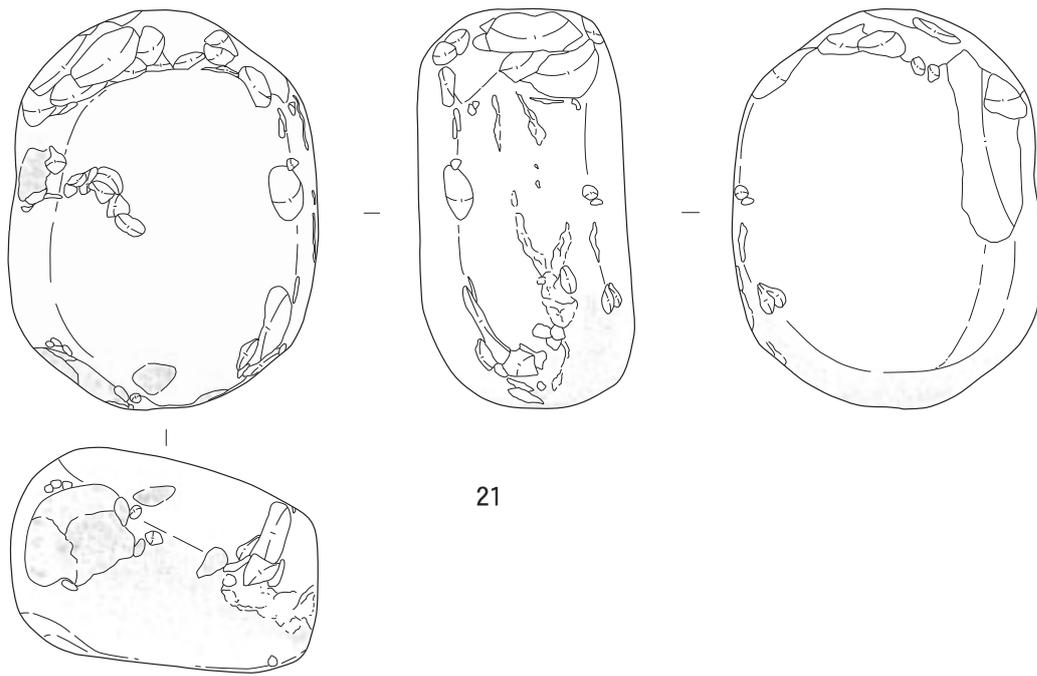
図版31 石器 3 (敲打器類)



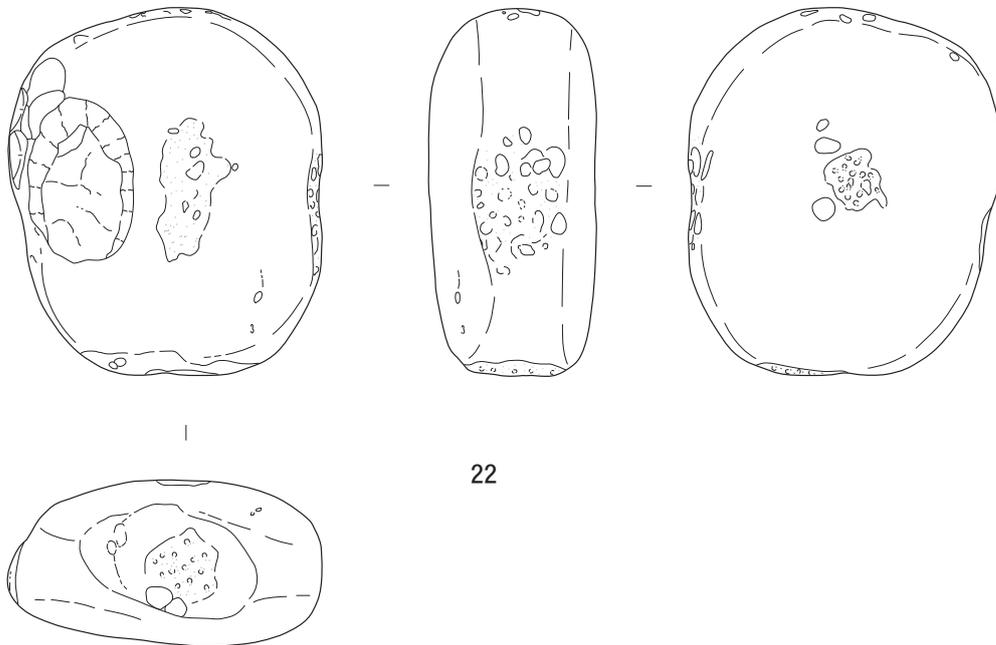
第46図 石器4 (敲打器類)



図版32 石器4 (敲打器類)



21



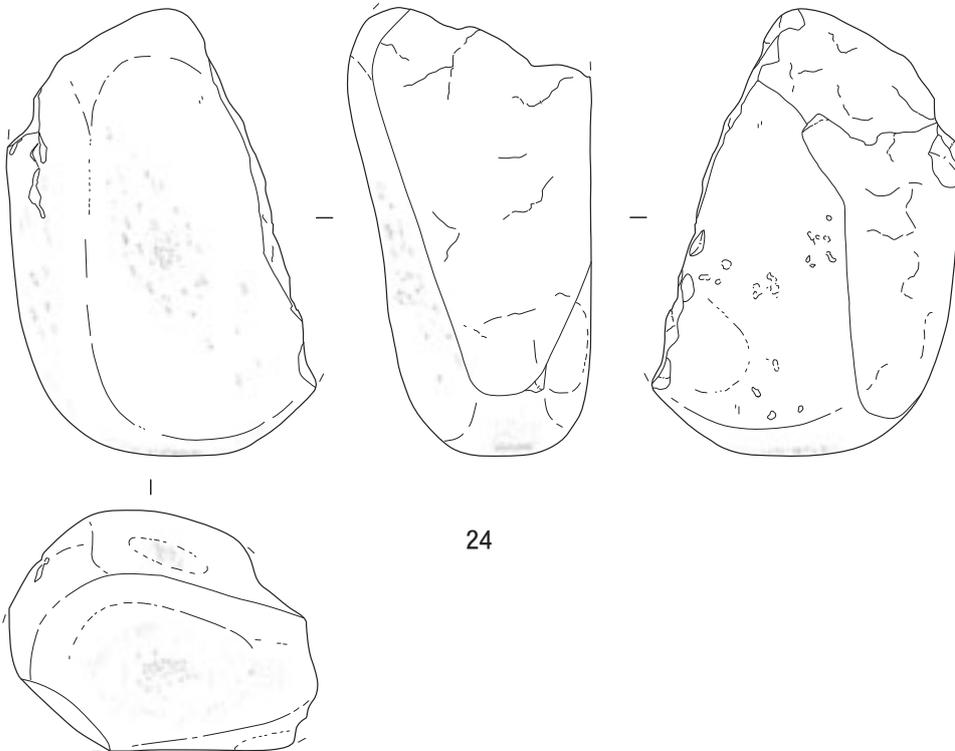
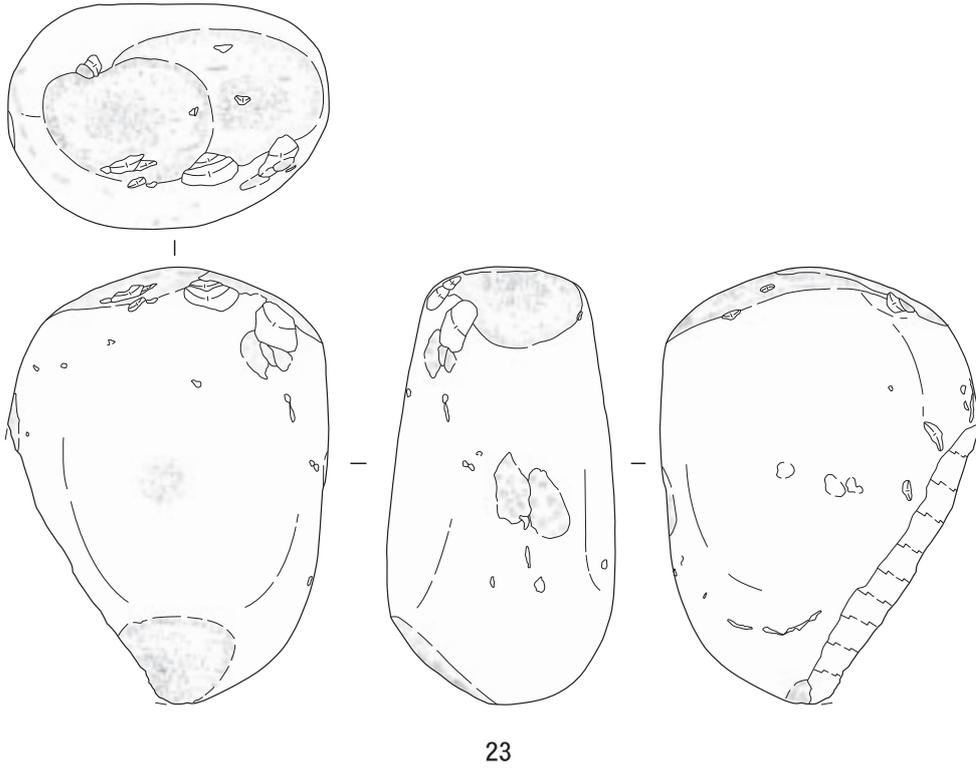
22



第47図 石器5 (敲打器類)



図版33 石器5 (敲打器類)



第48図 石器6 (敲打器類)



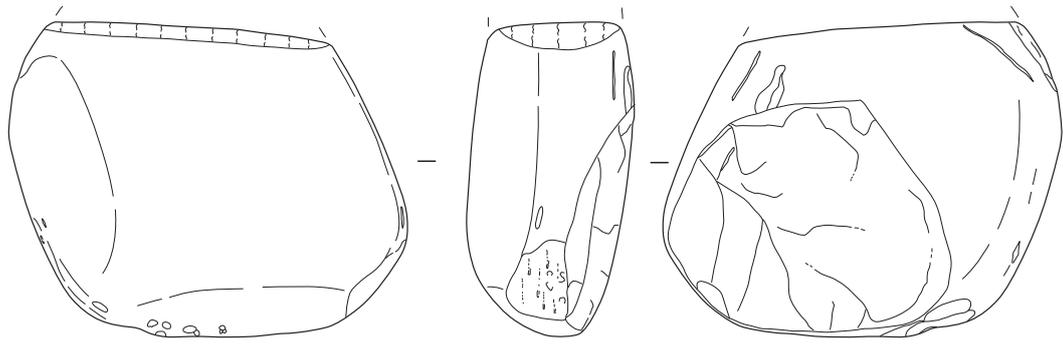
23



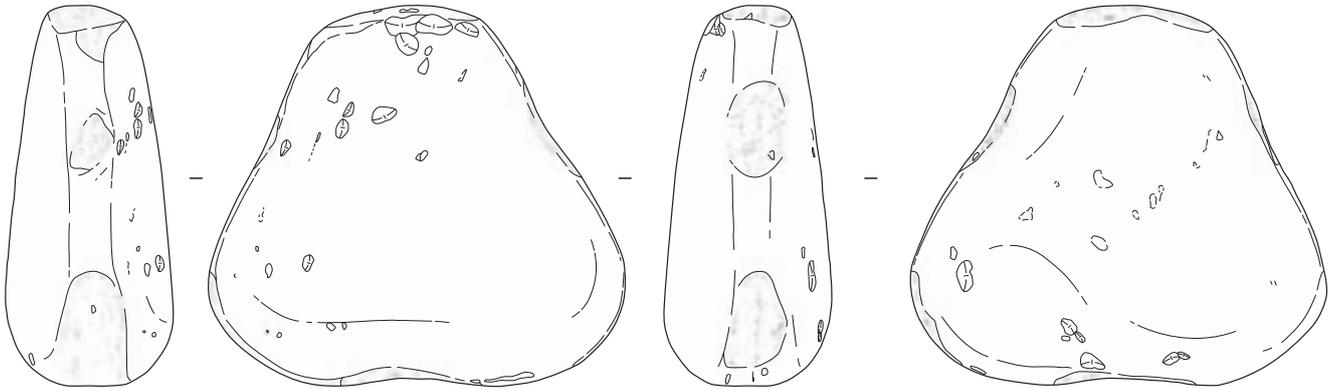
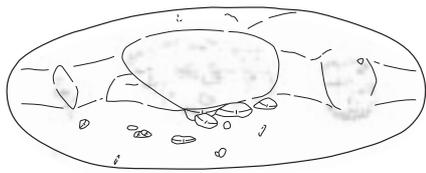
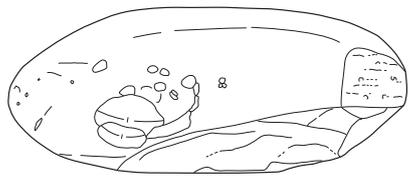
24



図版34 石器6 (敲打器類)



25



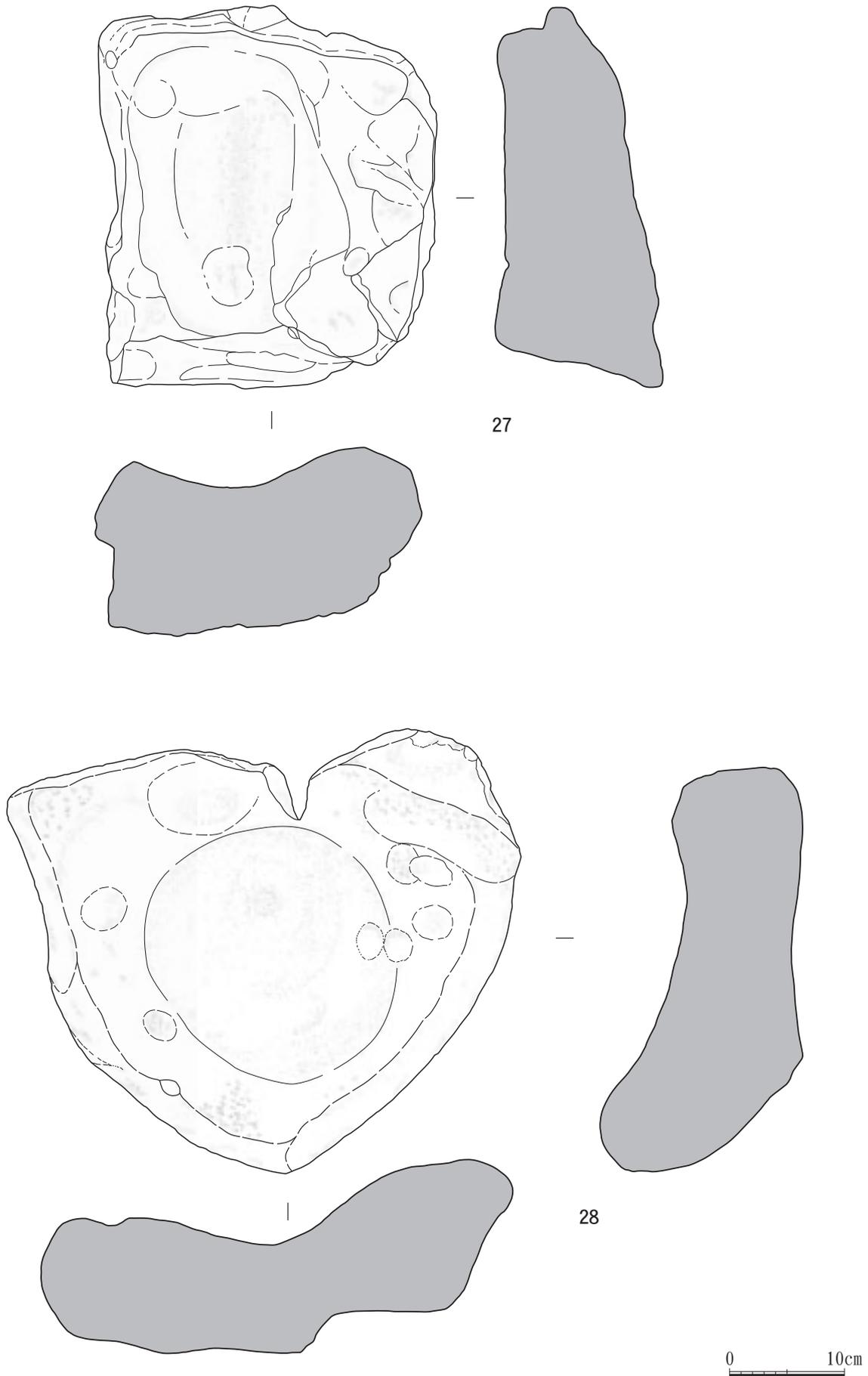
26



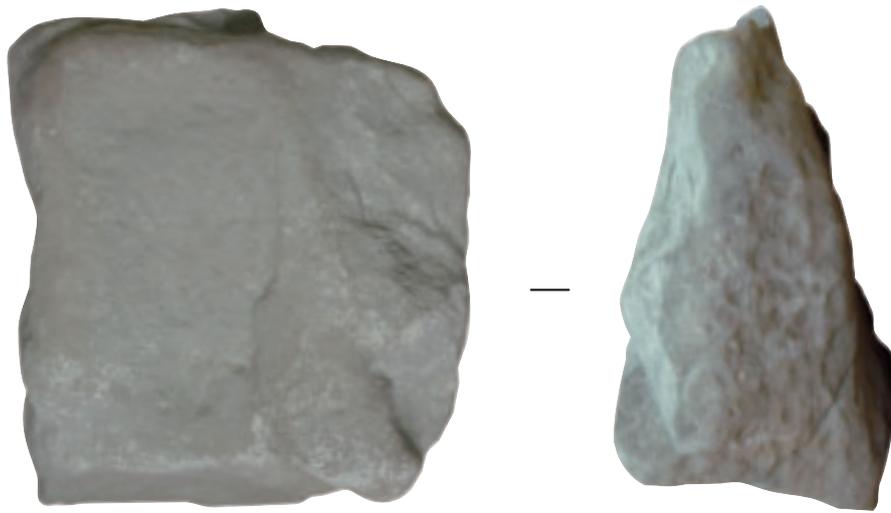
第49図 石器7 (敲打器類)



図版35 石器7 (敲打器類)



第50図 石器8 (台石・石皿)



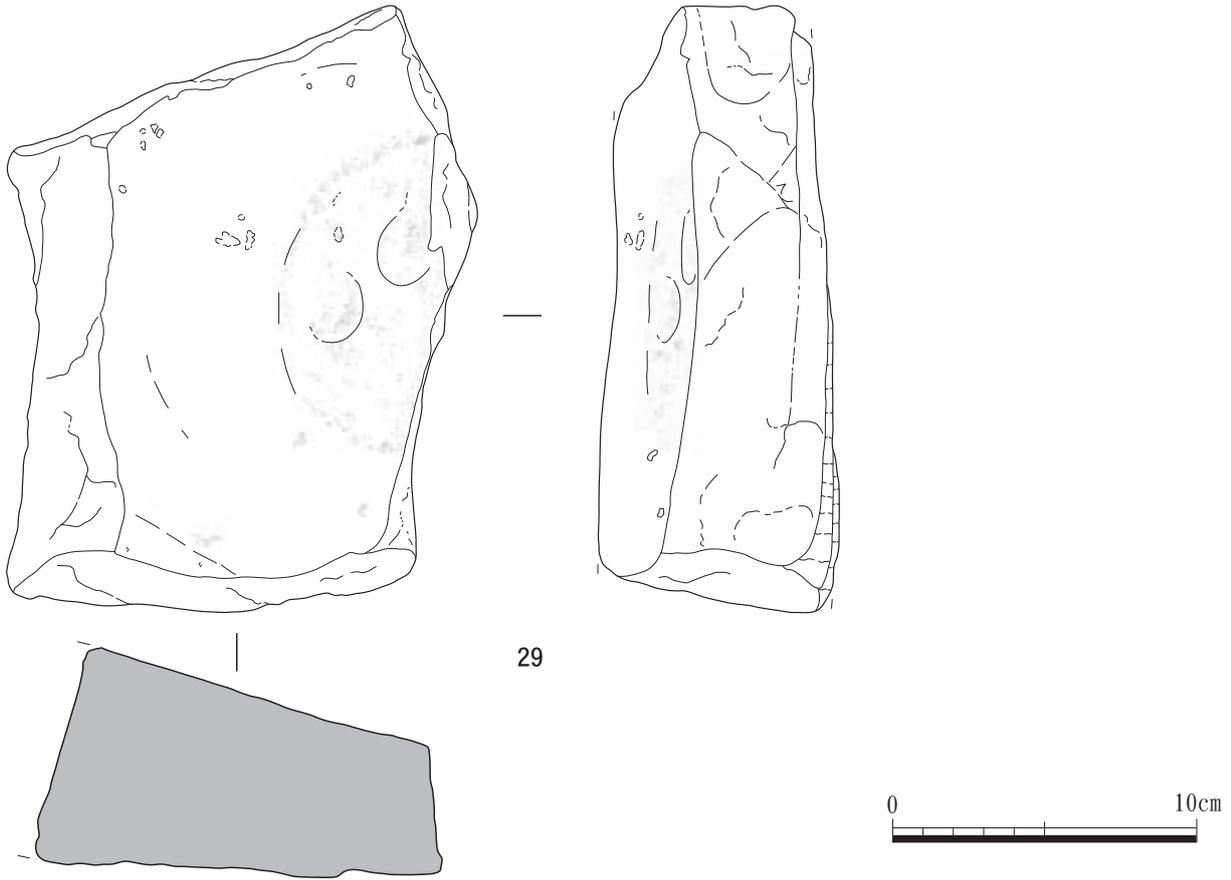
27



28

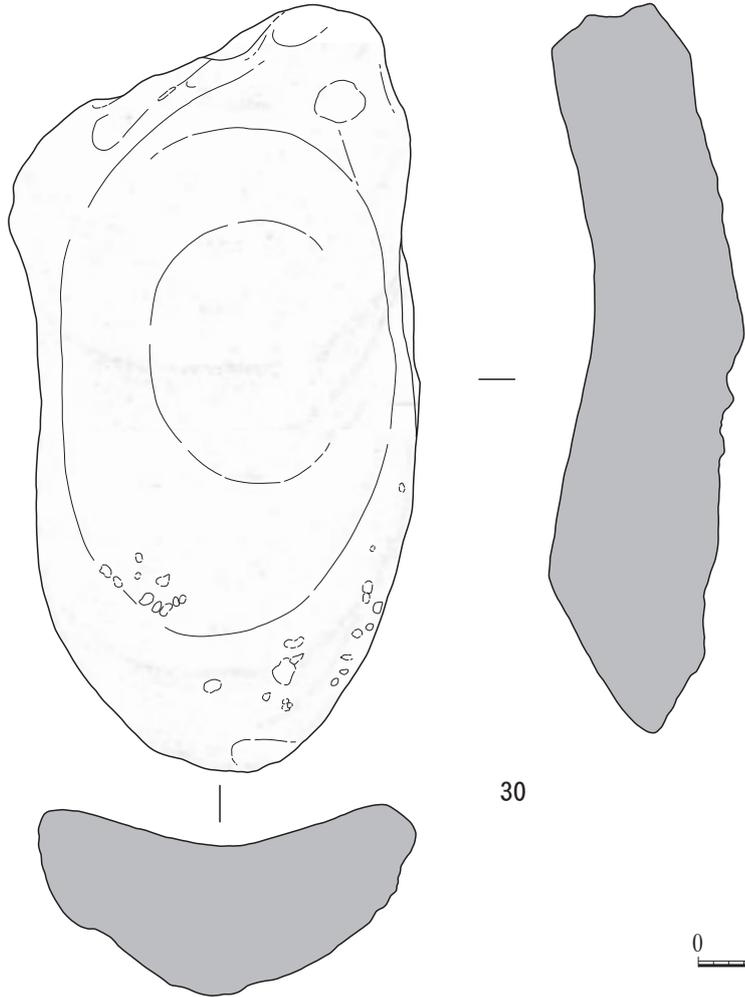
0 10cm

図版36 石器8 (台石・石皿)



29

0 10cm



30

0 10cm

第51図 石器9 (石皿)



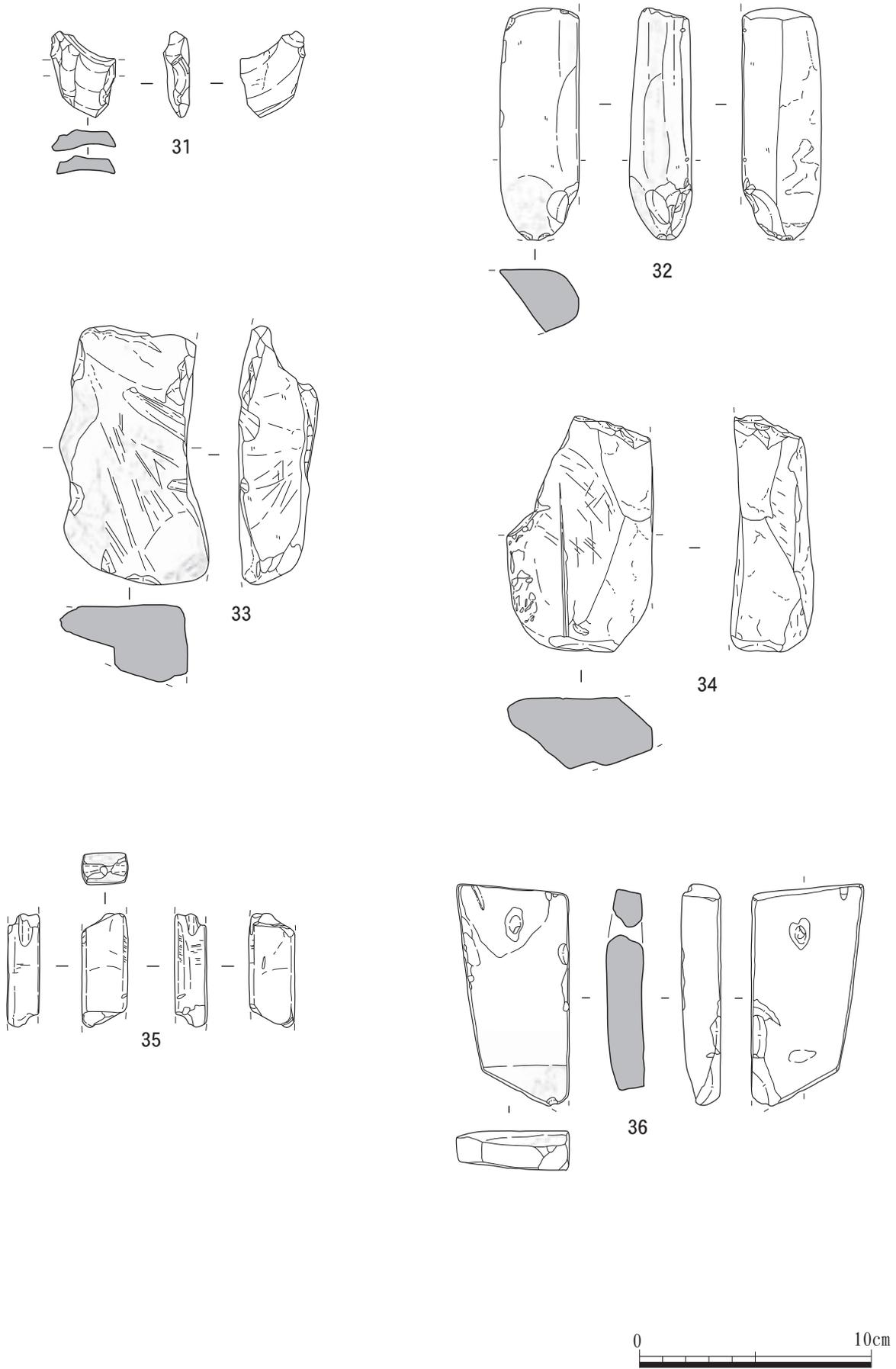
29



30



図版37 石器9 (石皿)



第52図 石器10 (チャート剥片・砥石)



図版38 石器10 (チャート剥片・砥石)

2. オオベッコウガサ

貝輪（図5）、有孔製品（図6・7）があり、出土点数が少ないため、ここでまとめて報告する。
 貝輪：リング状に加工したもので、3点得られた。図5は内縁に打割が複数確認できるもので、貝輪と考えられるが、前述のオオツタノハに比べると貝殻自体が脆く、自然剥離の可能性も否定できない。

有孔 a：図6は殻頂に径 2.0cm 程の粗孔を有するもので、貝塚時代後期の遺跡で報告例がある。

有孔 b：図7は殻頂及び縁を欠損し、殻頂より下位に径 0.77×0.55cm の粗孔を施す。孔は打割で調整される。類例がなく用途は不明。

第27表 オオベッコウガサ製品観察一覧

第図版	図番号	製品番号	製品	残存	縦(cm)	横(cm)	内径・孔(cm)	重量(g)	観察事項	貝殻の状態	出土地
第58図・図版40	5	968	貝輪	半欠	(6.0)	(4.6)	4.8×3.5	3.13	縁幅 0.7cm、輪状に加工、内縁に複数の打割痕。	色残	G18 Vb層 1163SS 台 2025
	6	967	有孔	完	5.0	4.0	2.25×1.7	7.00	輪状に剥離、複数の打割が確認される、貝輪の未製品？	色残	G18 III層台 639
	7	970	有孔	完	4.8	4.1	0.77×0.5	5.04	殻頂下方に小孔。両面穿孔。外縁に若干の剥離。殻頂欠損。	色残	I18 Vb層台 1987
図版なし	—	965	貝輪	完②	(6.3)	(4.8)	(4.1×3.4)	4.00	縁幅 0.8cm の輪状に加工。内縁に打割の可能性あり。	色残	H18 Vb層台 438
	—	966	貝輪	半	(5.5)	(4.5)	4.4×3.3	2.00	縁幅 0.65cm 輪状に加工。内縁打割	色残	H18 Vb層台 438

()は推定

3. ゴホウラ

貝輪：腹面型 1 点と背面型 3 点が得られた。

腹面型は図8で、上下面を水平に研磨するもので、仕上げ段階と思われる。

背面型は図9～11である。図9は残りが良く、内外縁の研磨は角を残す。内外面も研磨が認められる。図11は螺塔部分、図10は水管溝の部分で前者はやや厚く、後者は図9と同じように幅が細いことから貝輪の完成品に近く、図9に比べて、より殻口に近い部分を用いている。

第28表 ゴホウラ・アツソデガイ製品及び自然貝出土量

層位	貝種部位		製品		素材貝	自然貝		合計
	背面	腹面	ゴホウラ	アツソデガイ	ゴホウラ	ゴホウラ	アツソデガイ	
II		1				10	2	13
II (遺構)	1							1
III				1				1
IV (遺構)								2
V b (攪乱)					1	1		2
V b	2				1	6	1	10
V b (遺構)					2			2
合計	3	1		1	4	17	6	32

II (遺構)：(SF) 0008。
 IV (遺構)：(SX) 4409 (1層・2層)
 V b (攪乱)：(SZ) 0350、(SK) 0870
 V b (遺構)：(SS) 0656

4. 素材貝

ゴホウラやアツソデガイは貝輪の素材として用いられているため、ゴホウラ・アツソデガイの製品及び素材貝の出土量を第28表に示した。これによると製品や素材貝の出土は少なく、自然貝の出土が 72% と多く、加工後のものとも思われる。

ゴホウラやアツソデガイの貝輪の中にはヘビガイが付着したのもも少なくない。ヘビガイが多量に付着し、その中でも内唇に付着するものを「死貝」判断（黒住 2013）するようである。素材貝の中には多量のヘビガイが付着するものがある。ヘビガイの付着した貝をクリーニングする工程を示す資料が得られた(図版41)。①はクリーニング前でゴホウラの背面全体にヘビガイが付着するもの。②クリーニング途中(図19)で、背面部及び内唇にヘビガイが付着しているが、背面頂部のヘビガイは削られ、さらにその周辺も研磨し、フラットに整形されている。また、袖部の殻頂側も打割調整されている。③クリーニング後で、内唇のヘビガイも削られている。

5. アツソデガイ（垂飾品）

図12はアツソデガイの外唇部分を研磨加工したもので、外唇及び外殻の研磨が顕著である。全体の形状をみると輪状よりは「U」字状の垂飾品の可能性が高い。類例は平敷屋トゥバル遺跡（1996）にもある。

第29表 ゴホウラ・アツソデガイ製品・未製品観察一覧

第図版	図番号	製品番号	貝種	残存	貝部位	大分類	中分類	縦 (cm)	横 a (cm)	横 b (cm)	重量 (g)	観察事項	貝殻の状態	出土地
第58図・図版40	8	354	ゴホウラ	半②	体層	貝輪	腹面	7.40	2.30	-	35.82	内外縁：水平に研磨。外殻面に研磨あり。	風化、ヘビ貝、クレータ	H16 II層 台214
	9	355	ゴホウラ	3分2	袖部	貝輪	背面	8.10	-	-	14.97	内外縁ともシャープ研磨し、縁は明瞭な稜をなす。内外殻部分的に研磨。	外面、細かいアバタ	D・G10～12 II層 0008SF (ピーチロック道) 台4542
	10	353	ゴホウラ	半②	前水管溝	貝輪	背面	4.70	-	-	9.75	内外縁研磨及び摩耗、丸味。外殻面に研磨有。	風化強、アバタ	F17 III層 台436
	11	248	ゴホウラ	半②	螺塔	貝輪	背面	-	-	-	19.18	内縁は水平に研磨、外縁は内外面から研磨し、中央に稜が明瞭に残る。外殻面に部分研磨、内殻の螺軸に打割。	色残	I18 V b層 台2044
	12	352	アツソデガイ	半②	袖部	垂飾品	背面	7.85	1.65	-	20.26	内縁破損、外縁研磨、丸味。内外殻面に研磨有。	風化	H17 III層 台974
第59図・図版41	19	257	ゴホウラ	半②	-	未製品	完	13.03	12.02	7.25	632.00	殻の背面頂部周辺の付着したヘビガイ及びその周辺の殻も削りフラットにする。それ以外は自然。(図版41②)	色残、内唇ヘビ外→死貝	G17・F16.17 V b層 0656SS 台1068
図版41	-	254	ゴホウラ	完	-	素材	袖	15.80	11.30	6.7	623.00	背面にヘビガイ多量に付着、加工前(図版41①)	ヘビガイ多し。	G17・F16.17 V b層 0656SS 台1023
	-	252	ゴホウラ	完	-	素材	完	15.80	11.00	7.1	612.00	背面のヘビガイの突出部分、削る。加工後(図版41③)	背面ヘビガイ顕著。腹面の袖部にアバタ有。	D18 V b層 台4545
なし	-	241	ゴホウラ	完	-	素材	背欠	15.50	7.10	-	946.00	背面欠、袖部若干欠、水管溝欠	内唇貝付着、背面にヘビガイ付着	G16 V b層カ 0350SZ 台979

6. 貝玉

3点得られ、そのうちの1点を図化した。

図13はマガキガイの螺塔部を割り取り用いたもので、殻頂側は孔の周縁に敲打、体層側には複数の打割が認められることから貝玉類の製作途中であろう。いずれも殻口部分が破損していることから殻口を割り取ることが、貝玉の製作工程の初期段階と想定される。

第30表 貝玉観察一覧

第図版	図番号	製品番号	貝種	残存	貝部位	縦 (cm)	横 a (cm)	横 b (cm)	重量 (g)	内径・孔 (cm)	観察事項	貝殻の状態	出土地
第59図・図版41	13	1001	マガキガイ	完	螺塔	1.5	2.9	2.8	13	0.5×0.5	体層側の打割顕著。殻頂は打割により穿孔。殻口欠。	色残	G17・F16.17 V b層 0656SS 台1069
図版なし	-	1002	マガキガイ	完	螺塔	1.8	2.9	2.8	12	0.5×0.5	体層側の打割顕著。殻頂は打割により穿孔。殻口欠。	風化、巻きが三角形	E18 V b層カ 0752SP 台1280
	-	1004	マガキガイ	完	螺塔	1.3	3.1	2.9	13	0.4×0.4	体層側の打割顕著。殻頂は打割により穿孔。殻口欠。	色残△	G17 II層 台316

7. クロミナシ製品

図14はクロミナシの螺塔部分と肩部の一部を研磨したもので、他に加工痕は見られない。貝色も残る。用途は明確ではないが、貝種や加工の形状から実用品とは考えがたい。

8. 貝符未製品

図15はアンボンクロザメなどの大形イモガイを幅2.2cmの板状に加工したもので、貝符の未製品と考えられる。内外殻面とも研磨が認められる。G18 II層の出土である。範囲確認調査（2008）で広田上層タイプ（第47図1）が得られている。

第31表 イモガイ製品観察一覧

第図版	図番号	製品番号	製品	貝種	残存	縦 (cm)	横 (cm)	重量 (g)	観察事項	貝殻の状態	出土地
第59図・図版41	14	991	研磨製品	クロミナシ	完形	4.2	2.6	15.00	殻頂に2面の研磨、成長線露出。肩部も部分的に研磨残る。殻頂孔	色残、細かいアバタ	K18 V b層カ 0189SP 台1009
	15	583	貝符未製品	アンボンクロザメ	完形	3.4	2.2	5.34	外殻面に3面の研磨、内殻面は縁側を平坦にするため研磨、両側面研磨。	なし	G18 II層 台265
	16	584	貝鉚	アンボンクロザメ	完形	5.2	1.3	3.60	外唇近くを利用、外殻面の厚い方が研磨が強い。内殻面の両縁研磨、両側縁に挟り、厚い方は研磨。基部は折損のまま、先端丸味。	色残	C13 IV層 4409SX (1層) 台4544 取302

＜実用品と考えられるもの＞

実用品は貝銚 1 点、タカラガイ製品 7 点、ヤコウガイ製品（匙、容器、有孔）31 点、ホラガイ有孔製品 7 点、羅蓋製貝斧 14 点、スイジガイ製利器 3 点、二枚貝有孔製品 237 点、二枚貝研磨製品 1 点の出土である。

1. 貝銚

図 16 はアンボンクロザメの殻口近くを縦位に用いたものである。肩部側に基部を配し、木の葉状に先端に至る。基部の両側に抉りを施す。外殻面にアンボンクロザメの貝模様を残し、内殻面は湾曲部分を磨きフラットにするが、総じて雑な仕上がりである。C13 4409SX、IV層の出土である。

2. タカラガイ製品

ハナビラダカラ、ハナマルユキの背面を除去し、整えたもので、ハナビラダカラ 3 点、ハナマルユキ 7 点の計 10 点得られた。本品は民具事例（上江洲 1973）から漁網錘の可能性が考えられ、図 17 はハナビラダカラ、図 18 はハナマルユキを示し、他は第32表に観察一覧を示した。本製品は下記の加工が見られるものを製品とした。

- ①背面除去され、側面からみると除去面が整っている。
- ②殻軸部分の巻きが欠損するもの。
- ③殻底部分に打割調整。

ハナビラダカラは研磨されたもの（製 508）もあり、他の遺跡の出土状況から装飾品、ハナマルユキは民具例から漁網錘と考えられ、グスク期の遺構の内から出土している。

しかし、②や③の加工（島袋 1997・2002）は明瞭でなく、食用の可能性も否定できない。

第32表 タカラガイ製品観察一覧

第図版	図番号	製品番号	貝種	残存	縦 (cm)	横 a (cm)	重量 (g)	殻軸	背面	貝殻の状態	出土地
第59図版・図41	17	507	ハナビラダカラ	半	2.6	2.1	4	半欠	整	色残	H18 V b層力0581P 台 1435
	18	453	ハナマルユキ	半	3.1	2.4	5	欠	整①	風化	H18 II層台 420
図・図版なし	—	476	ハナビラダカラ	半	2.2	1.6	2	欠	整①		G18 V b層1163SS 台 2025
	—	508	ハナビラダカラ	完	2.5	2.0	3	欠	整		K18 II層台不明
	—	468	ハナマルユキ	完②	3.0	2.1	5	半欠	整①		K18 V b層力0156P 台 1289
	—	469	ハナマルユキ	完②	3.1	2.4	6	半欠	整①		F16 V b層台 553
	—	501	ハナマルユキ	完②	3.1	2.3	6	半欠	整①		D18 V b層力4424SK 台 4611
	—	502	ハナマルユキ	半	3.0	2.3	4	欠	整	風化	G18 II層台 384
	—	504	ハナマルユキ	半	3.2	2.5	8	半欠	整①	色残△	I16 V b層力0361P 台 1668
—	505	ハナマルユキ	半	3.0	2.3	4	半欠	整②	風化△	F18 V b層力0692SK 台 1218	

3. ヤコウガイ製品

ヤコウガイを用いた製品には貝匙、容器、有孔製品などがある。以下、各々について略述する。

(1) ヤコウガイ製貝匙

匙は24点出土した。製品の取り方で、ヤコウガイの背面を主として用いる背面型と、腹面を用いる腹面型（「ヤッチのガマ・カンジン原古墓群」2001）があり、前者は匙が大きく、後者は匙が小さくなる（第60図）。背面型は製品の取り方でさらに細分される。

- a：殻口方向に柄を配する。
- b：殻口方向に身を配する。
- c：無柄タイプ

以下、主なものを第60・61図・図版42・43に示し、図示された以外のものも含め、第34表に観察一覧を示した。

・背面型 a

身は図20～23で、図20は大きい殻を用いるもので、中央部分から大きく破損する。真珠層露出が顕著で、螺肋も研磨され、製品の完成度が高い。図21は縁及び螺肋の研磨が顕著で、外殻の表層を部分的に残す。図22はやや小振りの貝殻で、外殻は螺肋を打割調整し、部分的に表層が残存する。縁は打割調整後、研磨を施している。図23は身の部分（体層）で、外面の螺肋と稜及び外殻表層部分に研磨が認められる。周縁は打割調整後、部分的に研磨が確認できる。

柄は図24～26で、図24はシンプルな作りで、周縁を丁寧に研磨し、外殻の厚い部分を研磨するのみである。図25は造形的にも優れ、殻口の片側を大きく抉り、弧状、その反対側は直状をなすものである。内殻面の中央には縦位にすり切りで深い溝を施し、その下位に穿孔の痕が確認される。さらに弧状をなす部分にはその形に沿うように0.4cmの点刻を6個施し、その反対側には外径0.6cmの孔を施す。ナガラ西貝塚（1979）、渡喜仁浜原貝塚（1977）に類似資料がある。図26は匙の柄と考えられ、外殻の表層は色も残り、残存のほぼ中央に大きめの孔が施されている。

・背面型 b

図27は殻口方向が身となることから、前者とは製品の取り方が逆である。臍部の打割調整が明瞭にみられる。断面から推測すると容量の大きい匙である。

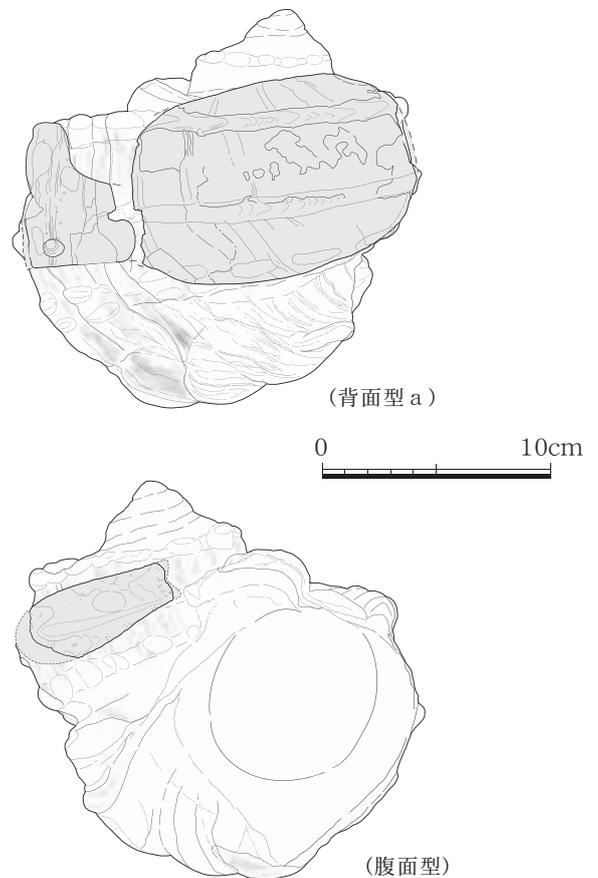
・背面型 c

図28は柄と身の間に境がない。周縁は打割調整で、背面は表層を残すが、突出した螺肋は研磨により高さを調整する。

第33表 ヤコウガイ製品出土量

分類	貝匙						容器			有孔製品	切取残存部	未製品	合計
	背面		腹面		未	完	未						
	身	柄	未	完									
I											1	1	
II		2				1					1	1	5
III	1	3		1		1	1	1			2	2	12
IV (遺構)											1		1
V a (遺構)								1					1
V b (攪乱)		1		1			1		1				4
V b	5	3	2		1		1		1	3	1	17	
V b (遺構)		1				1					1	1	4
VI											1		1
表採												2	2
合計	6	10	2	2	1	3	3	2	2	9	8	48	
	24						5			2	9	8	

IV (遺構)：(SX) 4409 (1層)
 V a (遺構)：(SX) 4409
 V b (攪乱)：(SZ) 0294, 0350, 1410, (P) 1049
 V b (遺構)：(SS) 0656, 0658, 1160



第53図 ヤコウガイ使用部位

・腹面型

前述した背面型とは様相を異にするもので、ヤコウガイの腹面の部分を切り取り、内外殻とも表層を剥ぎ取り、真珠層を露出させ、周縁も研磨が顕著で製品の完成度は高い。

図 29 と図 30 はいずれも先端部分を欠損するがほぼ全形の窺える資料で、柄端部に「V」字状の切り込みを施し、魚の尾状を呈する（上原 1989）。大きさは身が 4.0cm 前後、柄が 2.5cm 前後と背面型より小さく、身も浅い。貝殻の取り方をみるといずれも匙のほぼ中央に螺肋が走り、全面真珠層が露出し、背面型に比べて丁寧な仕上げである。

図 31 は身の部分で、外殻の表層を残し、周縁は粗い打割と細かい打割が見られ、さらに部分的に研磨され、製作途中のものと思われる。前 2 者と同じく、ヤコウガイの腹面を用いているが、身の部分は深く、匙の形状は柄と身が明瞭な背面型の可能性が高い。出土地をみると図 29 が F18 Ⅲ層、図 30 が J17 0294SK、図 31 が 0656SS の出土である。腹面型は渡地村跡（2007）、カンジン原古墓群（2001）、宇地泊西原丘陵古墓群（2008）など近世遺跡や古墓から報告されていることから図 29・30 はグスク期以降と考えて矛盾はない。

・粗加工

図 32 はヤコウガイの殻口を大きく割り取り、周縁部分を打割調整と摩耗が見られる失敗品か、粗加工品と考えられる。

(2) 容器

図 33 は完形で、殻口部分を打割調整し平らに仕上げ、外唇の瘤は研磨して、丸味を出す。

背面部分に被熱痕が確認されることから容器とした。貝殻はアバタがほぼ全面に認められ、臍部の発達は顕著で老貝を用いたと思われる。この種の製品は沖縄諸島で初めて確認された。

図 34 は体層部分を破損するもので、図 33 と同じように臍部と外唇の部分に摩耗が見られ、特に外唇部は平坦で、加工したと考えられる。体層の破損は被熱によるものと思われる。両者の状況から本品はホラガイ有孔製品と同様な用途が想定される。

(3) 有孔製品

図 35 はヤコウガイの殻口近くを方形に切り取り、ほぼ中央に粗孔を施したものである。外殻の表層はなく、真珠層のみが残る。孔の位置は中央より若干ずれ、打割調整が残る。本品は奄美大島マツノト遺跡（2006）、小湊外金久遺跡（1999）で多く得られ、沖縄諸島でも熱田貝塚（1979）備瀬貝塚（1986）、津堅貝塚（2005）で出土している。

4. ホラガイ有孔製品

ホラガイの内唇に粗孔を施し、殻頂を丸く整形するもので、7点出土した。

層別にはⅡ層3点、Ⅲ層2点、V b層2点の出土であるが、他の遺物の出土状況から貝塚時代後期のV b層に属するものと思われる。また、2点は点上げされている（第62図）。状態のいい2点を図示し、第35表に本製品の観察一覧を示した。孔は単孔のものが6点、2孔のものが1点で、前者の単孔のものは図38に示した様に大きくあけたものも2点得られたが、このタイプの報告例はあまりない。本製品は図示したものを含め、アバタが見られるものが多く、アバタの状況を見ると後世に付着したものと思われる。

第34表 ヤコウガイ製品観察一覧

第図 図版	図 番号	製品 番号	製品名	部位	小分類	重量(g)	観察事項	貝殻の 状態	出土地
第 60 図 ・ 図 版 42	20	225	貝匙	背面-a	身	83.1	外殻は縁及び螺肋も丁寧に削り、研磨顕著、真珠層露出縁は丁寧に加工し、丸味を出す大きい殻を用いる。	△	H17 V b層 取72 台4690
	21	239	貝匙	背面-a	身	128.0	表層及び縁、螺肋も丁寧に研磨、外殻面の表層が部分的に残る。	△	H17 V b層 取10貝ミ 台568
	22	321	貝匙	背面-a	身	54.7	柄部欠損。小振りの貝殻で、螺肋に打割調整、周縁は研磨。		H18 V b層 取130貝ミ 台430
	23	212	貝匙	背面-a	身	62.8	縁は打割後、研磨螺肋の稜研磨、外殻、部分に研磨が認められる。		G17 Ⅲ層 台643-2
	24	201	貝匙	背面-a	柄	45.2	縁は打割後研磨、殻口及び螺肋研磨し、フラットにする。	△	E8 Ⅲ層 台984
	25	224	貝匙	背面-a	柄	24.6	殻口の螺塔側を大きく抉るモチーフ。内殻に未貫通の孔を弧状に配し、中央に0.3cmの溝、下位に孔痕溝を挟んだ部分に内径0.3cmの孔を貫通、両面穿孔、外殻面研磨顕著。		H18 V b層 取37 1160SS 台1491
	26	218	貝匙	背面-a	柄	8.2	縁は研磨顕著。殻口は表層色残。孔0.5×0.65cmと大きい。		K17 V b層 取52 0098P X: 35925.860 Y: 25725.867 Z: 2.945 台1620
	27	221	貝匙	背面-b	身(未)	81.0	他と異なり、殻口側が身、臍部の打割が明瞭、深く容量がある。		I17 V b層 台2051
	28	302	貝匙	背面-c	未	140.0	身- 殻口、柄- 体層側で匙の取り方が他とは異なる。周縁は打割、螺肋は研磨され、アバタ露出。外殻は表層を残す。		不明 V b層 台5101
第 61 図 ・ 図 版 43	29	220	貝匙	腹面	柄と身の先端欠	15.1	図31より、若干大きい、貝を用いる?内外面研磨顕著、真珠層露出		F18 Ⅲ層 台719-2
	30	214	貝匙	腹面	身一部欠完	10.5	腹面利用。真珠層露出。丁寧に仕上げ前面(螺肋、周縁)研磨、柄「V」字状に切り込み。		J17 V b層力 0294SK 台1487
	31	310	貝匙	腹面	身、未	36.0	周縁- 粗割りだが、部分的に研磨。身は深い。外殻表残。	×	G17・F17.16 V b層 0656SS 台1067
	32	143	貝匙	背面	祖加工(未)	107.8	殻口部分、柄に相当、大きく割とる周縁打割と摩耗。		H17 V b層 台661
	33	227	容器	全殻		915.0	殻口を打割調整し、平らにする。背面、被熱の痕。	◎	G18 Ⅲ層 台766
	34	219	容器		殻口	465.0	殻口残、体層破損。臍部、外唇に摩耗し、一部分平らになる。	○	H16 V b層力 取57 1049P 台1625
	35	217	有孔			12.9	摩耗、真珠層のみ周縁、打割部分、摩耗大孔打割	△	K18 V b層 台2012-2
図 ・ 図 版 なし	—	228	容器	全殻		661.0	臍部を丁寧に打割調整、殻頂も破損。	○	H18 V b層 台4915
	—	71	容器	未製品		592.0	殻口、螺肋調整か背面、真珠層露出	殻頂 アバタ	B12 V a層 4409SX 台4647
	—	76	容器	未製品		683.0	殻口破損、臍近く調整	◎	E14 Ⅲ層 台415
	—	78	貝匙	背面	柄	21.0	3辺、打割調整。殻は厚い	○	G18 V b層 台4958
	—	93	貝匙	背面	柄	65.0	柄- 殻口側、側縁を打ち割り、螺肋を研磨か。	○	H18 Ⅲ層 台727
	—	105	貝匙	背面	柄	20.0	打割2箇所、反対は研磨。	◎	I17 V b層力 0410SZ 台1574
	—	119	貝匙	背面	柄	76.0	螺肋は打割。	△	E15 Ⅱ層 台746
	—	141	貝匙	背面	柄	48.0	殻口の部分3辺及螺肋研磨。	○	H17 V b層 台661
	—	144	貝匙	背面	柄	15.0	周縁研磨、螺肋打割。	×	I17 Ⅱ層 台213
	—	195	貝匙		破 未製品	12.0	真珠層露出。螺肋打割、縁は破損。		I17 V b層 台2051
	—	198	貝匙	背面	柄	16.0	真珠層露出、一部研磨。		H18 Ⅲ層 台701
	—	223	貝匙	背面	身	77.0	縁及び身も研磨顕著、外殻の表層部分的に残る	△	F18 V b層 台1138
	—	181	貝匙		未製品	17.0	—		K17 Ⅱ層 台155
	—	308	貝匙		未製品	53.0	—		G17 Ⅲ層 台912

凡例：アバタ・ヘビガイ (◎)=非常に多い ○=普通 △=少ない △=僅少 ×=なし

第35表 ホラガイ有孔製品観察一覧

第図 図版	図 番号	貝製品 番号	残存	殻高 (cm)	殻径 (cm)	重量 (g)	孔縦 (cm)	孔横 (cm)	貝殻の 状態	観察事項	出土地
第 62 版 図 44	37	386	完	28.0	17.1	941	2.4	3.5	◎	単孔。殻頂欠、丸味。	H17 V b層 取71 X :35935.940 Y :25737.155 Z :2.999 台4689
	38	384	完	33.5	18.5	938	9.0	8.2	◎	単孔。殻頂欠、丸味。	I18 III層台642 取13
図・ 図版 なし	-	381	完①	30.7	14.1	472	2.2	2.1		単孔、方形。風化。背面欠、殻頂欠、丸味。	G17 II層 取5 X :35938.737 Y :25737.573 Z :3.410 台372
	-	383	完	28.2	15.1	387	4.3	4.2	○	単孔。孔大きい、円。殻口、加工無し、殻頂欠、丸味。	H17 III層 台924
	-	385	殻口欠	23.4	13.3	342	2.0	2.2	△	単孔、不定形。外唇欠、殻頂欠、丸味。	E13 II層 台904
	-	387	外唇欠	20.1	10.8	207	① 3.5×2.2	② 1.7×1.7	△、色△	2孔、孔は①は内唇、②は小さい。背面欠、殻口大きく破損、殻頂欠、丸味。	G17 II層 台306
	-	393	背面欠	21.5	11.5	165	4.7	4.8	○	単孔、大きい、楕円。背面破損-自然、殻頂欠、丸味。	H18 V b層 台4906

凡例：アバタ・ヘビガイ (◎=非常に多い ○普通 △少ない)

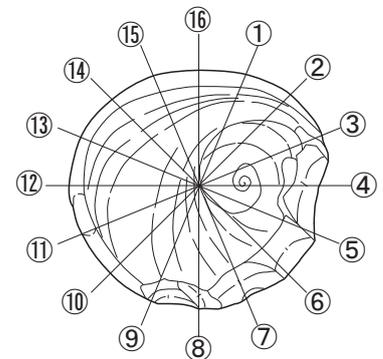
5. 螺蓋製貝斧

ヤコウガイの蓋の薄い部分を連続して打ち割り、刃状にしたものである。

本遺跡からは完形6点、半欠8点の計14点出土した。

層別にはI層1点、II層3点、III層2点、IV層(4409SX)で2点、Va(4409SX)層1点、Vb層5点得られた。そのうち残りの良い2点を図示した。H18 VbとB12 4409SX Va層の出土である。

分類は、伊礼原E遺跡(2010)に従う。



『シヌグ堂遺跡』(1985)

第54図 ヤコウガイの蓋刃分布

第36表 螺蓋製貝斧観察一覧

第図 図版	図 番号	製品 番号	残存	縦 (cm)	横 a (cm)	重量 (g)	分類	刃範囲	出土地
第 62 版 図 44	39	18	完形	7.0	7.8	154	A	⑤-⑨	B12 Va層 4409SX 台4647
	40	8	完形	7.2	8.2	179	B	③-⑪, ⑬-⑯	H18 V b層 台682
図・ 図版 なし	-	37	半欠	7.6	-	120	A	-⑧	B12 IV層 4409SX (1層) 台4563
	-	18	完形	6.9	7.9	160	A	④⑥-⑪	C12 IV層 4409SX (4層) 台4695
	-	12	半欠	7.5	8.0	183	A	③-⑫	E13 II層 0586SZ 台904
	-	36	半欠	-	7.0	105	A	-⑩	E15 I層 0005SZ 台550
	-	59	半欠	-	-	55	A	剥離有り	F17 II層 台382
	-	21	完形	7.1	7.8	156	A	③-⑨	G16 II層 台287
	-	11	完形	6.8	7.7	149	A	⑨-⑪	G17 V b層 台4951
	-	39	半欠	7.7	-	116	A	②-⑬	G18 III層 台651
	-	12	半欠	7.2	7.7	166	A	⑦-⑧	H17 III層 台973
	-	36	半欠	7.6	-	121	A	-⑨	H17 V b層力 0380P 台1680
	-	21	半欠	7.3	-	115	A	③-⑪	H18 V b層 台4911
-	6	完形	7.3	8.0	181	B	④-⑥, ⑦⑨	I18 V b層 台689	